女人藝術

十二月号

NYONINTAISHŪ

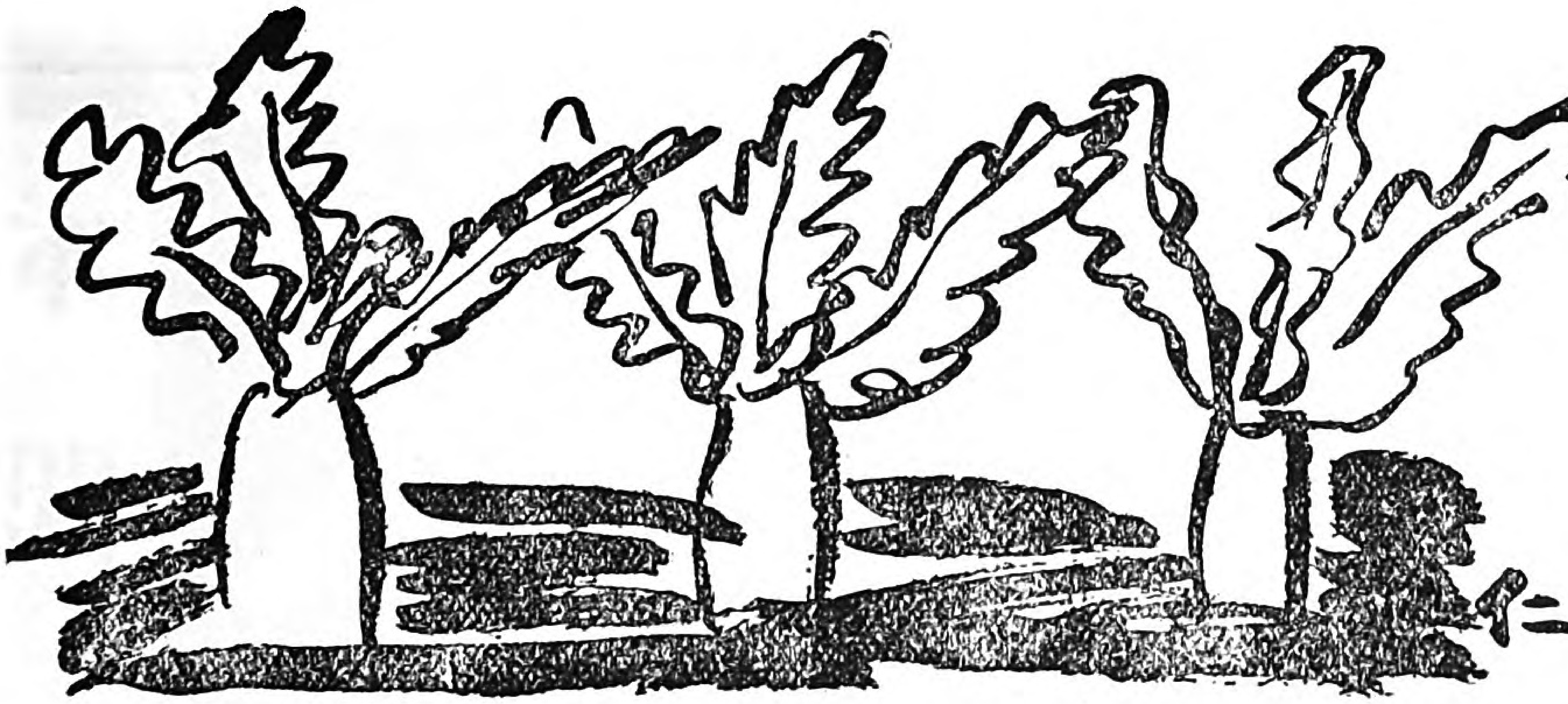
何ッ？

味の素が無くなつたツて？
味の素無くんば、食はぬに
如かず、早く買つて來いよ

味の素



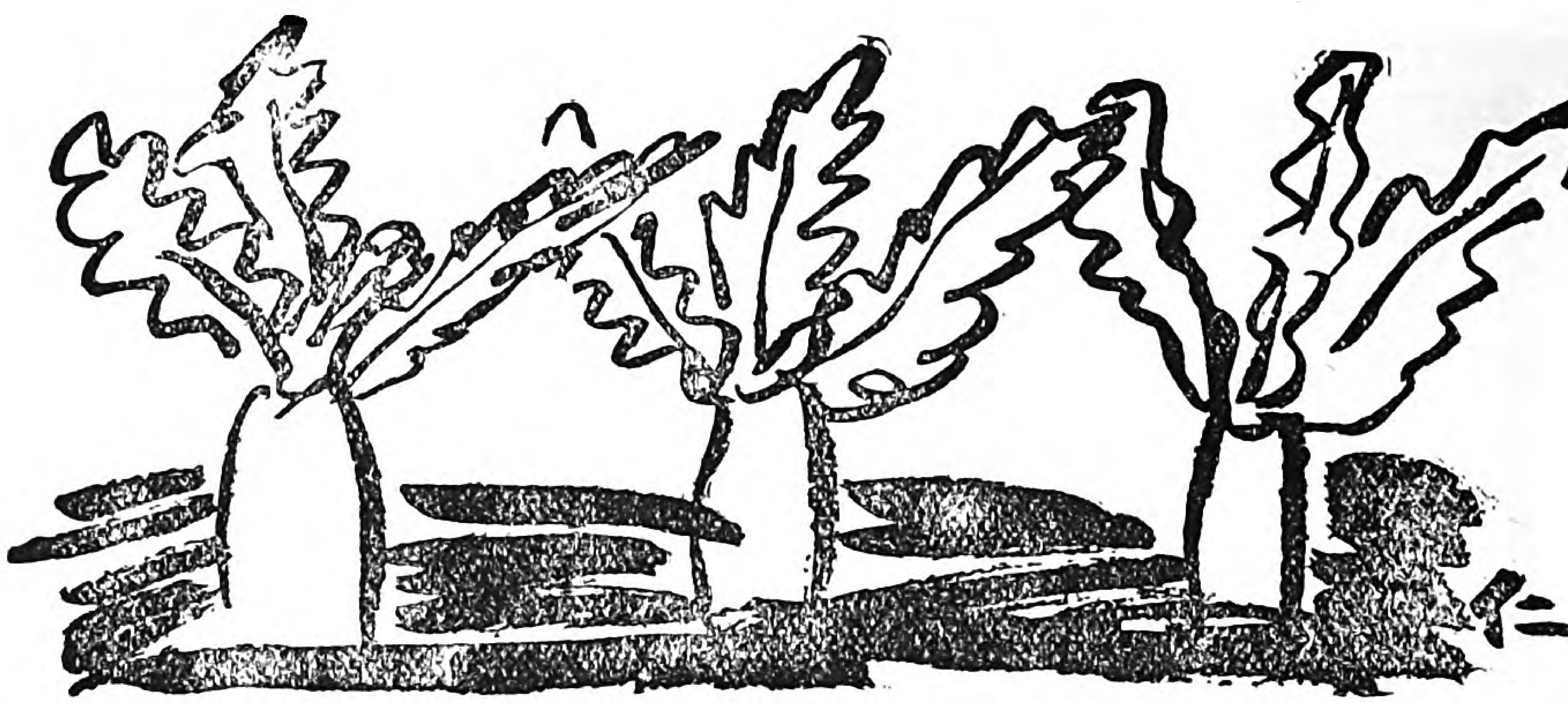
宮内省御用達 味の素本舗 鈴木商店



女人藝術十二月號目次

—禁轉載—

街頭斷片



新年飜譯特輯號豫告……（二）

附錄

女人大衆


品質日本一
ヤマサ醤油
味覚に訴ふ


世界一を誇るビクター蓄音器
VICTROLA
NO.1-90-¥150
本器を試聴せずに蓄音器を求めらるは早計なり
目録贈呈
日本一を誇るマーヴェル蓄音器
MARVEL
NO. 2-¥75
ビクター大賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋楽器店



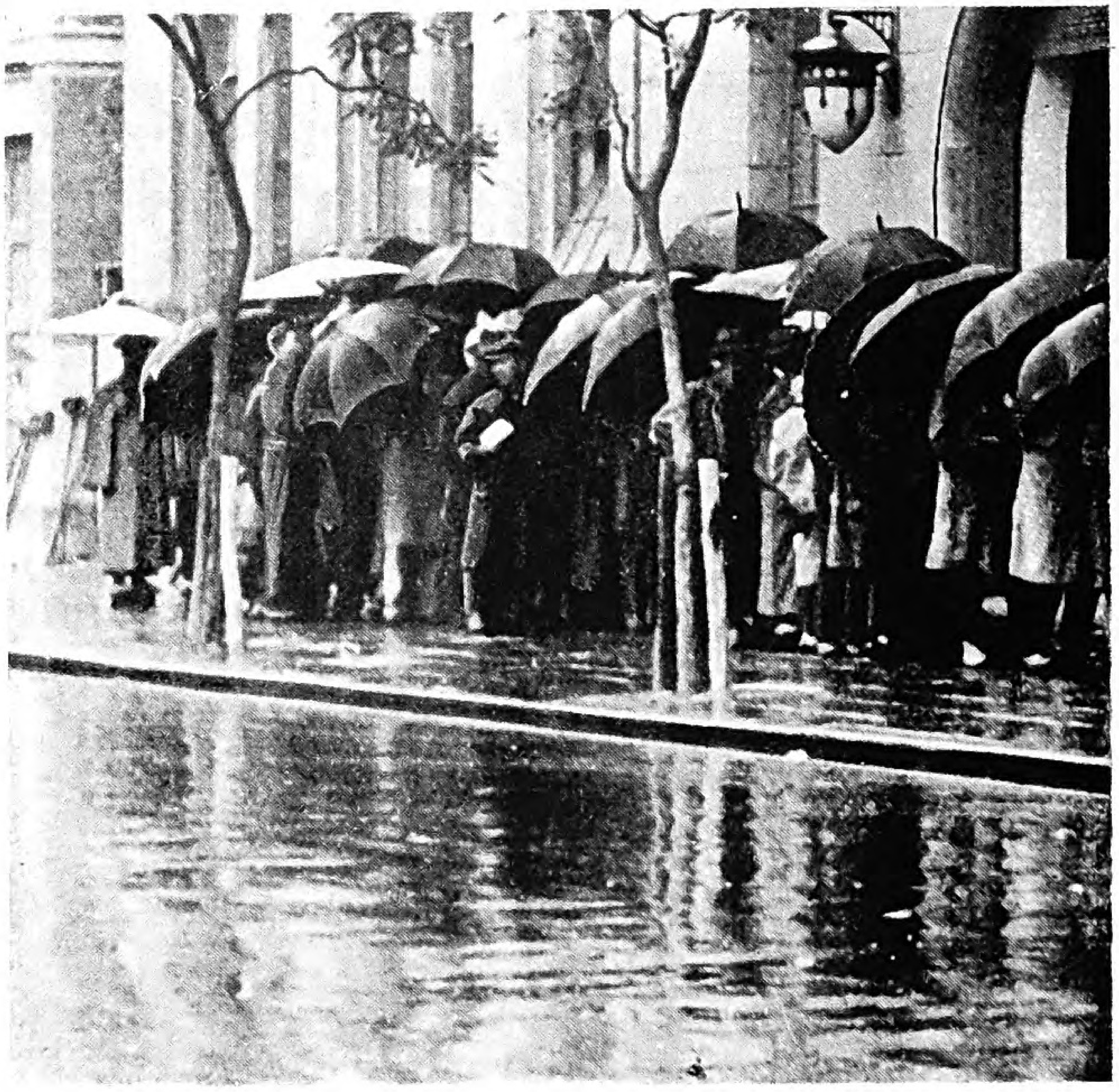


來朝せる文豪トルストイ翁の令嬢向つて右より秘書クレシチヤーワ女史、三人目トルスターヤ女史，日々新
聞松內主幹、高石主筆、和泉良之助氏——東京日々新聞社にて——





——大阪女人聯盟發會講演會の聽衆——



東京市衛生試驗所では十月二十八日一般市民に無料で血液檢査をしました。呼吸器病その他の保菌を氣づかふ人々が、正午までに一千六十餘人。大かたは無產者でした。



甲府市の勤勞婦人協會發會式――(女人藝術聯盟員登壇)



壇上の神近市子氏——朝日講堂に於ける女人藝術秋期大講演會

バクーニン全集

豫約募集◇全七卷◇會費毎月八拾錢◇全拂五圓六拾錢

石川三四郎
新居格
監修

社會理想研究會編

◇出版　消費組合式出版方法の劃期的大全集
◇贊助　海外諸バクーニン學者の絕對的支持
◇譯者　アナキズム理論に通曉せる篤學新進
◇編輯　各國全集に未載の稀覯文獻網羅收錄
◇臺本　獨・佛・西・露各國語版全集一々照合

第一回配本（申込順に配本）内容

マルクスとの個人的交渉・ドイツ自由主義史・××的國際聯合と組織・パリコムミユンと國家概念・他數篇

◇小冊子「ミハエル・バクーニン」申込次第送呈す（要郵券二錢）

〆切　十月末日の處申込殺到の爲十一月末日迄延期

略規

體裁　四六版九ポ一段組各冊二五〇頁以上
装禎　百瀬晋氏
刊行　本年十一月十日より毎月一冊宛
會費　一冊金八拾錢、一時拂金五圓六拾錢
申込　申込金不要、送金は振替利用下さい

東京神田小川町一　**近代評論社**　電話神田〔25〕二五八五　振替東京八一一四三

大取次

東京市神田區仲猿樂町
嚴松堂
東京振替六五五六

好評最新刊

申込は振替を御利用下さい

露西亞農民文學集

エル・セイフリナ著
井田孝平譯

强い女

頁數 百五〇頁
定價 七十錢
送料 四錢

本書は最近の**露西亞に於ける農民文學としての傑作短篇を選集**したものである。革命後に於ける露西亞農民の思想、感情が如何なる方向に發展して行つたか？ **都會勞働者と地方農民との新時代に於ける役割**——それは等しく識者の知りたい處である。曩に「**女人藝術**」が紹介したロシア新女流作家エル・セイフリナの「**强い女**」を始め收めるところ八篇——主として**消費組合運動**の文獻を出版するを以て任務とする本組合が、特に本書を選集したる所以のものは一に世界の謎「**農民の國共產ロシア**」の眞髓を江湖に紹介せんがために外ならない。

セイフリナ 强い女。 グラアトコフ 裝甲車。 グリゴーリエフ 白鳥。
レオーノフ 兄弟。 ヤーゴウレウ 文盲。 ペドロホラ 新生活。
ウエレサアエフ 革命委員會。 ポドヤアチエフ 茶店開き。

帝國大學教授 本位田祥男著
「農村と協同組合」
定價五十錢

吾國の協同組合の權威者である、本著は氏の抱負を全面的に披瀝したものである。

東京市外巣鴨町
二五〇〇番地

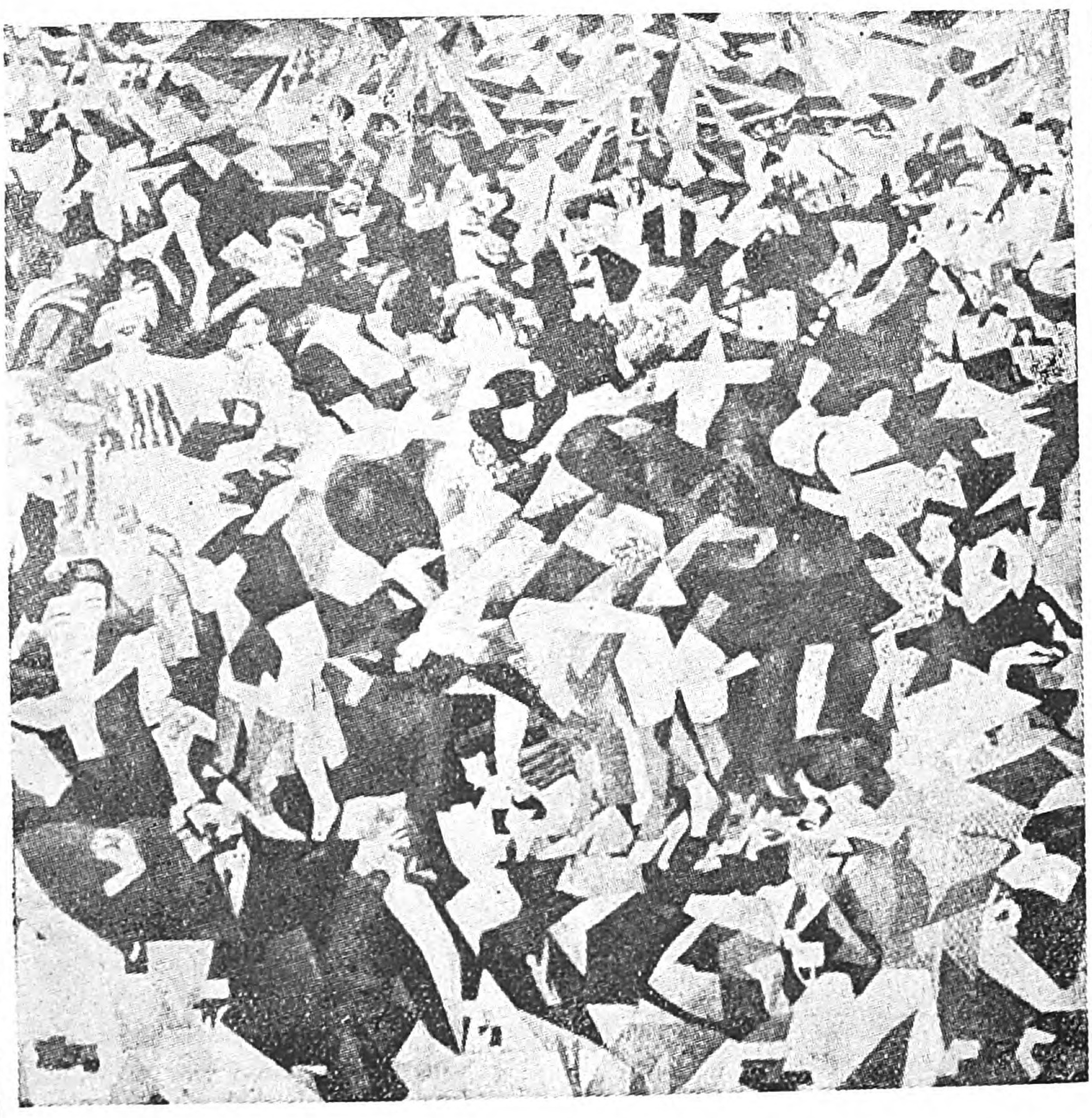
協同出版組合

振替口座東京
八〇二八〇番

直接申込に限り送料不要

女人藝術

十二月號



新春號豫告

見よ！かくも輝かしき新春を何日の日にか女人の上に維ちしぞ。我等は進出行進曲を遂に持つた。女人と生れし誇りをもつて我等擧りて新春第一黎明の空に唱はう。恒に本誌のよき支持者である姉妹よ、本誌新春號を街頭に一本も殘すな。それは女性の恥辱である。昭和五年の巷における第一聲は全女性行進曲の合唱からはじまらなければならぬ。

全女性進出行進曲

當選作歌・及作曲發表

飜譯特輯

街頭奇遇

杉浦翠子

私は三越へ買物に行かうとしてその近くで電車を下りた。下りた街上は卽ち動と響きと光と色とあらゆる生物無生物が遽く官能的に踊り出てゐる錯亂の天地。それにも拘らず、私は寧ろ雜然とした色彩と、騷然とした音響の中に、眼は何物も見ず耳は何物も聽かずに、だといつて、心のうちに一點見詰めるものもあるわけではない空虛の足どりを運ばせてゐた。と、私は遇然Kと出會つたのだ。彼が先きに私を、私が彼よりも先きに彼を見つけたか、それを意識する間もない瞬間のひとみの交換が、街上の錯行にも紛れなく、あたりを無にした二人ばかりの視線を一筋に相互に引張りよせたとたんに、もう私はKに近づいて聲をかけてた。

「どちらへ」「僕。三越へ」「まあ、私も三越へ」

Kは近々洋行するので、その買物をするのださうな。歌人仲間での評判の美男に、またそれだけにおめかしやである。いつのまにか私をいゝ男好きだといふ定めにして、人もあらうにこのKをば私の親愛なる人として友人たちは噂をする。目下噂の渦。しかし私はこれに辯解はしない。大證人を吊つておくことや、人を騙かしてみたりすることの好きな、茶目氣分の横溢せる私の性分から、この噂の渦に辯駁の一矢を與へるを愚として、默過微笑である。

實はKの洋行前に一度彼に云つてやりたいことのある私だつたから、今こゝの奇遇を機會にその言ひたいことが發作しかけたが、一時一刻の靜止もない街上騷然の際である。Kの神經が散漫としてゐることは重々想像されて、こゝで眞劍な事を、兼々の宿念を洩らすことは、多辯して無駄なことだと知りながらも、例の氣一本の性分は、なに、Kの頭の中に充滿してゐる街上感覺を征服させるほどの「ひたぶり」を持つて打つて出てやらうと云ふので、早速。「Kさん。あなたはひどい。先月の短歌雜誌で杉浦翠子のヒステリックを。と書いてあつたわね。あなたは本當に私のヒステリー氣分に觸れたこともありはしないくせにさ……それに、あなたのやうな八方美人。妥協性から見れば、私の一本氣の物言ひが、ときにヒステリーとも見えるでせうさ……なんです！　××なんかのあんなまづい歌を褒めたりして、あなた！　あれを本當にうまい歌だと思つてゐるんだつたら、あなたは鑑識眼の低級な人で、私とは語るに足りない友人です。さうぢやないでせう。私は知つてます。あの方から原稿を頁つたから、お禮に褒めたんでせう。くだらない。私なら原稿を貰つたら稿料をちやんと拂つて、さつぱりと、その賣買は金錢で片づけて了ふわ。稿料の代用に言論を換へるなんて、まるで女郎の態度です。今日の腐つた歌壇の批評なんてものは、物品贈答の返禮氣分で批評するんですからね。私だけですよ。Kさん、誰にもお世辭をいはず、黨派にも偏よらずに批評をしてゐるのは。だから、憎まれるんですよ。ヒステリーなんかといはれるんですよ。私のことをヒステリーなんて云ふ人は、藝術的良心の鈍つた飄簞鯰なんだから、構はない。ね！、Kさん！　あなたも飄簞鯰なまづ？」

私の言葉はずらずらと出た。竅所々々を突いたアクセントには彈力をもつた。私はこの良い言葉の端々が空中に消散せざる彈丸となつて、飄箪鈴の耳の鼓膜を射擊せねばならないと思ふからに、ぴつたりと彼に寄添つて、私の口から直ぐに彼の耳に音波が吸收するやうに、體に體をひた寄せて、男臭い匂ひにも我慢した。

二人の糊附けして離れないやうな街上の並步には、恰も兵隊の行列を見ゆるしてでもやるやうに、却つて私たちの勢に呑まれてか向ふが避けた。私たちの前に面と對つて濶步する人、それが二人連れであるとき、彼は左右二つに劏れ別れて、私たちを冷たく、しかし嫉ましげに見ながら、腹の虫を押へて通してくれた。後から來る人は、私達に近き五六步のところで急に大股に脚早やにして、私達を追ひ越す、その橫目に私の顏を睨んだ。中には既に追ひ越した一間前から、首だけをぐるりと人形のやうに後へ振廻し向けて、まざまざと私の顏に眼を見合せてゆく、男女もあつた。狹い人道の織るが如き雜沓にも、誰も私たち二人の糊附並步に突き當つて、二つに劏るやうな衝突をもたらす非文明な人はなかつた。この二人の並步を相迎へ、相送つた行人の無數の眼は、私がKの答によつて或は絕交するかの膝詰め談判を携帶しての步みとは、誰も思はないであらう。そこが愉快でならない。愛を語る。憎しみを語る。いづれにしても唇が疏つて立つ空氣の震動には變りがないのだから。私はかうして街上に通りすがりの幾多の人を騙して滿足してゐると、私のこの姿をぢつと見てゐる眼があつた。その眼は、私が私に注がれてゐる彼の眼を感ずるとき既に遲く、彼の凝視が時を刻んでゐたことをば、期に達してから私が直感したのだ。

三越橫腹の出入口の前、私がさし懸らうとした其處に、ひとりの紳士の我身に集めたひとみの射力を感じたとき、私の躰は驚き悚んだのだ。私は忽ちKの躰を離れて「まあ、お兄上樣でしたか、しばらく……」と、急ぎ寄つて頭を低く躰を曲折しておじぎをする眼には、今兄と同伴してゐる婦人の、豪華な身なりの裾のあたりを見たのだつた。

「買物かい」こんな平凡なことを云ふ兄に「はッ」と、畏まりながら、私はこの兄の同伴者の女が嫂のふさ子でないのは分りきつた、愛妾のS子であるのを——しかし、兄はS子を私に紹介もしないで、「丈夫かい？」などゝ重ねる平凡辭の間にも、私の後に立つてゐるKの方ばかりをじろじろと見て、氣味の惡い探りの風が、私が兄の連れの婦人を嫂でないことを異常に思ふやうに、私の同伴者が私の夫でないのを、兄が異常に思つてゐることは明かである。その瞬間兄の前には流れるやうに塗りの光つた自動車が音なく滑り橫たはつた。兄と愛妾と、老女と女中と次々に車に乘つた。私はお世辭にも見送らないことは例の性分「Kさん。行きませう」

もう商品の前を步いてゐた。しかし、私の感情はすつかり破壞されて了つた。先きに友人を騙し、今、路傍の群衆を騙して愉快がつた私は兄をだけは騙す氣になれない、その憂鬱さを。兄は「自分の血統を引いた妹である。或は自分と同じやうにひとりのつまでは濟まされないのだつたら困る」から、憂ひ危ぶみ惧れはしなかつたらうか、私はそれが苦痛でならない。萬人をば騙し得る。だが、血族にだけは本當の自分を知つて貰ひたい。血族とは名ばかりの今日の兄と妹だ、何等魂の交涉も兄弟の交際もない兄と妹だと思ひながらも私は兄に對して起る眞劍の氣持を自分に味はつて、沈痛に浸つた。

死と死？

松田解子

彼は死んだ。これは事實である。

彼は、病死と云ふ自然的死を果てるには餘りに階級的に生れついた。讀者は武田麟太郎氏の『暴力』を知つてゐられるであらう。彼とは、恐らくあの作の主人公であると思つて貰ひたい。

北海道で、樺太で、カムチヤツカで、苦難と闘爭の日を送つた彼は、×年前東京に出た。黒いロイドをかけて、縞のズボンを穿いて。彼は餘り理窟を捏ねれない男だつた。唯、實に、煽動演說が旨かつた。江東に於ける多くの爭議批判或は應援演說會に於て、彼は其の武器を採つた。彼は、人が云ふアナからボルへの轉向を、鬪爭の眞唯中に實踐した一人であつた。彼の眞に戰鬪的な生涯は、まさに之から始まるべきであつたのに、そして始められて間も無かつたのに、彼は×されたのだ。しかし、彼は生きてゐる。私は靈魂不滅を說く積りでは全然無い。が、彼の意志け、多くの犧牲者のそれと共に、階級戰の卒伍によつて承け繼がれていくと云ふのだ。

××日間の××から解放されて間も無く中耳炎で。

この報せを受けた時、私は悲傷と共に、古い記憶の中から一つの實話を摘み出して事の眞相を察する事が出來た。そしてそれは適中した。――軍隊で一初年兵が上官に頰べたを撲られたのが原因で中耳炎になり、つんぼになつたといふこと――そして、この戰線に頑强に踏み止る者は、勝つ前に、幾度も幾百度も撲られねばならないであらう。

安んぜよ！　彼。

『俺を裏切者だといふ。半殺しにするつてよ。ヘン、アナーキズムでお差支ない者は、貴族か、學者か、小ブルか、空想者じやねえか。お差支ないものは拜んでればいゝさ。』

そう云つたばかりではなく、勞働者の生活と勞働者の鬪爭組織の中に自らを突込んで、考へ、且、行動した彼。彼は×された。

何千人目かのベツドに彼女は横たわつた。

それにしても不具と云ふ事は、何と云ふ絶望的な無力であらうか。醫者は首をひねつて『大學病院ならねえ……』と云つた。が、それが出來たら――うんと金が有るんなら不具なんか問題ではない、腕が一本しか無かつたところで――でも、彼女はよく耐えた。そうして產み落した。AとBと私とで枕元に行つた時、絶えて血の色を見せた事のない彼女の兩頰は、產み落した女の歡びで赤らんでゐた。私共は新鮮な果物籠で彼女のベツドを飾る事が出來なかつた。お互ひに恐れて居た危險極まる瞬間を無事に乘り越えた安心だけを交し合つた。

『よくこらえたわね。』

『本當だ。』

何度も私達はそう云つて彼女を去つた。良人は失業者で、折惡く×港に出稼ぎ中であつた。

Aは持前の切れ味で其の病院長に打突かり最低料金を以て彼女を十日程入院加療する事に取り極めた。

『あの分で行けばいゝけど。』と思つてゐた彼女はその後二十日目にとう／＼果てた。産後の肥立ちが悪かつた事と、カリエスの爲めに。彼女はミシン工であつた。不具な彼女の擔つた重荷は營養不良とカリエスと失業者の夫と姙娠と分娩とであつた。貧乏であつた。最後の一人をも殘さず（それが不具だらうが低能だらうが頓着しない）徹底的な壓搾を本能とする資本の貪慾な手で締め上げられたのだ。

侮辱と痛苦を遺された彼女の子よ、育て！

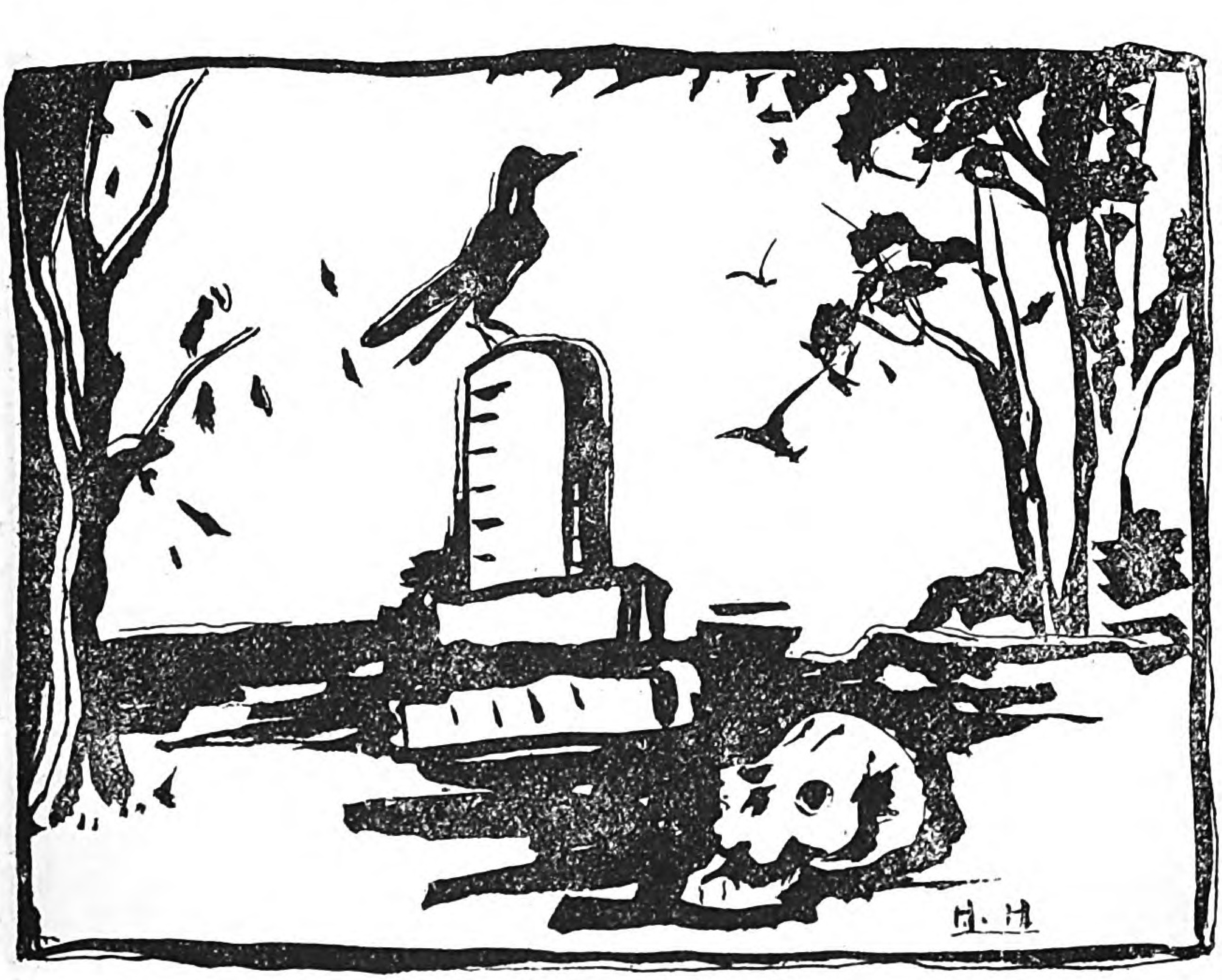
半年も結核に祟られてゐた×が、行衛不明になつたと云つて、同宿の仲間は其の日朝から八方に手を廻したのだつた。そして未だに×の存在は×である。遺書は略ゝ斯う語つてゐる。

『長い間みんなの厄介になつて濟まなかつた。俺としても君達への感謝の意味だけでももう一度起ちたいのだが、この身體ではとても望みがないのだ。それならば、何の爲めに生き永らへねばならないのか。奴等に恥を曝す爲めに？　嫌だ。俺は隨分と考へ抜いた上句死ぬ事に決めた。誰にも迷惑を及ぼさない様な死に方を選ぶ。

××の日を信じ、××の勝利を願ひつゝ。』

或者は遺書の全部を信じ、或物は疑つてゐる。『死骸も、生身もあがらない現在何を云ふ事も出來ないだらう。だが、自分で自分を殺す時は、もう一歩徹底した場合と手段が執られねばならないのではないか。』或者はそう云つて、眉を吊つた。

嵐は強い木を作るであらう。



新嫉妬價値

尾崎翠

耳鳴りが今夜は部屋に蟄居することをひどく嫌つて、さつさとオオヴァを引つかけ始めた。何處に行くのか私には見當がつかないけれど、しかし蹤いて行く他に仕方がない。何しろ彼と私は一つ肉體の中に一緒に棲んでゐるのだから。ロシアではもう一世紀近くも昔に鼻が街の廣場を散歩したんだ。耳鳴りの漫歩に蹤いて行くのもけふ日の人間に取つてはさう無駄なことではないかも知れない。と私は耳鳴りに聞えないつもりで私かに思つた。

「さうさ。歌舞伎とシユライ・ドラマが一つ小舍で演られるんだ。伊達のルパシカと實用のおかつぱとが手を組んでるんだ。俺とお前だつて、だから一つ軀の中に狹つ苦しく雜居してるんだ。二つのものを同時に見たり聞いたり嗅いだり、おまけに拙い詩の合作までやらされるんだ。官吏の月給が活字の上で何割とか削られ、五日の間にまた活字の上で元に還るんだ。いつだつけな、あんなことのあつたのは。まあいつでも好いが、とにかくそんな頃の人間に漫歩の他の仕事があつたら言つてみろ」

「別に意見もないけれど」私はぐづぐづと靴下をはきながら「お次の靴下を一足欲しいな、强ひて意見を言ふなら。今思ひついたんだけど」

「何だい、それは」

「古い靴下。煙草の灰がたつた一粒落ちたんで前にもファッションマアクが一列出來ちやつた、古い。決してお次のぢやない」

「丁度御分際だ。俺たちの合作がお次のを買ふだけな市場價値を持つたらお慰みだよ。すこし位風通しが好くたつて我慢しろ。つひでに右のにも煙草の灰を一粒落して、右左お揃ひにしたら好いな。しかし今夜は急ぐんだ、明日が漫歩報告の締切日なんだから」

私は仕方なく片足には前後にファッション・マアクのある靴下をはいて耳鳴りに從つた。

驛の地下道で、耳鳴りは何か固いやうな柔かいやうなもので背を觸られた。長い間の蟄居で彼は人込みを潜る術を忘れ掛つてゐるには違ひないが、しかし妙な觸りだつたので彼は振り向かうとした。が、まだ頭の向き切らない中に、彼の視野に一本の棒切れの尖が這入つて來た。續いてそれを掻い込んだ腕。棒の後方の端。――部分的なクロオズアップが終つて棒の全部が前を行きだした時、耳鳴りは漸く棒についてぼんやりした知識を得た。質や用途は後で考へるとして、ともかくこれは杖の類に入るべき物らしい。そして街での手の持物が總てさうであるやうに、この杖の用途の八十五プロツエントは多分裝飾だ。

杖は二人づれの、女の方の左腕に掻い込まれてゐる。女の左腕は杖と同時に黒光りを放つオオヴァの複雜な襞を抱いてゐる。そしてこの二人づれはお互ひの話だけを知つて、地下道も人込みも知らな

い。――すこし小さくなつたクロオズアップで、耳鳴りはこれだけの光景を見ることが出來た。同時に彼はすこしだけ苦心したら、二人の話を三分の一くらゐ聞くことが出來るかも知れないといふ興味を起した。「話は穴のあいてる程面白いんだ。他から聞くことより、自分で穴を綴る方が」耳鳴りは大急ぎで私に耳打ちした。

二人づれは人込みを忘れてるだけに非常に足が速い。――此處で耳鳴りは杖のほんとの用途を發見した。この杖は普通の持物と反對に八十五プロ以上の實用用途を持つてゐたことを。それは人込みの中を速く歩く武器なのだ。女の腕に樂々と横たはつた杖は、前に塞つてゐる背中に固いのか柔かいのか解らない觸覺を與へる。妙な觸覺で前の背中は無意識に道を讓る。背中が杖の存在を知つた時は、杖はもう彼の前にゐて次の背中に働きかけてゐる。

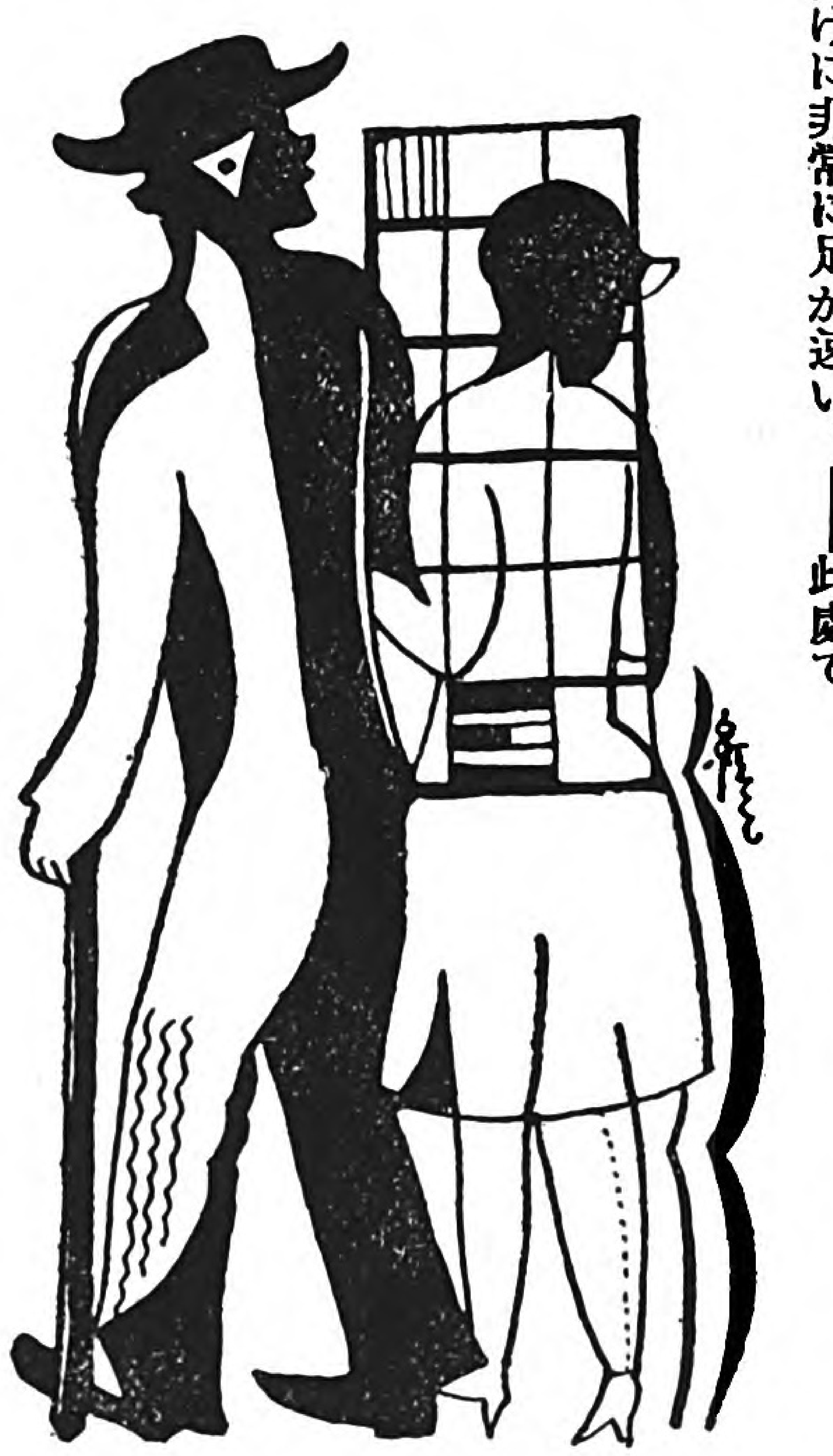
耳鳴りは杖の切り開いてくる路を人込みの苦勞なしに、そして彼等に遲れないで蹤いて行くことが出來た。

「でも案外つまらない。淡すぎる。さう思はない」

「僕はまたつまりすぎた。濃すぎる。今晩だつて、ぜひ、行きたい、つてことも、ないんです。――いや、行かないぢやない。ただ、腦貧血を起したらあなたの迷惑だから。不安なのはその點だけなんです」

「違ふ。何て變な考へ方。不安なのはあなた御自身の感覺ぢやないの。しかし厄介ね、ジヨセフイン・ベエカアの踊りで腦貧血が起るんぢや。ねえ大丈夫。すこしでも變だつたら今の中お歸りになつた方が好いわ。何しろ私はベエカアのゐる限り毎晩見るんだから」

「僕だつてベエカアが日本にゐる限りあなたの側にゐなければならないんです」そんな會話だつた。



女は對手に口を利く代りに、丁度前にあり合はせた背中に烈しい杖の一擊を與へ、爪先で階段を蹴つて人込みに消えた。

彼等がまた一組になつて武藏野館の舞臺に肉身のジヨセフイン・ベエカア踊りを見たかどうかは人込みに消されて解らなかつたが、驛の入口まで上つて來る間に耳鳴りは考へた。今地球の皮では女同志のとに男がやきもちを燒くんだな。Ｘ孃と（多分孃だらうな）土人踊りの名手の間をＹ氏が燒く。とすると、アダム以來のすばらしい嫉妬價値の轉換だ。性ではなくて藝術が嫉妬價値を獲たんだ。ちよつと面白いな。今頃は何處か女の畫家の家庭でフヂタの繪が痴話喧嘩を創り、ジヨン、ギルバアトの脚で六十一の親父が十四の娘にやけてゐる。マルクスは全資本家のやきもちの焦點だ。いや、今ちよつと面倒だから、マルクスも假りに藝術の中に入れておくんだ。整理は後廻しだ。「おい」と耳鳴りは私に呼びかけた。「フロイドがだんだん忙しくなるんだぜ、かうやきもちが交錯しちや―

街頭片々

後藤郁子

東京街！　東京街！

それは勉強難、娯楽難、生活難に追はれて故郷を飛び出して來る地方人にとつても、フジヤマのニホンを憧れる巴里人にとつても日本の首都であるからには等しく依然としてどこまでも犯すべからざる魅惑にちがひない。よしや一たび、マッセンストライク蜂起しやうとも（それは何萬年先きか分らないのにと大抵の人は眠つてるまに）最早地下まで遺憾なき防禦準備をほどこしつゝあるといふ、東京府を包圍する山の手線に沿ふ舗道の底の底まで沸騰するルッボであるにしても…。

お祭騒ぎ、御輿かつぎの多い街、川崎の大師・水天宮・池上祭・寄席・落語・長唄・歌舞伎の形式的傳説からマネキン・トーキー・ラヂオ・テレビジョンの形式的最新知識迄、到るところに傳統と破壞の火花がスパークして時代の速度は一秒より一秒烈しくなる一方であるからには矛盾の悲劇喜劇が絶えず演じられる所以です。

秋晴れした十月の某日午後、とある郊外、空氣は清澄、近所は靜かです。道路をへだてて二三軒先きの門口の立話位、らくに響いて參ります。…と、その時

「何するんだよッ。そんなに押し出さなくつたつていゝぢやないか。要らないと云へば出てゆくよ。押すなつて云つてるのにッ」

「何でもいゝから出て行つて下さい。出て行つて下さい。今來客中で忙しいんだから、押賣は御免ですッ」ガラガラッピシャリッ！

隣家の玄關の格子戸の烈しく閉まる音。押し出されたのは四十歳位の束ね髮、黑風呂敷を背おつた女行商人、「そんなに突き出さなくつたつて出て行くよッ、何も無理に誰が買つて吳れつて云つた。馬鹿野郎ッ。私達は乞食じやないんだよ　お上から許されて行商してゐるんだ、日本のどこを歩かうと勝手だよ、おまへさんは日本人か。日本の同胞が飢死しても自分さへよけれやいゝんか…」

門前で、女行商人のじだんだ踏んだ怒號が火の燃えついた様につゞきます。近所は靜かです。

「私達はね、おまへさんのやうにジッとして座つてゐちあおまんまが食へないんだようッ。日本人でも見殺しにするんかようッ、いくら眼鏡かけて丸髷結つたつて何なるものか。オタンチンー　馬鹿野郎ッ。エエ腹が立つッ」

行商人の子供らしい少年が急いで他の家から出て來ました。母親が一寸話したらしく

「あんまり人を馬鹿にするないッ。ケダモノ奴。ケダモノ奴ッ！」

今度はその少年が叫びました。

小一時間もして隣家の訪問客の歸られたあと、やゝシンとなつたお居間の方から夫人と女中さんの對話。



——「私、びつくりして仕舞ひましたわ、こわら御座いましたわ」

——「あんなもの。おまへこわかつたのかへ、あんなもの、こつちが最初に高飛車に強く出なきあいつまでも暇つぶしだからね、相手にしてたらそれこそ恥だわ。乞食同然なんだもの、何を云つたつて。あんな者人間の仲間と思つてやしないわ」

私は、啞然としたのです。近所は靜か。省線電車のすぎる音。

雨中。——最近歸國の洋畫界の一異彩、嗣治・フジタの個展が、朝日畫廊にひらかれてゐました。

日光のない雨つゞき、うす暗い畫廊のふかく沈淪した空氣からボウッと浮かんでゐるのがフジタの畫です。

全體が白色（ゴフン）の彩色、鏡面に落ちこぼれた髮の毛の纖細（デリカ）で冷やかな線、ゴフンの中へ溶け合つてゐる淡色（うすいろ）の軟柔さ、デッサン風な鉛筆畫に於けるしつこさ、蔽ひ被ぶさつてくるやうな筋肉、小品のロマンチック、どこかぬめぬめとした扁平さ、そんなものが相錯雜してかもし出した雰圍氣は繪具積立式油繪の潜入觀念を突破して、刺激に狎れた複雜なる近代的趣味人にも一味の新鮮を送るだけの價値はあるやうです。

仄かな興奮を頰に感じながら、畫廊を出ました。雨はなか〳〵止み相にもなく、降つてゐますが夕靄が立ちこめて、街の灯が反射してゐます。ぶら〳〵數寄屋橋をわたり乍ら

「歸るには一寸時間があるねえ」

「さうだね、銀座か」

「とにかく、お茶が飮みたいな」

「あそこ、今何やつてる？」

こんな對話を、朝日新聞社主催のあるたんびあの邦樂座屋上のイルミネエションの月は幾度聞いてゐることでせう。

埠頭にぴたりと船腹をつけた朝日の建物とすぐ前の丸やかなる白い橋、豐かな近代味のある交響圖、河面をこまかく叩いてゐる雨の遠い〳〵シロホン——機械からにじみ出た油そつくりの水の色も夜はチラ〳〵と映る灯影に異國的な水都です。そしてごらん下さい、黑い貨物のやうなニタリ舟が永遠の眠りに入つた樣に靜かに雨に濡れて浮かんでゐます。

——「あの舟はなつかしいね」

傳統的な日本の匂ひが懷鄉（ノスタルジヤ）をほんの瞬間起させますがそんなものは直ぐ消えてみんなは銀座へ——銀座へ

こゝから先きはよろしく「文學時代」や「婦人サロン」をおひらき下さい。

飢えてゐる・その他

小金井素子

△飢えてゐる。

或る日、新しい下駄のはき心地がうれしいそれほどの輕い氣持で銀座の或百貨店の、平常は餘り好まない地下室の食料品部を歩いた。

英國製のジャムとオレンヂマーマレエド。ロシア産はロマノフの商標のついたカヴィアー。アメリカも、カリフオルニア産のかくも豐かな果物と野菜、そしてシカゴの牛肉、イタリーの三色旗がマカロニの筒で、フランスがぶどう酒。スイッツルのチース・ドイツのソーセーヂとハム。

お醬油の匂をみなぎらせたガラス箱。その間に、彼女等は水色の作業服を着て立ち並んでゐる。彼女等の食慾は、たんのうする嗅覺に壓迫されて、遂に壓縮されて了つた。何と無表情に彼女等の手が、その一つ一つを動かし、包み、銀貨と引換へて行く事か。

中央の、大きな卓子の上に、男が來て肉の煮たのを盛り上げた皿を置いて行つた。そこに紙包を作つてゐた瞳が一齊に向けられた犬の瞬間、彼女等の一人の、水色の作業服の袖がふわりと揺れた。紅をさした頰の肉がゆるく揺れて、肉を一片つまんだ人差指と親指を彼女はもう一度、輕くなめて、――一あたり見まはすと、彼女は靜かに歩み去つた。

眞晝の、可成混雑した地下室に、食料品部は嗅覺と視覺を刺戟しすぎて、味覺――食慾を忘れようとさへしてゐるわたしに、何を話しかけようとするのか？

△モダンガアル。

早慶野球戰第一日。雨で延期した日曜日午後七時のラヂオニュースに箱型スピーカアは紫の布を通して云ふ。

――本日は日曜でもあり、天氣はよし、モダンガアルを初め、奥さんお孃さん、中には、仇な姉さん連の姿も見えて、――

これでは、モダンガアルが不良少女位の意味にしか響かない。

――早慶戰で、今年はネット裏でしたからお見掛けするだらうと思ひ、其次は三年町のコートへコーシエを見に行きましたのでキットお會ひすると思つてゐたら――一體どうなすつたの。ゴルフ一點張りですか此頃は。

この葉書、男字で達筆に書かれてある。

この二人の友人が、一人は銀杏返しの一番よく似合ふ瞳の美しいひとで、一人は、短袴の見かけだけは、先づフラッパアだ。そしてお互に普通の、奥さんと云ふ立場にあるとき、さてもう一度、モダンガアルと云ふ言葉をくり返して見る。

△イミテーションの散歩。

メトロポリスの發明家、ロートワングは人造人間に魂を吹き込む時に誤を來したかも知れない。だが、魂を持つ生きた人造人間の第一歩は、義手義足から始まる。肺臓も入れかへられよう。腦髓だつて間もなく入れ變へられよう。人造人間は、機械人形の發達の極致に目ざすより、あらゆる物質の模造人造(イミテイシヨン)の極致に導く。

イミテーションは、地上に蒔散らされた。例へばイミテーションにくるまつたお孃さんたちが、澤山街頭を行く。桑の葉を食べて吐く蠶の糸よりも、遥かに上光する艶をもつ人造絹糸。——それがお孃さんを頭の上の洋傘から、足の先のフエルト草履の表迄包み上げてるぢやないか。

人造ダイヤのピンが光り、皮革模造品の手提を握る手袋も云ふ迄もない。

幸、お孃さんの手足も內臓器官も、まだイミテーションではなかつたらしいが、彼女の思想は、趣味は、そして理想さへも——。イミテーションから出發したお孃さんの敎養は、遂に戀愛に迄及ぶ。

あとから、あとからつゞくたくさんの、イミテーションの散步。

眞正眞銘の、人造人間の自由に散步する日も、もう直ぐです。



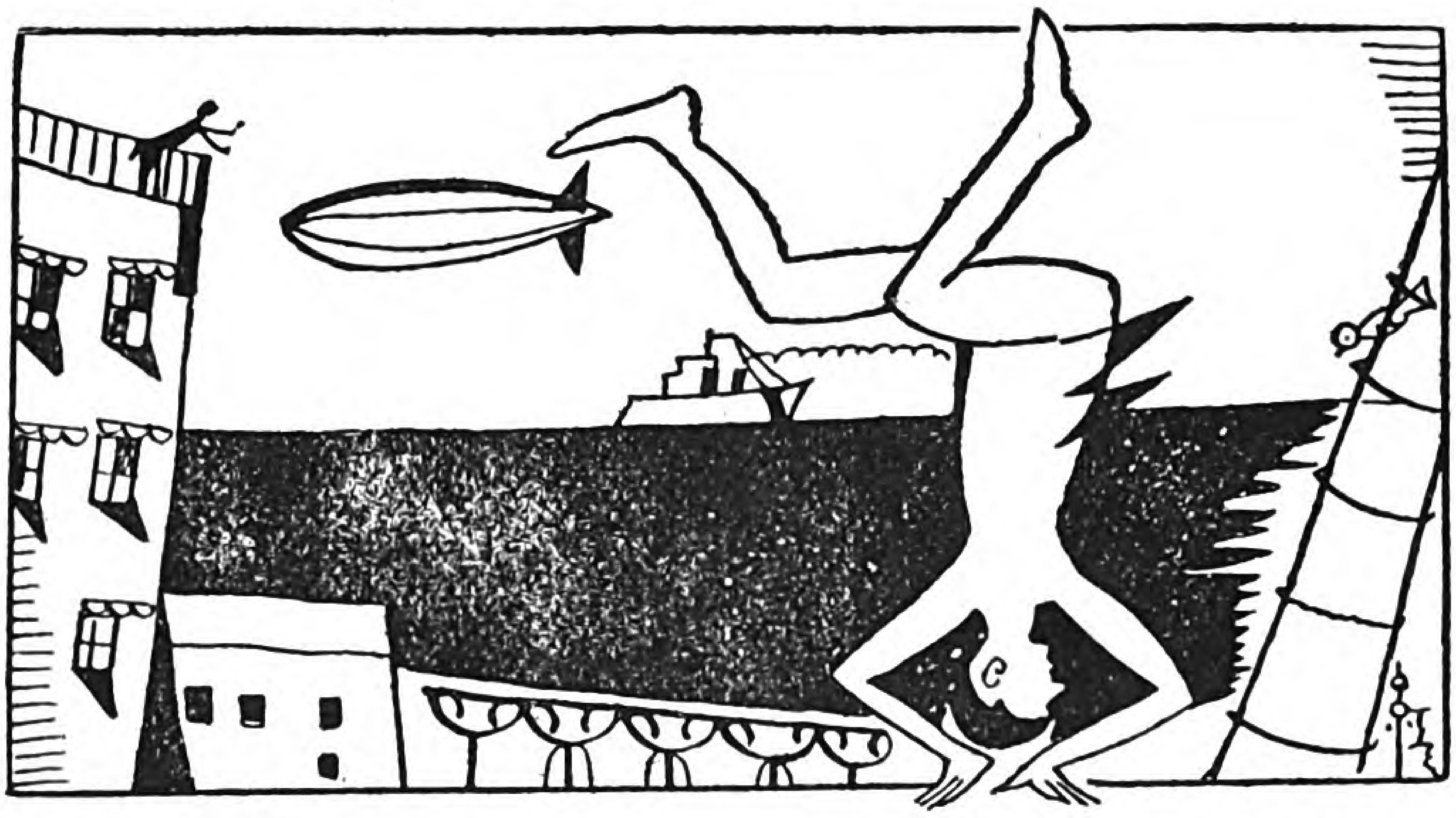
目と耳

山の木つが

風呂場の羽目のうしろで、屋根屋さんが二人お辯當をつかつてゐる。一人はもう男の子の小學校の卒業を待兼てゐる位の年配の壁だ。
「あいつらあ、（刑務所で大官連が）どんなにしても日に三圓か、安くつて二圓七八十錢の辯當を入れさせてるつてことだぜ。」
「それぢやちつとも仕置きにならねえ。」
「それが一人やふたりぢやねえ、コテとはひつてらあな。みんながみんな、三圓か二圓七八十錢の辯當なんだといふんだ。」
對手は答へなかつたが、自分たちは終日働いて――盛夏の炎天でも、寒中の吹晒しでも、終日の賃金貳圓内外であるといつた無言だつた。
「このせまい日本によ、そんな大盗人ばかり澤山ゐたんぢや、貧乏になるのはあたり前だ。」
「とんでもねえ畜生どもが威張つてやがるんだなあ。」
「好い人はジッと辛捧してゐるんだ。みんな苦しんでらあ、生活によ。」
飯か咽喉を通る間だけ無言だつたが、突然に、
「ライオンだつて皮あヒンムキアわからねえぞ。」
「アメリカは金があまつてうなつてるつてえが、國が廣くつて人間がすけないのだな。」
「そんな事はあるめえ、人間も多いだらう。」
「でも金があまつてるつてえから國のわりに人間がすけないいんだ。」
「さうかな？」
「せめえところでどうしてくらさうかつてえんだ。××様が米を作つて、米を大事にしろと教へてくだすつても、子供をつれて、動物園へいつて、清く遊んで金をなくすなと見本をだして下さつても、いくらライオンが儉約しろつてどなつたつて――」
「それよかなあ、砲兵工廠や士官學校をどうにかしてくれるといひなあ。毎日〳〵小車をひつぱつて通ふものには、グルリと一廻りすると途方もねえむだな道を歩かせられらあ。朝夕ぢやお前隨分な時間だ。」
「さういふ儉約はさせてくれねえ。」

◇

田舍では大福のやうなあんを餅でくるんだのを、安平といふ。支那の北平から傳へた食物かしら？　信洲には安平といふ村がある。
その北平廿二日發の特電によれば車夫六百人が暴れて、電車を襲撃し、九十臺の電車を七十臺まで滅茶苦茶にぶち破し、其爲に軍隊が出動し、全市戒嚴令が布かれ三千人の車夫がつかまつた。北平が沒落し、貨物の集散が減少したため失業者の暴動化である。いつぞや笙氏の北平だよりにもあつたが、俳優まで車夫になるといふのだから、こんどは反對に乘客がないといふ譯である。
私は去年北京で虱のやうにたかつてくる車夫さんに呆れた事があ



つた。筌さんの家の外通りを散歩してゐた時女優の芝居が見たくなつたので四臺車を揃へていつた。立派な車だつたがそれは立派な筈で、支那では抱車夫が平氣でホマチを稼ぐのだ。ところが劇場の前へつくと満員客留だつた。三人の車夫は笑つてまた乘るのを待つてゐたが、運わるく私の乘つたのだけがおぢいさんの汚ないので、ドテラのやうに厚く綿のはいつた、足のさきまである服を着てバタバタ駈てゐたので、氣味がわるく、虫は大丈夫か大丈夫かと後の車へ聲をかけてゐたものだつた。それが一名出て來ないために、待つてましたとばかりにボロ車の包圍攻撃――四人が圍まれてしまつた。兎に角あの長い軸棒を額より上へあげて下から目玉をだしたのが、菊の花の蕋のやうに、といふと奇麗すぎるが、うまくカチ棒を組合せて、幾重にも幾重にも取りかこんでしまうのだつた。

そんな時に、お客を救ふものはなにか？　それがまた彼等なのである。その中の一人にでも乘つたら客も掴み殺されかねない、車はいふまでもなく引つくりかへしてしまはれるのだ。たゞ呑氣なことに、その形勢のままで幾町幾間でも押流してゆく。もの馴れた筌さんは女ながらも蹴りもしかねない態度で終始する。それでなければいけないのだらうだ。ふとした透きをねらつて、前に乘せて來た車夫が前廻りをして前方から轅をおろしてくれたのに乘れた。最後に筌さんが、包圍の車夫群とはまるで別なのに機を見てヒラリと飛乘ると、ワーッと聲をあげたが、我々の笑ひと一緒になつて彼等も呆氣にとられて笑つてすんでしまつた。すこしばかり行くと筌さんの自動車が迎ひに來たのへ乘りかへた。だから私はその記事を讀むと思つた。あゝあれだな、あれが笑はずに笑つてすまされない問題なので、もぐらもちのやうにやつたんだなと思つた。いくらトンヅル三枚で生活の出來る彼等だつて、そのトンヅル三枚さへ得られなくなれば虱のやうにウジ〳〵してもゐられないのだ。日本の一錢についてトンヅルは八枚位だとかきいた。

◇

「兩人とも無事成人の上は、大神のひろき御神徳によりて夫婦のちぎりを取結ばせ給へ」と祝詞をあげられて緣結びの神出雲の大社で、許婚の式をすませた六歳と五歳の子供がある。花嫁さんは四五子ちやんといひ、お婿さんは種雄さんといふ大阪に生れた氣の毒な子供たちだ。子供とは一人の男性一人の女性のたゞ幼いのである。兩親だからとて、生んだものだからとて、その一人の人間となるものの未來を約束してはならない筈だ。どうせ、今日のままで社會が進轉しないのではないから、二人の子供が大きくなつた時分には、朗らかに哄笑して、互の道をゆくではあらうが、親の道樂で人間の子を人形にしないやうにしたいものだ。

居留地街の工場から

高橋鈴子

ひどい貧乏をしてゐた今年の三月、明るい春の色彩の街からぢめぢめした暗い氣持で工場に入つて行つた。工場の中では絢爛な明るさは見られなかつた。

爛熟した情熱の街の灯も點火しない。工場から觀たあたしの眼に映つた街頭は暗いものだ。

裝飾された街の裏口から生活苦を發見した。

　これでもか
　これでもか
と形を變へた貧乏が追つかけてくる
あたしは無氣味な
大きいこんな追手に
頸筋をとつつかまへられない爲に
春の街を逃げ廻つた。
そこに工場の門が開かれてゐた。
サイレンの呼び聲がする。
兎も角も――生活の手段として
――あたしは高い門を潜つた。
異人山の櫻は滿開だつた。

工場の中から街を覗く一つの小さな窓があつた。

展望臺に設置された望遠鏡のように嬉しい窓だ。

街の中は縣會議員候補者の自動車が疾走してゐるし、ビラが春風の中で亂舞してゐた。廣告燈の行列が樂隊とリズムを合して窓の下を通つて行く。廣告燈の灯は明るい――しかし灯を背負はされた傀儡のような男の顏は暗かつた。

屈辱がある。苦惱がある。

あたしは窓を閉めて目を閉ぢた。兩手でしつかり耳を掩ふた。

街の幻惑

街は春だ！
シミーズもヅウロースもつけない素裸の妙齡のをんなが
イルミネエションとジヤズのペープメントの眞中で
　すつからかんになつた女
賣れ殘り、殘品は貞操だけです
ハ…ハ…と跳ねつ反つて
狂ひ嗤ひをやつてくれゝば
――口惜しいが――素晴らしい壯觀だらうな。
街は春だ！
男×女　女×男　男×女爛熟した情熱の視線の交錯
フイリツピン音樂團のジヤズ
ジヤズ、ジヤズ、ジヤズ
カフエー、タバコ、キネマ廻る廻る赤い灯、青い灯
これが近代感覺の尖端だ――とは
なんと恐ろしい世の中だ。

街の人々に報知されるポスターが二度刷りも三度刷りにもなつて輪轉機から辷べり出て來た。車輪は廻つてゐる。

生きてゐる活字機が活字を間斷なく生産してゐる。ドロドロの鉛が加熱されてピクピク動いてゐる。

音響の充滿した工場の中へ小さな一つの窓から春風が吹きこんで光線の中で塵埃をひつ搔き廻してもゐる。

輕い咳をしてゐる男の横顔を見てゐると香典を集めたい氣がした春もない。五月の陽もない。工場はいつも冬だ。

あたし自身も胸部の疼痛をぢつと我慢して來た日が幾日續いてるだらうと思つた。銳い注射の針で放射的に刺すような痛みに襲はれると、あたしはその刺痛の場所をしつかり壓しつけて目を閉ぢた。

熱い涙が瞼の裏から滲み出て來るのを感じながら——さうあたしの其頃の生き方が滲み出てくる涙をぢつと堪えてゐるに似た慘めさだつた。それから十日ばかり後です。

工場から出て來た日

あたしのプチブル根性を
たゝきのめすつもりで
工場の門を潜つて行つた。
それから廿日振りに歩道を見た。
踏み心地のよいアスファルトだ
印刷工場のエキストラは完全に馘首になつた。
だがリズミカルな車輪からの
解放がある。自由がある。
嘔吐きさうな鉛臭もない。
賃銀がポケットに膨らんでゐた。
あたしは解放された歡びに丈一ぱいののびをして
瘠せこけた扁平の胸の洞穴へ
ふかぶかと廿日振りの大氣を吸つた。
そこで
おーい　みんな腕を組まう
しつかり組まう
歩き出さう
一人ぢあのめりさうなんだ
三人——五人——七人
歩道一つぱいに
分列式を作つて歩いて行かう！
と深夜の居留地を
大聲で出まかせを吹鳴つて行つた。
らんまんと咲いてゐた
櫻の花は散つてゐた。

工場から街へ、兎も角もあたし以上の慘めさがあつた。悲劇があつた。

旋律をもつた春の感覺は顫へてゐる街の世相だ。

あたしは大きな仕事へ突進する前提のように恐ろしく沈默してゐる靜けさをもつた深夜の街をガッガッ歩いて行つた。

三町　五町　十町
響きわたるメガホンで
谿から——村から——山から
仲間を呼ばう
街の廣場も惡くはない。

街頭小景

深町璃美子

女人藝術講演會プロローグ

女人藝術秋季講演會の盛況を豫想しながら私は數奇屋橋で市電を捨てた。橋畔に船體の様なＡＳＡＨＩが聳えてゐる。

重油の様な比重をもつた河つぷちの空氣――其處からボーッと夜霧が湧いて、雜踏の中を何處迄も擴がつていく。そして把み所の無い寂しさが、暗がりから電燈の光のやうに流れて來る。あらゆる街の不調和音がゴーッと鳴つてゐる星屑のない空――。ヘッドライトを觸角の様に動かして圓タクが十字街を謎の様に走つていく。

私は足を早めて夜になつたばかりの街頭を急ぐ。私は少し氣の利いたお上りさんみたいな氣がした。山の手から來る人間にとつては逆襲し難い文明の激流を感じた。腕時計が今私の手頸でチクタク。もう五時二十分だつた。朝日新聞社の六階へ、昇降機で一息に昇る。全身がツーとして氣が遠くなりさうだつた。ドヤ／＼と群衆が吐き出される。二臺の昇降機で束になつて押し寄せて聽衆來る。

『今晩は――おそく成りまして…：』

受け付けの處で生田さんが椅子から『よくいらつしやいました』とおつしやる。皆忙しさうだ。

『今夜は坊やおいてきぼりにして來ました。』

そう云つた私は急にノスタルヂャに襲はれる所だつた。

『明日は二日分の母性愛を發揮なさいね』つておつしやつて下さつた。私はお母さんの云ふ事を聞く良い娘になつて『はい、はい』つて云つて笑つてしまつた。

『明日は二日分の母性愛だ』、私はそう心につぶやき乍ら受け付けに立つた。私が來て五分も立たない内に、警官隊がやつて來た。そこで場内と入口の二手に分れると、聽衆の一人一人に嚴重な身體檢査を始めた。彼等の行動を見てゐると微苦笑では濟まされない氣がした。此夏市ヶ谷へ入つた某氏の事が、私の腦裡で烈しいショックを喚び起してゐる。虫のいゝブルジョア政治やブルジョア××、そして又何と恐怖病患者の多いことか。廊下に列んだ人達は一人も殘さず容疑者なのだ。先づ大學生風の靑年が第一番の網に引つかゝる。兩手を蟹のやうにひろげて、ハンド・アップです。オーバー、上着、ズボン、ポケットの全部に手をつゝこんでゐます。

『これは何だ？…ビラじやないか？――』

警官の聲に皆の顏色が緊張する。婦人の風呂敷包をばら／＼に開かせてゐます。ハンドバックなぞもひつたくる様にして覗きます。一體彼等は何を欲してゐるのか？ サーベルのガチャつく音と不氣味な白い手袋が動く許です。檢送されて來る聽衆は限りなく續く。

『これは何だ？』

『お辨當箱です。本です……。』

彼女達の胸や、帶の間を、腹部を、匍ひ廻る白い手は全くグロテスクだ。羽織をまくつて、脊中迄手をつゝ込んでゐます。

兩方の袂をひつくり返へして、袂くさが出たり、キヤラメルが飛び出したりします。彼女達は唯明るい微苦笑に紛らしてゆく。

指の間からすつぼりとぬけてゆく今夜のプログラム、ぬき取るやうに切符を受け付ける私の目と手は隙間もない。

『此處はもう滿員だ』そんな聲がする。

『ぢや、こゝ〆切つて上へいきませうか』

Ａさんと私は二人で最後の〆け付けをする。もう時刻は豫定の開會時間を過ぎてゐる。大講堂の中は聽衆のスロープをなして少しの空席も見當らない。七階の入口ももう林立した人で一つぱいになつた。本當に滿員だ。

長谷川主幹の開會の辭が始まつてゐるらしいが文句は明きり聞きとれない。それでも聽衆は鎖の様に續いてゐる。

兎に角ドアーを閉めて入場行進を打ち切らうとする。

『どうしても駄目でせうか？――』後からかけつけて來た婦人が戸の隙間から聲をかけた。今夜の入場行進の序曲は終つた。

地藏横丁

牛込の矢來下の羽衣館の所を少し江戸川によつた狹い細長い横丁だ。角のお地藏様は此の頃は素晴しい景氣だ。貴殿のパトロンはお金儲が上手ですからね。貴殿も此頃は立派なお住ひを持つてゐるし、お賽錢は信仰家の年寄や氣前のいゝ東京兒があげるし、赤いリンゴや梨が、お三寶にごろ〳〵乘つてゐますし、ダリヤのお花なんぞ上つてゐますし。その横隣から五色揚の胡麻油がぷーんと匂つて來るのはどんなものでせうか。安い商賣で名の通つたお客のこみ合つてゐる夕方です。今日は樂隊入りの特價デーだ。

靑物店の眞紅なトンガラシの實と、大根の眞白な肌、ホーレン草のビタミンは、私の食欲を無計算に刺戟する。お皿に盛つて十錢、二十錢、これが商賣の單位だ。

時節柄、私の蟇口は底をはたいても、十錢玉と五錢玉が二枚きりの日暮だ。貧乏を緊縮の萬金膏なんぞで治さうなんて大間違ひだ。

新宿の夜

あらゆる人間の集合所みたいに、華やかで、怒りつぽく、默りやで、享樂的だ。色電氣に凝つた廣告燈が夜天に明滅し、どれも低廉なジヤズ的なリズムが立體的な陰影の中に抱かれて、いきつまつた生活者の流行唄みたいになつゝこい。

ゴーッと省電が走つてゆく音響や、汽笛は、港の町と間違へられさうだ。それ程性的に昂奮狀態に浸つてゐるやうな街だ。

商品の様な贅澤な女の顏がプロマイドの様に伸びて來る。鋪道は露店商人が占領して人通りでギシ〳〵してゐる。

何も彼もが大量生産で、賣店のブルジョア趣味は、「ガラス張のウインドの中で窒息していくがいゝ。主義者や、批評家や、詩人だの畫家だのゝ計畫が、どんな暴々しい火花を起すであらうか。私は待つてゐる。新しい世紀の夜のあけるのを。

武藏野館あたりのひつそりした空氣は人造石の內部の秘密事件に舌を卷いてゐるかもしれない。

オモトの植木鉢が何十圓しようと、ギリシヤ型の鼻をしたエトランゼのステツキが何圓であらうと、變態的なクラブが出來たつて、グロテスクなキヤフエがふへた所で、階級的憎惡は飾り物にもならない。それより蛇使ひの男に無雜作に卷きついた大蛇の、蹙をひそめた平べつたい小さな頭が、より現實的であり、よりイデオロギー的かもしれない。

とんでもない御婦人達

山本和子

ともかくも十月といふ月は減俸問題で脅かされた月であつた。濱口首相の國家を思ふ至誠から出た人格的な政策が、緊縮から、遂に減俸にまで飛躍した。が結局、官吏の抗議に面喰つて、深く『輿論を聽取』してといふ人格的な反省によつて撤回された。撤回をしたのだから文句はないぢやないかといふ事になれば、この問題は正に時事的興味をそゝらない事になる。で減俸問題としては私も取り上げる事を止さう。

が併し、この問題の撤回が聲明されない日の第一線に立つ婦人先覺者の意見は尙問題たり得ると思ふ。

たま〳〵かういふ問題が惹起した時に取つた婦人の態度こそ、社會問題をいかに取り扱はうとしてゐるかを物語るものであり、婦人の自覺の度が計り知られる好材料となるものであるから。そして又、第二第三の社會問題に對してその婦人達が、眞に婦人の立場を自覺し、現代社會の諸現象を見るに明確な眼を持つてゐるか否かゞ判るからである。

讀賣新聞十月十八日の婦人欄には減俸問題に對する第一線の婦人の意見が掲載されてゐた。

反對派では無産婦人同盟の岩内とみゑ氏、社會民衆黨婦人部の山田やす子氏、赤松明子氏、婦選獲得同盟の市川房枝氏、金子しげり氏、婦人參政同盟の高橋千代子氏、高木富代子氏、職業婦人社の平田のぶ氏、女子英學塾の星野愛子氏、女教員修養會の黑崎悅子氏、女人藝術社の長谷川時雨氏、等はそれ〴〵積極的に反對意見をのべ、實行を宣言してゐる。

同じ反對派でも、聯合婦人會の吉岡彌生氏、キリスト教女子青年會の加藤たか氏、女子商業の嘉悅孝子氏等は、婦人の立場から一度政府の意向をたゞした上でしんみりと考へて態度をきめるとか、よく研究するとかいふ程度のものである。この俸給生活者の死活問題をしんみり考へ直す餘地がどこにあるか。研究する餘裕がどこにあるか、しんみり考へ直すといふ風な人情的な問題でもなければ、よく研究すれば判るといふ風な學問でもないわけではないか。この種の婦人には資本主義社會に現はれる一切のみじめな現象が研究の資料であつたり、それを批判し理解するに人情ですましたりする具合である。がまだしも漫然と反對する意向のあつた事丈でまづ諒として置かう。

併し、次ぎに贊成派の意見をきいてみやう。聯合婦人會の吉岡氏が全く驚かされた結果、政府の御損を心配し、政府の意向をたゞした程でしんみりと考へ直す程度で、でもともかくも反對丈はしてゐるのに反し、聯合婦人會の三輪田繁子氏は、一時は不愉快に思つたが、落ちついて考へて見れば當然で、國家の大變な危機を救ふ前提として、一家の收入が減らされる事位は忍ばれる、只こんな事をやつたからには他の方面でも政府に充分な努力を見せてほしいといふ

のである。だが國家の大變な危機と云ふが、その國家が、俸給の一割を減じられても平氣でゐられる國民と、政府にしてみれば僅か一割の減らし方で、口に入れるものを節約するより他に方法のない國民とのどちらにより多く占められて構成されてゐるといふのか。贊成派でも無理をすれば百圓で六分位までは切りつめられる。只生活の無駄をはぶくのと、月給を減らすのとは別問題だが、それも、國家のためならばまあ辛抱しなければといふ程度の贊成者、生活改善同盟の塚本はま子氏あたりならば、その程度の婦人として、さう大して惡意のあるやうにきこえないだらうが、四谷婦人會の山田わか子氏の如きは、都會人一般が贅澤すぎるといふのを以て、この減俸問題が、あたかも、都會人の奢侈の風を矯正出來るかゞ如き見解を持つてゐるのに至つては、こんな論法がどこから割り出されるのか了解に苦しむ。私共にあつてはいくら俸給をあげられて、よしその贅澤を許される身分になつたとしても、給料があまりに高すぎるといふ事はないのである。このやうな婦人から婦人問題、社會問題を傾聽する婦人雜誌の讀者である主婦達こそいゝ迷惑である。殊に四谷婦人會の竹内茂代氏は、現在の不景氣は、醫者（因に氏は有名なる女醫である）でも商人でも、辯護士でも收入はまさに半減されてゐる。そして官吏等が特別であり、優遇されてゐたのだから、國家のためにそれに從ふのが國民のつとめで、從つて婦人會の問題にはならないだらうといふに至つては、何と名論ではないか。



今は漠然と自然發生的に生活苦を歎き、社會に呪ひの聲を叫んでゐる勞働者でも、自分より二三十錢日給の多い仲間が、賃銀値上げ運動に起つ時、こんな風な意見を持つて、それを妨害しやうとはしない。仲間の問題の中に自分自身の問題の横はる事を見拔いて、共に仲間の意識を以て奮起する事を躊躇しないといふ事を知らしてやりたい。

更に婦人市政研究會の多川すみ子氏に至つては實業方面では商賣が思ふやうに行かず、會社がつぶれたりして、不景氣に苦しんでゐるが、官吏等が今までの通の俸給で行かうとするのは虫がよすぎるといふ。而も、今は市政の研究で、政府のする事には口を入れないとある。

かういふ歷々の婦人方に市政の研究をやつてもらつてゐる市民こそいゝ面の皮である。

實業方面の人々が不景氣に苦しめられてゐるのだから、官吏も、同じ不況時代に住むよしみに一しよに不景氣の分け前を持つのが國民の義務とでもいふのだらうか。

贊成派の婦人方よ、せめて同じ讀賣新聞の十九日に八百屋、炭屋、魚屋の主人達の意見でもよく耳に入れていたゞきたい。俸給生活者でない商人なら、俸給の一割減が及ぼす場所への影響を、商人の利害との關係をよく見究めてゐる。この減俸問題が官吏と商人を同じ利害關係に置かれてゐる社會問題だといふ批判を明かに充分に持ち合はしてゐるのである。

（一九二九、一〇、三一）



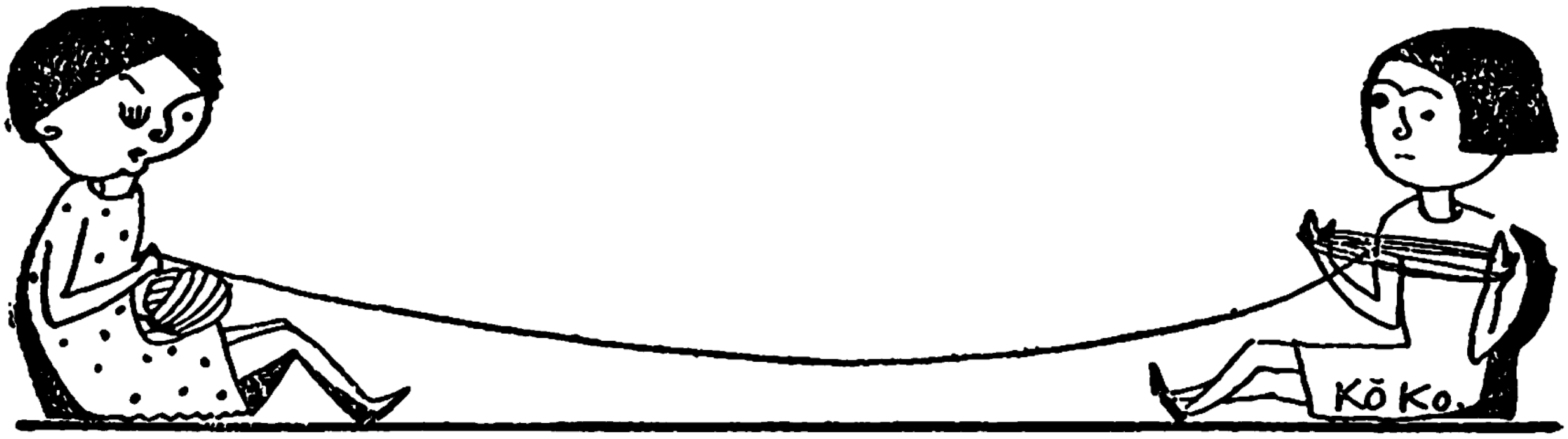
小さき者へ

—愛兒へ—

武内利榮子

私が私自身を
力弱きものと嘆ずるが如く
お前達がそれ自身を
弱者だと痛嘆する事を私はおそれる。

人間が自分を弱者だと意識する事は
いゝことには違ひないが
それは淋しい事である。
そしてその淋しさはあきらめへ通ずるのだ、
私はそのあきらめをもおそれる。
そのはちきれさうに肥え太つた小さい手足が、
すく／＼とこだわりなく伸びて
お前の凝視が鋭くなつた頃
世の中はあきらめを持つ人間を必要としない、
そこで私はお前達が



强く〳〵生ききつてくれる事を欲するのだ。
自惚れでもよい、
自分をもつとも時代に必要な人間であると
言ふ確固たる信念の下に、
飽くまでもたゝかい勝たうとする力と
すべての生命を溫め燃す焔を持つ人間に、
さらに
それに溢れる喜びを感ずる人間に築かれる事を欲するのだ。
其處に選ばれた人間の偉大な使命を感ずるだらう。
それは時代の先驅者のみに與へられる
最も嚴肅な喜悅である、
小さき者よ、
幼き愛兒よ
萠え出し芽生よ、
來るべき時代のお前の多くのはらからが、
地上の何處かで
產聲をあげてゐるのを
私は强く感ずると共に
それ等の生命にも
お前へと同じき願望を持つことを
私は喜ぶのだ。

第二巻第十二号、二十四頁から三十九頁は高群逸枝著「お出なさった——一アナーキストの宣言——」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舎）

ブルジョワ・イデオロギーとプロレタリアの自由



松本正枝

マルクス主義者と自稱する人々の共通な特徴は圖々しき無知である。彼等はマルキシズムそのものさへ知らない。彼等はモリエールの喜劇中の人物がポオヴルテ（貧困）をパヴアテイと英語でいふ事によつて、貧民問題が半ば以上解決したやうに考へたと同じく、自らの理解してない事を喚いて問題が解決するかのやうに思つてゐる。

隅田氏などは此の種のマルクス主義者の典型といつていゝ。氏によると『プロレタリアの要求する自由は、彈壓と戰ひつゝ、ストライキの自由、無産階級の言論集會結社の自由、×××活動の自由』であつて、これはブルジョワジーの自由とは相違するといふが、然し氏の擧げられた自由は、いづれも單なるブルジョワ・デモクラシーの自由に過ぎない。こんな事が今日プロレタリア運動一般の要求してゐる自由であらうか？　氏はマルキシズムはおろか社會主義のいろはさへもしらない。しかもなほ一層知らないアナアキズムに對して駁論を加へやうといふのであるから完全なドンキホーテでなくて何であらう。

プロレタリヤの要求する自由、即ち近代社會主義運動一般が追求してゐる自由とは、要するに生産の自由と消費の自由である。無政府共産主義或ひは共産主義的無政府主義（この言葉はクロポトキンによつてはじめて用ひられたる言葉である）とは要するにこれを端的に云ひ表はしたものである。

アナアキストの主張する自由とは、『資本家も、×××長官も、××引つくるめて』の自由、漠とした自由ではない。アナアキストは資本家の自由とプロレタリアの自由を混同したことはない。自由の區別はあらゆるアナアキストの既になしてゐるところである。例へばバクニンを見よ！（バクニン全集の邦譯版は今將に出版されやうとしてゐる）彼の著書には至るところに自由といふ言葉の持つ曖昧さを指摘して、ブルジョワのいふ自由とプロレタリアの自由、從つて人間の自由との區別が論じられてある。藤森氏とか隅田氏とか中島氏とかいつたやうなドンキホーテ、『自由の意義』と『自由意志』の區別さへも分らない人々、自ら據ると稱する立場さへも理解してゐないいはゆる『勉強してゐる人々』、自ら達が無知で囀づるところから他人も皆同樣無知で囀づつてゐるのだと憶測する人々のみがわ

かりきつた事を混同してゐるに過ぎない。『氏等の頭腦は、實に小學六年生位の子供の空想より張り合ひのない幼稚な空想である』

プロレタリアの獨裁とは、マルクスによつてはじめて主張されたのだと、キリスト教徒が此の世のいいことは皆はじめてキリストによつて云はれたと信じてゐるやうに、マルクス主義者は盲信してゐる。マルクスがプロレタリアの獨裁を主張したことがあるのは事實である。しかしそれと同時に、マルクスがプロレタリアの獨裁を主張する者に反對して、大いにブルジョワ・デモクラシーを謳歌したことのあるものも事實である。

一八七二年九月、和蘭のハアグで開かれたインタアナショナルの大會に於ては、三つの意見の對立が明らかに現はれた。一つは政治的權力の破壞を提唱するアナアキスト、他の二つはいづれも政治的權力の奪取を目的とするものであつたが、その中の一つは議會行動を徹底的に主張するもの、他はプロレタリアの獨裁及び計畫的革命を主張するものであつた。第一の派は瑞西のギリヨオムに、第二の派は獨乙のヘプナアに、第三の派は佛蘭西のヴァイヤンにその解説者を見出した。そしてこの第二、第三の兩派は相結んでアナアキストを敗つた。けれども更に此の兩派は互ひに他の問題で意見の齟齬を來し、第三の派は遂に大會を脱退し、續いてインタアナショナルからも脱退した。その脱退聲明書中にも同じくプロレタリアの獨裁が聲高く主張せられてゐるのである。

マルクスは此の對論には直接關係しなかつたが、大會の終了後、アムステルダムで開かれた演說會に於いて、自分の態度を闡明してゐる。彼はそこの演説の中でブランキ派（第三派）に一矢酬ゐて、合衆國や英國の如き國に於いては、勞働者は平和な手段でその目的を達する事を望む事が出來ると述べ、和蘭もこれと同じ範疇に屬する國であると主張した。

即ちマルクスは、ブルジョワ・デモクラシーの比較的完全に行はれてゐる國々に於いては、プロレタリアの革命的獨裁といふ過程を經ずして、社會主義に到達する事が出來ると考へたのである。此の意味に於いてマルクスはブルジョワ・デモクラシイの否定者でなく、讃美者であり謳歌者である事はトオマスやヘンダアスンと少しも變らないのである。

それから三年經つて獨逸の社會主義運動の二派、即ちアイゼナッハ派とラサルレ派とが合同しようとした時、今度彼マルクス自身がプロレタリアの革命的獨裁を主張する立場にまわつた。

大體アイゼナッハとラサルレ派との間に、首領間の個人的確執を除いては、あらゆる問題について別個に對立してゐなければならない程の理由がなかつた。マルクスはアイゼナッハ派の隱然たる首領を以つて任じてゐたけれども、アイゼナッハ派そのものはラサルレ派と異るところなく、國家主義者であり、その綱領に於ても大同小異であつた。それに對してマルクスは別にたいした文句も云はず『フォルクスシュタアト』（民衆國家）とおかしな題をつけた機關紙へも應援して得意然としてゐた。然かるにこの合同機運が進むと彼は今迄アイゼナッハ派に對して默過してゐたことゝもを仰々しく取りあげて、その合同綱領に嚴しい批評を加へた。

實際その批評の當つてゐない點の多い事は、既にマルクス派の碩學メーリングが指摘してゐるからこゝに述べないが、メーリングによればマルクスは『フォルクスシュタアト』だけしか讀んでゐなかつたので、アイゼナッハ派について餘りにいゝ意見を持ちすぎてゐたのであるといふ。しかしそれより三年以前にブルジョワ・デモクラシーの國に於いては、勞働者は平和的に資本制を顛覆することが出來ると主張したマルクスがあれ程ゴータ綱領に嚴しい批評を下したのは、バクニンの

マルクスに對する批評『國家主義と無政府主義』に刺激されたものである。

とに角マルクスは此の時はじめて――マルクスによつてはじめてゝはなくて――プロレタリアの獨裁といふ言葉を使つた。そしてこの言葉が今日マルクス主義者と自稱する人々の金科玉條になつてゐるのである。

しかしマルクスのプロレタリアの獨裁に關する遺言は極めて概念的なもので、彼は此の獨裁の形態、乃至方策に就いては少しも指示してゐない。彼の社會主義運動について發表したプログラムは大抵どちらかといへばデモクラシー的傾向を帶びたものであつた。

白耳義のインタアナショナリストが、差し迫つてゐた戰爭の危險に對して、勞働者は總同盟罷業を以つて對抗しようと提議した時、マルクスはその提案を馬鹿げた事だと嘲弄して憚らなかつた。モダンが陷落して、ナポレオンが顚覆し、佛蘭西のブルジョワジイの地位が危機に陷つた歷史の決定的瞬間に際して、彼は佛蘭西の勞働者に社會主義の方向へ一步進め、勞働の支配を確立する事を勸める代りに、エンゲルス、デユポンと共に雨の如き指令を發して、ブルジョワジーに急いで媾和條約を締結させ、そしてそれからブルジョワ・デモクラシーの自由の讓步を獲得せよと頑强に訓令したのであつた。パリに於てコンミユンが宣言せられた時、彼ははじめてあはてふためいてそれを支持したけれども、その以前には彼は佛蘭西の勞働者をあらゆる言葉を以つて罵倒してゐたのであつた。コンミユンの失敗はその運動にはつきりした意識の欠けてゐた事も一つの原因ではあるが、既に時機が餘りに遲れてゐたこと、從つて地方の革命的民衆の支持を受ける事が出來なかつたことも一層重要な原因に數へなければならない。普魯西軍はもう佛蘭西の要地を占領してゐたし、佛蘭西のブルジョワジーは普魯西軍と諒解をとげて安定に達し、その上パリ以外の各地に起つた民衆の社會主義的性質を帶びた武裝一揆は、パリの起つた時はすでに皆完全に鎭壓されてゐたのであつた。コンミユン以前の六ケ月間、口を酸つぱくしてブルジョワ・デモクラシーの獲得を叫び、佛蘭西のあちこちの社會主義的性質を帶びた民衆の叛亂を冷笑してゐたマルクスは、コンミユンが起つや慌てゝ今度はそれを倫敦から指導しやうとした。コミユン以前の六ケ月間、あらゆる努力を拂つて佛蘭西の各地に社會主義革命を起さうと試みたバクニンは、コンミユンが既にその最良の機會を失つてしまつたことを惜んでゐた。

マルクスのプログラムは常に民主々義者のプログラムであつた。故にボルセヴイキが全權をソヴイエットに！　と叫んで露西亞で政權を奪取した時、その形態、その方法、その組織は、プロレタリアの獨裁といふ極めて概念的な標語を除いては、マルクスの中には何も類似したものを見出す事が出來なかつた。反對に、バクニン及びバクニン派がプロレタリアの鬪爭の『決定的方法』に於いて書いたプログラム、といつた方法、形態、組織の中に、多くの類似點が見出された。そこで獨乙の社會民主々義者は早速マルクスがバクニンに就いて書いた文章を復刻し、それに詳しい註解を施して、ボルセヴイキはマルクス派に非ず、徹頭徹尾バクニン主義である事を證明しやうとした。又英佛獨伊のアナアキスト、サンデイカリストの間にも此の類似點を强調して、ボルセヴイキを擁護するものもあるにはあつた。又今日に於てもソヴエット制度と共產黨の獨裁との間に嚴重な線を引いて、前者は全然アナアキズムのイデオロギーに基くものであると主張するものも少くない。

バクニンの實際運動のプログラムの中には今日ボルセヴイキと類似するものの少くないのは事實である。

又彼が有名な社會民主々義同盟を設立した

のは『隱密の、そのタイトルなしの獨裁者を構成して』勞働者にそれの革命的指針を遵奉せしめ、革命を促進させる爲めであつた。バクニンに從へば、インターナショナルはあらゆる傾向、あらゆる種類の勞働者を包容し、漠然たる綱領を掲げる廣汎な團體であり、社會民主々義同盟は決定的な、インタアナショナルに加盟した勞働者が結局に於いて到達しなければならない廣汎な、革命的綱領を掲げる團體であつた。從つてそれは精力的な充分に結合した、明確な意識を持つた、規律ある少數者の團體である。それはインターナショナルに加盟するけれども、それはインターナショナルに融合する爲めではなくて、その支部も大會や運動に於いて活潑に活動する少數者、今日の共産黨の言葉で云へば『核』となる爲めである。故にインターナショナルに加盟してゐ乍ら、又それと相並んでそれ自身の獨立的な存在を保つて行くのである。それはプロレタリア運動の精鋭より成る一種の『黨』とも見るべきものであつた。

バクニンとマルクスが理論的にはじめて正面衝突をしたのは、一八六九年九月の瑞西バアゼルに於けるインターナショナルの大會に於てゞある。この大會にはマルクス自身出席はしなかつたけれども、バクニンの提案になる相續權の問題に就いて、エカリウスがマルクスの起草した反駁書を持つて出席した。兩者の討論はこゝに述べないが、バクニンは革命の後に一片の法令を以つて直ちに自作農からその所有地を取り上げることは、却つてそれを反動の陣營に追ひ込むやうなものであるから、相續權を廢止して事實上の占有を許すがよいと主張した。

これをマルクスが、共産黨宣言の中で、最も進歩した國々に直ちに適用出來ることゝして『産業軍隊、殊に農業に對する産業軍隊の設立』を主張したのに比較し、それから現在マルクス主義國たる露西亞の農業政策を見る時失笑を禁ずる事が出來ないものがある。

議會政策に就いても、アナアキズムはその發生當初から全然議會運動を否定してゐた譯ではない。プルウドオンが一八四八年の革命後の議會へ、代議士として選出されたのは人のよく知るところ。バクニンが社會主義民主主義同盟を創立した時、最初の創立者十六人の中には、二人の代議士、伊太利人ファネリとフリシアとがゐた。當時はまだ制限選擧の時代であつたから此の二人は左翼共和黨の應援で、ナポリとシシリヤから選出されたのであつた。しかもファネリは伊太利に於ける最初のアナアキストであつたばかりでなく、西班牙にアナアキズムを輸入して、今日の西班牙の社會運動の種を蒔いた人であつた。彼等は議會に於いて極左的立場をとつたが、しかしアナキストであることによつて、代議士を辭めなければならないとは考へなかつた樣である。その後もアナキストはかなり長い間議會運動の功用に對して懷疑的であつた。アナアキストがそのプログラムから決定的に議會政策を揚棄したと見るべきは、一八七七年七月クロポトキンの發表した議會に對する深遠な批判以後のことである。

私はボスやクノウ、或ひはアルドレッドに和してボルセヴイキはバクニンの正統であるといふのではない。ただ今日ボルセヴイキの諸氏が、新しい思想、新しい天啓、新しい手段新しい問題と考へてゐる多くの事がアナアキストにとつてはすでに古い問題であること完全に揚棄清算してしまつたものである事を注意するに過ぎない。

近代の社會主義は、佛蘭西大革命の末子であるといはれてゐる。ブルジユワ革命を政治的に完成したとエンゲルスのいふこの大革命は、個人の自由と平等を宣言しながら國家のオムニポテンスといふ事に歸着したのであつた。この國家のオムニポテンスといふイデオロギーは、佛蘭西及び獨逸の初期の社會主義

者にそのまゝ繼承された。彼等は國家の中に社會最高の完成を見國家以外に社會を見なかつた。從つて彼等の社會主義は、たゞフーリエのそれを可能なる例外として、いづれも國家によつて初めて完全に實現されるものであつた。彼等はこの國家の樣式を作り出す事によつて、國家を一層强力にし、社會主義を實現する事を夢想した。彼等のある者は、民主主義的であり或る者は獨裁的であつたが、そのイデオロギーの根定に於いては皆同一であつた。彼等によれば、國家のないところには秩序も、統一も、協力も、組織もないのであつた。無政府とは即ち混亂と暴力の横行に他ならなかつた。彼等の中で最も卓越してゐたルヰ・ブランさへ『無政府制に於ける國家とは、誰れでも最も智惠のあるもの、最も力の强い者の權力、即ち混亂の專制である』といつて憚らなかつた。

これらの宿命的な理論に對して、國家の組織と勞働の組織、從つて社會の組織とを區別して、社會主義運動をかゝるブルジョワ・イデオロギーから脫却せしめた最も顯著な功績はプルドオンに屬する。彼は勞働がそれ自身によつて、勞働固有の法則に從つて組織される時が來るならば『工場は國家を消滅せしめるであらう』と主張した。彼は經濟の組織の中への國家の解體の必然性を見たのであつた。――此の頃猫も杓子も口にする辯證法によつて。

プルドオン以後の社會主義は、その點に於いてそれ以前の社會主義と明白に對立させられる。マルクスもすでに一八四七年にプルドオンその人に反對して書いた『哲學の貧困』の中でプルドオンと同じ意味で將來社會に於ける國家の消滅を豫想してゐる。彼はその後もしばしば國家の消滅に論及してゐるが、殊にバクニン反對の秘密回狀の中に於いては、アナアキイを社會主義運動一般の窮極の到達點であると述べてゐる。彼はデモクラシー――平和的手段――によつてそれに到達し得るとも考へたし、又プロレタリアの革命的獨裁――ボルセヴイキの主張するやうな意味があるならば――を經なければ到達出來ないとも考へた。

この點でマルクスの位置は、佛蘭西大革命より一八四八年の革命に至るまでの社會主義、即ちブルジョワ的國家社會主義と一八四八年以後の社會主義、即ち近代プロレタリアの無政府社會主義の丁度中間に位するのである。彼はデモクラシーの信者である事によつて、又デモクラシーを排斥するやうに見えた時でも國家の中に大なる改造力を認める事によつて、ブルジョワ・イデオロギーを正統に繼承してゐる。一方プロレタリアの解放は、國家の消滅をまつてはじめて完成されると考へた事により、近代のプロレタリア・イデオロギーに一步足をふみ込んでゐる。けれども後者に對する確信は、前者のイデオロギーを揚棄させる程に强くなかつたことが彼の思想の特徵である。この不安定は彼を極めて小心者とならせた。彼はプルドオンを完膚なきまでに――とマルクス主義者はいふが事實はさうでない――攻擊しながらその末尾にオヅ〳〵と經濟團體の發展が、階級對立の公的表明である國家に自から取つてかはるであらうといふ平凡なプルドオニズムを挿入れてゐる。バクニンを攻擊しながら、アナアキーは窮極目的であることを是認してゐる。デモクラシーと中央集權の信者たる彼マルクスが聯合主義を宣言したコンミユンを愉快と支持したり、バクニンの一喝に驚いて、ゴータ綱領に手の裏を返す樣に猛烈に批評を加へたりする。

これらはすべてマルクスのデイレンマに落ちた苦しみである。この矛盾に惱んだ彼は刺戟を受けた時だけは前方を見る。しかし刺戟のない時は、何時でも古い習慣性のイデオロ

ギーに覆はれてしまふ。そしてマルクス主義者は、前方に一歩を踏み出してゐながら、遂に此の世界に於けるブルジヨワ的國家社會主義の最後のものといふ榮譽を荷つたのである。辨證法的發展などゝいふ事はこの小心者の飾りに過ぎない。無知と確信のかけてゐる所には、いつでも辨證法がはいり込まなければならぬ隙間が見出されるのである。

バクニンもボルセヴイキの始祖といふものがある位に多くの矛盾を持つてゐた。彼は無政府國家（レタ・アナルシック）といふ言葉を平氣で使つてゐる。しかし彼はマルクスに反して、ブルジヨワ・イデオロギーよりもプロレタリヤ社會主義に對する確信が强かつた。彼に於いてはブルジヨワ・イデオロギーがプロレタリア社會主義を覆はないで、反對にプロレタリア社會主義の光明が前者の影を薄めてしまつた。それが彼に近代プロレタリアの無政府社會主義の先鞭をつけさせたのであつた。

ブルジヨアの自由と平等、いはゆる單なる個人の自由と平等、デモクラシーは、國家の中に卽ちブルジヨワジーが政權を獲得することによつて實現される。これに反してプロレタリアの自由と平等、卽ち生産と消費の自由と平等は、國家があつては實現されない。それの實現は先づ國家の消滅を豫想しなければならない。しからばプロレタリアは自ら解放を成就する爲めのブルジヨワのそれとは全く異る組織、手段によらなければならないことは明かである。又プロレタリア革命は、オールヒユーマニテイの解放を目的とする。しかしその全人類の解放といふ意味は、ブルジヨワ革命に於ける如き、政治的意味に於てゞはない。それは社會的意味に於てゞある。故に全勞働者の鬪爭は政治的性質を持つものである』といつても、その持つところの政治的性質は否定的意味以外ではあり得ないのが眞實である。卽ち政治的組織を改造したり奪取する事でなく、それを破壞する事でなければならない。政治的權力を獲得する事によつて、全人類を解放する事が出來るといふのはブルジヨワ・イデオロギイである。

國家がなければ組織がない、政府がなければ力が集中されないといふ考へは、ブルジヨワ・イデオロギイである。ボルセヴイキは此の點で少しもプロレタリア的でない。アナアキストは組織を排斥しない。力の集中を排斥しない。假借なき鬪爭を排斥しない。アナアキストの排斥するのは、國家の中にのみ組織を見、政府の中にのみ力の集中を見、黨の獨裁の中にのみ鬪爭を見る宿命的なイデオロギイである。プロレタリアの自由と全然背馳するイデオロギイである。かゝるイデオロギイを揚棄しなければ、プロレタリアはその鬪爭を決定的に遂行する事が出來ない。

プロレタリア××の成功は、その革命の持つべき傾向を、プロレタリアが明確に意識してゐなければならないことは、議論をまたない。そして明確な意識のある所には、鐵の如き規律ある黨などは存在の必要がない。鐵の如き規律が必要であり、極めて中央集權的な黨が必要であると考へるのは、一部分はイデオロギーにも基づくか、その外に明確な意識のかけてゐる事を示す。卽ちその指導者チヤンピオン以下がはつきりした意識を持つてゐない時は、それは規律とか統制とかいふ外部的な權威に依賴しなければならない。一件の指導者氣取り、チヤンピオン氣取りでゐながら、ブルジヨワ・デモクラシーの自由とプロレタリアの要求する自由の區別意識さえも持たない隅田氏や、藤森氏や、中島氏が、阿彌陀佛に南無する如く、規律や、統制や中央集權に依賴するは、此の點からのみ云つても極めて無理のない事なのである。

目的は手段を決定する。プロレタリアの自

由の爲めの運動は、ブルジョワ的自由の爲めの運動の既成手段を用ふる事は出來ない。プロレタリアの自由といふやうな廣汎な自由はたとへその目的が如何に善良にせよ、その意圖が如何に眞面目であるにせよ、如何にすぐれた人物を網羅したにせよ、決して『黨』といふが如な偏狹な組織にあらゆる事を從屬させる事によつて實現出來るものではない。それは生産組織の根本的變革である。それは明確な自由の意識と組織とによつて鼓舞されたあらゆる方面からのイニシアテイヴを保つて、はじめて完成されるものである。

此の點に於いてアナアキストとコムミユニストとは、組織戰術上に於いても著しい對照をしてゐる。コムミユニストが黨の獨裁を强調し、中央集權的國家の手中にあらゆる生産及び分配の機關を集中しようとするに反し、アナアキストは自由ソヴイエットに、卽ち生産者の自治的コミユンに生産手段を管理せしめ、生産及び分配の問題を自由に解決せんとする。ボルセヴイキにとつては、ソヴイエットは國家の統治の機關である。アナアキストにとつてはそれは民衆の自治の爲めの組織生産と消費の自由の確立せらるゝ社會の發展の基礎、少くとも芽でなければならぬ。それは國家の破壞者でなければならぬ。この意識の下に於いて組織せられた時にのみそれはプロレタリアの自由の爲めの有力な手段となるのである。

露西亜に於いても自覺ある大衆は自由ソヴイエットを要求した。露西亜が國の內外の資本家の反動と交戰し、その存在を維持する事が出來たのは、又革命を行ひ得たのはソヴイエット組織の賜である。ボルセヴイキは狡猾にも全權をソヴイエット！　と叫んで政權を獲得したが、彼等が政權を握るや、ソヴイエットは全權を奪はれて、單なる統治の機關に化してしまつた。『ソヴイエットか獨裁か』これが今露西亜に於いてアナアキストとボルセヴイキの爭つてゐる衝點である。

アナアキストは、爛漫と花咲く自由の社會が或ひは平和的の、或ひは軍事的の、或ひは管理上の困難な鬪爭を經ず直ちに出現するものだなどゝ考へた事はない。それと同時に國家が辨證法的に揚棄せられて、必然に消滅するなどゝも考へない。それは不斷の努力、不斷の鬪爭の後に於いてのみ、はじめて出現するものであると考へる點に於いては何人にもまして確信的なのである。唯だアナアキストの鬪爭形態は、その時々の客觀的條件によつて種々に變化しても、常にプロレタリアの自由、生産と消費の自由といふ目的に決定せられてゐるのである。そしてこの自由がその一切の行動の基調をなしてゐるのである。この基調をかいてゐる一切の鬪爭、一切の組織、一切の行動は、如何に壓言しても決してこの自由社會をもたらす事は出來ないことを信じてゐるのである。

××がなければ外敵は防げない、××がなければ國內の秩序は保たれない、××がなければ民衆の後れた意識を高める事が出來ないといふ。何とブルジョワジイの寢言に似てゐる事よ！　ブルジョワジーはさういつて民衆を××の奴隷にする。共産黨もさういつてその宿命的な、致死的な獨裁を推持し、民衆のあらゆる自治とイニシアテーヴを抑壓する。××は本質的にさういつた組織ではないのである。外敵を防ぎ、秩序を維持し、後れた意識を高める爲めのプロレタリアの組織は××ではあり得ない。又ブルジョワジイとブルジョワ意識を完全に一掃し得るものは國家ではなくて、徹底的なレヴオリユウシヨンである。××はそれの妨碍者である。

今日の社會民主々義政黨はなにもはじめから今日の議會的政黨であつた譯ではない。獨逸に於いても、佛蘭西に於いても、伊太利に於いても、はじめは皆例外なくボルセヴイキと同じ事を云つて議會に參加したのであつ

た。アナアキストはその變遷を充分に經驗した。それの僞瞞と、議會運動に固有の法則を見つくした。議會に參加して內部からその僞瞞を曝露し、議會に信賴してゐる大衆を覺醒させるといふ事は、幼年學校、士官學校、陸軍大學を經て陸軍大將になり、そしてそれから軍隊を赤化せしめるといふのと同じ程度のたわごとである。資本家の溫情政策に信賴してゐる勞働者があるから資本家となり、いゝ地主の出現を望んでゐる小作人があるから地主となつて解放運動をするといふ類である。眞實に本當の政策は、それの徹底的批判と排撃より他にない。

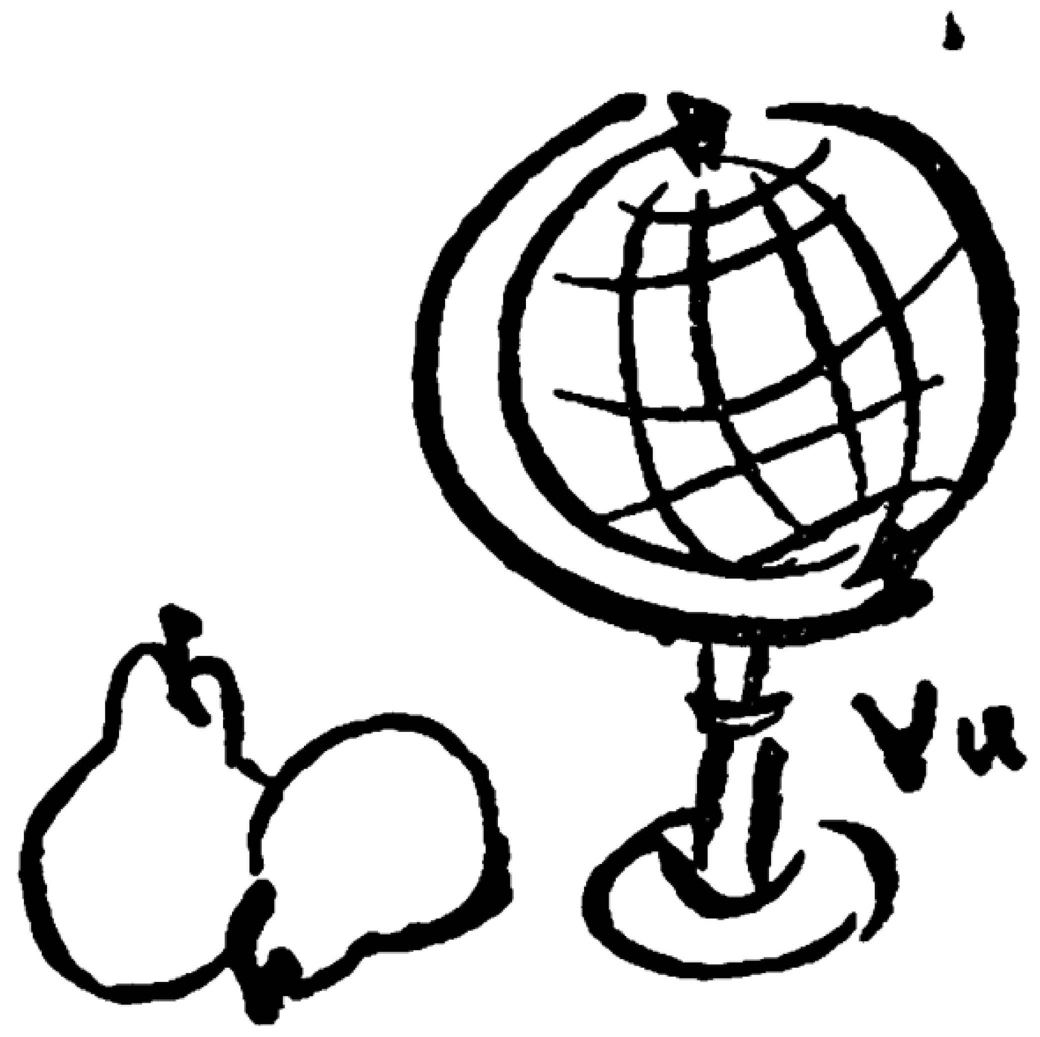
ロシアに於いて特權を享樂してゐるのは共產黨員だけで、一般の勞働者や農民が致命的に不幸である事實を報道してゐるのはアナアキストのみではない。今日に於いては多くの共產主義者がそれを主張してゐる。例へば日本のマルクス主義者を風靡した福本イズムの宗家本元、コルシユを見よ！　今日露西亞の民衆の不幸な狀態を描いてゐることに於いて彼は決して人後に落ちない。又コミンテルンの一番最初の書記であつたアンジエリカ・バラバノワ女史を見よ！　如何に露西亞の大衆が政治家共に蹂躙されてゐるかを實に潑溂と描いてゐる。又和蘭に連絡機關を置いてルーズなインターナショナルを形ち作つてゐる左翼共產主義者の發表してゐる極めて詳細な情報を見よ！　それは多くの共產主義者の機關雜誌に定期的に揭載されて居り、英、佛、獨語のいづれなりを讀む人はたやすくそれを手にいれることが出來る。

現在の露西亞が社會主義なるが故に、常に世界のブルジヨワ ジーから、『ブツプされる』危險に瀕してゐるといふ宣傳は、たゞスターリンの獨裁を維持擁護の爲めのトリツクに過ぎないことはトロツキーも云つた。露西亞が隙を睨はれてゐる事が事實であつても、それは決して露西亞が社會主義國であるからではない。勢力均衡の爲めに露西亞に好意を示してゐるブルジヨワ國もある。露西亞が今日感じてゐる國際的壓迫は、ブルジヨワ國の夫々が相互に蒙つてゐる壓迫と同一の性質のものである。これに就いては佛蘭西の共產主義者で經濟學者として相當名のあるエル・ルーゾンの詳しい研究がある。私は日本のマルクス主義者諸氏に對して、少くとも共產主義者の書いたもの位は『勉强する事をおすゝめする』ものである。

實に『人は常に恣意的に物を解釋する。然るに事實はたゞ一つしかあり得ない』のである。一九二九・一〇

感謝

十月十八日朝日講堂に於ける本誌講演會の盛況は、女人藝術聯盟諸氏の深甚なる支持によるところと感謝に堪ません。猶、十月十二日大阪市に於ける本誌愛讀者々友よりなる大阪女人聯盟支部發會式及講演會も稀なる盛會、これまた聯盟員諸氏の熱意、甚大なる努力によるところと深く〳〵感謝いたします。



隅田氏の妄論を駁す

八木秋子

1

華かな、電燈五十年祭のやうな賑ひで咆えついて來られた隅田龍子さんの駁文を讀んでそこに私は少からぬ英雄主義的自己陶醉と自己滿足とを見た。

隅田さんにしたがへば「お前達のやうな單純な頭では偉大なマルクス主義は判らない」と仰有る。アインシュタインの相對性原理ではあるまいし、勞働者農民幾億のはらからを解放する原理が、そんな風にしちむづかしい「平民ども」に理解できない專賣特許であつていいのか。私達は社會を根底から改造する道理は、精神的不具者でない限り、單純な、單純すぎる平凡な頭で立派に理解できるものであつて欲しいし、それは斷じて直譯的な高踏的獨斷であつてはならない。

俚諺にいはく「先生といはれるほどの馬鹿でなし」ところが實際は、この「先生」がさかんに幅を利かす世の中だ。しかし、この現象は不思議でも何でもない。「平凡な頭では理解できない」マルクス主義が「先生」たちの特權階級の特賣になるのは當りまへの話だ。百姓や職工階級は、理屈をいふことでは「先生」がたの敵ではない。またそんな暇もない。

早いはなしが、わが國のマルクス主義運動を見ればよい。最左翼非合法派の運動は、ブルヂョア大學に月謝ををさめてゐるモダン大學生諸氏、インテリゲンチアがひきづつてゐるではないか、最左翼にかぎらず政治主義解放運動のどの分野をみても、ピラミットの頂きに支配者然とをさまつてゐる彼等は、どれもこれも「白い手」の所有者。菜つ葉服や唐義階級は彼等のアゴのさきでこきつかはれてゐる。

隅田さんはいふ。「我々は勇敢なる政治的指導者團をもたねばならぬ」と。はなはだ結構。その勇敢なる政治的指導者團にお目にかゝりたい。かゞやける左翼の精神をうりものにして、昨日までは無產階級をあざむいてきた大山、河上氏等が、コソコソと合法政黨の創立にうきみをやつすなどは、いかにも沒落者のゆきさうな道だ。かういふ人々は演壇や活字の上では大言壯語することが出來る。だが、現實――實戰のまへでは、あへなくも資本家政府と野合する輩でしかない。三・一五事件といへば左翼の人は胸を躍らすだらう。だが今日ではどうか。勇敢なる政治的集團――かゞやける前衞であるはずの黨の指導者某々氏等（私は名はあげない）ピラミットの尖端に王座してゐる彼等はいかに見事な方向轉換をした

か。支配階級政府に屈服して「日本共產黨は解散すべきである」といふ。掌をうらがへすよりもあつけない鮮かな裏ぎりぶりを獄中からみせてゐるではないか。ブハリンの沒落に至つては沙汰のかぎりである。

かうして殘存してゐる僅少の非合法派の大部分は學生、インテリゲンチュアである。彼等の饒舌は表面いかにも華々しくあるが、それきりだ。これが、マルクス主義の實踐的方法であるのか。實際は勞働者農民階級とはいよいよ遊離してきてゐる。浮足だ。いまや光輝ある最左翼は末梢神經をふりまいて沒落の歷史的役割をつとめつゝあることは、私たちにとつては憫笑に價する。

社會改造の實踐と任務は「私は革命家である」と考へることによつて悲壯な氣分をいだいて自己陶醉に陷つてゐるマルクス主義者の大部分をおき去りにして、はるかの彼方に、眞實の苦悶をつゞけ默々として地の底を縫ふて堅實な步武を固めつゝある素朴なアナキズム運動にあるといふことを、この機會に一言しておきたい。

2

それでは何故、そのアナキズム運動は大衆の眼に映じないか。反對にマルクス主義はなぜ、見られる如く世の喝采を博するのか。

今日、社會の表面に起伏する輿論なるものの製造者は、インテリの階級である。インテリの要求を捉へ、その心理をつかむもの、この黨派は舞臺の中央を步む事が出來るのだ。

マルクス主義は一方では、そのクロス・ワード的乃至風車パッズル的行けどもつきせぬその混迷、底なしの沼、小春日に論戰する手頃の玩弄物たるが故に、そしてかやうな作用はインテリの心理に全くお誂へむきであるが故に、他方、現實の資本主義社會では今や芽の吹きさうにない見透しからきたインテリの、勞働者農民を足臺にして心地よい支配者の椅子に坐つてみたいといふ要求を十二分にみたしてくれるが故に、一も二もなく、マルクス主義迎合のありさまとなるのだ。

私どもは、鬪爭によつてのみ獲得維持されるべき筈の改造運動が、マルクス主義にあつては、却つてその小ブル・インテリ階級によつて迎合されてゐるといふ事實を一考すべきではあるまいか。

もつとも日和見的、文字通りの小ブル資本主義社會の習慣、制度これらのもつとも恐るべき保守黨であるインテリの階級が、マルクス主義の中心をなしてゐるといふことを見逃してはならない。

彼等はコムミュニズムを口に唱へ乍ら、ロシアにおいてはこれを實行しない。のみか益々右傾の傾向を深めてゐる。そしてこの階級裏切りに對し抗爭せんとするプロレタリアートを投獄し、一齊射擊を浴せかけてゐるのだ。

アナキズムは人類をゆり動かす深さをもつてゐるが、それは民衆の生活のうちから生起した體系の集積であるが故に、すでにのべたやうに單純で素朴で通俗的である。マルクス主義のやうに迷路や、陷穽や拔道やこれらインテリの心理を滿足させるべき遊戲的對象に缺けてゐる。アナキズムは、資本主義社會の因習、制度、道德經濟組織そのいづれの微細な殘留にも反抗する。資本主義の一切を清算する。萬人平等を要求するところ、インテリの優越感は木つ葉ミヂンにうち碎かれる。だから、かやうなインテリからはアナキズムは歡迎されはしない。

だから、今日の社會の段階において、アナキズムが、社會の表面に華々しく持てはやされないことは、當然であるとともに、それだけアナキズムは斷乎たる唯一のコムミニズムであることが判る。

だが、エロテイシズムやアメリカニズムやモダニズムが次第に影を薄くしてゆくやうに社會運動の上のモダンボーイである、マルクス主義は社會狀勢の推移ともに、浮游物として清算されるに違ひない。アナキズムは、その反階級性を指摘し鬪爭し、それを粉碎する

であらう。

かくして、はじめて、社會のドン底に跼蹐してゐた眞の戰鬪的勞働者農民は、その充分に吸收せるアナキズムの野生的力をもつて、人類の偉大な事業に着手するのである。

3

隅田さんは「自由」といふ判りきつた言葉をも理解しない。判つてゐても耳をふさいで聽かうとしない。

マルクス主義は正しい。だから他の一切は間違つてゐる。裏切りだ、小ブルだ、ユートピアンだといひたてる。自由とは無支配といふこと。何の變哲もない。權力の固りである强權ソヴヰエトに變るにアナキズムのコムミユンをうち建てることにある。

ブルジヨアの自由とプロレタリアの自由とを識別しない。また、アナキズムはブルジヨアの勞働者を搾取する自由をのぞむところの自由だ、と迷論を吐かれる。かやうな論法をあなたのために惜しむ。無支配。これがためにこそプロレタリアは支配者ブルジヨアジーと鬪爭する。無支配とリベラリズムを故意にとり變へて平然たるあなたの大膽さに寒心する。

私は、この無支配の問題について二つの面から前號にのべたとほり——

第一は、アナキズムは無支配のコンミニズムであるといふこと、マルクス主義は强權を基礎とするコシミニズムであるといふこと。

第二は、マルクス主義が計畫どほりに過程して行つて國家が眠りこんだ段階での、あなた方のいふ自由がどんなものであるか、以上の二つを說明した。

なほ、經濟的見地からすれば、マルクス主義の中央集權經濟組織（集散主義）に對し、アナキズムは地方分散經濟組織であること。

そして一九二一年のロシアは、アナキズムが指摘したやうに集散主義は消費生產に對して空想的理論であつたことを知つて餘儀なくそれを放棄したこと、その結果として舊ブルジヨアジーを起用して階級的裏切りを行ひ、今日益々この傾向を深めてゐることを、附隨して說明したのであつた。ことに、科學的機械に乏しいロシアは、機械工業のためにひとつの苦痛をもつてゐることをもつけ加へてをいた。これ等は、公平な見方である。

最近知り得た一例でいふならば、（といつて稀にみる秘密主義のソヴヰエートの情報を、私たちは得る方法がない。これは新聞紙上から拔いてきた）これまで工場管理者、工場委員會、共產黨細胞の三角統監のもとにあつた工場が、勞働組合、共產黨細胞の干涉を禁止して、今後はもつぱら工場管理者の專斷にまかされ、いはゆる工場プロレタリアートは、工場管理の首腦者——それは舊支配階級の技術者經營者の復活したものであるが——それ等の定めた條件に屈服することをロシア共產黨が議決したといふのである。

さかのぼつて昨年十二月、モスクワに開かれた全國ソヴヰエト勞働組合の第八回大會の代議員は（この代議員達は多く青年共產黨員でありながら）中央が一般勞働者に對し彼等の要求を顧慮しないことを、從つて勞働者が幻滅をかんじてゐることを述べてゐる。そのプロレタリアート大衆の意見は、いとも鮮かに裏切られ、却つて豫期しない正反對の、既有の權力までをお取上げになつたのだ。

また、從來の國營輸出入商業局及び貿易局が、內緒で株式會社組織にかへられ、株式の半分は政府が、他の半分を各地の個人及び團體から募集して、能率のあがらない國家經營を中止したといふ。ネップマンや舊企業家の國內にまかせねば仕方がなくなつたルイコフではないか。

ソヴヰエートロシアは萬能だといふ。ふたゝび舊ブルジヨアジーを起用した新經濟政策新々經濟政策、第三新經濟政策等々、一散に出でゝます／＼裏切つてゆかうとするあの態度こそ、世界の勞働者農民のもの笑ひである。それが、今はときめくルイコフやスターリンの方策に出たのだ。その革命國家に對し

て一九二九年の今日ではブルジョアのお役人や學者でさへ一部の棺桶的骨董派を除いては、妙なかほをして默りこんでゐるのみかイギリスのマグドナルドのごときは自分の方からロシアに手をさしのべてゐる始末である。

東支鐵道事件についても、ブルジョアのお役人すらが、これが一九二〇年あたりなら列國干涉がはじまるところを、鳴かず飛ばすで形勢觀傍と洒落れてゐるのだ。

ブルジョアだつて、シベリア出兵時代の頭でロシアをみてはゐない。これは何故か。あなた方にしてみれば、これぞ「勞働者農民の國十年」の位置の確立だといはれるところであらう。それもある。しかし、もつと深い原因は、ロシアの右傾、すなはち資本家にとつて、さう都合がわるくもなくなつたぞ、といふ見地からしてのことだとは――。

今日、堂々とソヴヰエト・ロシア政府に對し、解放運動の立場に立つて、勞働者農民のまへに、その不合理、誤謬、罪惡を指摘するものは、遺憾ながら戰鬪的アナキズムあるのみである。

4

獨裁の過程を認識せざる者は、ユートピアンであり非科學であるといふ莫迦らしい論に對して、一つの事實をもつて簡單に答へやう。

それは、ネストル・マフノの運動である。（マフノの運動については石川三四郎氏の研究がある）マフノはウクライナの貧農の子である。一九〇五年革命運動に連座してモスクワ中央監獄に無期徒刑としてつながれた時は鑄物工であつた。一九一七年に釋放された。彼は全くの百姓男にすぎない。そして靑春の十年間を灰いろの牢獄ですごした。牢獄をでたときは立派なアナキストであつた。

かれは急遽ウクライナに歸つてアナキズム運動を開始した。それは成功した。一九二一年まで三年間、グレイ・ポレを中心とする數十萬の農民地方は「自由」鄉を出現した。そこには地主もなければお役人もゐない、獨逸の帝政派によつて指導された優秀な革命軍は農民パルチザンのために散々だつた。各人は能力に應じて勞働し必要に應じて消費した。

この自由鄉を破壞したものは誰であつたかトロツキーである。獨裁の使徒には自由は氣にいらない。トロツキーの軍隊は侵入して家を燒き、製作場をバラバラにし農民を殺し、生産を破壞した。トロツキーと農民の爭鬪はながくつゞいた。コムミニストはマフノ運動を極力ペトリウラのブルジョア國民黨の富農運動のやうに言ひふらさうとする。だが、一世紀前のことなら知らず、たつた十年そこら前のことを、共產黨の陰謀的歷史改變はさう容易くはできない。

科學といふ言葉に醉つた信者たちが、獨裁國家なしに社會改造はできないなどゝいつてゐる間に、第四階級はどし〳〵目的に向つて追求し達成する。

レニンの國家論も、カメネフの獨裁論も、隅田さんの受賣りも、獨裁合理化のために主力をおいてゐる點は、結局、直譯的な流行用語を洗つて見れば、反革命の征伐、社會主義の建設の爲めに、それが必要であると言はれるらしい。

カメネフは、獨裁について、歐洲大戰の期間國家危急存亡の時に列國ブルジョアジー政府が使用したのは獨裁である。獨裁はかやうな効果をもつてゐる。プロレタリアートが一九一七年以降においてこの戰術を踏襲したのは何も怪しむに足りない、と言つてゐる。

第四階級の心理は、到底、智識階級のなかに育つて事物を見聞したマルクス主義者の頭では理解できない。隅田さんが、プロレタリアのするままにほつてをけば、何んなことをやり出すか分つたものでないと考へられるのは道理だ。井蛙の偏見である。ほつてをいても子供は育つ、野育ちの子供ほど强い。親が叱りつけ、あゝだからうだと世話をやかれた子が伸びてゆくか一向かまひつけないで育てた子が伸びて行くか。野生の兒は幼いときは、

干渉される子供より低能かもしれぬ。しかし長ずるに從つて、その湧き出た智識欲によつて自發的に攝取し生長する。勿論自己流だからやり損じはある。だが、抑へつけられて萎縮することから較べれば數段まさつてゐる。

民衆をして萎微せしむるほかに能のない支配は、それがいかなる名目と見地に立たうとも例外なしに、革命社會のよりよき建設及びその發展の推進的な力とはなり得ない。

歴史的必然性を把握しないが故にアナキズムはユートピアであるといふなら問題は自ら別である。『鬪爭せずして』『天國に』かやうなデマをとばせて平然たる彼等。

一切の具體的事實的な現象なしに宙ぶらりんの唯物史觀はあり得るだらうか。流動過程そのものの中から歴史的必然性を把握するといふ。それなら自然成長性そのものである。流動過程の自然成長性を束縛しようとする。それならベルンシユタインの修正派だ。

隅田さんは、アナキズムは自然成長性だといふ。マルクス主義ではなし、だいいちそれは他の場所で非難されたアナキズム唯心論と矛盾する。

アナキズムはいふところの唯心論でもなければ唯物論でもない。實踐的革命理論であるばかりだ。

自然成長的、科學的宿命論的マルクス主義の偉大なる誤謬は、自然成長的であるが故に何が社會の病理であるかを探求し、これに對し執拗にして酷烈なる鬪爭をいどまないといふ根本的缺陷にある。

マルクス主義者が、ブルジョア教育によつて與へられた國家偶像視の觀念を清算することが出來ず、ブルジョアジーと一緒になつてアナキズムを攻撃するのは、そして、その方便としてユートピア主義の烙印を捺さうとするのは、その根本的缺陷の曝露に他ならない。

かつてブレスト・リウスク媾和のときレーニンに反對したトロツキーは、ドイツの侵入軍に對して農民軍の戰術で充分防衞できると考へてゐた。農民の一揆軍は國家の防衞組織ではない。社會の自發的攻守組織である。隅田さんには、ナポレオンのモスクワ侵入、それは文字どほり連戰連勝で立派に勝利ををさめ乍らモスクワを退却しなければならなくなつた、あのモスクワの勝利の理由は判らないかもしれぬ。また革命戰といふものは、たとへばヨーロッパ戰爭の時のああした長い戰線の對抗といふ形態にはならない。それは蜂起的性質のものであり亂雑である。一絲みだれぬ軍國主義的近代戰爭のやうなものと考へてゐるならば、改めて實物の一九一七年のロシア革命勃發當時の史實をみなほす必要がある。しかし蜂起といふ言葉は決して無統制を意味しはしない。これに至るまでの充分な準備の蓄積と統制があるのはいふ迄もないが蜂起の瞬間は主として爆發する雰圍氣である。

マルクス主義者はアナキズムへの非難として、組織、統整をもたない。そして社會革命の戰術については驚くべき樂觀主義で空想的であるといふ。私は言葉の遊戯をすてゝ以上近代アナキズムが統制あり組織をもつイズムであつて、陰謀的中傷をうけたやうな單なるテロリズムでは萬々ない事を證明した。アナキズムは過去に多くの革命の失敗を經驗した。しかしそれが故にマルクス主義者はアナキズムを攻撃する事はできない。なぜなら、ドイツ、オーストリー、近くは支那武漢などこれ等の共產黨革命同樣な失敗の歴史をのこしてゐるのだ。

社會組織の目標としてマルクス主義が強權的中央集權ソヴヰエトであるかはりに、アナキズムは地方分散の自由コンミユンをつくることは前に述べたとほり空想でなく現實に可能なことであつた。

現實の組織としてはマルクス主義が細胞の組織網をもつやうに、アナキズムも同樣であるが、その機能と目的が相違するだけである。無組織だなどゝ、何故いふのか。

××や××などの資本主義防衞機關がこぞつて新興階級抑壓のために示してをるあらゆ

る狂態に對して、アナキズムが無力であるといふ隅田さんの妄言程勞働者農民を僞瞞するものはない。それは陰謀であり階級的裏切りである。アナキズムは過去から今日まであらゆる怒濤のごとき反動勢力と最も力强い抗爭をつゞけてゐる。たゞそれがマルクス主義のそれのやうに鳴物入りで宣傳するほどの技巧がないのである。マルクス主義者がいかに叫號ばかりで闘爭精神が薄弱であるかといふ事實は、かの山宣事件の際、謄寫版と葬儀及び演説以外の活動がなかつたといふこと、それはとりも直さず彼等の闘爭精神がいかなるものであるかを立證すに足る一つの例だ。

私が「ロシアの民衆は不幸である」といつた言葉について隅田氏は咆えつく。だが、どんな詭辯を以てしても、現在のロシアがあらゆる巧妙な方法で列國資本主義と妥協し、右傾し、プロレタリアート裏切りの役割を演じつゝあることを否認するわけにはいかない。

5

それから、クロポトキンがフランスのサンヂカリスト十五人とともに、歐洲大戰亂に際してフランス軍の味方をし媾和尙早聲明書に署名したといふことを、隅田さんは傍點つきで（よほど嬉しいとみえて）のべられてゐるが、何も隱蔽する必要はない。まさにその通り、クロポトキンは間違つてゐた。このことは「文藝戰線」十月號にも田口運厳なる人が書いてゐた。間違つてゐることはクロポトキンが誰であれ失策である。だが、支那や日本のアナキストは、クロポトキンにさうした行爲があつたことが發見されるとともにすぐ反對した。當然である。このことについては本年四月のアナキズム機關紙「自由聯合新聞」の論説欄「愛國心の問題について」においてもクロポトキンの誤謬を指摘し、併せてミリタリズムに對するアナキズムの態度を鮮明にのべてゐる。

獨逸共産黨の創立者カウツキー、ロシア共産黨の始祖プレハノフ、ドイツ革命後の共産黨首領パウル・レギなど、及びその他のマルクス主義者運動の戰列への裏切りについて、隅田さんは自派への不利益から沈默をまもられたのは賢明である。そして、かやうな態度こそマルクス主義に傳統する戰術なのだ。

一九一七年以來、アナキストなるが故に、眞實の解放戰士なる故に、共産黨政府の虐殺を蒙つたものは數ふるにいとまがない。權力と新興ソヴヰエト・ブルジョアジーに抗爭せるが故に、不毛地の凍土地帶に流讁されて死をまつてゐる數多の勞働者農民の悲痛な祕密音信は、時々刻々、ベルリンのアナキストインタナショナル書記局に發送せられ、全世界のアナキズムに關係ある解放團體に訴へてきてゐる。著名なアナキストにして、若きロシアの革命闘士であつた無數の勇敢な人々は、いまはフランスやドイツその他に亡命して、ロシア内地の革命的勞働者農民と提携して熱烈な運動をつゞけてゐる。

有名無名のマルクス主義者が鳴物入りで「プロレタリアートのロシア」のお提灯をもつてゐる。

隅田さんはじめ、その他の多くの婦人マルキストよ、

あなた方は、私達の書いたこれまでの事實が嘘であり出鱈目であるといふのであらうか。私達は眞實のロシア調査團體を組織しやう。私達の調査團體をして自由に、ロシアの土地に赴いて農民や工場勞働者や、牢獄の犯人に會はしめればいい、理論よりも、想像よりも、事實は眞實であることを語るのである。



ドン・キホーテ化した大山郁夫氏

佐野京子

一

『吾等の大山』『吾等の委員長』といふ聲は、昨年二月の總選擧期を中心にして、吾が無産階級左翼運動の上に、一つの輝しい光をなげ與へてゐた。ひとり勞農大衆の間に於てのみではなかつた。『勞農黨の大山』といへば直ちに一般大衆にも、何かをシンボライズした感を與へた。そして、人々に過日東京驛頭で建國會の暴漢共に襲はれた時の大山さんのあの悲壯な光景を思ひ浮べさせるものがあつた。

その大山さんが、今度また合法的といふ肩書つきの『新勞農黨』の旗あげをしようとしてゐるこの一事によつて、きのふの大山さんは、もう今日の大山さんではなくなつてしまつたのだ。

「裏切者大山一派を排撃せよ!」『社會民主々義者大山一派の策動云々』といふきのふまでは大山さん自身が左中右翼一連の社會民主々義者にあびせかけた言葉によつて、今は、自らの上に、左翼の戰闘的な勞農大衆から抗議され、排撃される身の上となつてしまつた。

その間の事情にあかるくない人々にとつては、さしてのショックを受けないであらうが、皮肉な感を與へる。

私は、大山さん他二名の連名によつて發表された『親愛なる全國同志諸君の前に、新勞農黨樹立の提案』なるパンフレットを一讀して、ふと思ひ浮べたものがある。

それは、この三月以來、第二回目の日本××黨大檢擧によつて二ヶ月ほど留置場生活をして出て來た或る一婦人が、何かの用件で大山さんを訪問した。檢擧の話しのついでにその婦人が、『勞農同盟の 仕事のことで一寸やられましたが、それだけで出られました』といふと、大山さんは、至極眞面目に力をこめて『そうですよ、私たちは日本××黨のことについて何も知らないことが私たちの强みですよ』と云はれたといふ。

私はこのことを間接に聞いたのだから、言葉のいひまわしに多少の差はあるかも知れない。『日本××黨について何も知らないことが自分たちの强みである』といはれた大山さんが、或はそこにどんなカラクリを持つて云はれたかは知らないが、私はそのことを聞いて如何にも「大山さん」らしい云ひ方でありまた、「大山さん」の云ひそうなことだと思つた。『新勞農黨樹立の提案』を一讀して、更に

その感を深めたのであつた。私は思ふ、おそらく大山さんは、その時そのことを、大山さんらしい本當の眞面目さを以つて話されたであらう事を。その言、その眞面目さこそが、今度、大山さんをして『新勞農黨』の樹立運動に立たしめるに至つたのであらう事を。

こゝで私は、大山さんたちの提案理由を、一々理論的に論じようとするのではないが昔から『盲、蛇におぢず』といふことを云つた。『大山さんは盲だ、盲だから今更こんな新勞農黨を再建しようとする大膽なむこふ見ずな行爲に出させたのだ』と云つたなら私のこの盲めつぽうな論調を意外に思はるゝ人々もあらう。だが私は、あへて大山さんは盲だと斷言することをはばからない。

大山さんが早稻田大學教授といふ肩書をかなぐり捨てゝ舊勞農黨の闘爭に參加されてからの活動振りは、一意眞面目に、純眞に左翼運動の最表面に立つて、涙ぐましいまでの奮闘であつた。かつて、私は十年ほど前に、『婦人問題』の講演會か何かで初めて大山さんに接したことがあつた。十年といふ年月は大山さんの上にも幾多の變化を與へたであらう。しかし、舊勞農黨及び新黨準備會の大會等で、壇上に立たれた大山さん、また當時の大山さんに接したとき、大山さんには違ひなかつたが、昔のアメリカ仕込みの紳士的タイプはきれいになくなつてゐた。大山さんは、階級戰上の闘士として修業中の苦難を、まざまざとその身の上にも實現されてあつたのだ。

今度の提案書の中で、大山さんが『同志諸君！ 我々は年來雨に嵐に、お互ひがつしりと腕を組んで、あらゆる鐵火の試練に堪へ、測り知られぬ苦難の行進を續けて來た』と自信ある悲壯な過去の闘爭を語つてをられるのは、確かに事實であつた。此の事實はまたつねに大山さんとがつしり腕を組んで闘つて來た所の自覺せる勞農大衆と戰闘的勞働者が共に居たからであつた。

大山さんのゆく所、勞農大衆の渦があつた。そして支配階級の彈壓はいつでもそれに付きものであつた。『測り知られぬ苦難の行進』は日に日に險惡度を增してゆくのみであつた。昨年三月の日本××黨彈壓に續いて四月には、合法黨の形を持してゐた勞農黨も他二團體と共に突如、當局より解體を命ぜられた。勞農黨の再建は着手されたが當局の彈壓は十一月新黨準備會發會式の途上に禁止されてしまつた。

もはや、『合法黨』か『非合法黨』か等と今更論議せねばならぬほど、戰闘的勞働者にとつて馬鹿げた悠長な暇つぶしの時はない。何故なら、階級闘爭とは、資本家階級と勞働者階級との戰爭である。勞働者階級が勝つか敗北するか二つに一つの道より外にない、勞働者階級が、今日の苦難の非人間的な生活から救はれるためには、勞働者階級は先づ、今日の支配者としての資本家階級が縱橫にはりつめてゐる網の目の政治××を自らの手に戰ひ取らなければならない。

プロレタリアートの黨とは、プロレタリアートの勝利に向つて如何なる彈壓、如何なる困難にも打ちかつて、つねにプロレタリアートの闘爭の最前線に、正しく戰ひ、指導してゆく、プロレタリアートの頭部に屬する。

この頭部によつてこそ、プロレタリアートの一切の運動は正しく勝利に向つてゆくことが出來るのである。プロレタリアートの黨は『合法的』が『非合法的』であるべきか等といふやうなことが勞働者にとつて原則的にまた一般的に問題になる筈がない。

とくに、今日のように、吾が國の支配階級の反動化した下で勞働組合の闘爭または一工場のストライキですら戰闘的なものはすべて地下に追ひ込められてゐるような狀態にある時に、勞働者階級の最も闘爭的な、頭部が合法的に必要だと云つて見た所で、必要なものは與へられるといふやうな御方便な世の中に出來てゐるのなら階級闘爭も起らない筈だ。

ともかくも、こゝで六ケ敷しい理屈は拔いて、常識で考へても、（勿論かゝる問題が常識

で解決されはしないが）工場の闘爭に參加してゐる勞働者には余りにも滑稽なことだ。

二

ところが大山さん達は大膽に、『新勞農黨の樹立』に當つて、云つてをられる。

『…そこで私等は斷然意を決して大膽にも私等の單獨責任に於てこの提案を作り、それを一齊に全國の同志諸君の批判の前に投げ出すのだ』と。そして、『かゝる行き方は、常態の下に於ては明かに團體の規律に對する許すべからざる違反だ。だが、我々にとつては、今は非常時だ。……』と大山さん等は支配階級の最近急激に度を增しつゝある彈壓に面して『非常時だ！』と黃ろい聲を張り上げたのである。

階級鬪爭に參加するものが、支配階級の彈壓の度の如何によつて『今は非常時だ』とか『非常時』でないとかいふやうなことを規定するものか、どうかは別問題として、階級鬪爭は一つの戰爭であり、戰爭は非常時に違ひない。戰爭に於ては弱い方は强い方によつて少しの假借もない。弱い方が平伏の妥協をあえてするまでは、あらゆる慘虐がなされるのである。プロレタリアートは、その勝利の日まで、支配階級の慘虐な壓迫の中をくゞりぬけて、あらゆる戰略、戰術の正しさを以つて、支配階級と戰はねばならないとすれば、彼等は、勝利の日まで——或は進出と退却との戰術を必要とし、敵のすぐれた、長い間かゝつて築き上げた牙城に向つて、或は合法的な、非合法的な、すべての戰略、戰術をきたえ上げつゝ過去の失敗を今日の正しさに、七ころび八起き、——最後まで執拗な、たゆむことなき、犧牲的な、精力的な、鬪爭が續けられねばならない。

全世界を擧げて、これら階級戰の途上に尊い血潮を流した犧牲者は幾百萬を數へることが出來るであらう。この苦難に打ち堪え得る者のみが階級戰爭に參加することを許され、その指導者たる事の第一條件を與へられる。

日本の階級鬪爭は、諸外國の歷史に比して未だ若い。一度びの彈壓は、多くの鬪士を奪ひ、或る者は無能力者と化し、或る者は落伍者となり、すぐれた指導者は永久的に勞働大衆から切りはなされてゆく。殘れるものも生活の道は奪はれ、健康は害されがちだ。官憲の追擊は、勇敢なものを地下へ地下へと非合法の道を取らしめてゆく。階級鬪爭とは卽ち、かゝる苦難の道程である。

大山さんたちは、一度の彈壓に面喰つてしまつたか？　文字通り以上のような道をさけては手も足も出ないような狀態におかれてしまつた、大山さんたちの言葉をかりれば、『最近に於ける主觀的および客觀的の兩方面の異常に急速なる轉換に照應して』そんな苦難な道を避けた方法がとり度くなつた。

それならば、運動から身を引いたらよいではないかと……一言に云つてしまへば至極簡單だ。

大山さんを取りまく一連の舊勞働黨時代の幹部諸氏は、だから『合法政黨の形態に於ける我々の獨自の恒常的政治的組織——「新勞農黨」——を樹立し、その下に大衆的日常鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に集中統一して强力に展開し、更にその旗じるしの下に戰鬪的戰線統一を決定的に實現することを期して、當面その目標に向つて全力的に戰ひ進ましめよ！』と六ケ敷しい言葉をならべて、自ら己が身に拍車を加へてゐる。

これを單的に譯すれば、言ふまでもなく、彈壓のない、我が身に壓迫の加はらない鬪爭を（そんな鬪爭とは、鬪爭と名のつく支配階級への妥協であるが）するような獨自な政黨を作らうと云ふのである。

彈壓・投獄・斷頭臺はのぞけ度いが、かつて『吾等のゆく所、勞働者は起ち、農民は動いた』當時の華々しい・ヒロイックな幻影は、特に、それが從來運動の最表面に立つてゐた人々であつた丈に忘れ難い感激であり、英雄的自己陶醉の夢を殘してゐるであらう。

至極『虫のよい指導者』志願の多い昨今、大山さん以下の一連託生が合法的な看板に澤山な色をぬり立てゝ『勞農黨』の樹立を××的であるかのやうに見せかけても、今日の狀勢の吾が國で『合法的政黨』といふことが、何であるかは、戰鬪的勞働者にとつて余りに自明のことである。

かつて大山さんは『合法政黨』主義者達に『官許政黨』の別語を投げつけたのであつた。その大山さんが、今日は我れと我が身に、その別語を投げ返へされてゐる。

しかし、私はこゝで、あの、眞面目な、謹嚴そのものゝやうな大山さんが、『虫のよい指導者』たらんとするに至つたのは、氏が果して虫のよい考へを持たれたからであらうか？と考へる。『日本××黨のことについて何も知らないのが吾々の强味ですよ』と云つた大山さんの言葉を、私は思ひ浮べる。

三

大山さんは、今日まで左翼運動の最表面になつて、勇敢に戰はれた。その大山さんが、今日まで日本××黨について何も知らなかつたとしても、こゝでそれを問題にする必要はない。たゞ知らなかつたことが『私たちの强みですよ』と至極眞面目に力をこめて云はれた、知らないことをさも誇りでもあるかのやうに……、それで最表面にかくまで奮鬪して來られた所に、大山さんの今日までの戰ひが、ひとしほ『苦の行進』であることを思はしめる。またそこに大山さんの純眞な輝きを見せられて來た。

それと同時に、他面『盲滅法』式の感を與へるところがこの大山さんの『盲滅法』『盲蛇におぢざる』勇こそが、きのふは大山さんを左翼運動の最前線に鬪士として『吾等の大山』たらしめ、一風去つて今日は、左翼運動の裏切者として戰鬪的勞働者の抗議と排擊の矢面に立たしめたのではなからうか？

菊版四十七頁の堂々たる提案書を一讀して、そこには矛盾にみちた多くの自己瞞着の言葉を見せられる。きのふは社會民主々義者をあざ笑つて『官許無產政黨』の必要を、今日自ら先頭に起つて論ぜられる勇氣こそはまさに昭和のドン・キホーテにして初めて持ち得るものである。

大山さんは、今日もなほ自分の後から大山さんを支持し、大山さんによつて動くあの戰鬪的な勞農大衆の渦を夢みてをられるであらうか？たしかに、大山さんの腦裡には、かつて舊勞農黨が華々しく陣營をはつてゐたころの幻影がこびりついてゐる。『勞農黨』の名稱すら忘れ難いものである。

大山さんは、過去の幻影と、鬪爭の足跡をふりかへり〳〵『××黨』ではない『勞農黨』だ、社會民主々義黨ではない××的な黨だ、と至極眞面目に叫ばれる。

何と悲壯な喜劇であらう？

無產階級解放運動のドン・キホーテは、尙今後も『何も知らない事が吾々の强みですよ！』と大膽な自信を失はれないであらう！

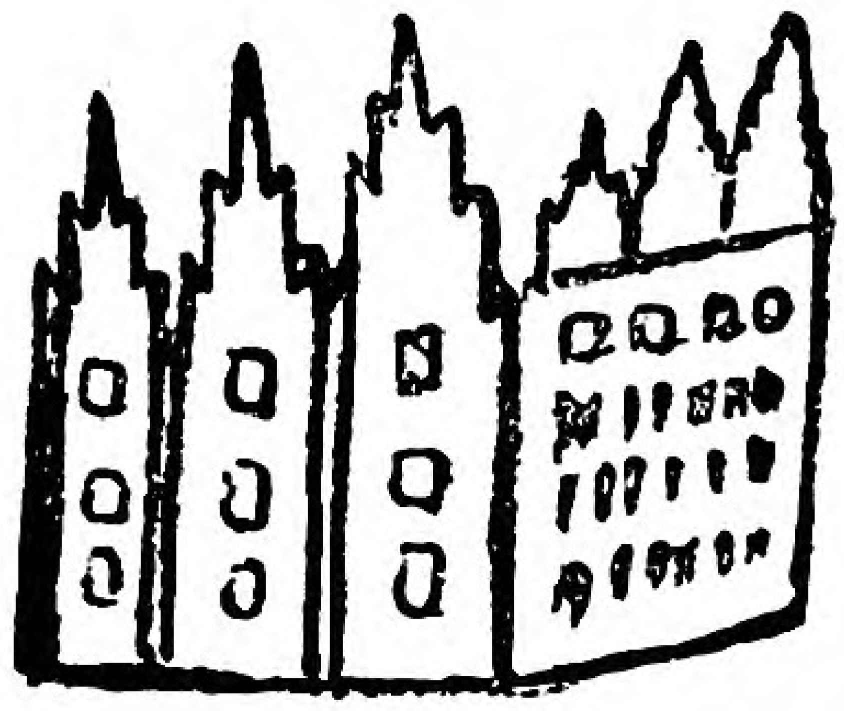
しかし、プロレタリア解放運動は喜劇ではない、一片の犧牲的精神と英雄的行動への幻影を以て長い將來への苦難の山を登るバロメータとはなり得ない。

革命への道は慘酷である。きのふの同志きのふの委員長も、今日は路傍の草としてふみにじり、ゆくてをさへぎる枝として切り落さねばならないであらう。

大山さんが、かつて幾度か呼ばれたであらう悲痛な一句、また、提案書の最後に悲しくも結ばれてある一句――『吾等のゆくところは、戰場であり、墓場である！』――が今は、ドン・キホーテは自らの前途を皮肉に指し示してゐるかのやうだ。

『吾々のゆくところは、いたるところの戰場である』しかし『一歩誤たんか待つものは墓場のみである！』

昭和のドン・キホーテ大山さんの行手、それは墓場ではなからうか。



反戰運動と文學

戸田豐子

世界大戰中及び戰後のヨーロッパ文學の強力な一傾向となつたアンチ・ミリタリズム文學のうちで、アンリ、バルビユスの「クラルテ」はインタナシヨナリズムの精神をはつきりと表現してゐる點で最も意義深い作品だと思ひます。「クラルテ」は世界大戰に題材をとり、祖國、戰爭、祖國擁護、愛國心といふ觀念から一切のベールをはぎとり、レントゲンで照らす樣にはつきりとその本質をばく露してゐます。バルビユスは更にこのインタナショナリズム精神を「クラルテ運動」といふ具體的行動のなかに發展させました。この運動は、大戰によつて、永い太平の夢を破られた、各國の思想家や藝術家を象牙の塔の隔離室から、アンチ・ミリタリズム戰線の猛烈な實行運動にまで狩り出したのでありますが、大戰中及び戰場に幾多の反戰小說が生み出されたのも、その一つの反映に外ならないと思ひます。歐洲大戰爭は十年餘の歲月を經た今日冷靜な頭で振りかへつて見ますと、その破壞力と殺人力の點で、實に驚くべき記錄——數字を殘してゐます。卽ち全世界が四ヶ年の永い間に七千萬人といふ人間をこの殘忍な殺戮場に供給し續けた、各國とも全人口の10％から20％までを戰線に吸收されたのです。そのうち戰死者は約一千萬人、負傷者は二千萬人、廢兵となつて歸還した者三百萬人といふのですから實に夥しい犧牲者の數でありました。そして直接戰爭の砲火に曝されなかつた國內の大衆、約八〇％だつて決して幸福な狀態にはをかれませんでした。言ふまでもなく、戰爭によつて屈強な勞働力を七千萬も奪はれてゐるものですから生產が巧い具合にゆかない、それから財貨物資はどん／＼戰場に搾りとられる、消費手段の生產といはず、生產手段の生產といはず一切の生產機關を擧げて、軍需品生產工場に强制されたのですから、國內大衆の消費は、平均して飢餓と窮乏の一歩手前にまで制限されたのであります。平時に於てさへ「人間以下」の生活狀態を强制されてゐる無產階級にとつて、此の「試練」が二倍の重石となつたことは言ふまでもない、飢餓と窮乏の結果流行病で倒れる者も無數にあつた、且つブルジョアジーは自己の利潤を守るためこの世界市場爭奪戰爭を最後の決勝點まで繼續するためには、自國のプロレタリアートに死物狂ひの政治的彈壓を加へる必要があつた。その結果各國の無產階級は實に火のつきやすい革命的情勢におかれたのであります。先づロシヤのプロレタリアートが立ち、ドイツ、ハンガリー、フインランド、バ

ヴアリアのプロレタリアが立ち上つた。ロシヤを除く以外の諸國ではブルジョアジーは一先づこの重大な危機を切り抜け、政權の安定を得ましたが、世界帝國主義の立場から眼界を擴げますと、其處に、ソビエート・ロシヤといふ實に割つても割り切れない矛盾物の存在を見出すのであります。

そしてソビエートロシヤのその後の政治的經濟的基礎の發展强化は、各國のプロレタリアートの力を增大させ、殖民地半殖民地の民族反抗運動の尖銳化とともに、資本主義世界經濟の政治的基礎を脅かしつつあります。

更に戰爭が、世界經濟に與へた直接の損害について、考察しますと、直接砲火に見舞はれた地域の田園、鑛區、工場等の生產點の破壞、荒廢は、各國の國民經濟に容易に恢復し得ない程度の大穴をあけてゐますし、且つ、巨額な戰費が煙になつてをります。それから凡ゆる生產機關の荒廢、——しかし、戰後約八年間に、無產大衆を政治的に經濟的に壓迫した結果、世界經濟は漸く戰前の生產力を回復してまゐりましたが、今度は又、增大する生產力と狹隘すぎる市場の問題に頭を惱まさなくてはならなくなつた。卽ち歐洲戰爭勃發前と同じく、世界再分割の問題が、再び國際ブルジョアジーの日程に上つて來たのであります。

世界のプロレタリアートはこれらの情勢に絶え間ない監視の眼を注ぎ、賠償問題、國際聯盟、不戰條約の成行にも深甚な注意を拂つてゐます。國際聯盟といふのは、アメリカとロシヤに對して戰爭を準備するヨーロッパ共同戰線の樂屋であるし、不戰條約はアメリカが國際聯盟の頭を抑へ、ソビエート・ロシヤに對抗するために提唱し、英佛がすばらしい留保付きで贊成したイカモノである。賠償問題のヤング案による國際決濟銀行の設立とは、帝國主義者間の對立に新たな角度と、新たなスタートを與へる以外の何物であるか——

プロレタリアートはこれらの一切のまやかしと蔭蔽とを突き通して、第二次帝國主義世界戰爭切迫の危機を感じてゐる。各國は極めて組織的、計畫的に軍備の增大を計つてゐます。敎化運動による軍國主義思想の撒布から、一見戰爭とは何の關りなきが如き、金、銅、鉛に對する熱病的な追求に至るまで、彼等の戰爭準備の魔手が伸びてゐるのであります。

世界のプロレタリアはこの危機に對して絶え間ない鬪爭を進めてゐる、卽ちコミンテルンの指導による反戰運動を持ち、世界の被壓迫民族十五億の國際的組織體として生れた反××主義同盟を持ち、××主義者に反對し、戰爭の危險に反對する鬪爭を時々刻々に迫めてゐます。

ここで我々は世界大戰當時に於けるクラルテ運動や、幾多の反戰小說の事を思ひ浮べます。「クラルテ」によつて證明された樣に、文學の影響力と煽動力は案外に多きいものですから小說によるアンチ・ミリタリズム思想の宣傳は「時々刻々に忘れてはならない反戰鬪爭」の最も有効な一つの形態だと思ひます。

たゞ在來の見聞によりますと、日本の所謂「反戰小說」には××内の封建的身分制度と非人間的生活のバクロや、戰爭の部分的描寫に人道主義的、平和主義的哲學を加味したものが多かつた樣ですがこれ丈では眞にアンチ・ミリタリズムの宣傳にはなりません。現段階に於ては××主義戰爭の味方とその一味徒黨を殘らずやつつけ、彼らの欺瞞策と、その戰爭準備を徹底的にバクロする樣な、眞に階級的な、「反戰小說」が要求されてゐるのであります。

戸田氏の論文は十月十八日朝日講堂の講演會の原稿ですが、戸田氏が最初の講演で充分意を得なかつたので、特にこゝに再錄することにしました。（編輯者）

演劇時評

上田文子



演劇批評について

どんな鈍感な人間でもこの頃の文藝批評を讀んで、批評家の定規する規準が、マルキシズムに據つてゐるか、マルキシズム以前の唯心論に據つてゐるかを見分けることの出來ないものはあるまい。それ程、近時の文藝批評はプロレタリア文學といふ新興藝術の一樣式――それは藝術至上主義の神性、恒久性をうばつて勇敢に藝術の社會性、可變性を公表し、社會進化の爲の巧利性を藝術に自覺せしめた――を問題の中心として、今マルキシズムとアンチ、マルキシズムの二つの陣營にはつきり區分なされてゐる。リベラリズムの立場を容認しないこの現象は、階級鬪爭の尖鋭化してゐる現在に於いては一般インテリゲンチャーの間にも段々、ひろまつてゆくことゝ思ふが、同じ藝術の部門に於いても、文學、以外のもの、即ち、繪畫とか彫刻等の造形美術や音樂（演劇については後に述べるから、こゝに言はないが）等についてみると、部分的には、階級性を表した制作、（私は寡聞にして音樂の方面には全然そういふものをしらないが）なり、批評なりが存在するにしても、それは到底今日の文壇に見られる樣な全面的な現象ではない。――その點に於いて文學は、思想や生活と最も密接な關係に置かれてゐる爲に最も早く唯物論的社會科學の眞理を容認し、實踐に移入し得た敏感な藝術部門であつたと思ふ。ところで、この文學を一分子として構成される、より大衆的な社會と密接する綜合藝術演劇の分野に於いてはこの批評の規準の問題はどう扱はれてゐるであらう。私はこれを語るに先立つて、批評の對象となる日本の近時の演劇（舊劇を含む）一般が、どういふ狀態で進んでゐるかを少し述べてみたいと思ふ。

現在、東京にあるコンマシヤリズムの大劇場は、帝劇、歌舞伎を初め、明治、市村、本郷等に、新橋演舞場、新歌舞伎座等を加へ千人以上の見物を收容し得るものが七つもある。聞くところによれば、近い中、東京劇場、日本劇場等も加設されるといふ。これらの大劇場を運用する資本家は帝劇その他二三を除けば殆ど松竹合名會

社の經營にかゝつてゐる。そして、この大きな劇場の各々が殆ど休月なく、開場される――その大部分を占める所謂本興行が、これ等の資本家の手に集められてゐる歌舞伎俳優によつて演じられる歌舞伎劇であることは、誰でも知つてゐることである。封建時代の遺物である歌舞伎劇が――いかにそれが民衆の中に生長した藝術として樣式的に豐かな振幅を具へてゐるとしても、――實生活に於いてアメリカニズムのテンポとマルキシズムのイデオロギーが交錯する現在の資本主義社會に於いて――ともかく、演劇の主要部分として生存してゐることは不思議である。この不思議を解說する爲に私は次の樣な原因を擧げる。

A、――過去の民衆藝術が現在に訴へる娛樂的興味。

こゝでは民衆藝術の强みよりも時間的な間隔が存外娛樂としての重用な意味をもつことを考慮していゝ。卽ち現在の民衆がカブキに對する時、非常に多く、容易に實生活から遊離し得る點を見るべきである。この逃避的な娛樂が民衆に對して毒であるか藥であるかはいふ迄もない。

B、――ブルジョアジーの社交的娛樂機關――

これはこゝに擧げるものの中で、現在の歌舞伎劇を――大劇場の經濟を支持するに最も重用な、最も現代的な新しい要因である。何故新しいといふか。こゝでは旣でに藝術が――演劇がそれ自身の單純な魅力を失つて、ブルジョアによつて巧利的に使用されてゐるからである。彼らの要求するのは藝術ではなくて社交である。ダンスの出來ない日本のブルジョアは勇敢にも劇場を社交場に代へた。彼らの前で演じられる芝居は彼らの生活と緣の遠い程よろしい。莫迦々々しい程よろしい。婦人達は開幕中にだす、コンパクトも使へ樣しお互ひの衣裳の觀察もしあへやうから――そして役者と舞臺裝置は成るべく立派な程、よろしい――何とまあ、これは大劇場の資本家にとつて有難い條件であらう。

C、役者の魅力。

しかしこれは昔日の俤はない。この種の魅力は歌舞伎劇を去つてスクリーンのスターに移つて行つた。それでも、蒲田のスター達の實演が大入滿員をつゞけたり、林長二郎が挨拶に出る爲に活動寫眞館の入口がこわれたりするのと同じ意味で、肉體をさらす舞臺俳優の魅力も未だ幾分殘つてゐる事は事實だ。それは所謂花柳界などの傳統的な社會を通して、以上私は歌舞伎劇の持つ魅力の要因を解說することによつて、歌舞伎劇の客の種類を知ることが出來る。それはブルジョアジー及びブルジョアイデオロギーに追從する、因襲的な小市民階級の一群であつた。だから封建時代に於いては純然たる民衆藝術であつた歌舞伎の末流も、今日では資本家によつて營業され、ブルジョアジーによつて利用され、享樂される退嬰的なブルジョア藝術以外の何ものでもない。それは旣に死んでゐる。死體の發散するものには有害な毒素ばかりだ。死體はそれ自身を解體し、他の生物に變化さることによつてのみ有益になる。新興藝術が、歌舞伎の樣式を肥料にして生長してゆくことは、この意味で正しい。

歌舞伎劇以外に大劇場で演じられるものに所謂新派がある。川上音次郎のオッペケペ時代には幾何進歩的な役割を努めて登場したこの種の芝居も、思想的に何の信條をも持つてゐなかつた爲、樣式、内容共に歌舞伎へ逆流した反動的なものとなつた。この種の芝居には歌舞伎ほどの魅力はない。水を割つた歌舞伎だと思へばいゝ。客の種類も同斷である。

ところで新劇の問題に移るのであるが、新劇が小劇場運動を一時完了して本年度に於いては大劇場へ〻進出する様になつた經路については、私は大體「新劇運動の過去について」(七月號所載)以後の時評で、述べて來たから別に說明しない。唯、それが、三月、築地小劇場の分裂以來、心座の「トラスト、D、E」新築地の「母」の上演を經て、左翼劇場の全線の劃時的成功となり、築地の「吼えろ支那」の壓倒的喝采となつて、つひにリア新興劇團協議會の協定を見るに至つた事實を見ればい〻。プロレタリア專門劇團としての左翼劇場を別として、他の、混成的プチブル新劇團が、大劇場進出と共に大衆化をモツトーとして鮮明に左傾し、各々その收獲を携へて敢然プロレタリア職業劇團と宣言するに至つたのは、演劇「全線」の成功と共に新劇界未曾有のストライキングな發展であつた。

斯の様に新劇界が思想的にも、實踐的にも多時であつたに拘らず、演劇に對する指導的な論爭、批評の不振であつたことは遺憾である。思ふに新劇運動の有爲な闘士達――村山氏や高田氏や北村(喜八)氏等――が、實戰渦中の人であつて、客觀的に、批判し、討究する餘裕を持たなかつたことがその主因であつたかも知れない。しかし、今後前に上げた新劇團が、左翼劇場のプロレタリア專門劇團に對して、プロレタリア職業劇團としての正しい進路を計かる爲には、新興藝術協議會による協調、批判援助等の便利以外に、外部から客觀的になされる正しい批判に耳を傾けなければならない。それ故に又、そういふ批評の要望されることも事實である。そしてこれは、一般、文藝批評家の分野であるよりもむしろ、專門的演劇批評家の負ふべき任務であらねばならない。專門的演劇批評家――と私は書いた。併し日本の現在の職業的演劇批評家といふものを考へる時、私はか〻る課題を彼等に給へることの矛盾を感ぜずにはゐられない。一例として新聞劇評家を取つて見よう。彼らの大部分は、因襲的な歌舞伎劇の通人である。これをイデオロギーの見地から見れば最もい〻もので古い藝術至上主義の追卒者にすぎない、かういふ彼らに新興演劇の進路に關する方針をはかることは針の目に駱駝を通すよりも難しい。それ以上彼らにゴルキーの「母」や「全線」や「吼えろ、支那」を批評させることは、それ自身非常なデマゴーグに價ひする。この點に於て新興劇團協議會の如きもブルジョア新聞の反動劇評家に對する方策を講じてい〻と思ふ。短時期に彼等を驅逐することが出來ないならば、彼らの「反動性」をはつきり指摘して、ジヤアナリズムを信頼する民衆の一部を自覺させなければならない。階級闘爭の武器としての演劇が全面的な廣汎な運動であればある程、大膽に大局を觀取する一方、如何なる微細な方面にも細心な注意が注がれねばならない。その細心な注意の注がるべき箇所として、私はブルジョア新聞の劇評欄をあげるものだ。

斯ういふ見地からは、東京朝日の劇評欄が比較的進歩的だ。岡鬼太郎氏が歌舞伎劇及び新派の芝居を擔任し、目ぼしい新劇團の公演に際しては主としてプロレタリア派の演劇人の中から、一一違つた人を臨時に頼んで批評させてゐる。この方針をもう一歩進めて、歌舞伎劇をも新派をもマルキシズムの立場から討究させると猶面白いと思ふ。都新聞でもつひ近頃から、伊原靑々園氏や平山蘆江氏が新劇を評することを止めて、登島黨氏が代る様になつた。この傾向をブルジョア新聞の批評欄全體に敷衍したいのが私の希望だ。そしてそれによつて、劇評家といふものをも、文藝批評家と同様に、マルキシズムとアンチ、マルキシズムとの二つの陣營に對立させ、お互

に攻守させることによつて、プロレタリア演劇の眞理を——社會進化に對する巧利性を、——未組織なプチブル階級に認識させたいと思ふ。今日の様に、「プロでもブルでもないおれは神様だ」といふ様なアナクロニズムな、天降り的批評をしてゐる劇評家の多いことは新興演劇の爲に呪ふべきだ。リベラリズムを装ふ反動家は、多くの場合露骨な反動家よりも十倍も有害である。斯ういふ反動劇評家のプロレタリア演劇に關する批評！を讀む時、私はいつもジャン・コクトーの「エリック・サテイ小論」中の次の文章を思ひ出さずにはゐられない。

「ラムプを批判する爲に、椅子の觀念から出發するのは滑稽だ。ところで批評家の大部分は言ふのである。「さうしてランプは一風變つてゐる。が、いゝラムプぢやない。その上に座ることが出來ないからね。」賢明なことはラムプが所有しなければならぬ種々の利益によつてそのラムプを批判することだ。しかし、さういふ明瞭は極めて稀である。」

私はコクトーの信者ではないが、この言葉には同感である。ブルジョア劇評家は全くプロレタリア演劇を評すのに、舊劇や新派劇と同じ規準をもつてする。そして、素材がなまだとか、藝が下手だとか、公平な立場を失つてゐるとか、ブルジョア道德と藝術至上主義を折衷した陳腐な論旨——しかり、全く陳腐だ。文壇ではこんな問題は二三年前に片づいてゐる——を並べ立てゝ攻撃する。結局彼等には、藝術の進歩的巧利的といふ唯物論の命題が全然理解されてゐないのである。彼らの多くは實に「ラムプを批判するのに椅子の觀念から出發する保守主義者である。ラムプを批判する爲にはその所有しなければならない種々の利害」を知るべきである。プロレタリア演劇を批評するものは少くともそれが負はされてゐるところの任務を理解してから出發しなければならない。

純粹な意味で指導的な演劇批評と同時に新しいプロレタリア劇評家の一群がブルジョア新聞の舞臺へ進出し、演劇に對する新しい規準を讀者大衆に規定する事を私は明年度の劇壇に希望するものだ。

2、戯曲集二編を讀んで

A、時雨脚本集

この作者の櫻吹雪の舞臺面を演藝畫報の寫眞版で見たのは私の子供の時分であつた。その同じ作者が、われ〳〵が拙い脚本を書く様になつた現在、「犬」や「氷の雨」や「甘美媛」の作者として活躍してゐられることは日本の女に珍しい旺勢なねばり强さであると思ふ。いつまでも生長してゆく作者の中にわれ〳〵はペーアギユントの若さを認める。

各脚本の終りに剋明に著作年代が記してあるのは親切でいゝ。この集に限らず、著作年代を、書き入れて置くことは、時代的な誤解を避ける者で作者の爲にも讀者の爲にも必要なことゝ思ふ。

作品としては卷頭の甘美媛が最も力作だ。生きてゆく女の力が、多少、ロマンテシズムな表現の底からピク〳〵動いてゐるがいゝ。最後の幕の最後の言葉、——

甘美媛——夢がさめれば、消えた生命を盛つた體は腐肉です。腐肉は犬でもよろこびますまいが、腐りつくしたら眞珠の芽はふくかも知れません。

斯うして、長い惡夢から醒めた女は、勇を捨てゝ出てゆく。しかし、このノラがどこへ行くか？　私は作者が何らかの形式で一後の

甘美媛」を書かれることを希望する。

その他の作品では「犬」と「氷の雨」がいゝ。「氷の雨」については座談會で大分しやべつたからこゝに言はないが「犬」はこの集中で私の最も好きな作品だ。成程、この作にも作者の認めていられる否定的な暗さはある。しかしその暗さに拘らず、われ〱はそこに、階級的な憎みを感じることが出來る。そしてその憎みは老主人公の死によつて消極的なあきらめに代るが、しかし、その憎みを宿命的なあきらめに決してかへないであらう強い性格を作者は、不良少女お高の中に用意してゐる。お高をはつきり表現してゐることはこの作の夜を貫く一條の光である。この作の上演を私は見なかつたが、今後上演される機會があるとすれば、演出者の對度は、お高を表現する點に强調されなければならない。

「西の空」にはよき抒情詩があり、「暗夜」には作者のもつエロテシズムが濃厚に表れてゐる。「手兒奈」「つくしの空」「月に住む人」などの古い作品にはネオ、ロマンテシズムの時代が反影されてゐて、私にある懷古的感傷を强ひた。しかし、かういふ過去の多くの時代をふみこえて、作者が、生々前進して來らんことは全く尊い努力である。この點からも、私は今後の作者の歩みを多大の興味を有つて眺める一人である。

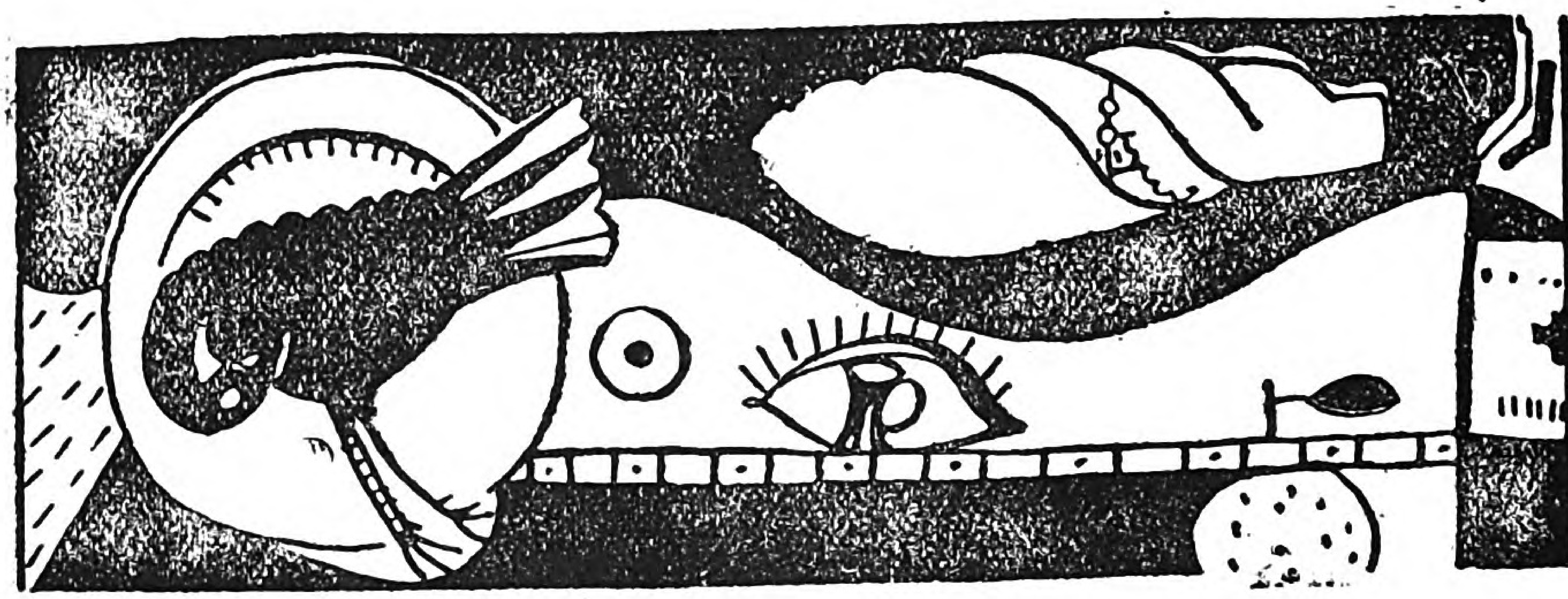
B、現代生活考

「現代生活考」の作者、鴇田英太郎氏は、この夏、胃癌で早逝された。生前に刊行される筈であつた九幕二十二場の大作戯曲、「現代生活考」は、他の戯曲と共に爲に遺著として發行されるに至つた。

私は小山内先生の劇と評論に寄稿してゐた關係で、同誌の同人だつた鴇田氏の作品を可成り讀んだ。しかし、正直にいふと、作者があまり感情的に作品の上で遊んでゐるのが氣になつて、好きになれなかつた。今度の遺著の出版をみても、矢張り現代生活考以外の作品には、その感がある。しかし、「現代生活考」丈は、たしかに量の上でも質の上でも、故人の墓標として記念されていゝ秀作である。こゝでは、過去の作者を惱した、スケプテシズムやニヒリズムが見事に整理されて、正しい階級的意識がはつきり表現されてゐる。よし、その表現に多少社民的な弱さがあるとしても、われ〱は現代に斯ういふ作品によつて啓蒙され得る階級のあることをしつてゐる。様式に於いて、この作品はカイザーの平行に負ふところが多いらしいが、芝居上手の筆で、非常におもしろくよませる——舞臺でみても凡らくさうであらう。

生前、比較的不遇であつた作者が、死期に近くかういふ思想的にも様式的にも、健康な作品を殘して行つたことは心から喜ばしい。

（一九二九・十一・四）



牝豹のうめき

若山喜志子

ひとり生みつけられたこの私ひとり生きやう美しく淨らかにそして强く

めぐりの同胞もさることながら私は今自己を見きはめるのに忙しい

實在の自分はこの自分より他にはないおもへばたのもしきかな怖しきかな

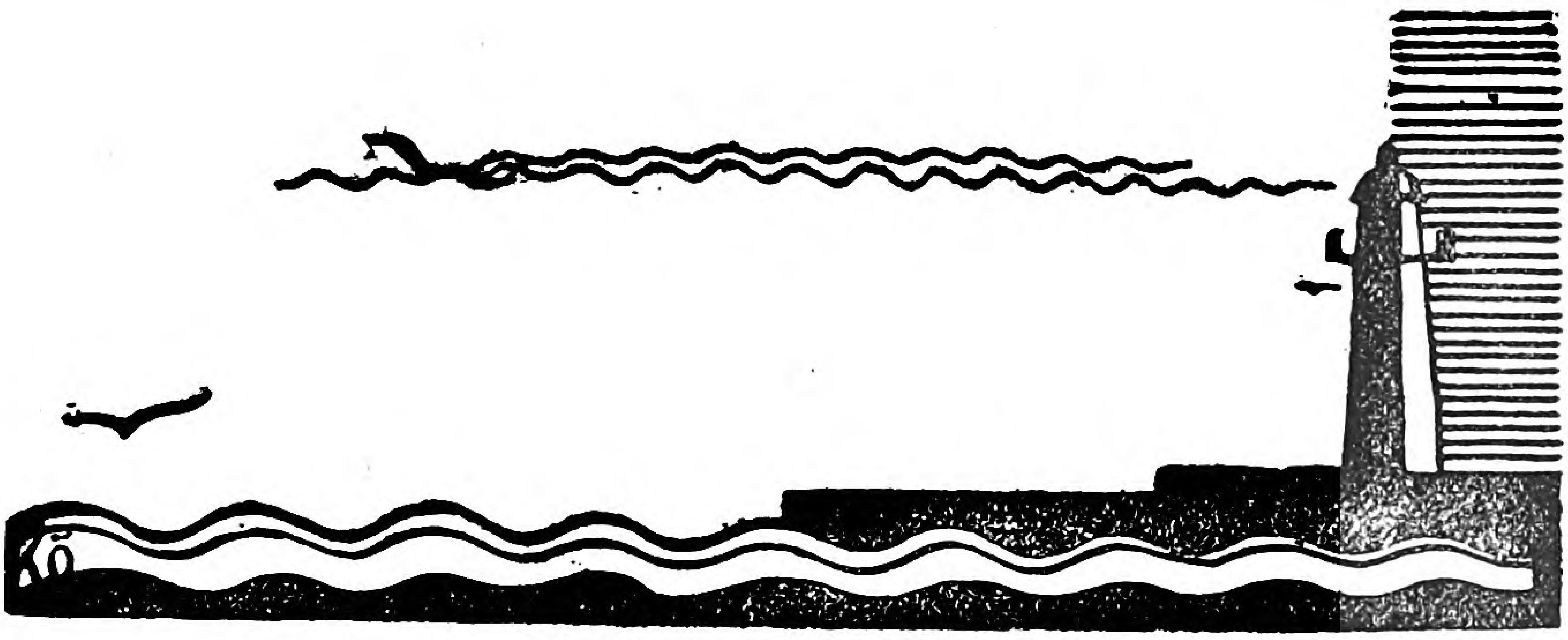
何よりもまづ自己をつくらうすべての解決はその上のこと

今呱々の聲をあげた牝豹生きやうと伸びやうとすばらしく呻いてゐる

祖先より享けたこのすぐれた血潮で祖先をもなほ凌がう決心

茫寞たる曠野に立ちのぞんでゐる今自分は小さいなど考へられない

自分で自分に反抗しつつ進んでゆくそれは强者にのみ與へられた宿命



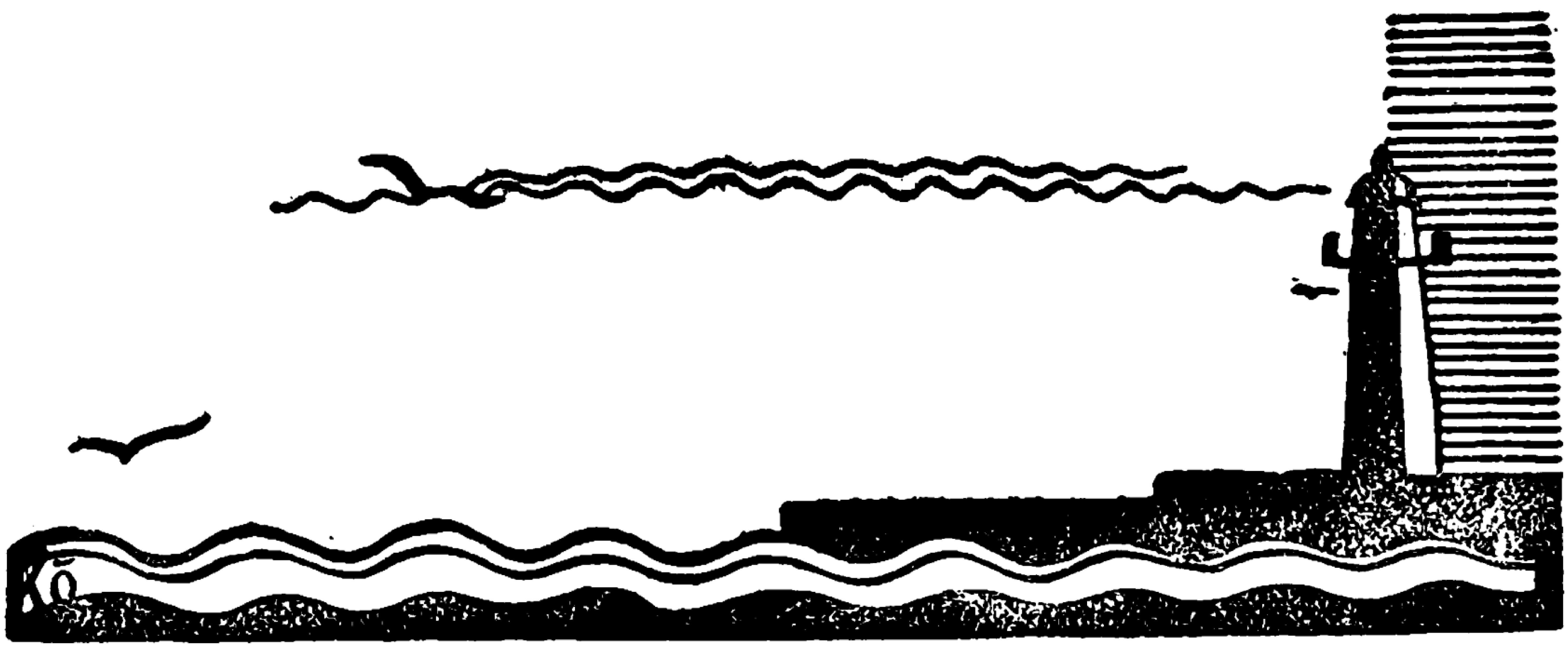
兵隊さん

京芙美子

ポンポン……
小銃の音が最後に止んで
積木細工の生きた兵隊さんが
森の中を歸つて行きます。

演習が終つたのです。

ほがらかな蒼空の下で
兵隊さんは軍律に
とつても忠實な奴隷です。



森の中ですれ違つた
田舎娘にさえ淡い戀ごゝろを感じ
遠いふるさとの
可愛い女にはげしい思慕をよせた。

宿舎についたら長い手紙を
送らう――

あと四十五日で退營です

その日を思ふと
胸をはつて、ほがらかに
口笛でも吹きたい思ひです。

歩調はみだれず、今日また
歸營の行進曲です――

早慶戰第一日

金曜日の晩から意氣込んでこんどこそワセダがかたなくちやあんまり負けすぎてると、大家さんだつて先輩なので無中である。そこで店子の女人藝術も、ワセダワセダワセダとむづかしいふしの應援歌をおつかなびつくりぶたいのよこつちよでうたふといふ次第、つまり十一日の晩（金曜日）、早稻田の講堂で開かれた應援歌練習大會に大家さんたちにくつついて、（實は女人藝術の講演會のビラを撒くといふのが目的だつたんだけど）大隈講堂に行つて、熱狂、熱狂、熱狂の、人と人と人と人と人の間にもまれて、その空氣を胸に一ぱいすひこんだら、どうしても野球がみたくて、たまらなくなつてしまつた。そして早稻田が勝たなくちやいけないと思はされてしまつた。そしてぶたいのよこつちよで、ビラを撒くことなんかどつかにすつとばしてしまつて、あゝ若き日の血はをどる……

すましてそれでわくわく熱中して、ワセダで氣持が一ぱいになつてゐる大家さんをせびつて、行きたいな、行きたいな、連れてつて下さい、ワセダの應援をしますから「女たちは行かなくてもいゝよ、應援歌を作つた僕だつて一枚も切符を貰へないんだから、」「こんなに興奮させられたのに、つまんないな」

その時吉岡彌次將軍、その昔、馬にまたがつて芝公園に徹夜し慶應の應援團一歩も入る



木魚の配偶

—日本橋—8

時雨

木魚の顔のツマヾキ

木魚の顔の老爺さんが、あの額の上に丁字髷をのせて、短い體に黒ちりめんの羽織を着て、大小をさしてゐた姿も滑稽であつたらうが、さういふまた老妻さんも美事な出來榮の人物だつた。顔は濱口首相より廣く大きな面積をもち、身丈も偉大だつた。

うどの大木といふ譬はあるが、若いころは知らず、この女はとても味のある、ずばぬけたばかげさを持つた無類の好ノ物だつた。

湯川氏が硫黄にこりだして山谷を宿として、幾年か歸らなくなつてから、老妻さんはハタと生活にさしせまつた。江戸人は瓦解と一口にいふが、其折悲慘だつたのは、重に士族とそれに屬した有閑階級で、町人——商人や職人はさほどの打撃はなかつた。扶持に離れた士族は目なし鳥だつた。狡いものには賺され、家祿放還金の公債も捲きあげられ、家財を賣り食したり、娘を賣つたり、鎗一筋の主が白晝大道に筵を敷いて、その鎗や刀を賣つて其日の糧にかへた。

木魚のおぢいさんの奥方も、考へたはてに、戸板をもつてきて、其上でおせんべを燒い

べからずとやつてのけて遂に早慶戰中止とまでやつてしまつた…その割に小つちやい小父さんが、「三上さんに切符がないなんてそんな不都合な事があるか、いゝや大丈夫五枚位持つていらつしやい」何と素晴しいことになりそうだぞ。

社から歸りに、ポツポツふり出した空をにらんで「おいよせ」と坂の途中で吹鳴つてみた。誰も居なかつたから。十二日の朝おきてみたら、止んでゐなかつた「おいよさないのか」慶應に行つてゐる弟が「何を」つていふ樣な顏をしてみかへした。今日は敵同志だ。八時、九時、雨があがつた。

いつたいあるのかないのかさあ氣が氣ぢやない、社に電話をかけると、「今日はありませんから行きません」でも何だかうその樣で一人だけおいてゆかれる樣な氣がしてしかたがない。はやめに出かけるとどてらにくるまつた大家さん「今日は降つて殘念でしたな。」

十三日。少しくもつてるけどおてんきはそんなに惡くない。七時半までに社につていふのに悲しくもちこくをする。坂の途中で大家さんたちがのつてるくるまに出逢ふ「女の人達はあとに」

大きな座ぶとんを後生大事とかゝへた案川さんと熱田さんとあたしの三人は、おにぎりは先發の大家隊が持つていつたのでパンの大きなつゝみをぶらさげて、それでもあはてゝタクシーをひろつて一ぱし野球ファンですといふ樣な顏をして神宮めざして、ところが、熱田さんとあたしはまだすこし大ざつぱなル

て賣りだした。一文のお客にも、

「まあ〳〵私のをお求め下さいますのですか、それは誠に有難いことでございます。」

といふ調子で、丁寧に手をついてお禮をいふのと、深切な燒きかたなので一人では手が廻りきれないほど賣れだした。

あまり皺のない大きな顏に不似合なほど、謙遜した、黑子のやうな眼で燒き方を吟味し、もの〳〵しい襷がけの、戸板の上の道ばたのおせんべやの無愛想なのも愛嬌になつたのかも知れない。すると、おなじ雜遊をしてゐた姉娘が一日手傳ひに來て見てゐて、翌日からすぐ隣りあつて、おなじ戸板の店を出した。もうその時ははじめの緣に、遠洲で仲人にたつた旗本――藤木前の朝散の太夫の子か孫かが婿で、その若い二人組だつた。お客がくると、湯川氏の奧方がお辭儀をしてゐるうちに、

「いらつしやい、こちらが燒けてゐますよ。」

といつた風に浚つてゆく。客は賣れるから燒手をふやしたおなじ店だと思つてゐる。老奧方のお辭儀は段々ふえて、賣れ高はグングン減つてゆくが、そんな事に頓着のない老母は隣店の賣行きを感嘆して眺め、ホクホクしていふ。

「お前さん方、もつと此方へお出なすつたらよい。どうも私の店がお邪魔なやうだ。」

全くお邪魔だといはれたかどうか、兎に角元祖戸板せんべいの店は取りかたづけられた。

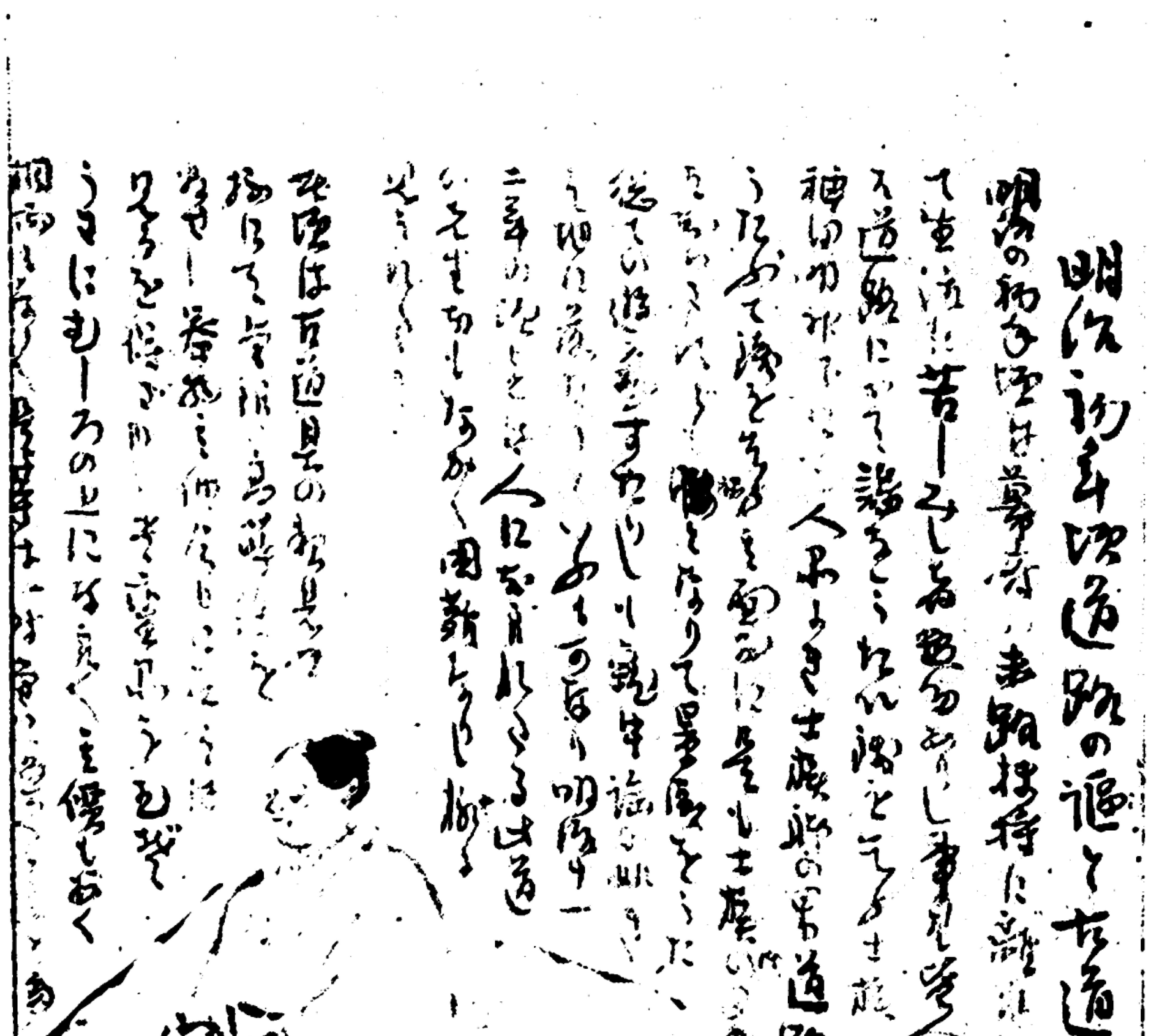
眞面目な會話をしてゐる時に、子供心にも、狐につままれたのではないかと、ふと、老媼さんを呆れて見詰めることがあつた。

「――祖父さんも何時歸りますことかねえ。」

そこまでがほんとの話で、突然、まつは愁いとみな仰やんすけれどもなア――とケロケ

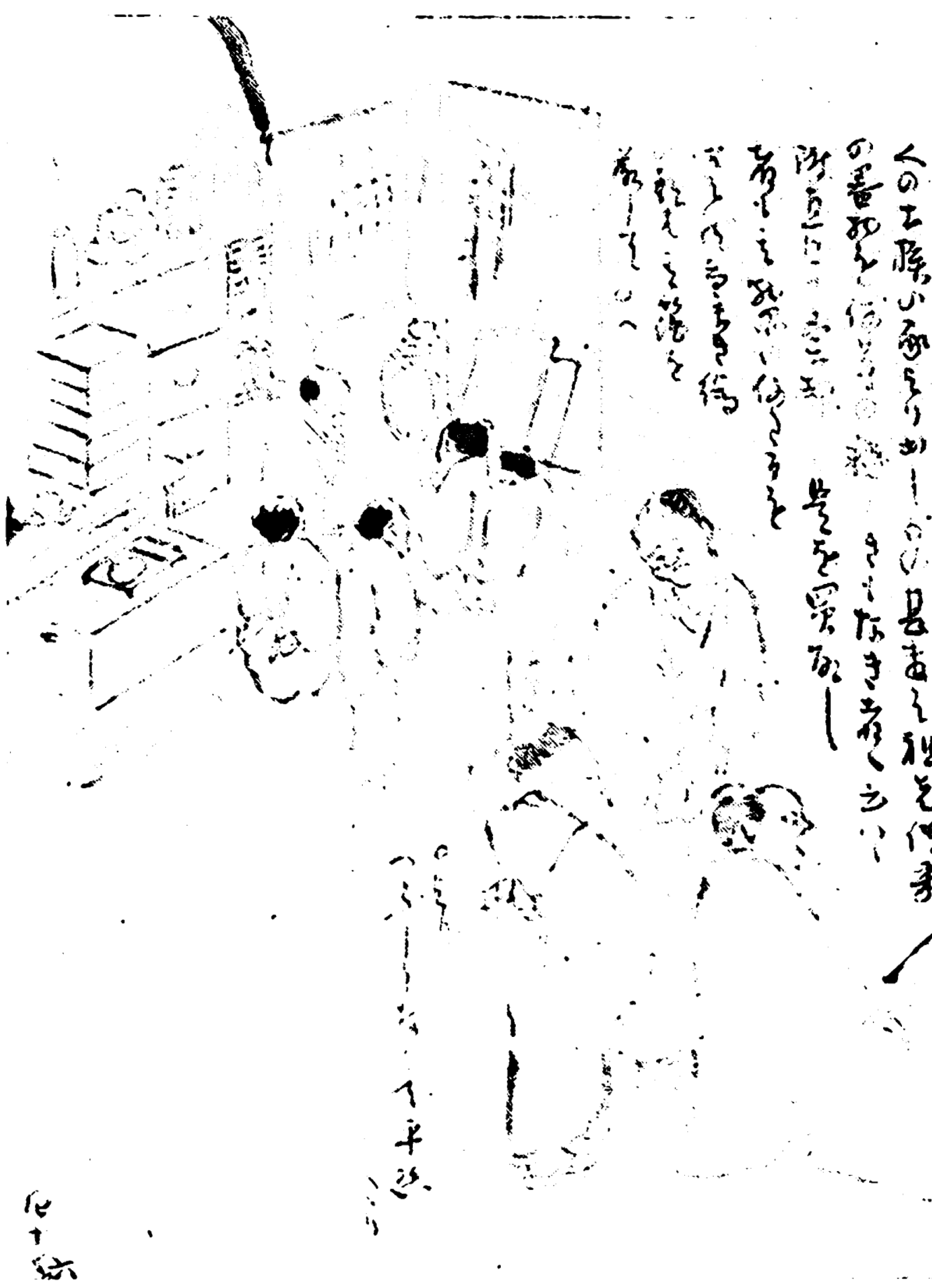
ールこそ知つて居れ紊川さんは何にもしらない、それがいきなり早慶戰をみに行くんだからすごいもんだ。
一壘側の外野に入る。いきなり應援團の人をみつけて、「先生におくれてきたので內野に入れなかつたんですけど、先生來ていらつしやいますか」「來ていらつしやいますすぐ御案內いたしませう」何にもしらないのんきな娘三人、よいしよと外野の壁からスタンドに飛び込んだ。
突然起つた「ワア――」つといふ喚聲、フレフレ、しつかりしつかり、勇敢だぞモダンガール。拍手の音、みると優子さんがすつてんころりととびおりだ拍子にころがつたのだ。紊川さんは十二貫八〇〇なのでやつところがらなくてすんだらしいあたしは勿論ころびやあしない、片脚つちに對して餘けいな引力をかんじただけだけれど。(今よこで紊川さんがあたしはとても上手にとんだつもりよ、一番うまかつたのよといつてゐます)そこで觀衆のかんこに迭られむかへられて、つい頰が赤くなつて下をむきそうになるのをはげましはげまし、平然と空をみてゆく。「あら小池さん」なんて呼ばれて學校の下級生のかほをめつけて、くびをちよいとちゞめる。ところで應援團員を先登にした三人の娘子群外野と內野との境のところにがんばつてゐるはつぴをきた、男の番人に「いかん」といはれてつまつてしまつた。先登に立つた應援團の人がいくら力きんでくれてもだめ「君、この外野に居る人がみんなグランドにおりて內

ロと唄ひだすのだつた。そして小首を傾けて、
「あれはたしか、長唄の汐くみでしたつけかねえ。あの踊りはいいねえ、――相逢傘の末かけて……」
と唄ひながら無器用な大きな手を振りだす。私が吃驚してゐると、その手でひとつ、招き猫のやうな格好をしておいて、鼻の下へもつていつて羞恥んだやうに首を縮めて笑ふ。



野に行くといわれても、君が責任を持つかね」そこで亦、フレフレ、モダンガール、勇敢だぞ、ワアッワアッ、三壘側の外野内野まてから送られるかん聲に又とびおりたとこまでもどつて來た。ところが、スタンドの壁は、あたしの背より高い位、いかにおてんば娘、何くそと思つてもとびついてのぼりきる自信はない。をかしくもあるがうすらかなしくもある。でもどうにかなるとはわかつてゐるからたのしみでもある。やがて石油箱が一つ持ち出された。よいしよ荷物を先になげてなるたけころんだりしませんようにナムアミダブツ、すつきりととびこせますようにと箱をふみ臺にしてとびあがる。十二時半のフリーバッティングがはぢまるまでの退屈がすこしの間だけでもまぎらはされることに、一ぱいならんだ人たちは實に大よろこびである。そいですつかり人助けなくどくをしてしまつたがもう大さわぎをして、スタンドの方にゆく氣がなくなつてここでいいなと思つてしまつた。が案内者は實に親切である。「いや今すこし待つて下さいすぐ御案内します」日向ぼつこをしながら待つてゐると甲賀仁代氏夫妻が、仲よくやつてくる。林芙美子さんの大事な亭六先生も來ているだらうとは思ふけど、それは慶應方であるから見えない。テンカンになつた洋服の男がかつがれて出てゆく。

さて今度は早稲田の人に連れられて、さつきむなしく追かへされたスタンド口から入る、ネットウラに腰かけてる女人藝術社の大家さん、さつきあがつた喚聲の原因をしつて



（故淡石翁筆）

布子（ぬのこ）の下の繻絆から、ポチリと色褪めた赤いものが見えるので、引つぱりだして見ると、黑ちりめんに牡丹の模樣の古いのだつた。綴（は）ぎ〱で、大きな二寸もある紋があつた。おばあさんの父親鈴木〇〇守（かみ）は、白河で切腹したとき、上野の法親王にはお咎めのないやうにと建白書のやうなものを書いたのだときいてゐたが、おばあさんに正すと、遠い昔の物語りでも聞くやうに目を細めて、さうですよ〱といふきりだつた。

ゐるので、肩をすぼめて、ちよいと横をむいてすます。こつちもすこしてれた氣持。



やつと落着いてすはつた時正に九時半、一時間以上も、笑はれたり、さまよつたりおのぼりさんはまことに、でも圖々しいもの。素川さんと優子さん朝ごはんまへなのでそこでむしやむしやとパンをたべだす。十時、十一時と人は段々ふへて、スタンドにも外野にも空いた場所が目に入らなくなる。陽の出ないくもつた寒い日正面から吹きよせるつめたい風、やがて雨をさそつてなさけないなあと首をつぼめてゐるまにまた止んで。時々大家さん達の方を横目でにらむと何かムシャムシャ。おひる近くなつてごはんつぶが食べたいなと素

「戦争なんて、もう〳〵いやなこと、いやなこと、眞つ平さね。」

ブッリと言ひきつて、狐つきのやうにだまり込んでゐる。背を丸く首を傾げた姿を見るとどんなに世の荒波がこの善人を顚動させ、かうも呆けさせたかと痛ましかつた。

私はこの老女の生母をたつた一度見た覺えがある。谷中御隠殿の棗の木のある家で、蓮池のある庭にむかつた室で、お比丘尼だつた。

老年になつてからこの夫妻は一緒に暮す日が多くなつた。

ある日、空巣ねらひがはひつた。おばあさんはキョトンとした眼で見てゐたが、立つていつて座布團を出した。盗棒はびつくりして、落附かないお尻を布團の上にのせたが、お茶を出されてモヂ〳〵した。

「あいにく留守にしたあとで、私では何のお役にもたちませんで――どうぞ、ごゆるりとなさつて下さいまし。」

盗人は飛上つて次の間へゆき、グルリと見廻して出て來た。

おばあさんは愈々眞面目で、

「たゞいまお菓子をとつて參りますから、ちよつとどうぞお待ちを――」

盗人は狼狽てた。外へ出られてはたまらない――彼の方が一目散に飛出すと、おばあさんが後から、

「もし〳〵貴下、おわすれものですよ、なんておそそうな――」

さう言つて着せてやつたのは、毛皮のついた外套だつた。

湯川氏が歸るとこの老妻は、盗人を笑つた。

「なんてまあ狼狽たお客さんなのか。ねえおぢいさん。」

川さんが悲鳴をあげる。しかし人が一ぱいでスタンドから出るのは一仕事。そこで智慧をしぼつて一ぱいつまつてゐる人を使つて玉わたしのやうに、ボールおくりの様におにぎりを送つて貰はふといふのである。そこでむこうの伊藤さんがこつちをむくかと思つてぢつとみてまつてゐる。ちらと眼がこつちに動いた瞬間をつかまへて呼びとめる。勿論目でだ。それから手まねでおべんとうをこつちにおくつてくれ、こつちからパンをあげるからとやる、なかなかわからなかつたがやつと通じて一安心。こんどは機械になつてくれる中間の人達が問題だ、しかし之は隣からとなりと口づて手づてにやつてもらへばいいんだから、やがてむこうでは評議一決いくつかのおむすびをわけてとると、ふろしきづゝみが隣りに流れ出した。こちらも一生懸命だ『あのあそこに四人男の人がゐるでせう、ハンティングをかぶつた。ホラ、一人黒い洋服をきた人がこつちをむいて、茶色のオーバをきた人が済して正面をみてる。あそこに之をわたして下さいな、すみませんけど」一二三とむこうとこつちのパンとおにぎりが動き出した。「どこだどこだ」「何だ何だ」皆と一緒にゆらりゆらりと人の間をお互に目指す方向に進んでゆく、やがて中央にきて、おむすびとパンとがぶつかつたとき、大變、どつちがどつちへゆくのかわからなくなつてしまつた。みてる方はやきやきしてはらはらしてゐるが、手渡してくれる方はほんの義務的な、それも退屈なればこそなので、どつちだどつちだ。

「その人は何の用で、何處から來た？」
「それを私が知りますものかね、老父さんが御存じぢやありませんか。」
「私がなんで知るものかね。」
「へえ？　それは不思議だ。私はまた、貴夫のお客さまだから、あなたが御存じだと思ひましたよ。」
「私の外套がないよ。」
老夫は壁を見ていつた。
「おやまあ嫌だ、あなたが着てお出になつたのに——おぢいさん老耄なさつた。」
「ばか言へ、わしは着てゆかない。」
ふと老夫さんは、老妻が丁寧にお辭儀をしてゐる頭のさきを、盗人が、自分の外套をきて出てゆくのを思ひうかべた。そして淋しい顔をして、私のところへいつけに來た。
誰かが、不用だといつてゐたインバネスが、身長の短いおぢいさんの、丁度よい外套になりはしたが——

私の父は晩年を佃島の、相生橋畔に小松を多く植ゑて隱遁した。湯川氏夫妻もおなじ構内に引取られた。七十代の婿と八十代の舅とは、共に矍鑠として潮風に禿頭を黒く染め、朝は早くから夜は手許の暗くなるまで庭仕事を勵んだ。二人ともに、何が——と。
一人が嶮しい山谿を距る呼吸で松の木に登り、櫻の幹にまたがつて安房上總を眺めると、片つぽは北辰一刀流の構へで、木の根つ子をヤッと割るのである。寒中など水鼻汁をたらしながら、井戸水で月の光りで鎌を磨いでゐたり、丸太石をころがしてゐたりする。日和のよいころ芝を刈るときは、向ふの方と、此方のはうで向ひあひながら、

やつとおむすびのつゝみがこつちへ向つて動き出したやれ安心と思ふまもなく、その包みがあたしたちからみえなくなつてしまつた。『おいなくなつちやつたぞ』「誰だ誰だとつたやつは」「女が泣くぞ」云はれなくても然りである。「いやだあとつちやつちやあ、なくなれば泣けちやふ」「おいどこへいつたんだ」「誰かとつちやいましたよ」「困るわ、いだなあ食料品をとられちやあ一成行如何とみてる伊藤さんに手をふつてナイナイパンとしてみせる。むこふは無事に渡つてゐる。こつちにおむすびがついてからパンを送ればよかつたと思つてもあとのまつり。「これはなんだ」はるか下の方から持上られたふろしきづゝみ、「あれよあれよあんなとこにいってるわ」「おい出てきたぞ、こつちんだぞそいつは、上の方に送れ。」「何ですか」「おいしそうですね」「途中で又とつてやらうか」「いやです」みんなは面白がつてゐる。やつと私達の手に入つたおむすびのはこをあけてみたら、あつちへころがされ、こつちへころがされ、福神漬と、するめと、のりのカクテイル。でも何とそのおむすびのおいしかつたこと、

「おいうまさうだな、俺たちだつてその包を持つたんだから食ふ權利があるんだぞ、」一つ一つと手渡たされたおむすびに、ウメイ、ウメイ、どうも有難う、」「おやするめがあるぞするめがほしいな、お孃さん、するめくれませんか」「するめのお孃さん俺にも、」ても元氣な學生、先輩及び早稲田ファン達である。應援の應援團が、皆一齊に外套をぬい

「いや、手前一向に武藝の方は不得手でげしてな。」

「いや、劍法でもなんでもあのコツだ。どうして、霧にかくれるといふが、あなたの溪谷を渡るあれだ、あの呼吸といつたら、實際たいしたものだ。」

「いやどうも、さう仰しやられては汗顔のいたりだ。」

——だが、私が松の木の上にゐる父を、老人の冷水だとよびにゆくと、小さな聲で、

「ぢいさんはやめたか？」

と訊く。湯川老人の方へゆくと、

「や、もう、お父さんの若いこと〳〵、感服のいたりだ。」

と腰をのばす。この、老たる婿と、舅と姑が、どうした事か、毎日の、どんな些少な交渉でもみんな私のところへ、一々もつてくるのだつた。三人の老人が、年寄らしいイゴで三すくみのかたちで、不平も悦びも感謝も、みんな私のところへもつてくる。

「婆さんが腰をぬかして——なんともふす腑甲斐ない女か。」

湯川老人がさう言つてゆくと、入代りに父が來て告げる。

「祖母さんが築山に座つて、祖父さんに小言をいはれてゐる。早く行つてやれ。」

おばあさんは私の顏を見ると言つた。

「あたくしはね、あたくしのお墓を見てびつくりいたしましたのですよ。私は生てるのか、死んでるのか分りませんでね。」

やつと分つた。茎を摘みに來たおばあさんは、寒竹の籔の中に小犬の埋めたしるしの石を見て、呆然としてしまつたのだつた。

またある日、湯川老人が私の前に、言ひわけなささうに立つた。

「ばあさんを、ちと、惡くしてしまひましてな。」

で立上つた「若き血に燃ゆるもの」とやりだせば早稲田は又「あゝ若き日の血は踊る。榮ある母校のために」と歌ひだす、とこんどは又ケイオウが「獨立自尊は我等が誇り」「天に二つの陽あるなし」早稲田がやりかへす。一人の男がグランドの壁にのつて氣取つて右手をあげひいふうみとふると思ふとこんどは、左の手、ひよいひよいひよいひよい、ひいふうみ、オツトセイが立ちあがつて、みなさまと氣取つてさてと體を一ふり二ふりといふかんじである、とその身振手振につれて應援團が實に見事に手をたゝく、之即ち拍手早稲田慶應慶應早稲田：：九時半から二時までの、時間を退屈から遠ざけてくれる有難さである。



ワアツワアツ何だ何だ、誰か又女の人がグランドに降りたのかな、立上つてみたらさにあらず、肥つた小母さんがおばあさんと若夫婦をひきつれて赤い旗をふりながらやつてきたのだ「小母さん、小母さんこつちへ來いよ」「ここへ來いよ」「こつちへ」大變な人氣である。「ヨショシ、」みんなの所へ行きそうな顔をしてすまして通りすぎてネツト裏へ行つてしまつた。「がつちりしてやがる」笑ひながら不平がとぶ、旗にかいてある字をみると稲門堂。そこで成程とうなづく。

小さな眼をパチパチと伏せた。あとから離れの住居へいつてみると、身寄りの男たちが二三人ゐた。彼等は具合わるくモヅモヅした。

おばあさんの體が生體なくグニャ〳〵になつたといふのだ。レウマチで關節の自由がよくなかつたので、臺灣からよい藥を持つて來たから飲ましたのだといつた。そんならば暗い顔をする譯はないがと思ふと、効きすぎたのだとまた言つた。それは湯川氏の婿の一人の士族で、官吏をやめて日清戰爭に臺灣に從軍し、そのまま居ついてしまつた土佐辨の、日本人ばなれのした人だつた。

「臺灣では、チトチトやつてもよく効くのを、おばアさん一時に飲んだでナア。いや、別に、悪いもんでも、叱られるよな藥でもないが、チト強いでナア。虎の血と、蛇と――もひとつ……」

猛獸の血と蛇の何かと、もひとつのものを乾し固めて粉にしたのを持つて來て、分量は兎にかく、八十上の老女に飲ませようとしたガムシヤラな勇氣におどろいてしまつた。

肝心なおばあさんはモガ〳〵こんなことを言つた。

「とろけてしまうなんて、まるで惚たやうで意氣ですこと。おやつちやん、あたくしや葡萄酒でのみましたよ。」

なにしろ、死んだら牛肉のおさしみを佛壇へあげてくれといふ人だつたから、私は驚きもしなかつた。

一年ばかりたつた夏の朝、私の寐てゐる茶座敷の丸窓を、コツコツ叩くものがある。戸を一枚ひくと、老人が、

「ばあさんがどうも變で――」

さう言つたなり、竹箒をひいて、さつさと木の間にかくれて去つてしまつた。

「しつかりたのむぞ小母さん—何だ何だ。暇なので何でもかんでもすぐ「何だ何だ」となる。振返つてみると勇敢なる小母さんが太い腕にふくろをかゝへて、その中からリンゴを取り出しては投げてゐる。「こつちだこつちだ」「も一つ」「うまいぞ」「も一つ」「そこはもういけないこんどはあつちだ」となりで素川さん「小母さんの手元がくるつてこつちにも、一つころがつてこないかな」(註私はそんな食ひしんぼぢやない!。誰?が自分で云つた辯に、白ばくれてゐます。果物だから判からないよ、なんて社長さんまでが誰かの肩をもつが。斷然これはえん罪です。素川)

サイレンがなる、わあつと聲がながれる。いよいよ早慶戰開始だ、應援歌いよいよさかん、みんな魂をどつかにとばしてゐる。

これからあとのはなしは卽ち專門的に屬するのであたしには書けない。みんなの方がきつとよりよく御承知だらう。ところで、一回戰は、實に嬉れしくも早稻田が勝つた。

女人藝術社の連中、肩身の廣いこと、女人藝術が來たから負けたなんて云はれたらば、その恨骨髓であるが今日はその反對である。そこでどうですとばかり鼻をひこつかせた。大家さんをとみれば之又嬉しそうに相ごうをくづしてゐる。ポケツトウイスキーを時時あふつて赤くなつた顏をにや〳〵として、應援團のフレ〳〵早稻田、フレフレ三上つて云はれた時に、スマシテかぶつてゐたハンテイングをぬいで大事な——之は小さい聲で::あたまのてつぺんをみせて「早稻田バンザイ」

曉闇が萩のしづれに漂つてゐた。小蝶が幾羽もつばさを疊んで眠つてゐた。離家の明けてある戸をはいつてゆくと、薄暗い青蚊帳の中に、大きな顔がすつかりゆるんでゐた。も一足早ければ、何か秀逸な遺言を殘したであらうに——枕許に、まだよく色つかぬ柿が、枝のまま籠に入れてあつた。おぢいさんの心づくしであつたらう。

老妻が歿くなると、老爺さんの諦めてゐた硫黄熱がまた燃てきた。次の間にはもう寐てゐるもののない、廣々した住居に獨りでポツネンと机にむかつて、精密な珠算と細字とが、庭仕事の相間に初まり、やがて庭仕事の方が相間にされるやうになつた。薄の穂が飛んで、室內の老爺さんの肩に赤トンボがとまらうと、櫻が散り込んで小禽が障子につきあたつて飛廻つても、老爺さんには東京なのか山の中なのか、室內なのか外なのか、ムツリとして無愛想になつてしまつた。

だが、もうさびしい諦めはもつてゐたと見えて、山へ行くとは言ひださなかつた。たつた一度さうした望みを洩したをり、私は出してやりたかつた。山で死ぬのが彼にはいいと思つたが、彼の親類は困ると言つた。それから急に年齢の衰へが來た。離家の垣根の隅でポツチリづつの硫黄を製練し、研究してゐる姿が蟇のやうに悲しかつた。

私ひとりを便りにでもしてゐるやうに、私がものを書いてゐる窓に來て一言二言づついつた。野球のミットのやうな掌を廣げると、土佐繪に盛りあげた菜の花の黄か——黄色い蝶をつかんできたのかと思ふほど鮮かな色があつた。

彼の試練からとれた硫黄だつた。

「これをひとつ、お見せくださらんか。」

老爺さんの頭には、其時、時の知名の成功者たちの名がうかんでゐたに相違なかつた。

「實業家や學者にもお近づきがあるでせうから。」
鮮かな黄色は、私の黒ぬりの机の上にこぼれた。老爺さんは懐から部厚な書きものを出した。

硫黄採煉明細書と版に彫つたやうに正しく表書がしてある。

「硫黄は釜が痛むものでしてな。」

と老爺さんはやつと發明した製煉釜のことを手眞似で話した。私は老爺さんの心根を思つて、駄目と知りながら知己の鑛山所長にその明細書を見せたら、その人は首を振つていつた。

「惜しいことにみんな外國で發明しられてしまつてゐる。機械はもつと簡便に出來る。だが、九十の老爺さんがよく實地から此處まで考へたものだ。」

私は九十の老爺さんが以下だけを使つて、パスしなかつた事はきかさなかつた。彼は恐悦の至りだと言つた。

明治四十三年の九月に佃島に津波が來た。京橋の築地河岸一體にまで其水は押上げたほどで、洲崎や月島は被害が甚かつた。庭の眺めになるほどの距離にある相生橋から越中島の商船學校前には、避難して來てゐた和船が幾艘も道路に座つてしまつたほどで、帝都には珍らしい津波だつた。私の家は老人たちの丹精の小松が成長して、しつかり根をかためてゐたせいか防波堤は崩れなかつた。海水が高いと案じ油斷はしてゐなかつたが、うとうとと眠つた夜中にチョロ〳〵と耳近く水の音をきいた。戸外の暴風雨にはまぎれぬ音なのですぐに目が覺めた。潮入りの池は島中でたつたひとつだから、これは池があふれたな、近所に氣の毒だとその瞬間に思つたが、よく目を覺すとそれどころではなかつた。何もかも

そこで女人藝術も大きな聲で「早稲田バンバイ—「慶應あしたはしつかり！」（みどり）

留置場のモダンガール

勃發的事件の犠牲

勃發的事件はたま〳〵計畫的な事以上の效果をもたらす事があるものだ。十一日講演會が無事に終つてやれ安心と云ふ瀬戸際に突然飛び出した男が勞働女塾の寄附を叫んだ事によつておこつた事件がよくそれを證明して居る。おまけにH署へ一晩の御厄介になるべく二人の女を逸つた原因となつた。そしてたまたまの御馳走を南京虫諸君にあたへた。

十月と云へば晝間は兎も角夜中はなか〳〵寒い。三疊にリノリユームが敷いてあつて筵が二枚。一枚の毛布に三人。「こんな滿員の日にわざ〳〵やつて來るからいかんよ。文句を云はんでおとなしく寢るんだ！こら！そんなに慾ばつて掛ける奴があるか！そんなに離れて寢るからだ。抱きあつて寢ればあつたかい。」愁人同仕でもあるまいし。仕方がないからOさんと背中をつきあはせて寢る。

「やい、そこに寢て居る女つ子。御馳走だよ。」Oさん元氣づいて「さしいれですか。」

「俺が買つて來てやつたんだ。せんべいを。腹がすいて居て可愛想だからな。」嘘つきめが！「猫いらずでもついて居るといかんから調べてやるよ。」お腹がふくれたら眠られるだらうと味のないパンを二人でかぢる。

殘りのパンを袋ごと枕のかはりにして横になる。うつら〳〵して居ると腰のあたりが無性にかゆい。ボリ〳〵と搔くとお團子の襟に

膨れあがる。と頸のまはりもかいくなる。又引搔く。今度は腕。もう體中がかいくなつてはね起る。到る所に團子の山が出來る。「かいくて堪らないわ。」Oさんもむく〳〵と起き上つて「やつぱり居るのねえ。とてもかいい。」

Oさん、私の足を椨下の上からさはつて見てお團子の大きさに大いに驚く。Oさんは少し飛役になつて居るのか余りはれない。外套を振つて又横になる。ガタンピシヤンとやかましい音に眼をあけると、見馴れない御夫人が着物をぬがされて居るところ。「紐はみんな取るんだ。帶だけ卷いてゝよし。中へ入つてゆつくりお休み。」重い格子戸がドカンと閉るとガチヤンと鍵をかける。外の聲。「奥さん今頃何しに來たんだい。夜中の三時に自動車を走らせる樣な急用がどこにあるんだい。」奥さんは默然として返事をしない。ハンケチを口にくはへたまゝうつむいて居る。

「何だつて自動車に金を拂はなかつたんだ。ふられた旦那なんか追つかけたつて仕方がない。あきらめて又他のを探したらいゝぢやないか。えつ奥さん。何をそんなに默つて居るんだ。氣どらんでもいゝよ。」

「だつて、私……お金がなかつたんだもの。だから時計を上げるつて云つたんだわ。」

大島の着物に錦紗の羽織の奥さんはこれきり又默つてしまつた。一枚の毛布を四人で引つぱる事になる。三時。省線の音もやつと聞えなくなつていよ〳〵寒くなる。

「さあ起きろ!」少し暖かくなつてうと〳〵したと思ふと奴鳴られた。漸々皆起ると二十

が浮出して器物が活動してゐる。ボンヤリしてゐるのは人間だけだつた。

電燈は斷れた。幸に滿月の夜ごろだから、月はなくても空は眞暗といふほどではない。

離家から、二階にゐた中學生の弟が裸で、胸まで水に浸つて探險用の燈火をつけてやつてきた。二匹の犬がサブ〳〵泳いで後について來た。

「老爺さんをともかく二階へあげておくれ。」

といふと弟が答へた。

「とても駄目だよ、おやつちやんでも言はなければ動きやしない。なんてつたつて、戸棚の前に座つて、硫黄をいぢくつてる。」

「でも水で大變だらう。」

「うん、床が高いけれどもう肩のとこへ來てる。」

「硫黄をみんな二階へあげてあげるといつておくれ。」

「此方へ連れて來たいが、老人だから流されるだらう、とても甚いや、僕でもあぶない。」

私は突嗟に富士登山の杖が浮いてるのをとつて、窓の外の弟にわたした。

水が引いたあと、ヘドロを搔くのと、濡れた衣物や書籍が洗ひきれずに腐つて、夜になると川へ流して捨てた。壁は上までシケが浸上つていつた。額などは水につかりもしないのにバクバクして、何もかもが病氣になつた狀態だつた。私は二人の老人の健康を氣づかつた。

離れの二階が一番乾いてゐたのと通風がよいので、みんなが其處に集つて暮すと、二人の老人はまた互に强がりはじめた。しかし二人ともどこか惡くしてゐる樣子が見えた。私は七十代の父の方に說いた。

五六になるきたない事務服を着た女の人におまはりが云つた。「お前は掃除がらまそうだから掃け。」二人は又隅に積み重ねられた毛布を引つぱり出して寢る。「そんなにいつまで寢ていちやいかん。起きて座つて居ろ。」

六時頃人のよさそうなお爺いさんが朝の御飯を運んで來る。はげちよろな木の箱にそれでも白い御飯だ。わきに泥のついた様な大根の莖のお香こがついて居る。お爺さんがお椀を持つて來て「今おみよつけをあげますよ。食べるかね。」ガチャ〳〵音をさせてバケツに入れて持つて來る。二人顔を見合はせて「汚ならしいわね。」「でもまさかおみよつけ専用でせう。」

おみよつけを貰ふ、と昨日のお晝から忙がしくて大した物を食べて居ないので、白い御飯が食慾をそゝつた。二人はかまはず食べ出したが他の二人は膝の上に手をのせた儘御飯とにらめつこをして居た。事務服の人にどうです食べませんかと促すと有難うと云つて元氣に食べ始めた。例の奥さん丈は相變らず下をむいた儘手をつけようともしなかつた。

「やあなか〳〵元氣だなあ。」交代のおまはりが動物園のライオンでも覗くやうにして格子戸の外から云つた。「だつてわりにおいしいんですものね。」二人はクス〳〵と笑つた。

「そりやそうさ、これでもこゝの米は二等米なんだからね。」

なんの！　南京米ぢやないか！

「モダーンガール出て來い。」モダーンに生活して居てモダーンなのはあたり前だ。君、モダーンの意味を知つてるか？

「どうも老爺さんが悪いらしいが、醫者をよぶといふとかからないから、お父さんが風邪をひいたことにして——」

「よし。」

老父は至極簡單で、もの事を逆にいへば唯々諾々なのである。

「なにしろ湯川老人は年齢だからな、醫者に見せなければいけない。」

そして、その湯川老人はいつた。

「ようごす、お父さんは頑固だからどうも強がつていけない。僕が醫者にかゝるといふと、自分の爲だとは知らずに、湯川もまゐつたなと言はれるだらう。だが、なんぞ知らん、長谷川氏のために呼んだ醫者だ。」

カラ〳〵と笑つてつけたした。

「幸と硫黄はなんともなかつた。書物をすこしやられたが、それはまだ書けば書けるから、どうか御安心ください。」

だが、死期はせまつてゐたのだつた。保てるだけもつた軀は、ポクリと倒れるまで餘命を保つてゐるだけだつた。醫者は言つた。何ともないが死ぬだらうと、しかも十日はどうかと——

葬式にも間に合はないだらうがと、臺灣から出て來た例の虎と蛇薬の婿は、蚊にさされながらブツ〳〵言つた。

「こんな事なら、わしや言ふとかにやならぬことや、仕ておかにやならんことが澤山澤山あつたに——おぢいさん、どこまで他人を困らせる人か、わしやもう、若いころから此人のためには、ほん、サンザンな目に逢ふとるわ。」

二階の汚ない宿直室で珍無類の押問答が始まる。調書を作る爲である。P「何だつて金なんか集めたんだ。誰が集めろつて云つたんだ。」私「誰かつてそこに居た二三人が異口同音に云つたから誰だとはつきりは云へない。」P、「二三人だと？わからんな。ふん、始めから相談が出來て居たんだな。會が終つたら寄附金募集とな。」私「そんな事はありません。突然知らない男の人が飛びだして皆さん勞働女塾へ寄附をしようぢあありませんかと歸りかけた群集に呼びかけたのです。そしてその時に居たOさんやKさんに寄附して貰ふなら今ですよ。こんな機會は二度とはない。と云つたので、私に帽子を持つてお金を集めに行つて來いと命じたから出口へ行つてその通りにした迄です。」

P「云ひ附けられたから集めたつて、それぢやお前は社長の云ふ事なら泥棒でもすると云ふんだね。」私「學校時代から寄附は惡い事であるなんて敎はつては居ないので――出來る者は大いにやれと敎へられたから平氣でお金を集めたのです。勞働女塾はOさんが賃仕事をして迄女工さん達の敎育の爲に經營して居るのだと聞いて居たから、女の人の仕事を助ける意味から云つても大變いゝ事だと思つたのです。」P、「うまい事云つてらあ。お前達も貰へるからだらう。」

調書に書かれた字を見ると。勞働貯蓄。「貯蓄ではない女塾、女つて云ふ字ですよ。」

すると女蓄となつた。勞働女を蓄へる？？

「年の割に隨分若いなあ。君は實にハイカラ

醫者も驚いた。こんな事はないが、こんな事はないがと――その瀕死期は來てゐるのだが。

「おぢいさん癌があつたのだね、驚いたなあ、何時ころからなんだ。」

醫者にもわからないものが、誰にも分りやうはなかつた。强い、しどい、刺戟のある臭氣を、香を焚き、鼻の穴へ香水をつけた綿を插て私が世話をすると、その時だけ意識が分明して、他の者には近よらせなかつた。そしてお世辭がよかつた。

何に拘はつてゐるのか――と私は考へた。

「おぢいさん、お酒がほしい？」

ニコリとしたやうな表情だ。私は藥指のさきに、薄めた淸酒をつけて甞めさせるとおちよぼ口をした。

「ほう、觀音樣だな。」

傍から首を出した妹を見てお世辭をつぎたした。

「イヨウ、綺麗になりやがあつたな、辨天樣だぞ。」

酒をもひとつといふやうに口をあけた。そして露を吸ふやうに、垂らされる雫が舌のさきに辷ると、

――富士の、白さけ‥‥

と幽な／＼な聲で、轉がすやうに唄つた、正しく生てゐるをりなら笑みくづれるほどに笑んだのであらう、唇をパクリとした。

でも臨終ではない。あゝ結構な、いゝ往生です／＼と寄つて來たものはポカンとして當惑した顏をした。

私の心は暗かつた。長い一生、一念を封じこめた硫黃山に心を殘してゐるのではあるま

だねえ。」私がニコ〳〵してゐたからだらう。

調書を他の人の所へ持つて行く。四角い顔の人がどか〳〵と來ていきなり奴鳴る。

「知らない男だなんて、こゝへ來て噓云ふ奴があるか、あの男を知らんと頑張るなら二十日でも泊めて置くぞ！馬鹿！判らずや！」

ぴしやんと戸を閉めて出て居つてしまふと例のおまはりが「お前が噓なんかつくもんだから又書きなほしだ。折角早く歸へしてやらうと思つたら駄目になつちやつた。其の男、考へたらわかるだらう。早く云つちまへよ、歸へしてやるから。」知らない事を思ひ出す樣な神通力は相憎持ちあはして居ない。知らない事ばかりはいくら打たれても思ひ出しようもない。押問答の最中に外で社長さんの聲がした。さすがに嬉しい。やがて入つて來た私服の刑事。「もう書きなほさないでもいゝよ。もうわかつたんだ。こんな事男なら誰も問題にもしやしないんだ。」

「これからこんなおちよつかいするんぢあないよ。」奴鳴やが又奴鳴つた。

體中へお團子を澤山貰つて、社長さんとKさんに迎へられて歸へる。

翌日朝日新聞社へお禮に行つた歸り道にH署の前を通つた一同。

「憎らしいH署！」

社長さんすかさず、「ぢやいゝでもしておくさ。」

茶目連そろつて、自動車の窓から××の方を向いて、いゝ、いゝ。

いか——

「老爺さん、硫黄鑛山が賣れましたよ。」

「ほ。」

パッと、死んだ瞳に瞬間灯がともつた。手を差出した。そこらにあつた重いものを握つた手を私は老爺さんの手に觸れさせた。

「有難い——みんなにやつてくれ。」

私はほゝゑましくお伽噺のやうに言つた。

「老爺さんの黃金の像を建ててあげませう。」

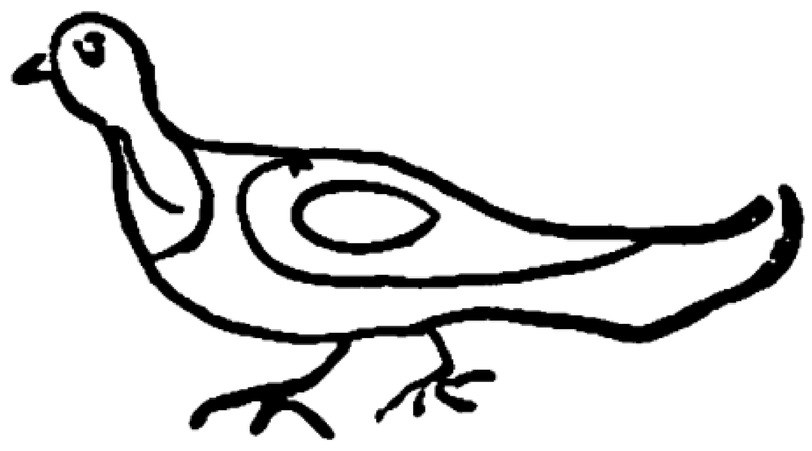
「ほ。」

滿足な瞑目だつた。

嚴肅にしやちこばつた人たちの方がすぐに惡口した。慾ばつてゐると——

私にはさう思へなかつた。

初秋の風に竹がサラサラ鳴る曉、柩は跡とりの息子の家にと出てゆくのだつた。戒名は硫黃居士と私がつけたが、息子の望みで二字に離してくれといふので黃竹居士になつた。私は臨終に噓をついたのを今でもちつとも惡いと思つてゐない。私はみんなが、さまではといふのに反對して、黃竹居士湯川老人の柩の中へ、標本になつてゐた硫黃の、ありつたけの種類をすこしづゝ入れてやつた。これほどの供養はないと思つてゐる。



光を感ずる子

若林つや子

『またあなたは忘れて、あれ程昨日言つておいたじやありませんか、何無い、なければ何故買つて貰はないのです。』

丙午の老孃體操の女教師鬼頭先生の蒼白いヒステリーの顏が動いて呪はしげににらみつけた二つの目にキヨの體が中心を失つてよろよろと運動場の砂の上に倒れた。

『アッ!』

『キヨ、キヨ、起きないか、朝だぞ』

病氣の母の力弱い聲である。

十月の朝風は寒い。ことにこの開墾地は町の温泉場よりずつと寒さが早く來るようだ。電燈の無い部屋のすき間だらけの雨戸からうすら白い朝の光がのぞきこんで母の垢じみた夜具がもぞもぞと動いて居た。キヨの胸はさつきの夢の續きでトントンと音をたてゝ居る。雨は降つて居ないらしい。どうしよう。土間に下りてたてつけの惡い勝手口の戸をひつぱり開けると、傾斜した大根畑で兄の省三が大根の間引きをして居る。

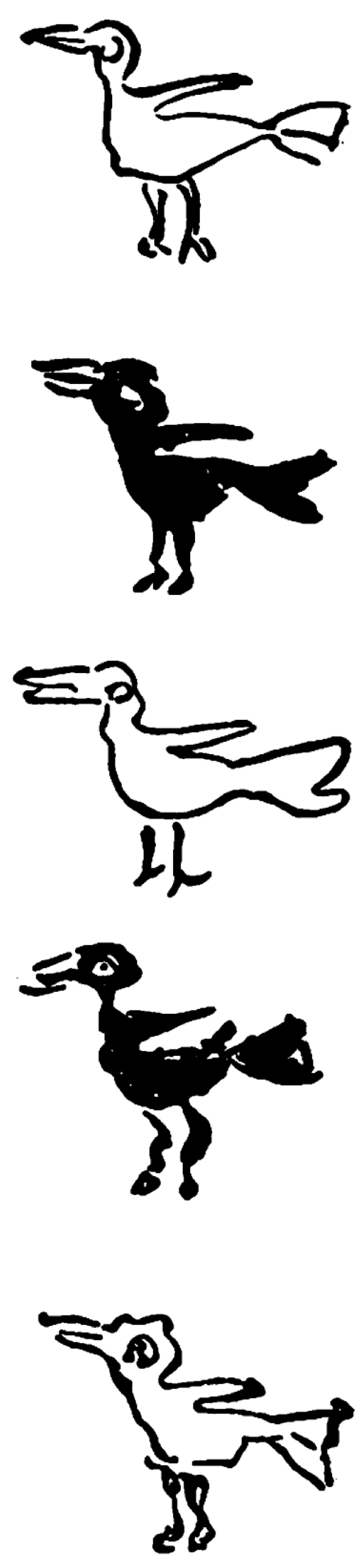
キヨは納屋から杉の葉と薪を抱へて來て火をたきつけた。昨年の末父を失つたキヨの一家族の 生活はいやが上にも苦しいものだつた。病身の老母と二十歳を頭に六人の兄弟、その上母は春から心臓を惡くして養生の出來ないまゝに今もつてようよう蒼白い顏をいろり端に運ぶ位がせきのいゝ山である。二人の姉は町の温泉宿に女中奉公に出し、一人でも口の少ない方がよいと言ふので三番娘のミツもこの春から地主の山野の家で犬猫同様にこき使はれて居る。十二のキヨは弟の世話と一家の食事から洗濯、母と老母の食事の用意までして一里餘りもある小學校へ通はなければならないのだつた。一家の生計は高い地代を搾り取られた後で計算して見ればどうしても飢るより他道はなかつた。然し省三は默々として働いた。そして彼の様子はどこか異つた所があるのだつた。

キヨは朝食の時おそるおそる言つて見た。

『お母ア、體操服が無いと先生に叱られる』

昨日の體操時間の鬼頭先生の目と今曉の夢を思ひ起してキヨの心臓は又音をたてはじめた。

『體操服、何だ、そんなものが無くていけないたら學校なんてよし





ちまへ!!』

不幸と貧とに若い時から明るいよろこびを知らずに生きて來た母親は蒼白い顔をひきゆがめてどなつた。

『みかんがあかるんだり、大根が出たりするようになれば兄さんがどうにかして買つてやるから、それまでがまんしていろ』兄は三ばい目の飯を平ひらげて土間に下りた。縞目のわからなくなつたシャツの肩の穴から、日にやけた肉體がのぞいて居る。兄はいつもの歌を口笛で吹きながら出て行つた。その歌は町の青年や學校の先生などのうたふ歌ではない。キヨはいつとはなしにその聲をおぼえてしまつた。そしてその歌がたまらなくすきだと思つて居た。

うらゝかな秋晴れである。うすぎたない本の包みをかゝへてキヨは一目散に山の家をとび出した。山をかけ下りて縣道へ出る曲り角の所でキヨはあぶなく音もなくはしつて來た素晴しいパッカードにつき當りそうになつた。

『アッ』

自動車は折からの晴天續きに砂埃をキヨに浴せかけて飛去つた。

ゴルフ場行きの自動車だ。大輪のダリヤの樣にあでやかな女とキリギリスの雄のような、ナヨ〳〵しい男とが眉をつき合せて乘つていたつけ。キヨはすりへらされた下駄を鳴らしながら空想に耽つた。

今の自動車に突當つて私が右の足先をホンの少し許りケガをするそうすると、そうだあの緋ダリヤの樣な女の人が車から飛下りて、

『アラ! まあ、どうも、おけがはなくて、あなた、ねえ』

『そうだ、君これでお藥を買つてくれ給へ、いたくないんですか』

お金だ、お札だ、そうだ、體操服が買えるぞ、兄さんの本も買へる、お母さんの藥も、いいなあ、素晴しいぞ、その時道の端に出て居た茨に引掛つてキヨの空想は一たまりもなく消しとんでしまつた。

『あんなキレイな女の人、あんな男のくせにおしやれできどり屋の女のような男の人、何のことだ。私がこの前姉さんに用事があつて行つた時だつてあの秋月館の髪の毛をチリヂリにちぢらせて大きな石の入つた指環をはめた女の人だつて、地主の山野の娘だつてまるで乞食の子でも來たかのように顔をしかめたりなどして、にくらしいつてありはしない、あんな女の人大きらひ!』

キヨはさつき自分の空想して居た事が心苦しくなつて自動車の方を振りかへるとツバをはきかけた。海が見えるぞ、いい天氣だな。急に元氣になつて大またにストンストンと歩きはじめた。

沖の初島は水仙島よ
島の女神は花の女神は
初木姫、……。

ほがらかな歌聲だ。若い男が鎌としよいわくを持つて上つて來る。家の兄さんよりよいシャツを着て居るわ。

朝令のベルがチリ〳〵と鳴つた。キヨは大勢の兒童達と一緒に朝令場へ出た。

『國旗に對して注目ッ!』

看護當番のW先生のドラ聲に二千に近い男子女子の目が一齊に國旗に注目すべく訓練づけるまでには相當の受け持ち教師の苦心が必要だつた。旗はスル〳〵と杜を傳はつて登つてゆく。杜によりそつて一生懸命つなをひつぱつて居る生徒總長の高慢チキの顔が朝日を受けて眞赤に光つて居る。高慢チキな生徒總長とカラクリの糸。

だが従七位の校長は國家觀念養成の最もよい具體案として國旗のスルへと登行く如くに我國威の高まりませと祈らせるのであつた。教室の前で整列して兩手をのばして前へ並んで居る時キヨは體操服の事が氣になり出じた。その瞬間である。上げて居た手が思はず下つた。と鬼頭先生の眼がギロッと光つた。

『あなたは會禮の時ぐらぐらして居て、又動いて居る。もつとしつかりしなさい。まるでくらげのようだ』

級友達が一度にどつと笑つた。キヨは自分を笑はれたのだと思ふと顔がサッと赤くなつたようだつた。けれど自分をくらげと言つた先生の顔が鬼のように思へた。鬼頭先生の鬼の頭、鬼の頭がくらげをにらみつけて居る。何故かキヨはそんな事を思つた。

五時間目の體操の時間である。他の級友たちは皆黑のスカートに白のスポーツ衿のおそろいの體操服になつて買ひたてのゴムマリのようにポンポンとはね上つて居る。

ヂリヂリと始業のベルが鳴つた。鬼頭先生がその蒼くヒヨロ長い體を運動場に運ばせて來た。彼女は二十四と言ふ惡い年に生れて來た事と、女學校時代にあるマドロスにもてあそばれた事とから大分度の進んだヒステリーでしかも××地方のなまりのあるトゲトゲしい言ふつきの女であつた。再び愛人の强烈な愛を感じない以上、彼女の炎のとげはいやが上にも伸びてゆくことだらう。



『また着物で、着物で體操が出來ますか』

キヨはポカンとして居た。

『列の最後につきなさい!!』

つきのけるようにキヨの肩のあたりを引つぱつた。

『右へならへ!!』　例のかなきり聲だ。キヨの前には牛玉の子が居た。少しかしいだ桃割れのピンの毛がだらしなく衿にまつはりついて、昨夜の白粉があごから耳へかけて線をなしてうす黑くこびりついて居た。安い京白粉の香が時々キヨの鼻までやつて來た。

洗ひ古したナフトル友禪の着物に細いひものようなへこ帶、彼女等のひるのよそほひは全くあはれなものだつた。他の姉さん達が十二時近くにおき上つてエネルギーを貯えて居るのに牛玉の子等はひとりで早くおきて冷たい朝食をすましては學校へ來るのだつた。

だがそれは二時間目の終り頃來てボンヤリとして居たり又時には机にうつぶして眠つてしまつたりする事もあつた。

行進をして居る時である。ヒヤリとキヨの足に何かさわつた。血が！　黑血だ！　キヨはビッコをひきながら救護室へ行つた。いつの間にかキヨは救護室のベットの上で眠つてしまつたらしい。ふと目を開いた時ガラスの外は夕燒けだ。キヨがベットからにじり下りようとした時鬼頭先生の蒼白い顔が戸口の所にうかび上つた。

『一寸立つて歩いてごらん』

キヨは寢臺から下りて歩いて見た。

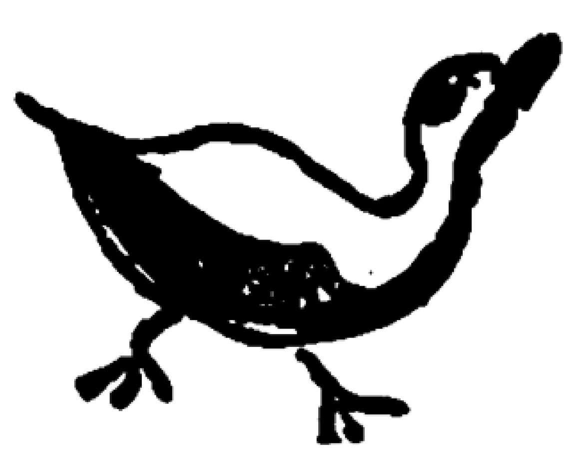
『いたい？　あれ程言ふのに運動靴を持つて來ないから足などきる、今日歸つたら直ぐ買つてもらひなさい。もういつてもよい』キヨの目に今朝の母の顔がヒヨイとうかんで來た。

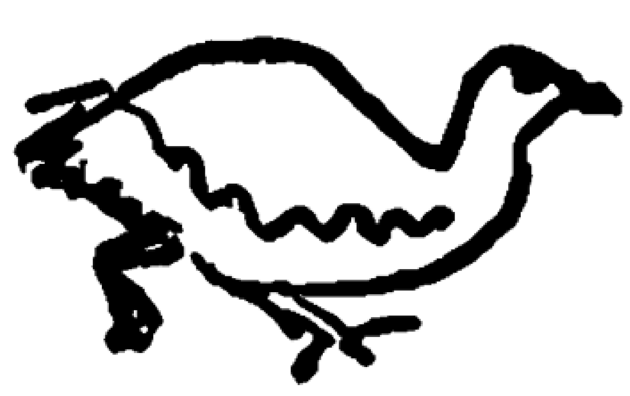
『何をボンヤリして居る。歸つてよいと言つてるのに。』

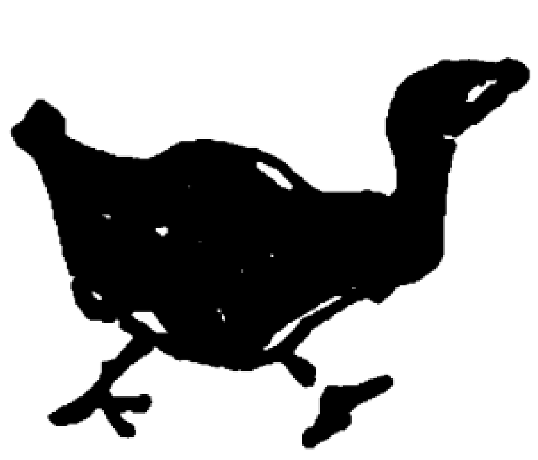
夕暮れである。海は今日もよくなぎて居る。東京行きの汽船がボーと汽笛を鳴らして海の上をすべり出した。キヨのうすぎたない着物に不似合な眞白い繃帶が歩くたびに足先でおどり、その度につき

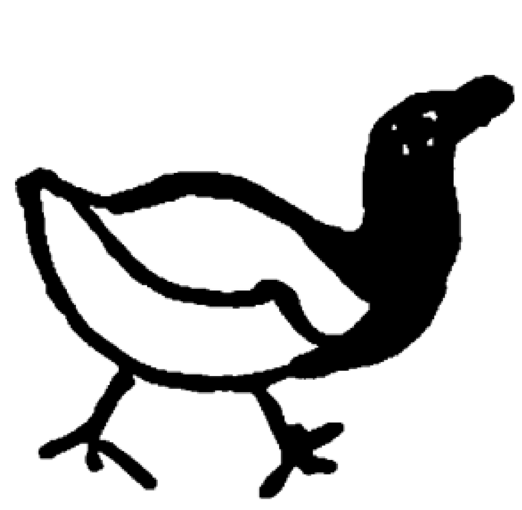


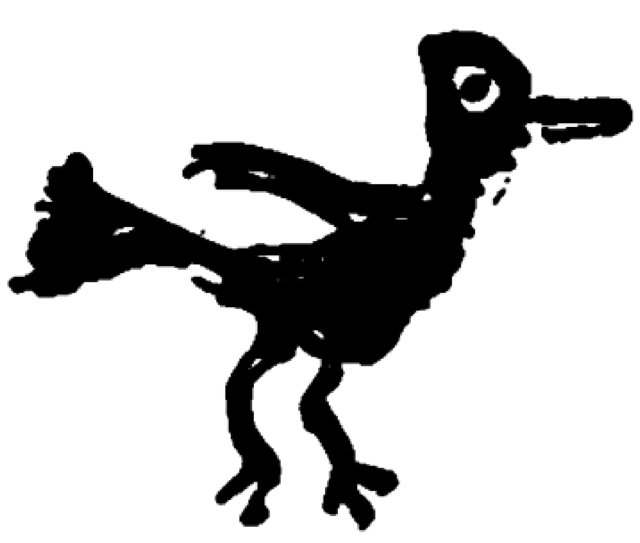
つきと痛む。夕陽がすつかりA山に落ちて色づき始めた櫟林の枝からハラ〳〵と落葉が自動車の輪立ちにころがり落ちるのだつた。
『どうしたといふのだ、キヨ!! こんなばんがた（夕方）まで學校で何をしていたのだ』母の聲はトゲ〳〵しかつた。
『足を切つた』
キヨは不自由な足をひきづりながら下間に下りた。兄はまだ外で働いて居て歸つて來ない。母はいろり端で火をふいて居た。くすぶつて容易にもえつかない火は徒らに白い埃があたりへまひ上るのみだつた。キヨは杉の葉をむやみにおしこんだ。部屋の中は煙でもうもうとして居る。
『今夜は石油がなかつたな』
外から歸つて來た兄はバサリと土間に何かおきながら言つた。
夕食、それは一日畑仕事をする兄には無論のこと、學校に行くキヨにも子猿のようにかけづりまはる弟達に對しても一日に消費するエルネギーの幾分にも足りない粗食であつた。
『兄さん、これ先生がよこしたよ、あした日曜だから學校へ來るだつてよ。お前の兄さんはいつも休んでいけない。あしたはどうしても來るのだつて言へつて先生がおこつてたよ。』
兄はいろりに杉の葉を一枚投げ入れて裏に××青年××所と活版刷りになつて居る茶封筒を讀んで居た。一しきり赤く燃えて居たいろりの火が消えると兄は立ち上つて納屋から薪を一かゝえ持つて來た。パチパチと燃え上る火を頼りに兄は何か一心に讀んで居る。いつも讀んで居る本だな、キヨはそう思つた。
『兄さんあした行く』
『兄さんが行けば誰が働く。兄さんは何をしなければならないかわかつて居る。キヨお前にもわかる時が來る。お前は早く兄さんの讀む本がよめるようになるのだ。勉强するだぞ』
キヨは何だかしんみりと悲しくなつた。
忘れて居た足のキズが痛み出した。
手さぐりで夜具を出すと片足をふとんの外に出してたつたひとりで本を讀んでる兄の角ばつた肩のあたりを見つめてゐた。
『兄さん』
『何だ、足がいたいか』
『そうじやあない、もうねない』
アカ〳〵といやうすぼんやりとでもいい。電燈がほしいなあとしみじみ思つた。
背ばかり高くて目がキヨロキヨロしていて、そのくせひたいにいつもしわをよせて居る、キヨ達の修身の時間にいくらキヨが手を擧げても一度も指したことのない校長より受け持ちの先生より、體操服で叱られる鬼頭先生より兄が一番頼もしく正しいように思へてキヨは急に明るい光に出合つたような晴ればれしい氣分になつた。
パチ〳〵いろりの火が燃える。母の力のないせきがキヨの心をともすれば暗くするけれど、兄の頼母しい横顔を見ると太陽のように力づよく感ずるのだつた。（一九二九、一〇）

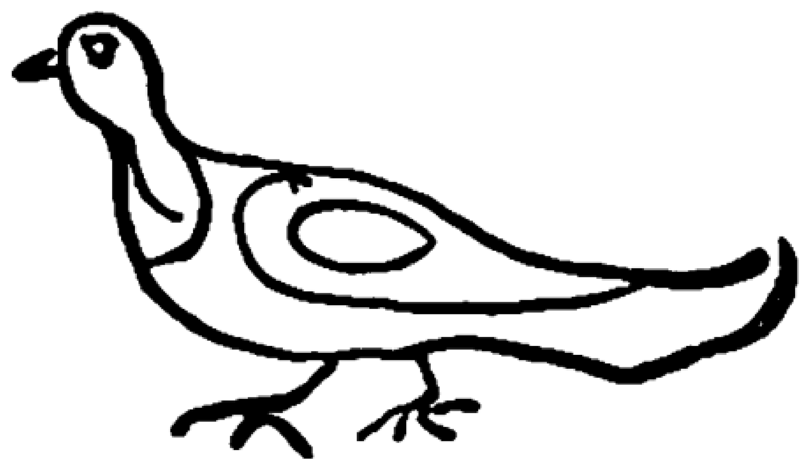






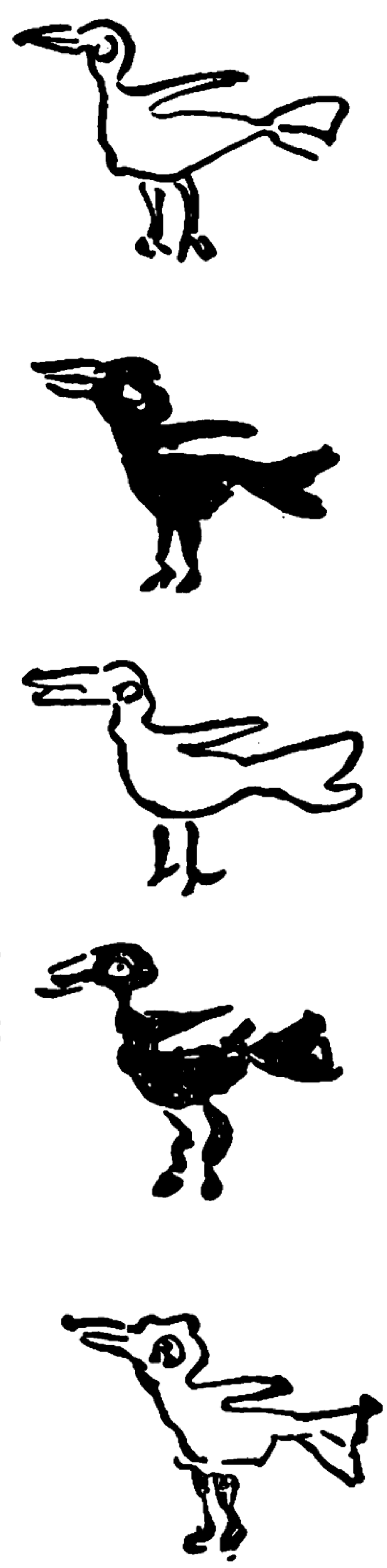






無料産院

緑川靜枝



留守を、階下の叔母さんに頼んで、葉子は今にも、帯の下からずり落ちそうな腹を抱えて、産院の門をくぐつた。

控室には、大ぜいの女たちが、堆積した埃の中に、激しい呼吸と、苦痛の表情をかさねてゐる。

濕めつぽい、四隅の黴の中へ、姙娠脚氣の宣告を受けた彼女達の、カロリーの缺乏した酸性ガスが、じわじわと溶け込んでは、鈍い明り窓の光線の縞へ、空氣の波動につれてゆれ動く。

通りすがりに見知り合ひの、看護婦がゐたので、彼女は、丁寧に挨拶したのち、今朝がたから、時を切つて痛み出し、それが大分ひどくなつてゐるから、先に診察して欲しいと頼んだ。

魚の様に冷たい、看護婦の寢不足な目が葉子を一瞥したのち、やがて、極度に飛出した下腹部の邊りへ、執拗な視線を投げた。

『聞いて見ます』

レールの軋む樣な、ヒステリックな高音が無料産院の空氣を、一そう憂鬱にした。

彼女は、不快を感じながら、じめじめした薄暗い廊下を、小鼻を突く消毒藥の臭ひに馴れながらついて行つた。漂白の利き過ぎた看護婦の青白い服の襞が、關節の動く度に、かさかさ、と音を立てた。

診察室の入口で待つてゐると、さきの看護婦が顔を覗かせて

「帯を解いてゐて頂戴」と、ぶつつり云つた。

奥から、痩せた小柄な女が、胸をはだけてよろめき、出てきた。着物の間から、膨れ上つた腹のさきが、腐りかけた、夏卵の殻を思はせる。

彼女が、腰掛けるのを待つて口髭を蓄へて、薄桃色にむくんだ醫者は、聽診器を乳の周圍に、當てがひながら、じつと、公式的に耳をすました。彼女は、胸を張つて、出來るだけ、大きな呼吸をした。

それが終ると、窪みのひどい、垢じんだ藥蒲團の上に長くなつた。

ぶよぶよした。白い産毛の手が、彼女のはちきれそうな腹の上を器用に丸め、形を整へていつた。

「すぐ、出來ますよ、このまゝ入院なさい」

醫者は、揉む手を止めて、瞳を覗き込んだ。



彼女は、間歇的に襲つてくる陣痛を耐へてすく、言葉が出なかつた。

臓腑を引き抜かれる樣な苦痛が去ると急いで小使室へ行つて、頼んで置いた荷物を貰つた。病室へ通じる階段を上りながら、餘程、上京してゐる彼に、電報を打たうかと思つた。

だが、折角、望みが叶つて、僅かの日數を忙しく送つてゐる彼の事を考へると、仕事の途中で呼返すことが、何となく躊躇された。

―うまく、原稿を引受けてくれる所があればいいが―

彼女は、ふと、痛みの沈んだ今、なごやかな氣持で、生活苦に喘いでゐる彼のとげとげしい姿を案じた。

『この原稿が賣れたら、生れた赤ん坊の、お祝ひの眞似事でもいいから爲てくれよ、そして、小じんまりとした、一軒の家でも借りやうぢあないか」

三四流どこの、小つぽけな新聞社で、何年經つても、、元のまゝの給料でゐる彼は、彼女の產期間際に、やつと一週期の暇を貰ふと東京の大きな雜誌社に勤めてゐる古い友達を訪ねて、ひまひまに書き上げた童話の原稿を持つて、上京したのだつた。

暗い、中年の彼の影が、小脇に、小さな風呂敷包を確りと抱え込んで、長く地を引いて駈け步いてゐるさまが、次ぎ次ぎと、ヤットバックに畫き出された。

結局、彼女は、無事にお產になるのだから電報を打つて、心配させるのは、無馱だと考へた。

「無料產婦に限り一切の世話を產院でする」と云ふ、この市立產院の特典が、彼以外に、身寄りを持たない貧しい彼女にとつて、殊に嬉しかつた。

病室は、廣くて汚なかつた。

ガスと、臭氣の澱んだ底に、線の崩れた黃色い顏が、苦痛と、疲弊の因果に、忍從してゐる。

亂れた櫛卷の傍らに、眞赤な產衣にくるまつた赤ん坊が、明るみに曝け出された恐怖に怯えて、喚いてゐる。

廊下を隔てて、有料產婦の部屋が、向きあつてゐる。

時をり、ドアーを軋しませて、豚の樣な厚化粧の女が、通る人を點檢してゐる。

暫くすると、看護婦がきて、葉子を分娩室へ連れて行つた。

磨き上げられた淸潔な部屋には、いろんな器械が、白蛇の鱗の樣に、秋晴の空に光つてゐる。

當番の產婆がきて、彼女をベッドへ寢かしてくれた。

次第に、陣痛が昂じてくると、彼女はベッドの兩はしの鐵棒を確りと握りしめて、髮の先まで力を入れて、力み返つた。

息も、つけなかつた。

鐵棒を握りしめた指のつけ根は、皮膚を破つて、今にも、飛出しそうだ。

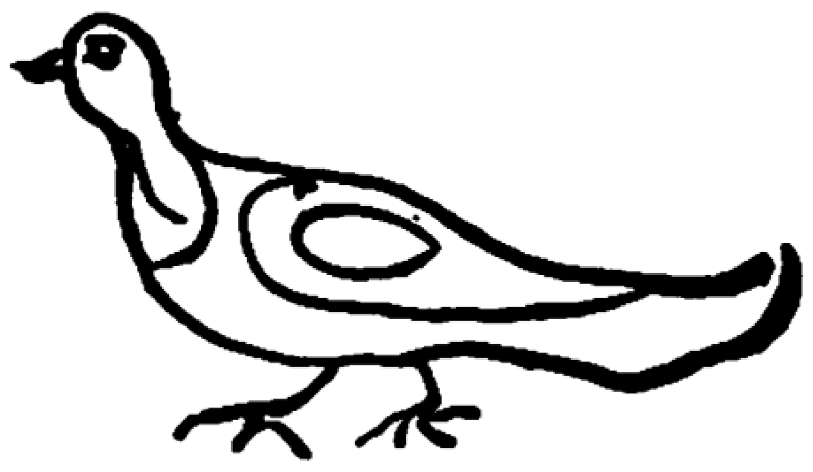
咽喉が、からからに渴いたので

「水が欲しい」

と云つたのが、精一ぱいだつた。

產婆は、冷たい牛乳を彼女の口へ流し込みながら、片手で顏の汗をふいてくれた。

飲み終ると、眠けが襲つてきた。



「確りするんですよ、今、眠つたら、子供が、出てきませんよ」

產婆の聲が、腦の一部に、反射して消えて行つた。

そのうちに、いよいよ最後の陣痛が、襲つてきた。

足をふん張ると、彼女の腰部が、急に持ち上つた。

何處も、彼處も、筋張つて、靜脈が皮膚を破つて突出しそうだ。

斷末魔の呻き聲が、葉子の口から裂けた。

最後に、生命の限り力み返つて、鐵棒を「うん」と握りしめた瞬間、づるづると生暖いものが、腰のつけ根にふれた樣に感じた。

「もう、力んではいけませんよ、靜かに、靜かに」

急に、部屋が騷々しくなつた。

隣室から、水の落ちる音が聞へてきた。

產婆が、彼女の顏を覗き込んだ。

「赤ちやんが出來たんですよ、もう少しで、後產が下りますから、じつとしてゐて下さい」

「どつちですの」

彼女は、ほつとして、心持顏を向けながら聞いた。

「女」

產婆は、急に凹みの出來た彼女の腹の上を靜かに、力を入れて撫でた。

暫くすると、隣室から、ばたん、ばたん、ばたん、板にでも、物を打ちつけてゐる樣な、音が響いてきた。

と、その底の方から、かすれた、弱々しい赤ん坊の泣き聲が、とぎれ、とぎれに彼女の耳へ傳はつた。

何んとも云へない不安を、急に、彼女は、感じた。

——不具か、弱い體質の子ぢやないかしら、彼女は、動悸の中から、恐る恐る、產婆に聞いて見た。

「生れたての赤ん坊つて、隨分大きな聲で泣くつて聞いてゐますのに、年寄の樣な、變な聲で泣いてゐますのね」

髮の薄い、肥つた產婆は、彼女の顏を斜にのぞいて、一寸、云ひ澁つてゐる樣子だつた。

「あのね、田中さん、氣を落しちやあいけませんよ、ひよつとしたら赤ちやんは、育だたないかも知れないんですよ、發育がとても惡いんですからね」

どきつ、とした瞬間、異常な熱の樣なものが、電波の樣な速度で、彼女の體內を押流した。

暫くして、閉じた瞼の裏から、一滴、にじみ出ると、彼女は急いで枕を顏に押當てた。

ばたん、ばたん、打ちつける樣な音の底から、かすれた赤ん坊の泣聲が、次第に細く弱つていつた。

彼女は、顏を蔽うたまゝ、生れて初めて經驗した、深い悲しみの中に、慟泣した。

後產が下りた頃は、最早や、子供の泣聲は聞えなかつた。

產婆の話しで、呼吸だけはしてゐることが判つた。

「せめて、肺だけでも丈夫でしたら、助かるかと思ひますが、一番大事な肺がよく出來ていないんですから。少し養生が足りなかつた樣ですよ」

時々、押潰された樣なしやくりが、耐へきれない樣に、彼女の口から漏れた。



ほどなく、脊の低い、がつしりした小使がきて、彼女を横だきにして、ベッドへ運んで行つた。

葉子の泣き腫らした顔を、周圍の女達は、無遠慮に覗き込んでは、ささやき合つた。すぐ、産婆がきた。

「赤ちあんは、もう二時間位しか生きられないと思ひますが、それまで、貴女の側へ、寝かせて置きますか、餘り心配なさると身體にさわりますから、何んでしたら、産室の方へ置いてあげますよ」

「連れてきて下さい、顔が見たいんですから」

彼女の、耐へてゐた、をえつが、産婆の言葉で、急に痙攣的な響を加へた。

産婆が去ると、急に、部屋の中が、ひつそりとした。たれ一人、彼女に、慰めの言葉はかけなかつたが、皆、氣の毒そうな表情をした。

産婆に抱かれて、母の心盡しの、眞白な、ガーゼの産衣を氣た、小さな赤ん坊が、間もなく、側らへ寝かされた。

彼女は、涙をふいて、初めて、母らしい愛と悲しみの眼で、しげしげと子供を眺めた。

産婆が去つたのち、彼女は、出來るだけそつと、子供の額を撫でて見た。血が、通つてゐないのか冷たかつた。

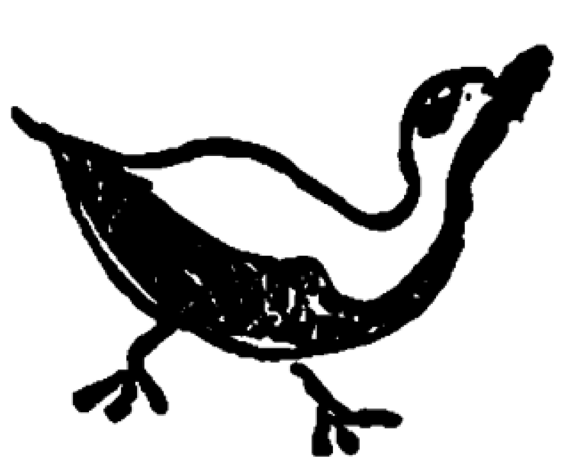
腐れかけた、トマトの様に、赤黝い斑點を置いた、神經のにぶい皮膚、魚の臓の様に、ぶよぶよした肉の彈力、それ等が、時をり、思ひ出した様に痙攣する。

蓮のせんゐの様な呼吸が斷續するが殆んど吐く息ばかりである。

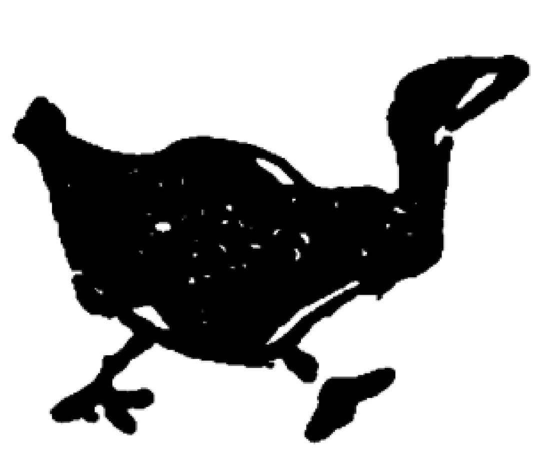
彼女には、子供の髪の毛が、身體の發育に不似合なほど、黒く、房々してゐるのが、さらに悲しかつた。

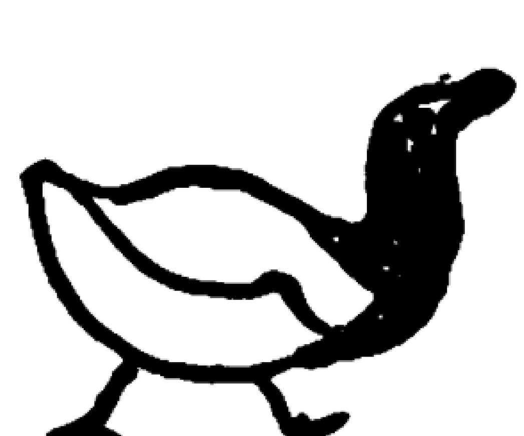
時の經過につれて、子供の身體は、冷たく硬直していつた。

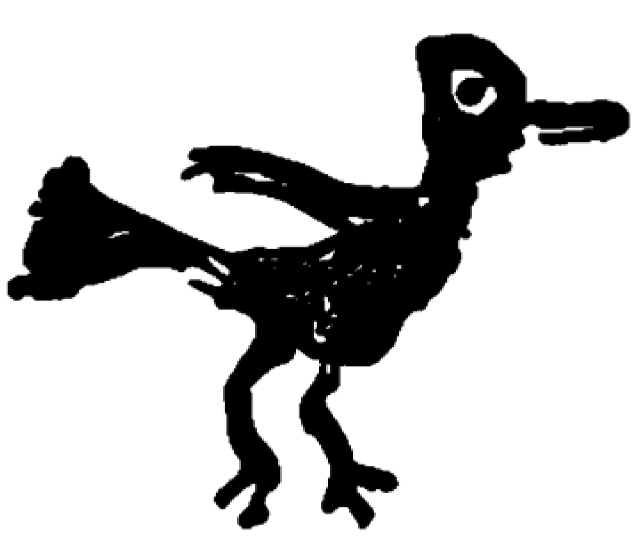
若い、母親の啜り泣きが續いた。











彼女は、悲歎の世界から意識をとり戻すと所詮、定命のつきた魂なら、一刻もはやく、他界した方がよかつたと、諦める餘裕が出來た。

――これ以上、生活に脅されないですむ――最後の理性が、貧しい彼女達の持つ、皮肉な矛盾を、冷笑した。

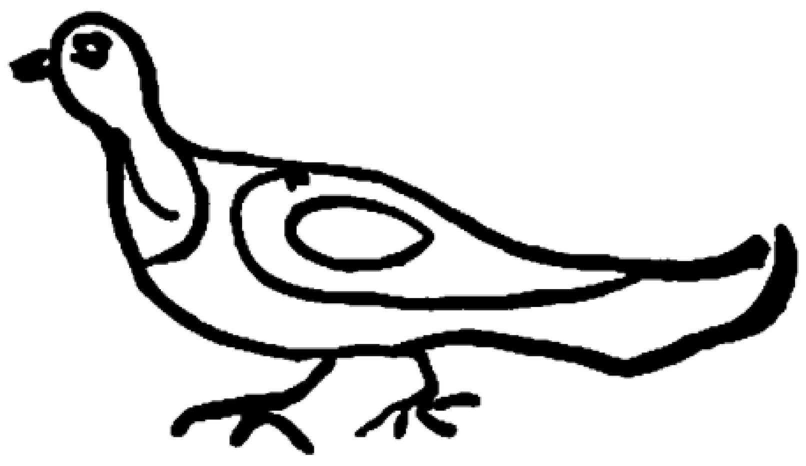
無料産院のベッドに、熱を失つた、十月の太陽が、餘光を赤く浮き出してゐる。

榮養素の足りない、發育不良の魂が、餘光の中に、かぼそく消えていつた。

彼女は、看護婦に頼んで、頼信紙を持つてきて貰ふと、彼の許へ電報を打つた。

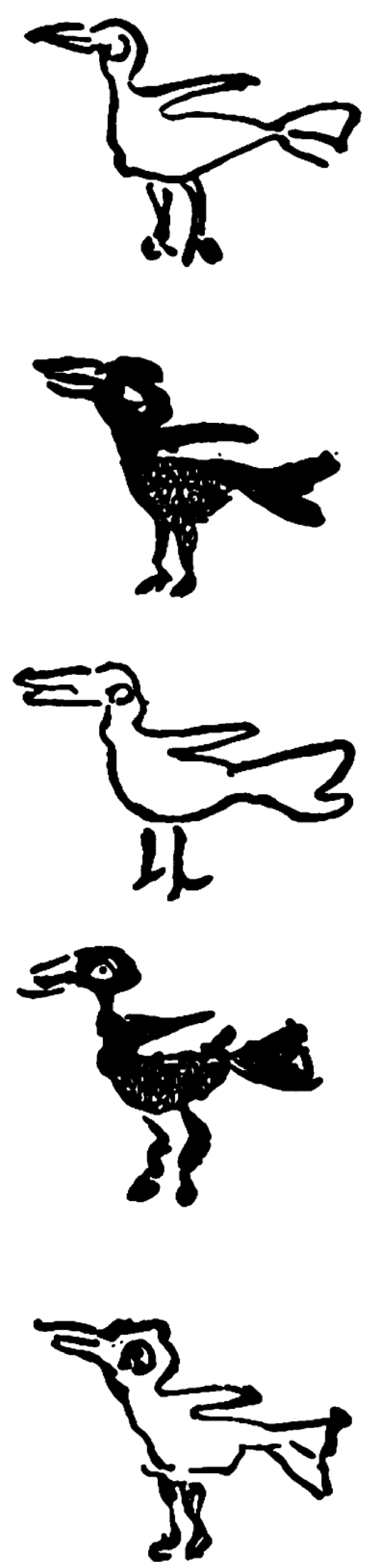
「コシスシヨチニコマルスクカエレ」

三時間前、分娩の爲め、産室へ上つてゆく時、彼へ宛て打たうとした、電報とは何んと云ふ甚だしい、相違だらうと、彼女は、思つた。十月二十七日



北平のある日本人

笙千鳥



一

風が吹き出してからもう今日で三日だ。

北支那の十一月は何もかも灰色になつて仕舞つた。排日の文句を書いた宣傳ビラが、ヒラヒラ風に捲くられて、破れた紙キレが赤塗の色のはげた門扉のところへ、吹きつけられて赤だの白だの小まかく、砂と一しよに渦を巻いて居る。

いつも狹い胡同の西口に座つて居る盲目（めくら）の乞食老爺も、坐つて居ることの出來ない冷たさなので杖にすがつて立ちつくして居る。

「心好的（しんはんで）老爺（らをえ）太太（たいたい）」――と叫んでも、銅子兒（トンツル）のカケラ一枚だつて與れるものは無かつた。

おたつはこの北支那の冬の日だといふのに誰れもが持つて居るような、風除けのマントも羽織も着ず、襟卷もせず、一張羅のベロベロ銘仙を着て身明きから肱をつつばつて、出して居るのが一層寒むさうに見えた。髮が風のためにみだれて三人の男の兒を產むと、反つ齒になるとさへいふほどだのに、死んだ子供を加へたら、十人も產んでお產のたびごとに一二本づゝ拔けた亂杭齒をくひしめて――だが實際、なりにもふりにも、かまつては居られ無いのだつた。

値ぎり倒して乘つて來た洋車（やんちよ）に、銅子兒（トンツル）五枚渡して、ヤレヤレとスプリングの毀はれた破れ椅子に、どつかりと腰をおろした。鼠色のうす穢（よご）れた毛布に、病み呆けて、靑ざめた八ツの忠造を包んで、病院から歸つて來たのだつた。

おたつは忠造をせんべい蒲團の上に寢かすと、ストーブをガチャガチャやりはじめた、まだ、ほとぼりの殘つて居る上へ、少しばかりの石炭を投げ込んだ。

厨房で．洗ひ物をして居たおきよがとんできて言つた。

『忠ちやんどうだつた、お藥與れた？』

兄弟思ひのおきよは、病院で藥を與れるかどうかを小さい心でいままで考へて居たのだつた。

『お藥與れはつた。院長はんもな、可愛さうや云ふてやはつた。お父つあん病院で酒呑んで騷（さ）はいで、ほかの患者さん迷惑するによつ



てに、ほん困るで、お前たち施療患者やで、ちとおとなしうしてもらはにや困ると、なんぼ云ふたかて、親父がきかんので、お前や病人にはエライ氣の毒やが、去んでもらはんとならん、そやさかいに、病人も診てやる、藥もやると、エライ親切に云ふてくりやはるのやし。」

『だけとお母ちやん、毎日行くのやつたら洋車錢も入るし、うち石炭も少いから忠ちやん可愛さうやね』

十五のおきよは、それが苦勞でならなかつた。

『昨日まで暖くい病院に居たもの急に寒い目したら、わるかないか?』

『石炭かて、まだ半噸はあるのやけど、わてらばかなら、まだ焚んとよろしいのやけど、――忠ちやんかてもう、石炭半頓だけの壽命しか無いのやろうから、あるだけどんどと焚いてやつて、もう無うなつたら、わてら凍え死んだかてかめへんとおもふのや。お父つァん酒ばか呑んで仕事もしやせんし、他所のお方のおかげでどうなりこうなり、わてら親子の命繫いで居のやし、やうやつと施療で入院させてもろうたら、お父つあん毎晩病院に來て酒呑んで騷ぐのやよつて、去ふにやならんしなァ――わてら病院に居れば、部屋は暖くいし、お風呂かて毎日入れてもらへるのやし、――皆からおたつあん、あんた、このごろエライ美しうなりやはつたと皆に言はれるのや、そや毎日お風呂に這入つて居りまつさと、いふほど結構なことやのに、何もかも、無茶なお父つァんのために、泣かんことありやせん』

おきよは、いつも、いつも母からの繰りごとは、聞き厭きて居るけれど、こんどこそは、父の無理解を憎まずには居られ無かつた。

忠造の結核性腹膜炎を手術から、入院までさせてもらつたのに、親父が毎晩病院に行つて、酒亂のやうに騷ぐので、日本人の患者の少ない病院なので、日本人の體面上斷はられるのはあたりまへだと父親が怨しかつた。そしてこの可哀さうな母親を慰めてやりたかつた。

『お母アちやん、私、病院に居てよう看護婦さんの仕事見習ふたんやわ、看護婦さんなつたら澤山月給もらへるのやから、私、看護婦さんになつて、お母アちやん樂させてあぎよう。」

『きよちやん、看護婦さんの勤務つらいといふことやぜ――散髮屋のうめちやんなァ、見習からほんまの看護婦さんに、やつとなりやはつて、お父つあん、嬉んでなはつたが、あないして死にやはつたやないか――いつも叔母あん酷らいぜ酷らいぜ、言ふてやつたないか、あんたかて、體弱いのやつてなア、あかんわなア』

『そんなら私、お裁縫よう習えて、牡丹亭の姐ちやん達の衣裳縫ふわ、そしたらお金儲かるやろなア』

ストーブが赤くなつた。忠造の顔にも血の色がさして來た。ドヤドヤと、チンコロのような子供達が、どこが眼だか、鼻だか、分ら無い顔をして歸つて來た。

父親の銀次郎は十五年前、おきよが產れないうちからこの土地へ來た。北支那一の牡丹亭といふ日本式料理店が出來て本式の建築をした。腕の良いのと、男振りが良いので身が持てない經師屋の二男の銀次郎は、勘當されて關西にごろついて居るうち、仲居あがりの

おたつと一緒になつて、お太陽樣と米の飯は何處にもあるとおたつをつれて支那三界までやつて來たのだ、江戸つ子の銀次郎から思へば、まつたく支那三界だ——唐、天笠だ——唐人の住む國だつた。

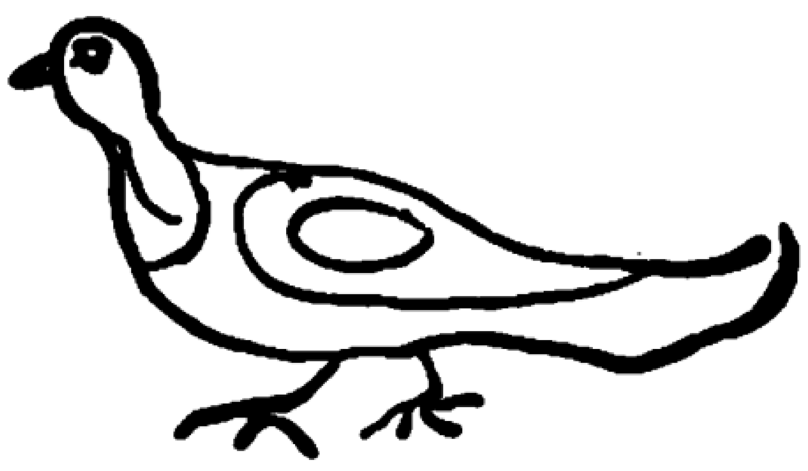
だがその時分は日本人の景氣はすばらしかつたので、料理店の景氣は大したものだつた。銀次郎の仕事も相當あつた、取るにまかせて使ひもした、女にも持てたが、そんな時はすぐに流れて不景氣はすぐに來た。

だんだん仕事が無くなるころから子供は增え出した。榮養不良で半分は死んだが、まだおきよを頭に五人ある。

ことに最近の深刻な不景氣さは、支那人の間ばかりではなく、官吏や銀行會社の人達は轉任する。見込みの無い商賣の人はサッサと引上げて仕舞ふ。殘つて居るものは、根を下ろした商人や、歸るにも歸られ無い、銀次郎一家のような連中ばかりだつた。

障子襖なんぞは破れたつて、煤ばつたつて、經師屋の手に懸けるやうた人は無いし、新らしい仕事のありよう筈はなかつた。

——親子七人がどうなつて行くことか、日本へ歸つたとて自分一人なら喰へるが、——歸るにしても女房子を連れて行く第一旅費さへ工面が附か無い。それに溜に溜た借金をどうしたら返せやう——



結局は親子七人野垂れ死だ——

考へろつたつて、考へやうがないと銀次郎は考へた。だから目ぼしい物を片つぱしから賣つて、朝から酒ばかり呑んでは暴れて居る。

邦人達には、すつかり愛憎をつかされてしまつた。

『お父つちやんお酒やめてね』とおきよけいふ。

『あんた、わて達、見殺しに仕なはるのか』とおたつは責め立てる。

『仕事がねえんだよ、稼ぎたくつても稼ぎようがねえぢやあねえか——』

それより銀次郎には言へないのだつた。彼が泥醉してブップッ言つてゐる時は、

——天下廻り持ちだぜ、めそめそしやあがんねえ、いまにお父つあんがうんと儲けて、良い衣裳買つてやらあ——え、こう見えたつて、江戸つ子だい——天下のお職人さまだい——こちとら、のめつて死たばつたつて、不正しい眞似は仕ねんだよ——なんでえ、紳士づらしやがつたつて、大臣がなんでえ、

銀ちやんも燒きが廻はつたぜ——チャンコロは笑はれねえや。米の飯だつて喰はねえなんて、情けねえこと言わねえ。——

だから銀次郎は酒亂になつた。

二

おたつの父親がやつて來た。

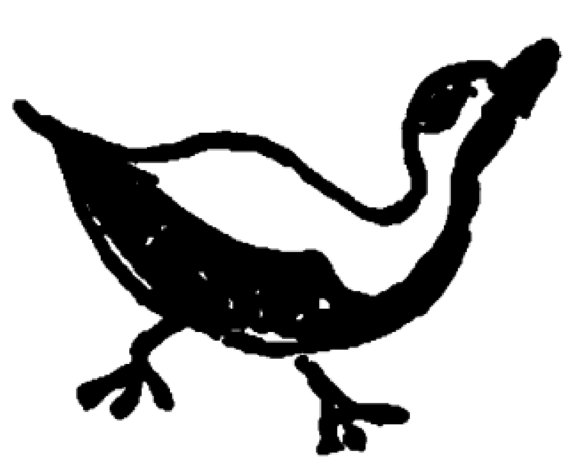
六十五になる、植木職の平藏爺さんは、もう十五年も別れて居る娘のおたつと、孫達の顏が見たく、金蓄めて支那へ行く、支那へ行くと、口癖のように言つて、好きな酒も吞まず、喰べるものもろくに喰べないで溜めた臍くりが百三十圓ばかりになつたので突然にやつて來たのだつた。都合に依つてはおたつに、死に水を取つてもらひたい大決心でやつて來たのだつた。

『お爺さん、どうして來たの』

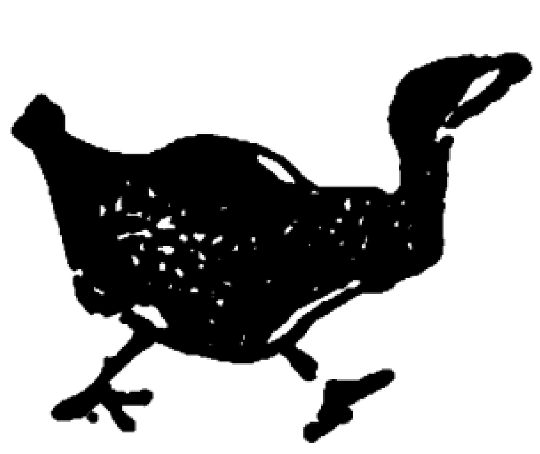
忠造や、忠造の兄の武雄と、六ッの新吉と、三ッの留吉とは、何處からこんな、見たことも無い、まつ黑な、皺くちやな、見馴れ無い手織木綿の日本服を着て、腰からナタ豆の煙管を出して、手の平

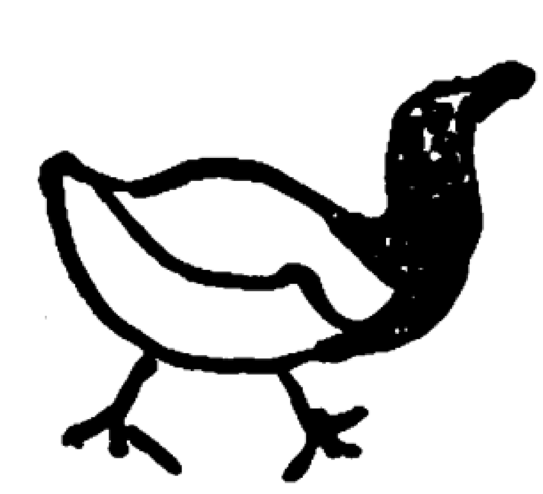


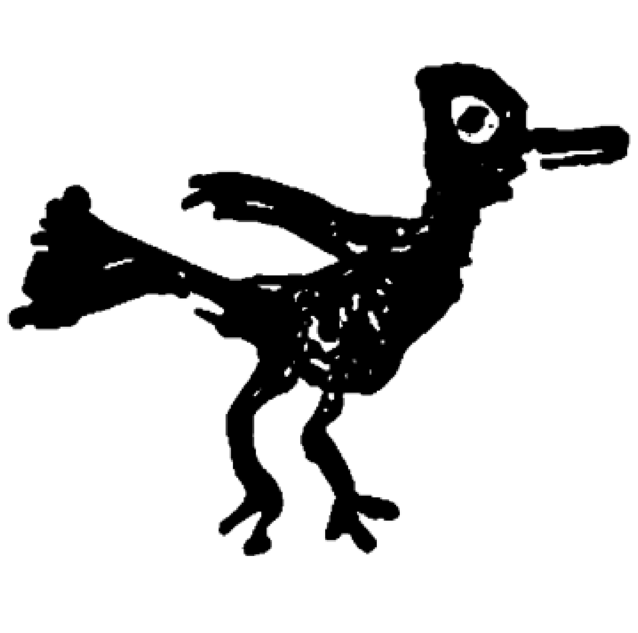
に、火玉を落して、スパスパ煙草を吸ふ、爺さんが來たのかと、不思議な眼で見て居た。
『おまへら、お爺さん知らんのやろ、お爺さんはなァ、お船に乘つて來たのやぜ』
悲しいことに子供達は、船も汽車も見たことが無かつた。
『お船つて、どんな船だい』
『海にあるやろ、あれに乘つて、海の上を來たのやがなァ』
『海つて、どんな所だい』
『そやろうな、此處に居つて、何處へも行かんさかいに、海も、船も、知らへんのやろーナ』
平藏爺さんは、立つ時神戸の新開地で買つて來た、安物の飛行船や汽車の玩具を取り出して、孫たちに與へたが、實物を見たことの無い子供達は、思つたほど喜ばず、いじくり廻してすぐにも毀して仕舞さうだつた。實際、少年雜誌の一册さへ、當てがはれたことも無い子供達だ。
平藏爺さんは、ハラハラして、勿體無さゝうな顏して見て居た。須磨や神戸あたりの子供達に引比べて、孫たちがなんとなく物足り無かつた。想像して居たのとは違つて、犬コロか、豚の兒見たいなものばかりなのに驚いた。そればかりで無く、この淺間しい、生活を見て、來るのでは無かつたと、後悔した。
まあ、自分の娘のおたつは、どうだろう、色は黑く、柄は頑丈だが、ちよつと小意氣な、氣がさな女だづたのが——婿の銀次郎も、粹せな男だつたのが——顏の色は惡るいし、ブクブクした、まつ黑の、木綿の支那服を着て、家といへば、天井や、壁紙は、お手の物だから張り替へればいいのに、雨浸みのまゝ、破れて、埃にすすげた窓の紙は、ビウビウ鳴つて居るし、破れ椅子の置いてあるところは、泥靴のまま出入するから、泥だらけで、植木一本も無い庭は、煉瓦がところどころ、抜けて土塀は、いまにも壓れさうになつて居る——
近所は、ガヤガヤ、ギヤァギヤァ、騷々しい支那の貧民窟なので、一種一樣な臭氣がしてゐる。平藏爺さんはぼんやりした。
俺は間違つた。見當違ひをしたと、平藏爺さんは心のなかでホロりとした。十五年も海外で働いて居るのだから、少しは小金も出來て、ボーイや職人の一人や二人は使つて、孫たちも洋服ぐらい着て、おたつも奥様のようになつて居るだろうと想像し、近所の人達にも自慢して來たのだつたが見知らぬ外國へまで來て、こんな生活をして居る——娘が可愛さうでたまら無い。折角、長い間樂しみにして働いて、孫の傍で樂しく暮さうと思つて居たのが、このありさまは——と眺めると、眼のまへがまつ暗になつた、
三日ばかりたつと、平藏爺は急にげつそりと弱つて仕舞つた。長い道中の勞れや、食物や住居の違つて居るのがこたへたとは言つてゐたが、めつきり弱つたのに氣がつくと自分にもこのまま此土地

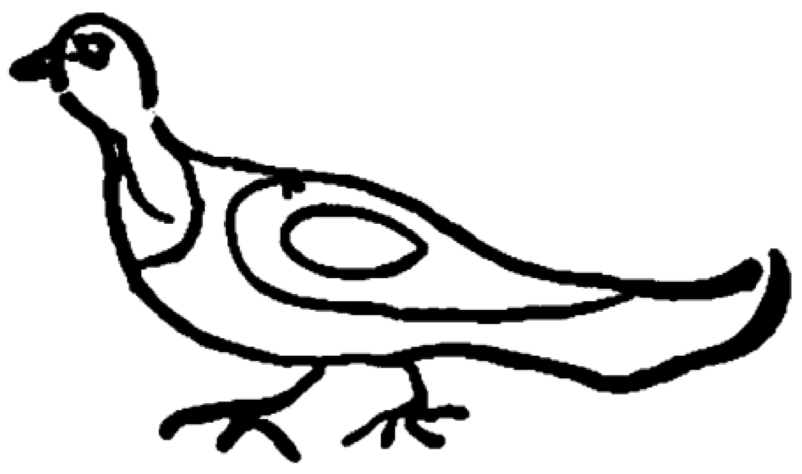












で、死んで仕舞やあしないかといふ不安が來た。死ぬなら、やつぱり日本へかへつて忰の傍で死にたいと思ふと、歸りたさに我慢が出來なくなつた。

おたつは、年寄りがたつた一人で、見知ら無い國までやつて來たのに、旨しいもの一つ食べさせることも出來ず、見物一つさせず、土産物も持たさず歸すことは、弟の嫁に對しても氣まりが惡るかつた。歸つてからも嫁の前に、肩身が狹くいじめられることだろうと思ふと、どうしても引止めて置きたかつた。

『お父つあん、あんたまア折角お出やしたのやから、この冬一杯居てお呉れやす、暖うなつたら、また何處ぞゆつくり見物にも、行けますやろ、銀さんかと、暮になつたら料理店はんや、お素人はんのとこかて、仕事もおますでしやろうから、お父つあんにもすこしは良い目も見せてあげられまつししやろ』

おたつは、氣安めに當てにもならないことを言つて引留めた。

『おまへは、そう言ふて呉れるけんど、俺が居ればそれだけ、餘計雜用もかかるしなア、この病人にも金がかかるのやし、孫の顏もよう見たで、まつと寒うならんうち歸つてまた働きまつさ、またすこしでも金が出來たら、この年やでもう二度と來ることは出來へんから、少しなと金送つてよこすよつてナ、お前たちも嫁はんようしてか――忠造はもうあかんのやろナア、』

『せつかく手術してもろたが、あとの養生がわて等の身分やで、行屆かんさかいにナア、この冬は持つまいといやはるのや。家にあるこの半頓の石炭焚くだけの命や、思ふとります。』

『じよう命やで、しよむないが、あとの兒達患ょさんように、氣いつけて息才にしてんか』

『お父つあんにもゑらい苦勞かけてすみまへんナア』

いままでにあんまり泣いて、泣いて、泣き盡して來たので、體中の水分が欠乏しつくしたが、皮膚も、髮の毛もガサガサして、どこもかも、乾ききつて、そんな時にも泪さへこぼれ無いおたつだつた。

銀次郎は銀次郎で、貧乏を見すかされたムカツ腹で。

『歸るといふ奴を、首根つ子へ細附けて、老爺を飼つて置く譯にも行くめえ――ぢやあまあ、お別れに、今夜一杯呑るかナア――お親父さあん、どうでえ、食ふ物な豚の尾つぽや、芋の頭で、チヤンコロの食ふような情けねえもんだが、こん夜は、一つお父つあんの送別會だお歷々樣方ア、倶樂部や、牡丹亭で、毎晩送別會だ、留別會だ、歡迎會だ、なんてやつてやがるけれど、こちとら、歡迎會だ、送別會だつていふ、味を知らねえんだ。今夜一つ盛んに、やろうじやあ、ねえか――』

また氣違ひが始まつたといふような表情をして、子供達は押默まつて壁の隅に固まつて居た。忠造は、眼ばかり大きく、髑骨のような顏をして、父親の顏ばかり見つめた。

おたつがおきよを相手に市場から何か買つて來て、コトコトとお爺さんの口に合ふようなものを、こしらへにかゝつた。

やがて足のグラグラする卓臺の上に、猪口だの、皿だの、箸だのが並べられた、白鶴の瓶も並んだ。子供達は燒餅を旨さうに啣つた。忠造も、どうせ助から無いのだからといつて、他の子供達と、同じように喰べさせた。

『お親父さあん、一つ行こう』

おたつが黒皮の破れた、埃だらけのボンボコ三味線を持ち出して來ると、銀次郎は良い機嫌に唄ひ出した。錆のある良い聲だ。おたつは三味線の手をとめてうつとりと聞き入つた。この男の爲なら、といふ時があつたのだ、手鍋提げてもと思つたのだ。此男を立てすごすといふ意地で一緒になつたのだ――

平藏爺さんが拔け殘りの齒をモグモグさせて、梅忠の道行を三味線でうたうと、黃色い、南京豆のやうなおたつの顏に、ボーッと、血の氣がさした。



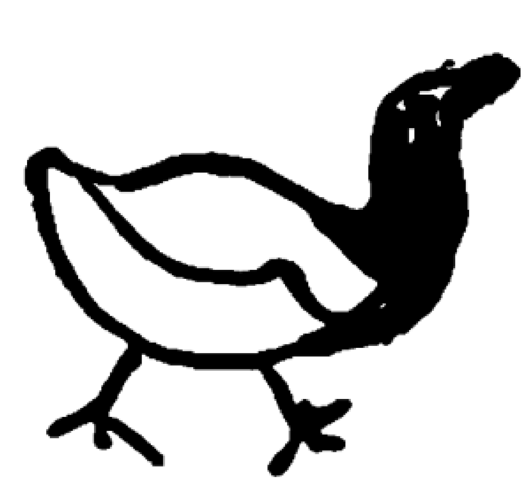
丁度船の都合がいいといふので平藏爺さんは汽車賃と船賃だけ持つて、殘りの五十圓をおたつに渡して歸つて行つた。何處も見物一つせず、土產物一つ持たず、市場で見た赤い繪の牡丹の描いてある洗臉盤がほしかつたのだが、それさへ買はずに止めた。おたつは末の三つになる男の兒を、十文字に背負て停車場まで見送つた。外套も着ない平藏爺さんは、孫のおきよが大急ぎで編んで吳れた毛糸の襟卷きを首にまいてコボコボ咳をした。つく呼吸も、凍るような、寒い北支那の朝だ。

支那の兵隊ばかり乘つて居る、鐵板の裝甲車のような三等車へ、言語の分ら無い、日本服を來た、小さな爺さんが乘つたので、みんな不思儀さうにたかつて見て居た。汽車が、動き出すと、おたつの眼からは堰を切つて落したように、一度に泪が溢れ出した。











讀者通信

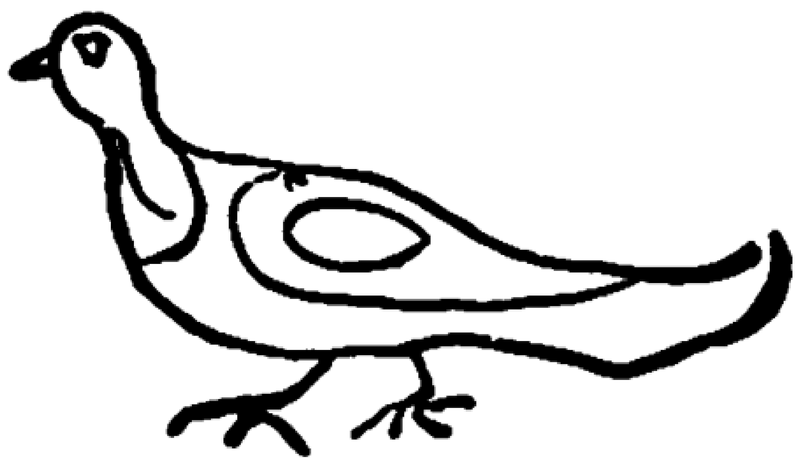
米子　京　芙美子

〝女人聯盟〟の發展また發展に、同志よ集れと町中馳け步きたい程同志の見つけだされないまちです。でも本屋へ行つたら一部しかなかつたのでよんでくれる人があるメたと喜こびました。男の方のよみ手が多いと店員の話です。聯盟の支部をあそこでもこゝでもと云ふ聲にただ羨ましく思つて居る現在、どうでも此の文化の低い山陰に聯盟支部の赤い花を咲かせてみせやうと友と誓ひました。何の知識もない忙しい〝そば屋〟の娘と生れて來て下さるお客樣から少しづつ社會的なことをきかされる樣になつて廣い社會と云ふものの問題が判つて來た私が〝女人藝術〟によつてみちびかれて行くことが出來て大變に嬉しく思つて居ます。女人大衆を――あの信州岡谷の爭議に母の家で働かれた高濱女史が、今は鄉里の此の町に歸つて婦人身の上相談所を開いて山十工場の女工さん達のために働いてをられます。無產者のために働かれるのにあはないかなり階級意識のない女史であると云ふことを、二ケ年間交つて來て知つた私は驚きました。たゞ左翼ファンにすぎない私ではありますが長年女工のため働いて來られた女史の指導をあまりこゝろよく思つて居ません。改良主義、おざなりの社會事業家の樣な感じですが、私から〝女人大衆〟を女工のよみ物として入れて下さいと願つてみます。

忙しいからだのひまに私は女史の所に出かけて工場の話などきくことをたのしみにして居ます。

村の小話二つ

池邊さま子



飴屋さん

東京の深夜を流してゆくあの支那うどんの笛は、感傷的でまた亡國的哀愁を含み、晝間置き去りにされた、途上の尖つた神經に反響して、どこまでも鋭くつゝ通つて聞ゆるけれど、同じこの笛の音を田舍で聞くとまるで、東京のそれとは反對な氣分を味はゝされる。

あの、鈍感な海綿のやうに吸收性に富んだ田舍の世界は、甘つたるい媚びた音で、そして、氣持ちのいゝほど四方に吸ひ込まれて行くのだ。

私は此の夏久し振り歸郷して、この支那うどんの笛の音を聞いて驚いた。こんな邊鄙なところまでも延長したものだ、と、然し聞いてみれば、これはうどんでなしに、朝鮮飴賣だそうだ。

震災後東京を追はれた彼等は別府溫泉を中心に、その脊中合はせにある、私の村にまで伸びてゐるのだ。

性急な都會の子供にはそうでないが、飴は不思議に田舍の子供には喜ばれる。竹の棒にくつつけた飴をしやぶりながら、おまけに貰つた日の丸の紙旗をバサ〳〵振つてゐる樣子は、しつくり似合つたものだ。

親達も初めは物珍らしさに、强請れるまゝに一錢二錢の錢を與へてゐたが、毎日そう續ける譯にはゆかない。

白く乾いた縣道を、飴賣りが通ると、子供達は、笛に釣られる伽噺の子供のやうに、何もかも放つぽり投げて出て行く。買へないことは分つてゐながらも。

「小父さん、くんな。」

「錢持つとるか。」

「錢はねえけんど。一本宛くんなよ。」

すつかり村の言葉を憶えた飴屋は二言三言子供に冗談言つてゐたが、フト子供の持つた小刀に笑ひかけた。

「坊、それ出しな、飴うんとやるよ。」

「ああ、」

子供が玩具にしてゐた小刀を渡すと、飴屋は三本の飴を握らして、ニコ〳〵笑つて行つた。





次の日には、子供は皆小刀を持ち出して飴を貰つた。

「小刀でなくてもいゝんだよ。金氣のもんなら何でもいゝんだ。」

飴屋はそう言つた。

それから子供達は家中を探し廻つて、腐つた釜やら破れた鍋やらを持ち出した。

屑屋といふものゝない村では、厄介物が片付いて結句いゝわと言つてゐたほどであつたが、そうした物とてすぐに盡きて了つて子供はまた淋しい顔して飴屋を見送つた。

古金買は損のゆかぬ商賣だ。すつかり甘い味を憶えた飴屋は

「古物ばつかりより、いゝものゝ方がうんと飴貰へるぞ。」とそゝのかしたものだ。

朝炊いた味噌汁の鍋がない。やれ釘一本さへ見つからない。なかにはお佛壇の花立てが、飴に化つてなめられた家さへあつた。

「あん畜生、朝鮮人の奴、」

と親達は躍氣になつて、飴屋を追つ拂つた。それからは、あの、甘つたるい笛の音が聞えぬやうになつた。親達が安心して畑の仕事に出かけた隙をみて、チョロ〱髭の飴屋は、ひん曲つた勝手口から頭だけ出して、

「おい竹ちやんよ、きい坊も居るのかい。」

と言つた調子で、依然として被害は止まないといふので、村の親達は駐在所に届けるやら大分市の警察署から嚴めしい巡査が出張して來るやら、飛んだ騒ぎが始つてゐたつけ。

おしんの問題

若後家のおしんは、婦人病の妻を持つた醫者に、腹を貸して生活してゐた。生れた男の子は一年育てゝ渡したが手切金が五百圓、それに月々卅圓宛の扶持がついてゐたといふ事だ。

金をかけて遊興たいものは別府に行くし、村の若衆ではせいぜい半襟か前掛代位で、稼ぎにはならない。

おしんは田舍には珍らしく色の白い鼻の尖つた女であつた。年寄つた母と、二人の子供とを控へてゐる彼女には、なか〱生活が樂でなかつた。

子供を渡したのを機會に、ブッツリ醫者との關係が斷れてからおしんは黴の生えた裁板を出してまた賃仕事を始めた。ところが、押し迫つた節期になつてうまい話が轉げ込んだといふので、村中の女連が騒ぎ立てたものだ。

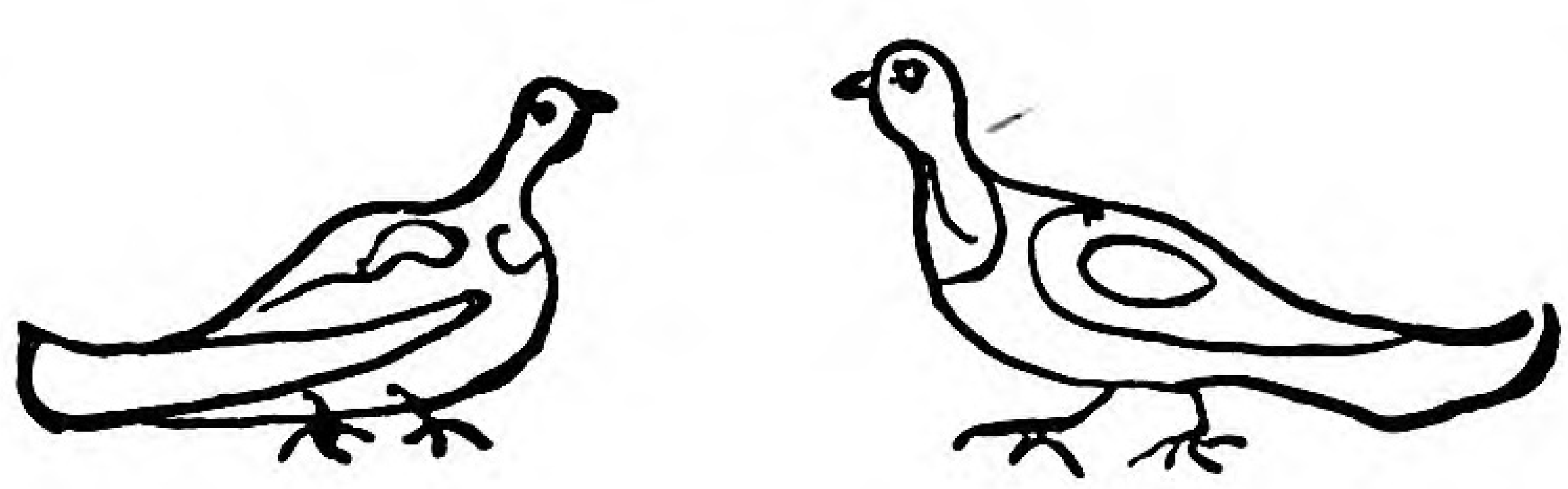
口がかりといふのは、××工場主の小間使ひといふ名義だが、腕さへあれば妾で暮らせるといふのだ。

「なあに、妾といふのは、世話人の口車に決つてゐるよ。あの大旦那がさ、まさか。」

「村でこそ、おしんで鳴つてゐやうが、明に出して見れる女ぢやねえ。」

「それに歳はもう三十だぜ。目の縁は小皺だらけさ。」

まさか、おしん風情が、此の地方での大旦那××工場主の妾にならうとは、ちと虫がよすぎる、それに彼には別府に母娘づれの美しい妾が圍つてあり、花柳界で大したもての男であるのだ。と皆思つた。



おしんの仕事といふのは、工場内にある、彼の休憩所で茶菓を運んだり掃除をしたりする位で、それでゐて月々五十圓の給金が貰へるといふのだ。

村の女達は女郎のやうなおしんの行爲を非難しながら、到底自分等の窺ひ知られない幸福が紙一重先きに光つてゐる彼女が嫉妬ましかつた。出來ようものなら、彼女の足を引張つて、矢張りあの薄暗い室に釘づけして賃仕事をさせておきたい位であつたらう。

だがおしんは、縞お召の半コートを引きかけて、村を飛びして行つた。

「着物が何だ、金がどうしたと言ふのだ。次き次ぎと貞操の安賣りをして行くおしんに、女の魂も何もあつたらんぢやねえ。」

「私達は従令一萬圓貰つても、女の生命は捨てない。」

「あんな奴、この村を追ひ出して了へば、氣が晴々することぢや。」

齒糞だらけの、齒肉を剝き出して村の女達はおしんの後姿に嘲笑を投げたのだ。

二三ケ月しておしんは俥で歸つてきた。その時は錦紗の揃ひに革のハンドバツクを抱へてゐた。彼女は、譯なく彼の妾の內容を證得したのだ。やがて工場の近くに一戸を貰つて、おさまつた。

それから三年經つた今年、歸郷してみると、おしんは村に小綺麗な家を作つて、老母と子供と安氣に暮してゐるのだ。聞けば、おしんは彼に病氣を感染させられて、勤めが出來なくなつてから、生活の保證を受けて村に歸つて來たさうだ。

三年前の、村の女達のあのおしんに對する羨望と嘲笑とのひん曲つた感情は、彼女の幸福が慌しく幻滅したことゝ再び立ち得ぬ病毒の刻印を捺されたことゝにすつかり棒引されて、今はおしんの事となると皆晴々した表情で話し合つてゐるのだ。

そして、取り引き人のない一萬圓の貞操の持主達は、おしんに媚びる事によつて、いくらか宛の小使錢の惠みを受けて滿足してゐる



讀者通信

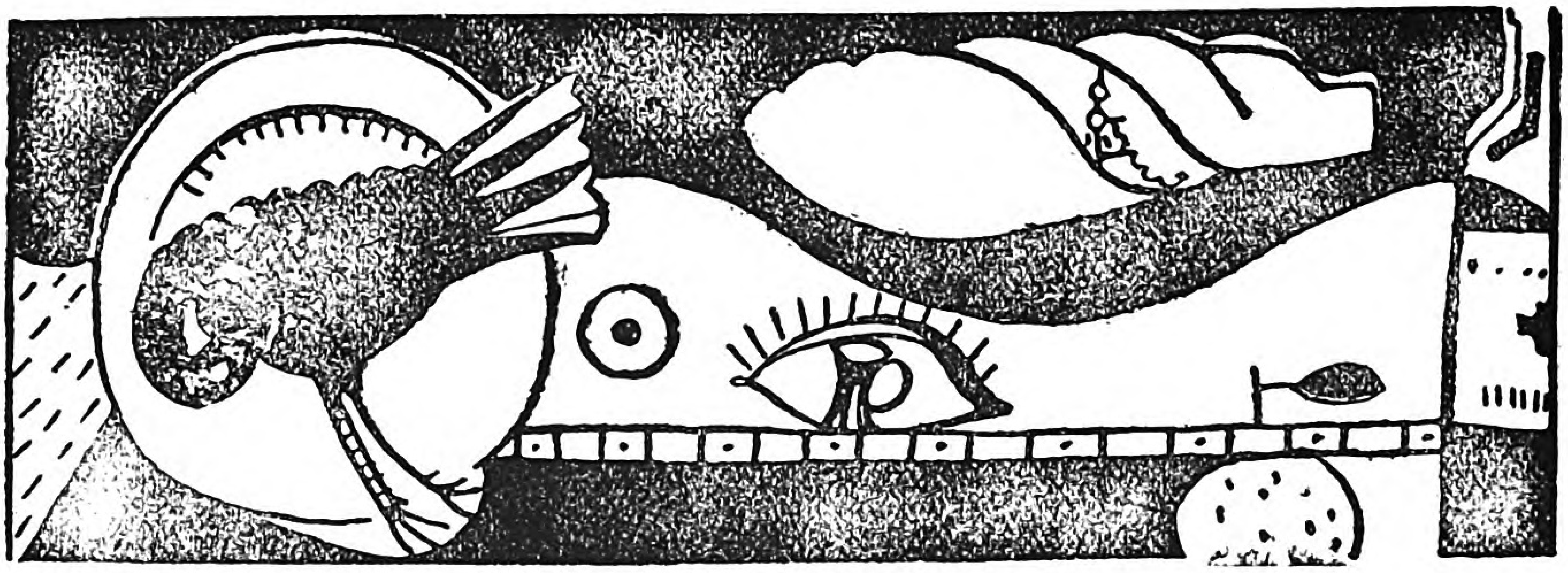
北海道　藤　ゆき子

北海道の本誌愛讀者の方へ!!

聯盟員の一人として多大の期待を持つて古郷の北海道の地を踏んだ私は、いざ立たんとして同志の少ない事に失望した。廣い大地に散在する諸姉よ、炬火をもつ私も一人です。都市の方々の努力を望む、一人でも讀者の方は加盟して下すつて、北海道支部の旗上げをしたいと思ひます。

山　口　ある現役士官

妻の讀んでゐる女人藝術を時々拾ひ讀みする、自分のやつてゐる仕事に比べて、何と餘りにも違つた恒星上の出來事の樣であり、又女人達であらう。褒めていゝのか、けなしていゝのか自分には解らない。然し日本の家の主婦達が一人殘らず女人藝術の讀者になつたら何だか日本の國には今までと違つたこれからが齎きかへられる樣になるのではあるまいか。



侘しき近代風景

五十鈴川淑子

魂も身もルンペンとなりしよと切なく笑みてうつむける人。

こゝも又暴壓激し革改遠しと支那を歎きて便りする彼。

プチブルと吾をののしる人ありき我がプチ、ブルは顧みもせで。

自らをアパッシュとする若人の人道をとく瞳悲しき

和田津枝

貧乏は悲しきものぞ古本さへ買われず歩む夜店の町を

歌集さへ買はれずなりて數ヶ月切ぬき等を出してしたしむ

燒まんぢゆうの味も覺えて今宵また五錢白銅にぎりてぞ行く

如何にせばよきやと思ふに不覺にも涙落しぬ電車の中に



目標を消す

—放浪記—

林芙美子

十一月×日

浮世離れて奥山ずまい・・・

ヒゾクな唄にかこまれて、私は毎月玩具のセルロイドの色塗り。日給七拾五錢也の女工さんになつて四ヶ月、私が色塗りした蝶々のお垂げ止めは、懷かしいスブニールとなつて、今頃はどこへ散亂して行つた事だらう——。

日暮里の金杉から來てゐるお千代さんは、お父つあんが寄席の三味線ひきで妹弟六人の裏家住ひ、「私とお父つあんとで働かなきやあ、食へないんですもの・・・。」お千代さんは蒼白い顏をかしげて、佗しそうに赤い繪具をベタベタ蝶々に塗つてゐる。

こゝは、女工が二十人、男工が十五人の小さなセルロイド工場、鉛のやうに生氣のない女工さんの手から、キユウピーがおどけて出たり、夜店物のお垂げ止めや、前帶芯や、樣々な下層階級相手の粗製品が、毎日毎日私達の手から洪水の如く流れて行く。

朝の七時から、夕方の五時まで、私達の周圍は、ゆでイカのやうな色をしたセルロイドの蝶々や、キユウピーでいつぱいだ。

文字通り護謨臭ひ、それ等の製品に埋れて仕事が濟むまで、めつたに首をあげて、窓も見られない狀態だ。

事務所の會計の妻君が、私達の疲れたところを見計らつては、皮肉に油をさしに來る。

「急いでくれなくちや困るよ。」

フンお前も私達と同じ女工上りぢやないか、「俺達や機械ぢやねえんだよつ。」發送部の男達が、その女が來ると、舌を出して笑ひあつた。

五時になると、二十分は私達の努力のおまけだ、日給袋のはいつた箱が廻つて來ると、私達はしばらくは、激しい爭奪戰を開始して、自分の日給袋を見つけ出す。

襷を掛けたまゝ工場の門を出ると、お千代さんが、後から追つて來た。

「あんた、今日市場の方へ寄らないの、私今晩のおかずを買つて行くの……。」

一皿八錢の秋刀魚は、その青く光つた油と一緒に、私とお千代さんの兩手にかゝえられて、サンゼンと生臭ひ匂ひを二人の胃袋に通はせた。

「この道を歩いてゐる時だけ、あんた、樂しいと思つた事ない。」

「本當にね、私ホッとするわ。」

「あゝあんたは一人だからうらやましいわ。」

お千代さんの束ねた髮に、白く埃がつもつてゐるのを見ると、街の華やかな、一切のものに火をつけてやりたいやうなコオフンを感じる。

十一月×日

なぜ？

なぜ？

私達はいつまでもこんな馬鹿な生き方をしなければならないのか！いつまでたつても、セルロイドの唄、セルロイドの匂ひ、セルロイドの生活だ。

朝も晩も、ベタベタ三原色を塗りたくつて、地虫のやうに、太陽から隔離されて、歪んだ工場の中で、コッコッ無限に長い時間を青春と健康を搾取されてゐる、あの若い女達のプロフイルを見てゐると、ジンと悲しくなる。

だが待つて下さい。

私達のつくつてゐる、キユウピーや、蝶々のお垂げ止めは、貧しい子供達の頭をお祭のやうにかざる事を思へば、少し少しあの窓の下では、笑んでもいゝだらう――。

二疊の部屋には、土釜や茶碗や、ボール箱の米櫃や、行李や、机が、まるで一生の私の負債のやうにがんばつて、なゝめにひいた蒲團の上に、天窓の朝日がキラキラして、ワンワン埃が縞のやうになつて流れて來る。

いつたい革命とは、どこを吹いてゐる風なんだ……中々うまい言葉を澤山知つてゐる。日本のインテリゲンチヤ、日本の社會主義者は、お伽噺を空想してゐるのか！

あの生れたての、玄米パンよりもホヤホヤの赤ん坊達に、絹のむつきと、木綿のむつきと一たいどれ丈の差をつけなければならないのだ！

「お芙美さん！今日は工場休みかい！」

叔母さんが障子を叩きながら呶鳴つてゐる。

「やかましいね！沈默つてろ！」

私は舌打ちすると、妙に重々しい頭の下に兩手を入れて、今さら重大な事を考へたけど、涙がふりちぎつて出るばかり。

お母さんのたより一通。

たとへ五拾錢でもいゝから送つてくれ、私はレウマチで困つてゐる、此家にお前とお父さんが早く歸つて來るのを、樂しみに待つてゐる、お父さんの方も思はしくないと云ふたよりだし、お前のくらし向きも思ふ程でないと聞くと、生きてゐるのが辛い。

たどたどしいカナ文字の手紙、最後に上様ハハよりと書いてあるのを見ると、お母さんを手で叩きたい程可愛くなる。

「どつか體でも惡いのですか。」

此仕立屋に同じ間借りをしてゐる、印刷工の松田さんが、遠慮なく障子を開けてはいつて來る。
脊丈けが十五六の子供のやうに、ひくゝて、髪を肩まで長くして、私の一等厭なところをおし氣もなく持つてゐる男だつた。
天井を向いて考へてゐた私は、クルリと脊をむけると蒲團を被つてしまつた。
此人は有難い程深切者である。
だが會つてゐると、憂鬱なほど不快になつて來る人だ。
「大丈夫なんですか！」
「えゝ體の節々が痛いんです。」
店の間では、商賣物の菜つ葉服を叔父さんが縫つてゐるらしい、ジ……と齒を嚙むやうなミシンの音がする。

「六拾圓もあれば、二人で結構暮せると思ふんです。貴女の冷い心が淋しすぎる。」
枕元に石のやうに座つた、此小さい男は、沓のやうに暗い顏を伏せて私の上にかぶさつて來る。
激しい男の息づかいを感じると、私は涙が霧のやうにあふれて來た。
今まで、こんなに優さしい言葉を掛けて私を慰さめてくれた男があつただらうか、皆々私を働かせて煙のやうに捨てゝしまつたではないか。
此人と一緒になつて、小さな長屋にでも住つて、世帶を持とうか、でもあんまり淋しすぎる。十分も顏を合はせてゐたら、胸がムカムカして來る此小さな男。

「濟みませんが、私體具合が惡るいんです、ものを言ふのが、おつくうですの、あつちい行つてゝ下さい。」
「當分工場を休んで下さい。その間の事は僕がします。たとへ貴女が僕と一緒になつてくれなくつても、僕はいゝ氣持ちなんです。」
まあ何てチグハグな世の中であらう――。

夜。
米を一升買ひに出る。
序手に風呂敷をさげたまゝ逢初橋の夜店を歩く。
剪花屋、ロシヤパン、ドラ燒屋、魚の干物屋、野菜屋、古本屋、久々で見る樂しい路上風景だ。

十二月×日
ヘエ！街はクリスマスでござんすとよ。
救世軍の慈善鍋も飾り窓の七面鳥も、ブルジョワ新聞も、一勢に街に氾濫して、ビラも廣告旗も血まなこになつてしまふ。
暮れだ、急行列車だ。
あの窓の風があんなに動いてゐる。能律を上げなくてはと、汚れた壁のボールドには、二十人の女工の色塗りの仕上げ高が、毎日毎日數字になつて、まるで天氣豫報みたいに、私達をおびやかすやうになつた。
規定の三百五十の仕上げが不足の時は、五錢引き、拾錢引きと、日給袋にぴらぴらケープのやうな傳標が張られて來る。

「厭んなつちやうね…。」

女工はまるで、サヽラのやうに腰を浮かせて、御製作だ。

同じ繪描きでも、これは又あまりにコツケイな、ドミエの漫畫ではないか。

「まるで人間を芥だと思つてやがる。」

五時の時計が鳴つても、仕事はドンドン運ばれて來るし、日給袋は中々廻りそうもない。

工場主の小さな子供達を連れて、會計の妻君が、四時頃自動車で出掛けて行つたのを、一番小さいお光ちやんが、便所の窓から見てゐて、女工達に報告すると、芝居だつて云つたり、活動だつて云つたり。正月の着物でも買ひに行つたのだらうと言つたり、手を働らかせながら、女工達の間にはまちまちの論議が噴出した。

七時半。

朝から晩まで働いて、六拾錢の勞働の代償、土釜を七輪に掛けて、机の上に茶碗と箸を並べると、つくづく人生とはこんなものかと思つた。

ごたごた文句を言つてゐる奴等の横ッ面をひつぱたいてやりたい。

御飯の煮える間に、お母さんへの手紙の中に長い事して貯めた桃色の五拾錢札五枚入れて封をする。

殘金十六錢也。

たつた今、何と何がなかつたら樂しいだらうと空想して來ると、五圓の間代が馬鹿らしくなつた。二疊で五圓である。

一日働いて米が二升きれて平均六拾錢、又前のやうにカフェーに逆もどりしやうか、あまたゝび、水をくゞつて、私と一緒に疲れきつた壁の銘仙の着物を見てゐると、味氣なくなる。

ハイハイ私は、お芙美さんは、ルンペンプロレタリヤで御座候だ。何もない。

何も御座無く候だ。

あぶないぞ！あぶないぞ！あぶない無精者故、バクレツダンを持たしたら、喜んで持たせた奴等にぶち投げるだらう。

こんな女が、一人うぢうぢ生きてゐるより早くパンパンと、××を眞二ッにしてしまおうか。

熱い飯の上に、昨夜の秋刀魚を伏兵線にして、ムシヤリ頰ばると生きてゐる事もまんざらではない。

澤庵を買つた古新聞に、北海道にはまだ何萬町部と云ふ荒地があると書いてある。あゝそお云ふ未開の地にプロレタリヤの、ユウトウピヤが出來たら愉快だらうな。

鳩ぽつぽ鳩ぽつぽと云ふ唄が出來るかも知れないな。

皆で仲よく飛んでこいつて云ふ唄が流行るかも知れないな。

湯から歸へりしな、暗い路地で松田さんに會ふ、私は沈默つて通り拔けた。

十二月×日

「何も變な風に義理立てしないで、松田さんが、折角借して上げると云ふのに、お芙美さんも借りたらいゝぢやないの、實さい私の

家は、あんた達の間代を當にしてゐるんですから。」
髪の薄い叔母さんの顔を見てゐると、おん出てしまいたい程、くやしくなる。

これが出掛けの戰爭だ。急いで根津の通りへ出ると、松田さんが、酒屋のポストの傍で、ハガキを入れながら私を待つてゐた。

ニコニコして本當に好人物なのに、私はムカムカしてしまふ。

「何も云はないで借りて下さい。僕はあげてもいゝんですが、貴女がこだわると困るから……。」

塵紙にこまかく包んだ金を私の帶の間にはさもうとした、私は肩上げのとつてない昔の羽織を氣にしながら、妙にてれくさくなつてふりほどいて電車に乘つてしまつた。

どこへ行く當てもない。

正反對の電車に乘つてしまつた私は、白々とした上野にしよんぼり自分の影をふんで降りた。

どうしやう。

狂人じみた口入れ屋の高い廣告燈が、難破船の信號みたやうに、ハタハタしてゐた。

「お望みは……。」

牛太郎のやうな番頭に、まづ私はかたづを呑んで、商品のやうな求人のビラを見上げた。

「辛い事をやるのも一生、樂な事をやるのも一生、姉さん良く考へた方がいゝですよ。」

肩掛もしてゐない。此みすぼらしい女に、番頭は目を細めて値ぶみを始めたのか、ジロジロ私の上下に目を流してゐる。

下谷の壽司屋の女中さんに紹介をたのむと、壹圓の手數料を五拾錢にまけてもらつて、公園に行く。

今にも雪の降つて來そうな空模樣なのに、ベンチの浮浪人達は、朗らかな鼾聲をあげて眠つてゐる。

西鄕さんの銅像も浪人戰爭の遺物。

「貴方と私は同じ鄕里なんですよ。鹿兒島が戀しいとお思ひになりませんか、霧島山が櫻島が、城山が、熱いお茶にカルカンの甘味い頃ですね。

貴方も私も寒そうだ。

貴方も私も貧乏だ。

晝から工場に出る。生きるは辛し。

十二月×日

昨夜机の引き出しに入れてあつた、松田さんの心づくし、拂へばいゝんだ借りておこうかな、弱き者汝の名は貧乏なり。

家にかへる時間となるを
ただ一つ待つことにして
今日も働けり。

啄木はこんなに樂しそうに家にかへる事を歌つてゐる、私は工場から歸へると棒のやうにつゝぱつた足を二疊いつぱいに延ばして、大きなアクビをする、それがたつた一つの樂しさだ。

二寸ばかりのキュウピーを一ッごまかして、茶碗をのせる棚に、のせて見る。

私の描いた瞳、私の描いた羽根、私が生んだキユウピイさん、冷飯に味噌汁をザクザクかけて、かき込む淋しい夜食。

松田さんが、妙に大きいセキをしながら窓の下を通ると、臺所からはいつて、聲をかける。

「もう御飯ですか、少し待つてゐらつしやい肉を買つて來たんですよ。」

松田さんも同じ自炊生活、仲々しまつた人らしい。

石油コンロで、ジ…と肉を煮る匂ひが、切なく口を濡す。

「濟みませんが此葱切つてくれませんか、」

昨夜、無斷で人の部屋の机の引き出しを開けて、金包みを入れておいたくせに、そうして、たつた拾圓ばかりの金を借して、もう馴々しく、人に葱を刻ませやうとしてゐる。

あんな人間に圖々しくされると一番たまらない。

遠くで餅をつく勇ましい音が聞える。

私は沈默つてボリボリ大根の鹽漬を嚙んでゐたが、臺所の方も侘しそうに、コツコツ葱を刻み出した。

「あゝ刻んであげませう。」

沈默つてゐるにはしのびない悲しさで、障子を開けて、松田さんの鉋丁を取つた。

「昨夜はありがとう、五圓叔母さんに拂つて、五圓殘つてますから、五圓お返ししときますわ。」

松田さんは沈默つて竹の皮から滴るやうに紅い肉片を取つて鍋に入れてゐた。ふと見上げた歪んだ松田さんの顏に、小さい涙が一滴光つてゐた。

奥では弄花が始つたのか、叔母さんの、いつものヒステリー聲がビンビン天井をつき拔けて行く。

松田さんは沈默つたまゝ米を磨ぎ出した。

「アラ、御飯まだ焚かなかつたんですか。」

「えゝ貴女が御飯を食べてゐらつしたから、肉を早く上げやうと思つて。」

洋食皿に割けてもらつた肉が、どんな思ひで私の食道を通つたか。

私は色んな人の姿を思ひ浮べた。

そしてみんなくだらなく思へた。

松田さんと結婚してもいゝと思へた、始めて松田さんの部屋へ遊びに行く。

松田さんは、新聞紙をひろげて、ゴソゴソさせながら、お正月の餅をそろへて笊へ入れてゐた。

あんなにも、なごやかにくづれてゐた氣持ちが、又前よりもさらに凄くキリヽッと弓をはつて、私はそつと部屋へ歸つた。

「壽司屋もつまらないし……」

外は嵐。

キユウピーよ、早く鳩ポッポだ。

吹き荒さめ、吹き荒さめ、嵐よ吹雪よ。

――何だかあんまり長くなりましたので、これで一寸ひとやすみしませう。氣分が新らしくなりましたら、又續けます。長谷川氏及び愛讀者諸氏の好意を謝します。筆者――



長流記（その十六）

山田邦子

江木氏が代々木を去つたのはお慶さんと佐千子の友情のもつれが彼を苦しくさせたのは事實だけれど、彼が考へた程江木氏一人を中にした競爭心理から爭つた二人では實はなかつたのである。導火線に火をつけて煽りたてたのは江木氏だつたけれど、實は二人の心の底にある――合ふ處もあるが合はぬ處もある女心の合はぬ部分がさうした空氣にふれて自分ながら驚く程急に勢づいて頭をもたげた毒の花であつた。たとへば梅雨期に思ひがけなく床下の朽木などに勢を得てムクムクとはえだす悪菌のやうなものでもあつたのである。空が晴れて空氣が清まつてくる時期が來れば又健康な花も鳥も育つてゆくいろいろな原子を含む心の世界の、或る時の現象に外ならぬものであつた。と佐千子は後に思つた。

然し佐千子はその當時には江木氏の代々木を去つてしまふ事がひどく殘念な寂しい事に思へた。心を傾けて信頼したものに深く執する佐千子の性格から來るつらい苦しみでもあつた。……もう時雨のくる頃でわびしい雨が音もなく降る日であつた。荷物の片付いた頃と思つて佐千子はお別れのお茶を飲むのに急ごしらへの喫いものを持つていつもするやうに江木氏の家の庭から小さい書齋をのぞいた……とガラス障子越しに、江木氏はもうくゝつてある大きな荷物に寄りかゝつてマントをはをつて寂しさうに雨を眺めてそして佐千子の姿を見ると江木氏はいそいで障子をあけて出て來た。

「お別れのお茶を飲まうと思つて喫い物をこしらへて來ましたの」

さう言つて佐千子は湯氣のあがる小鉢を江木氏の前に出した……と江木氏の瞳は急に涙に曇つて

「僕はやつぱり貴女を愛してゐる」

さう言つた江木氏の態度にはやはり眞實の感激があつた。勿論此の「愛してゐる」の意味は戀愛の愛の氣持で出した言葉ではなかつたのだしその意味で受取つた佐千子でもなかつた。……特にその頃は江木氏の佐千子に對する友情に動きが來てゐた事は佐千子に何となく感受されてゐた、そしてさうなつていつた心の經過も佐千子は領かれる氣持がないではなかつた。然しかういふ處の江木氏の眞情や

感動は後で考へても佐千子には僞とは思へなかつた。

江木氏が愛人の梅子さんと結婚するについて病院に拂はなければならない纒まつたお金の相談に田舍の家に歸つたのはそれから一ヶ月程も後の事であつた。曇つた朝だつた、佐千子は少しおくれさうになつた時間をいそいで上野の驛にはゐつてみるともう人々はぞろぞろとプラットホームに流れこんでゐた。江木氏が汽車の窓から顔を出してお慶さんと梅子さんがその下に立つてゐた。江木氏は着ながしの木綿袷に小さい荷物一つといふ旅裝であつた。……佐千子はおそくなつた言ひ譯を言つて窓に立つたけれど何となくそこらの空氣が佐千子を壓して來た。それはたゞに佐千子がおくれて來たといふ理由ばかりでなしに、お慶さんと江木氏と梅子さんとの間におそらくは最近に、一氣につながり合ふ機會があつて佐千子を押しのけてしまつた……かやうに感受されてくるものであつた。

然しかういふ氣運は此時初めて動いたものではなかつた、二ヶ月程前に江木氏が半月程田舍の家に歸つた頃から江木氏と川端氏との家がだんだんと親しみを回復して來て、さうなつてくれば兩家は佐千子の家よりも以前からの友人であるし江木氏は川端氏の家では夫婦の友人であるから、そして共に藝術家であるから兩家に自然な融和の生じるのは當然であつた。江木氏が郷里から歸つて佐千子の家に尋ねて來た時

「外へ寄らずにこゝへ來たんですよ」

と言つて名物の細かい豆のお菓子を佐千子の前においた。佐千子は勿論よろこんで今夜は自分の家でごはんを食べて行くやうにすゝめたりした。江木氏が田舍で養子の口があつたなどゝ嬉しがつて話してゐる處へひよくりとお慶さんが顔を出して、

「さあ、又あとで此度は私の方へ佐千子さんも來てみんなで話しませうよ、兎に角もうお夕飯が出來たから……」

とお慶さんは當然のやうに誘つた。江木氏の顔はみるみる赤くなつてデリケートな困惑におちた樣子であつた、佐千子はわざと何も氣がつかないやうに、

「さう、それならお慶さんの處でお夕飯をなさいよ、私もあとから行きますわ」

さう言つて二人を玄關に送り出したところで佐千子は心で笑つて言つた。……「江木さん、私にそんな心づかひは必要のない事なのに、私をさういふ風に解するその貴方の解しかたが今日の妙な結果を生み出してゐる事なのに——お慶さんの處へ先きに寄つてお夕飯の約束をして來たとてそれをそのまゝ言つてくれゝば私は明るくそれが領かれるのに、どこにも寄らずになんて……私をさう解するのが私には困る事なのです。……さう佐千子は心で言つて微苦笑をして二人を見送つた。

然しそれも深くせんじつめてみると一がいに江木氏が二人の女性を引はなさうとたくんでやつた事ではなくて、江木氏といふ男は、二人以上の女性との交渉は、ともすればさういふ風にしてしまふ性格なのかもしれない、卽ちどちらにも自分を深く映さうとする、言ひかへればそれらの女性は自分に特に深く親しまうとするだらうと思ふ心の、惡く言へばデリケートな感情が相手をいたはつてさういふ形をとらずにはゐられない性質なのであつたかもしれない、と後年佐千子は解釋した。

兎に角さういふ樣でいつとなくお慶さんと江木氏との間が陰につ

ながりが深くなつていつた處から江木氏は代々木を引あげてゆく事にもなつたらうし、その時佐千子がお別れのお茶を持つて行つた時「僕はやつぱり貴女を愛してゐる」と「やつぱり」といふ告白的批判にも似た言葉が出たのである事もだん〳〵佐千子に頷けてきた。上野の驛は丁度その關係の分水嶺であつた。お慶さんは梅子さんの姑のやうにふるまつてゐた。江木氏はしらけてくる空氣を感ずるかして

「梅ちやんも僕の留守には時折お慶さんや佐千子さんの處へよせて頂くといゝ」

とお慶さんを見、佐千子を見梅子さんを見て言つた。梅子さんの無邪氣な可愛らしい笑顔が佐千子の方を向いて會釋をした、佐千子は和いだ心持をおぼえた。

汽車が動きだした時お慶さんは深く〳〵江木氏を見た、その瞳が何かを語つてゐた――一瞬にそれを見た佐千子は自分の感受のあやまらなかつた事を明かに悟つた。江木氏とお慶さん梅子さんの三人はいつの間にか手をとつてゐたのだ…「さよなら、私は後を追ひません」佐千子の心は一時に輕くなつた、そしてはしやぎ笑ひが我にもなく顔に浮んだ、…何の故ともしらず恐れがすぎ去り不安が通りこしてしまつた。遠くなつてゆく汽車の窓にのり出してゐる江木氏に向つて佐千子は近い頃映畫で見た女優のやうに指を口にあて、笑つた。…「もう貴方も恐れては居ません、妹などゝいふやうな眞心も靴下のやうな心もすぎました、戀愛はもとよりない貴方です、さよなら…」

その後のお慶さんと佐千子の交友は表面は至極平和であつた。お慶さんの家では以前江木氏の居た小さい家に引移つて來て一そう佐千子の家と近くなつたので相變らず行き來もするし散歩にも出るしお湯にも一緒に行く…然し互の心の底のいやなものを見たり見せたりした後のしらけた氣持の流れ去るにはまだ日が淺すぎた。

江木氏が郷里でお金の相談をまとめて歸つて來ると、以前お慶さん達の居た初臺の丘へ新しい家を持ち梅子さんとの新生活を始める豫定がたつた。その家へは佐千子もお慶さんと手傳に行つて一緒に水を汲んだり庭を掃いたりした。表面は何事もないやうだつたが神經質な江木氏には、ぐつと離れてしまつた佐千子の心はいち早く響いてゐる事が又佐千子に響きかへしてゐた。

梅子さんが××病院の寄宿の行李をまとめて斷然お慶さんの家に待つてゐる江木氏の處へかけこんで來た夜は佐千子もお慶さんの家に居て一緒にお茶をのみ話をした…むづかしい其病院ではさう言ふ方法でまづ自身をそこからぬけ出しておいて責任額のお金を拂ふ方法をとるより仕方がないといふ事であつた。…九時が門限の時間であつた、その九時の時計を聞いた時にはさすがに梅子さんの顔はサッと不安の曇りがかゝつた、江木氏は

「あゝこれで完全に梅子を奪つてしまつた」

さう言つて凱歌をあげた。川端氏もお慶さんも佐千子も二人の前途を祝つた。間もなく江木氏は新妻の梅子さんをつれて古い臺ランプをお慶さんに借りて電燈のまだ來てゐない丘の家に夜の道を歸つていつた。

年が明けてお正月になつた、新家庭を持つてからも江木氏は佐千子に英語を教へてゐた、輕少でも收入のたしになるからでもあつ

た。佐千子は一週に二度づゝ丘の家に、古い英語の本を持つて通つた。もうサッカレーのマリーアンセルはあげてしまつてその頃はテニソンの詩を讀んでゐた。

お正月には梅子さんは小さい皿の上に豆や數の子やなますを盛つて恥しさうに佐千子の前に置いた、すべてはお慶さんのさしづで作つたお料理といふ事が一目明らかであつた、高野どうふのきざみやうまでそれはお慶さんの家とそつくりな少し味のまづいこしらへかたであつた。お慶さんが梅子さんの姉であり姑である樣子はすべて行き渡つてゐた。もう佐千子はそんな事に氣を散らさずに、勉強、勉強たゞその氣持で通つてゐた。

松の內もすんでしまつた或る夜めづらしく由井氏が早くから家に歸つてゐて、例によつて別に話もなしさりとて少しもじつとして居られない癖の由井氏は、

「オイ、川端さんへ行つて見やう」

と佐千子を誘ふた、そして二人は連れだつて近いお慶さんの家の玄關に立つた。なかにはお客樣があるらしく見えた。

「お客樣?」

由井氏は聲をかけて樣子をうかゞつた。

「まあおめづらしい、由井さんよ・・・・どうぞ」

お慶さんは吃驚した樣に出て來たがめづらしい由井氏の訪問は川端氏をもおどろかした、來客と思つたのは江木氏の夫妻であつた。

「ヤア・・・・おめづらしいですな」

「ヤア・・・・しばらく」

二人は同じ樣にヤアと聲をかけたが由井氏のヤアは川端氏のそれにくらべてたしかに大はしやぎのかけ聲であつた。由井氏は他人との交際は、はしやいでしやれのめして笑はせて笑つてにぎやかにしないではおかないやうな癖をもつてゐた、こんな事が江木氏にはひどく不眞面目に映つた。・・・・今までまじめに藝術を論じてゐた室の空氣が一度にさはがしく宴會の席のやうになつてしまつたので江木氏は不快な表情をかくせなかつた。その夜由井氏のはしやぎやうも少しあくどかつた、そのあくどさは江木氏のその表情にあたるもので止めて止まるべきものではない意地の强い由井氏の表情もかくせなかつた。

「さてどういふ形でそこまで進まうかな・・・・まづ三津五郎の身ぶりで行かう・・・・」

さう言ふ冗談を言つて由井氏は炬燵の方へすり膝で進んだりした。笑ひは高く室のなかにみちた、お慶さんは氣をきかして、此由井氏を一人加へた時には花がるたかトランプでないとみんな同じ心持で面白く遊ぶ事は出來ないと思ひこんでゐるので大いそぎでトランプを持ちだした。

「サア、トランプしませうか」

お慶さんもはしやいでそこへ札を投げ出した

「僕はしらないから・・・・」

かう言つて江木氏は橫になつた、困つた空氣があらはになりさうであつた、・・・・今夜の江木はいやに强くなつてゐるなと由井氏はフンと心で冷笑つた。

「何んでもないじやありませんか、かうしてかうして・・・・すぐわかるじやありませんか・・・・」

梅子さんは見かねて聲をはげますやうにその場を取つくろつた。

「僕はほんとに知らないんだ」

睦しい此夫婦の間に一寸爭ひめいた言葉がかはされた、梅子さんは一も二もなく閉口してしまつた。…江木氏をぬいた人數で二三回勝負をするとあつさり由井氏は切りあげた。
「お茶をいれませう」
お慶さんは立つて臺所でお茶の仕度をし梅子さんがそれを運んで來た。
「此サンドウヰッチは私がこしらへたのだけれども肉のはゐつたのはないかもしれないわ、クリームばかりの樣よ」
さう言つてみんなにそれを分けた、肉のサンドウヰッチがたゞ一つあつてそれが佐千子にあたつた。その時江木氏は起きてゐた。
「僕は肉のサンドウヰッチがほしいな」
と佐千子の方を一寸見てほしい表情をして笑つた。以前の佐千子ならば一も二もなくそれを江木氏に讓るのだけれど、佐千子は笑つたゞけでそのまゝにしておいた、そんな細かい處にもその頃のそのグループの空氣の變化が現はれてゐた。
お茶がすんで歸つて來た由井氏は家へ着くとすぐに佐千子に言つた
「失敬な奴だ、もうお前は江木となんかつきあふ必要はないぞ」
「それはわかつてよ、でも此まゝしらん顔するのはこつちが大人氣ないわ、きれいにしませう、…英語の本を持つて明日行つてみる…」
その翌月は丁度英語の日に當つてゐた。
　佐千子は重い心をはげまして初臺の坂をのぼつていつた、土手の熊笹に雪が殘つてゐて寒い風がサラ〳〵と吹いてゐた。…行くまいか…佐千子は幾度も坂で立ち止まつた、然しあらはに口論した譯ではなしそれつきりもう來なくなつた、となつてはあんなつまらぬ喧嘩を買つた樣にもなり卑怯にも思はれて、又兎にも角にも仲よくして來た友人と喧嘩わかれになるのもいやだといふ感情もあつて、佐千子は重い足を無理に運んで行つた。右の手にわざと英語の本の包みを持つてゐた。
　玄關の格子をあけると、ハッとした顔色をして梅子さんが出て來た、ア、そうか…と佐千子は悟つた…兎に角上へあがつて江木氏に逢つた、前夜の話には互に少しもふれないで、忙しくなるからといふ江木氏の說にすぐに佐千子は贊成して後を濁さないやうにきれいにそこをいとまごひをして出た。それが佐千子と江木氏の交友の最後であつた。それから一年程して江木氏の書いた自叙傳風の長篇小說が世に出た。それは多くの世間人の好奇心と一種の感激をそゝるに充分なものであつた。人道主義の藝術家が看護婦を妻にまで救ひ上げる戀愛、そのなかに出沒する堅實な女流作家と放縱な女詩人それがみんなその藝術家を中心に崇拜して葛藤を生じるのであるから華やかにおもしろい、更に感じさせられる事に主人公の愛人である看護婦は曾て人に犯された事のある事實を正直に書いてあるのだから世俗の感激は深かつたのである。たゞ困つた事には放縱な美しい女詩人のモデルに持ち出された佐千子は自分の不用意の時に不意に唇を觸れられたのがその女詩人が進んで見せなくてもいゝ愛のしるしを示しその藝術家はそれを避けなかつたといふ樣に丸きり事實と反對に書かれてあつたり——勿論佐千子の斷りの手紙などの事は書かれてない——佐千子の前に涙を流して「やつぱり僕は貴女を愛してゐる」…と感激した方面はやめて佐千子を妖女の如く誇大にして書きつらねられてある事でそれが犯されたる愛人の告白の正直さによつてその小說をすべて事實とされてしまつた事であつ

た。それが爲佐千子の受けた迷惑はどれ程であつたか分らない。佐千子はそのまゝ思ひ切つて辯駁を書かうとしたが先方は何と言つても小說であつた。事實と混同して言へない處があるにちがひない事になる。折を待て時を待て、そして勉强せよと周圍に止められた。

佐千子はやる心を靜めて時を待つた。五年程の年月がすぎてからの或る日佐千子は一人お湯からの歸りを板垣に添つた寂しい小路を歩んでゐた、冬菜賣の車が佐千子の前をコト／＼坂をのぼつていつた‥‥と向ふから來る男が車とすれちがつてはつきり佐千子の目にうつつた。‥‥

「江木だ‥‥

佐千子の心は一時に湧いた、言はうか言ふまいか、と思つてゐるうちに二人は小路をすれ違つてしまつた‥‥と佐千子はふり返つた。

「江木さんでしたね」

「あ！‥‥

目鏡がキラリと光つて先方も歩みを止めてふりかへつた。

「私は少し貴方におきゝしたい事がありますけれど」

江木氏は一寸時計を出して見た、

「時間のかゝる事でせうか、僕今日はこれから矢部君(哲學者)に逢ふ約束があるんだが‥‥三十分位ですむ事なら‥‥」

「さあ‥‥三十分ではすみません、少しこみ入つた事ですから、では又の機會にしませう」

「では明日たづねませう」

「エヽどうぞ」

それで二人は別れた、家に歸つて考へた佐千子は多血質で興奮しやすい自分が江木氏に會つて、はたして思ふ處が靜かに述べられるかどうかを危ぶんだ、そして手紙にする方が安全だと思つて氣をおちつけて考へ／＼長い手紙を書いた。

江木氏から來た返事によるとあの女詩人のモデルは勿論佐千子だけれどあんな風にモデルによるといふ事は全く堪えられないくらゐは自分にもわかつてゐた。然し自分は貴女と對してゐると知らず知らず自分の惡い方面が呼び出されて來るのを覺えたので誇張して貴女に魔女の役目をさせたのだと云ふのであつた。そしてその女詩人のモデルは大方の人が佐千子と氣のつく人はなくて女詩人Hかとも言ひA女史かとも聞く人がある程で自分はせめてそれを喜んでゐると書いてあつた。口を觸れたのは如何にも自分が先きだけれど貴女の態度がそれを願つてゐるやうだつたから貴女の事にしたのだと書いてあつた。すべては小說としての効果をはかる間になされた事で卑劣な心から事實をまげて自分にのみ都合のよい事を書いたのではないと强調してあつた。自分は無良心に貴女を私人的な惡意で非難しやうとは露程も考へなかつた、と書いてあつた。‥‥然し佐千子は彼の小說がその女詩人に對して藝術品としての境をこえてかげの人物に肉迫して罵詈讒謗してゐる事を思はないでは居られなかつた‥‥佐千子の記憶のなかには、曾て友情の續いてゐた頃江木氏に送つた佐千子の著書が絕交してから後古本屋にさらされてゐて、表紙の裏に江木恭様佐千子と寄贈の文字が書いたなりで賣られてゐるのを見つけて來てくれた友人があつて、その時佐千子は曾て江木氏が一時崇拜して出入した三木鈴吉氏の贈つたいろいろの著書を、その頃もう三木氏に對する熱がさめて氏を憎んでゐた最中でお慶さんと佐千子の前で「こんな本は賣つてしまふ、わざと寄贈の文字を消さずに賣つてやる！」と豪語した事を思ひ出して江木氏のその手

紙の、小說的効果をのみ考へ藝術家として單にモデルに取扱つてあるので私的の非難をするやうな卑劣な心持は露程もないとりきんでゐるのも當にならないと思つた。佐千子の强情も幾年たつてもなほらないものであつたが江木氏の自負心も何年たつても鼻につくいやさがあつた……然しすべては人間の淺ましさだ、江木氏も佐千子もお慶さんも、それぞれ厭なものを持つてゐる、そしてそれぞれの心持で良きものを願ふ良い處をも持つてゐるのだ。各自が力說する自分の良いものはやはり事實その人々の持つてゐるもの――尠くも持つを望んでゐるもので、又各自が他を非難するものは各自非難されたものにその片影のある事をも互に肯定すべきである、(佐千子一人には止まらない)……と佐千子は後年考へるやうになつた。

お慶さんとの交渉は江木氏と絕交した後も一年近く續いてゐたがもう取りたてゝ言ふ程の親しみはなかつた、お慶さんは益々人道主義に進まんとし、佐千子は呑氣に自分の步みを步んだ、佐千子はどうひいき目に見てもお慶さんの人道主義に感心出來なかつた、むしろ捨て去つた自然主義小說にお慶さんらしい面目が眞にあると思つた……。かういう樣で互に手紙で暫く別れた事を言ひ合つて消息を絕つた。

二年の後佐千子が大病で起てなくなつた頃お慶さんも胸の病氣が重つて鄕里の病院に入院してゐる事を風のたよりにきいた。佐千子は手紙を出さうかと思つたけれど、重い病に苦しめられてゐる劳れは一朝一夕で書きつくせないその後の佐千子の氣持を手紙にまとめて絕えて久しき消息を親しい心でお慶さんに出す力がなかつた。

佐千子の病氣が一年餘りかゝつて漸く快方に向つた頃お慶さんの訃が報ぜられた。佐千子はそそかな悲しい心で仲の良かつた頃お慶さんと二人でうつした寫眞をかざつて香をたいた。佐千子はその後幾度もお慶さんの夢を見る。

「私をわかつてくれた？」

さう言つてお慶さんをゆすつて泣いた夢もそのなかにはあつた。

――(長流記。お慶さんの卷終り)

歌集「山麓」を評す

今井邦子

歌集「山麓」は山村避地の一農民が其生活をあくまで究きつめ、其還境を眞率に寫生した歌集として特色の深いものである、其立脚點は素朴その表現は誠實、特に近代の動盪はげしき歌壇に一つの力强い地方藝術を世に問ふの感がある。

著者結城哀草果氏は雜誌アララギの古い同人で、山形縣藏王山の麓の村に農事にいそしみつゝも書を讀み歌を作つて倦む事を知らない純朴な農民である。「山麓」は氏の處女歌集で集められた歌は大正三年から昭和二年に至る間の七百八十餘首であるがその特色は開卷第一頁に於て既に讀者の目をひくのである。

雪掃きに穿く藁靴をあたためて雪を掃かんと思ひたちをり

寒行の法螺貝ひびく吾はふと米搗く足を

休めけるかも
あるものは夜綱を綯ふがつらしとて夜學會へと通ひたるなり

技巧上から言へば未だ幼稚で内容も深くはない、外の事件に動かさるゝまゝに心持を並べてゐるにすぎないけれど、歌をはじめて間もない人の示した作として伸びゆく未來の充分に見られる素朴な生活を邪念なく他意なく歌にしてゐる態度に寸毫の浮脹がない。

著者の生活は田打ち代搔き水引莚織蠶飼といふ様に四季の移りにつれて忙しい勞農の生活を繰りかへしてゐるが、作る歌は自から年々に目が詰んで秀作を出してゐるのは敬服の至りである。

ひた赤し落ちて行く日はひた赤し代搔き馬は首ふりすすむ（大正三年）
代搔きて水濁る田に風吹けばかりんの花は白く散りけり（大正五年）
代搔きて泡だちにける田の水はにごりしままにゆふべしづめる（大正十五年）

水引の歌

今夜こそ水盜まむと忍び來しはるけきかもよ山燒くる火は（大正四年）
被り來る莚の上に露霜の降ると告げなば妹は嘆かむ（大正七年）
曉のつめたき露の田の畦に莚を被り咳ぶきにけり（大正十五年）
水引くとわがたもとほる小田道に螢火ふえて夏たけにけり（大正十五年）

代搔きの歌大正三年の分は何か強いものを欲する青年の心に活き〳〵と響く歌であらう、下句は特におもしろい、然し此歌はまだ多く他の影響を受けてゐる、まだ本來の哀草果の歌とは言へない處に居るのである。大正五年になれば外面的の影響が去つて實相について克明に寫生しやうとする自家の心が動いゐる、進んで大正十五年の作は深く技巧を内にこめて味ひ深い歌ひぶりで、泡だちにけると言ひ「濁りしまゝに」といひよく表現し得てゐると思ふ。水引の歌にしても初めは外部的に動いてゐるが大正七年から十年十五年となると實に沁々と深い味になつてくる、「莚をかぶり咳きにけり」「螢火ふえて夏たけにけり」など、特に言外にこもる寂しさが深く、立派な歌境に入り得てゐると思ふ。

此の集には又農村の素朴な風物を叙しそのユウモアを巧みにうたつたものも散見出來る。

外套のまま爐に足のべて遠慮なくパリカン實は寐ころびにけり
演習を見に來し娘等にわが言を聽いてくれよと騎兵は言ふも

氏の歌の成長史を見ると萬葉調に立脚して其師齋藤茂吉氏の影響を大きく受け猶先輩の良き影響を受けて巧みに消化し得てゐる、古くは良寛に心醉したあとも見える。

氏は最近、刺戟の少ない山村に居ては生活が單調で從つて歌境も狹く自分は苦しんでゐるといふ様に言はれた、それは一面事實でもあらうが氏の歌が近年その苦しんでゐる心から著しく内面的に深い味をもち折にふれては心して新なる歌境を開からうと努力してゐる事がわかつて更に感深いのである。純眞な氏の心に現時代のさま〴〵な波は如何に働きかけるか、眞面目な氏の今後の歌境こそ期待される處である。秀歌と思ふ一部をあげる。

ひむがしの高山脈の雪雲のかたまる日こそ春は寒けれ
この雨に病みつつ思ふ父母の刈る田の稻は伏しみだるらむ
いささかの桑の木蔭に日を除けて胡瓜をかじる吾とわが妻
睦みつつ妻と二人が拾ふ田の落穗をぬらす時雨さむしも
尊さよ稻の葉先におのづから水玉のぼり日は暮れにけり
師のなげきはわれのなげきと思へよと故郷の妻に手紙書きにけり
秋雨の降りつぐ宵は妻として竈のへやに火をまもりつゝ
遠くより笛吹くごとき音たてて吾妻颪は雪を持ちくる

女人藝術各地講演會記錄

女人藝術文藝・思想大講演會

――朝日講堂にて――

十月十八日午後四時少しすぎ、ヂリ〳〵…入口はもう人が一杯よ、困つちやつたわ切符がないんですもの、あたし泣き相なの、早く切符を持つて來て……小池さんの宇頂天な泣き聲が電話口で吹鳴つてゐる。それは大變々々前景氣大いによろし、とばかり急に皆慌て出して魚やさんのやうに威勢よく朝日講堂へ馳けつける。

正服の警官がぞく〳〵とやつて來る。はてな前日ビラ撒きでおなじみになつた故かと思つたらどうして入口にづらりと並んで入場者の身體檢査、おかげで入口係りは殺倒する入場者の整理がついて大助かり。

平塚明子氏や富本一枝氏の顏も見える。秋田雨雀氏も髪の眞白な童顏をニコ〳〵させてゐる。やがて控室の方も會場に負けず賑かになる。

滿員客止め！　定刻の六時を十五分程遲れて開會。時雨社長さんの御挨拶が劈頭で何もかも云つて下さる筈なので、私は單に進行係りの順序として、最先きに壇上から頭を一つ下げたら、後上りになつた會場一杯、正面からぶつかつて來る人々の顏々々、目々々。聽衆の緊張がピンとひゞいて來る。

社長さん登壇、出られない講演者の斷りと巧妙な野次封じで「一言」を結ぶ。楚々と細い社長さんが、きつぱりと野次に應酬して野次止めの實地手本を示す。

辻山春子氏、新進の劇作家辻山さんはつい先日九州から上京された許りで、「演劇の起源」について話され。

中島幸子氏は「婦人の社會的地位」を語る。臨官のおじさんの目が時々ぴかり〳〵。

さゝきふさ氏は、瀟洒な黒服と、柔かい聲とウヰットに富んだ講演とで聽衆を魅了する。

社長さんの野次封じが效を奏したとみえ、拍手の外場内は非常に靜しゆくだ。

林芙美子氏「浮浪人の言葉」

神近市子氏「この頃の感想」

會場では幾度か拍手が起り、幾度か聽衆の鋭い間投詞が飛んで來るらしいが、私は控室との間を舞臺裏を行つたり來たりする事約二十回。じつと講演を聞いてゐることが出來ない。折角この盛會を記念したいと寫眞を頼めば、警察官が一人でも寫つてはいけない、といふ。聽衆の中に隨所に交つてゐる正服が寫らないやうにはどうしても寫せない、と寫眞やさんは泣き顏をする。幾度交渉してみても頑として聞き入れないので殘念だが仕方がない、講演者だけを、それも側にゐる臨官の姿が入らないやうに寫すだけに止める。

入口の方では入れない入場者が何とかして與れと頑張つてゐて、喧嘩になり相だといふ。扉の所には張番がゐて、いけない！と至極あつさりいひ切る。やうやく立ち去らないでゐる二十人許り入れる事になると又身體檢査、四十近い勞働者が三寸ばかりの細鈎を腰にさしてゐる。横濱から仕事の歸りがけだといつてもどうしても聞き入れない。あづかりませうかと、氣

の毒になつていはうと思つてゐると、ぽいと無雜作に入口の暗い隅に放り込んで、これならよからうと云つて入つて行つたのはとても嬉しかつた。貴婦人が寶石で光つた手提げを、あまり光り過るからと注意されたら、あれと同じにするだらうか、と私は一寸呑氣な事を考へて見る

中河幹子氏「戀愛學校の計畫」

今井邦子氏「萬葉集の朗詠」

織本貞代氏、府下龜戸町で勞働女塾を經營する氏は女工さんの生活について順々と訴へる。話が正に高調に達せんとするや中止。おそくなつて、前日ビラ撒きで今日の準備のおくれた戸田さんが息きつて馳せつける。平林さんの姿も見えない。入口からやられてしまつたのぢやあるまい等と心配になる。

中本たか子氏「世界の獨占形成及びその諸問題」大きな問題を短時間に語らうとする中本氏は、落付いて一語々々力を入れる。

望月百合子氏「ダイナミックについて」

戸田豐子氏「反戰運動と文學」準備の充分に出來なかつたらしい、戸田氏は語る可きものを持ちながらお氣の毒だつた。

最後に生田花世氏が「絶叫と實行」なる題下に聽衆を存分に笑はせて今夜の講演會の最後を結ぶ。講演者及び女人藝術一同に代つてこの盛會を深く感謝して私は壇上から最も丁寧に頭を下げた。この素晴らしい女人講演會が人々の心に投げ與へた暗示の渦巻きが結果するものを私たちは樂しんで待たう。（素子）

大阪聯盟支部の發會講演會

――大阪實業會館にて――

大阪驛へすべりこんだ列車の窓から、明るい灯火を背負つた新妻さんの姿が見える。ひどい人混みの中で、高く擧げた手が私達を招いてゐる。私達――望月、林、八木の三人は東京からコスモスの枯れかかつた花束を持つて、下りると忽ち、出迎への聯盟員の皆様の包圍の中だ。けさ東京驛の出立には中島幸子さんが果物をうんと抱へて、わざわざ見送つて下さつたし、名古屋驛では聯盟員の親しい人達の顔が――ここでは初めて見る皆さんのつつましい、然し隔てない樂しい交歡だ。

灯と自働車と、人間の海ともいひたい驛前へ出ると蕭雨がつめたく頬にあたる。「とにかく、お茶でも飲みながらの相談にしませう」といふわけで、阪急ビルの食堂へ上る。さつきから綠川さんの姿の見えないのが不思議でならなかつたら、一番背の高い洋裝がさうだつたのでびつくり、松村喬子さんも大元氣である。

女人藝術大阪聯盟支部の發會講演會はあすの晩だ、そして大へんな前景氣だとの事で體中が熱くなる。皆さんの大方は職業婦人で連日のめざましい活動だときく。とにかく四人の宿は一切新妻さんにお任せする事にして芦屋のお宅へ行く。十月十一日、午後十時――。

電車は坦々とした、灯のつゞく阪神國道を走る。松林に瀟洒な家の並ぶ別荘地だ。お宅はなかなか凝つた茶人風の構へ、林さんしきりに感に入つて出窓の工夫や違棚を子細に見入つてゐる。入浴相談、灘の生一本の口あたりで林さん陶然の境に入らうとするが、しかし明後日のラヂオ放送の原稿をつくるので、なかなか陶然どころではない。新妻氏夫妻の温いおもてなしに午前二時すぎまでお話して、二階の寢室に上つてからみんなは熱心にペンを運ぶ。何しろ放送局から出された題が「新戀愛自殺の批判に對する感想」といふ時代錯誤的なややこしい問題なので、まゐつてしまふ。

十月十二日、講演會は今晩だ。松村さんと八木とは熱い珈琲とパンをうのみにして阪急で大阪へ向ふ、新池田町の停留場で下車すると綠川さんのお宅は

直ぐだ。階下には聯盟員の皆さんが準備の相談中、階上へあがつて、綠川さんの御良人、高瀨氏と初對面の御挨拶、高瀨氏の勞は大きなものだつた。先づ、松村さんは皆さんとの共同準備のために殘つて頂き、綠川さんと八木とは大阪放送局へ、放送局の人は私達の短い梗概のかきぬきに一わたり眼を通して、遞信局とうち合せた結果、題が少し不穩當だから、「戀愛が死に至らしめる場合の再批判」と變更して欲しいと氣の毒さうにいふ。

むしろ中味が不穩當だつたのぢやないかな?

ふたりは更に今晩の會場の願書の事で警察へ。會場へ來て見ると、まだ立札がたつてゐないので、その事を賴んだり、神戸支部の高橋鈴子さんと八木とはポスターを抱へて、信濃橋から本町通りを貼つて步く。前垂がけの兄さんが不思議さうに立どまつて見入つてゐるのも大阪らしい風景だ。街路樹の篠懸が、夕陽のコンクリートの道へはらはら散る。

會場――内本町の實業會館へは、大田洋子さん、京都支部の川崎とみ子さん、神戸の枝川さん達がぞく〱集つてをられる。午後六時半、會場はすでに滿員だとの報でそろ〱地下室から上つてゆく。お定まりの和服も前列に畏つてゐる。傍聽席は婦人が六分。

湧きたつ拍手に迎へられて綠川さんの開會の辭。プログラムの進行係が神戸の枝川さん、辯士の紹介者は大田洋子さんがなつて下さる。綠川さんの經過報告のあとには、京都の川崎とみ子さんが立つて各地聯盟支部からの祝電朗讀、祝辭及び感想を高橋鈴子さん、講演なんて始めてゞすのよと頰を赧らめてゐらつしやる。望月さんの講演の次ぎが松村さん、林さん、八木、そして最後を新妻さん。そのあとで、折から來阪中の片岡鐵兵氏が飛入りで演壇に立つて下さつた。大阪支部の發會講演會は稀に見る盛會に終つた。お骨折下さつた聯盟員のみなさん中でも大澤環さん安宅端子さんや雨森篤子さんにさへお禮をいふ餘裕もなく匆々お別れしたのは、本當にすまないと思ふ。綠川さんや高瀨氏の努力に對しては、たゞ深謝する。(秋子)

山梨勤勞婦人協會講演會

――女人聯盟贊助――

甲府市に今度「山梨勤勞婦人協會」といふ女工さん達の團體ができた。會長は深田けさ子女史で、現在、芳澤製絲工場、矢島第三工場、丸茂製絲、朝日製絲、近藤製絲、矢島製絲工場、その他の女工さん達二百名を組織してゐる。組合的な色彩など全然ない、一種の修養團體である、と會長の深田さんは言つてをられる。しかし何事にもカムフラージュの必要な時代だ。表面的な一片の宣言などよりも我々は、同團體今後の活動に括目することが必要だと思ふ。

×

十月二十日、同協會の發會式には中本たか子氏を講演者として、望月百合子氏と私は聽講者といふ形式で、「女人聯盟」東京本部から派遣される事になつた。

「何事ぞ花見る人の長刀式?――勞働組合の發會式と思つたのか警官多數臨監の物々しい警戒禪に」と山梨日々が書いてゐる通り、會場の朝日館には金ピカのお巡りさん、角袖のおぢさん達が多勢頑張つてゐた。そのうへ、この日の主要なプログラムとして期待された各工場の女工さん達の「意見發表」が工場主たちの干渉によつて俄かにさし止められて了つたことだ。

「あんな處へ出てしやべつた者はみんな馘きつて了ふから!」と脅かされてきたことを一人の女工さんが口惜しさうに語つてゐた。或る工場の寄宿舍ではこの晩の外出を全然禁じて了つた。細井和喜藏氏の「女工哀史」

にも書かれてゐない様な具體的な不平不満が女工さんたちの口から訴へられることを工場主等は恐れてゐるのだ。彼女等が女らしい見方や感じ方で、工場や寄宿舎で、口惜しかつた事、悲しかつた事、あんまりだと思つた事、もつとどうにかならないものかしらと思つた事などを語り出したら、その話が具體的で生きて血がついてるだけに、きつと聴衆を感動させるにちがひないことを彼等は恐れたのだ。

そのうち、二人の女工さんが、「祝辭」といふ形式に合法性をかりて、やつと壇上に立つ事が出來た。坂本きみよさんは言ふ、

「私はストライキの應援や農民運動をやつたために工場を出されましたが、そのために今だに彼等の迫害を受けてをります。私が今度入つた工場へも警察の方が見えて、私の様な者を使つてゐては今にまたストライキでもやり出すと不可ないからと、親切に忠告して呉れた相です」

×

望月百合子氏の場慣れた流暢な挨拶の次に中本氏が壇上に立つた。氏はインテリゲンチャ、——プチブルとしての自分の悩みを卒直に打ち明け、まじめな謙遜な轉換によつて、東京の女工さんたちに同志として迎へられる様になつた昨今の立場を語り、それから、世界の政治的經濟的情勢についてごく嚙み砕いた説明を試み、女工さん達の頭に新しい感激を植ゑつけた。

×

最後にこの種の會合が今後もしば〱行はれる様に、それから、工場に、農村に、街頭に目覺めつつあるプロレタリアの婦人と、新しい知識階級の婦人が眞の有機的結合を行ふための契機としてもつと〱「女人聯盟」を利用し活用されんことを希望して筆を擱く。（戸田豊子）

名古屋女人聯盟會記

名古屋では女人聯盟の小會が十月九日の夜名古屋城前の松藤閣樓上で開かれた。出席者は、當名古屋女人聯盟支部長の荻岡ちさ子氏、矢田津世子氏、藤原靜子氏、眞井美代子氏、眞井壽子氏、なほ新しく女人聯盟員たらんとする伊藤雪子氏といふもまじりて、他に都會詩人社の男性十數氏大に語り、大に笑ひ、まことに樂しい會であつた。荻岡ちさ子氏は詩人、矢田津世子氏には小説の方へと志して、この頃ずつと勉強中の人である。

荻岡氏の詩は今月の『詩佳人』にのつてゐる。非常に感激にみちた調子で書きもし語りもする行動キビキビしてる婦人で、新愛知文藝部の西尾光仙氏夫人である。矢田津世子氏とともにこもども語るには、この名古屋には文藝を解しない人が多くて大分やりにくいんですけれども、私たちは急がず、さわがず、一歩一歩地歩を確實にふみしめて數會へとゆく、よりも質において優秀なる名古屋女人聯盟支部を作り上げたいと思つてるんです。そして、いつかは、東京より、諸先生の御出でをねがつての名古屋文藝大會を夢みてゐるんです云々。」

ドイツへ行つてゐたと自己紹介の眞非氏の姉さんの方は、會たけなはなる時、ドイツの民謠をうたひ、さてそのうちにつけくわへて私は只今のところ戀愛はありませんがといはれる。なか〱戀愛なんかで、ヒヨロヒヨロし相な婦人とは見えず、妹さんの方は柔道をしてゐるとかいつて、その斷髮巨軀、赤ら顔生き〱としてゐて勇ましい。モダーン近江のお余といつた風な所がある。藤原氏、伊藤氏は、この中でもうマダム級の人である。しつとりとしてゐて、理解も廣い。名古屋の目ざめたる女人の大團結の出來る日にはこの二人の人の盡力にも大に俟たなくてはなるまいとおもはれた。

翌日、私は、名古屋城を見にいつた。そして、大阪女人聯盟の會へとゆく、八木、望月、林、松村の四氏を停車場に送迎し得なかつたのは何とも殘念であつた。（花世記）

秋期講演の要約

昨今なか〱有產階級的婦人團體の活動が盛です。大阪に於ける全國的經濟大會、全國にわたる婦人聯合會の設立運動、婦人クラブ敎化總動員に於ける愛國婦人會、女子青年團の動員等々。

これら中產階級婦人運動は、その階級的特質として理論が空想的抽象的に陷り易く、その結果として科學的唯物的な婦人運動の發生の必然的な理由を充分に理解することができない。そして無產階級婦人運動と對立することになる結果、ブルジョア階級に乘じられて利用され、自ら知らずしてブルジョア階級の利益の爲めにうごいて反動的役割をつとめる結果に陷り易い。

中產階級婦人の運動である點で『女人藝術』と女人藝術社によつて組織されつゝある女人聯盟もまさに同じである。そして實際に雜誌同人の間には明らかにこのプロレタリヤ婦人の運動に對して對立的傾向の人も相當にあるやうであるが、しかし編輯にたづさはる人々が少くも間もなく廣汎にわたつて起り來るであらう、無產婦人運動の必然性を認めて、自分たちの手でその運動の爲めに少くも一つの定石を打つて置かうとする情熱でうごいてゐられる點だけは買つてやらねばならないと思ふ。

中產階級婦人團體の最近のさかんな活動は「喜ぶべき現象であるか或は警戒を要する現象であらうか私にはその後者としか考へられない。(神近市子)

「自由競爭は獨占へ導く」といふレーニンの公式より始まつて、世界一般の獨占形成及びその諸問題について說く。國家の法律と獨占形成との關係、改良主義者と獨占形成との提携等、資本主義沒落期は急速な獨占形成の時期である。あらゆる獨占形成の目的は、販賣價値から來る平均利潤率よりも高い利潤率を得ることである。で、その利潤率を高めるための獨占形成の經濟的基礎を明かにしなければならない。一、勞働對象、勞働手段、勞働力等の獨占。二、資本獨占。三、運輸獨占。四、消費部面の獨占。五、縱斷聯合體等の獨占形成を世界の現象に就いて述べ、更に獨占の强固性の問題等をあぐ(中本たか子)

演劇發生の直接的原因は人間の模倣本能で、物眞似や身振りに端を發してゐる、間接的原因は宗敎的禮拜である。

演劇發生の動機やプロセスは現在地球上に住む色々な未開民族も過去の原始民族も非常によく似てゐる、卽ち單純な模倣擬態から擬態的舞踊や擬態的演劇になるのである。

我國演劇の起原は神代上代の神樂(神遊)を初めとして、葬禮、結婚戰爭の出陣凱旋、又は穀物の收穫などの行事の時になす歌と踊にきざしてから、外國音樂の輸入(千二百年代)しない間が、模倣擬態又は擬態的舞踊の時代で以後の奈良朝平安朝の散樂などは擬態的演劇に屬するであらう。

かうした演劇の出發點の研究は演劇の本質についての考察上にも必要な事と思ふ。(辻山春子)

原始婦人を除く過去の一切の婦人の人生觀は、何時も絕望的であり、逃避的であり更に諦觀的であつた。此のことは、宗敎機構が婦人を對象として如何に阿片たる役割を演じたかを觀れば容易に洞察し得るし、又家族制度といふ鐵鎖が如何に婦人に宿命觀を與へたかを見れば理解できる。然し時代は辯證法的に流動する、封建制度が古ぼけた時代として消滅した如く資本主義社會の建物も亦今や瀕死の狀態にある。婦人は漸く自己意識に目覺めた。彼女等は神々を追放することを知り、人形の家を破壞することを體得した。そして貝殼生活から自己を蟬脫させることに邁進した。此れは流行でない。むしろ社會の必然的過程であつた。婦人は今一つの新なる人生觀を戰ひとつた、つまり自己を解放する武器としての人生觀を獲得したのである。吾々の建設した人生觀は、此の現實の地盤から遊離したイデオロギーでなく、不斷の流動をつゞけてゐる社會の反映としての人生觀でなくてはならなかつた。故にそれは空漠たる形而上學的人生觀とは相違して社會の必然を認識して得た生命の溢れたる人生觀である。此の意味に於いて人生觀を一つの世界觀としても別に內容には變りはないと信ずるものである。(中島幸子)

反響

市外淀橋　西山幹子

十八日は素晴らしい盛會さでございました。大きな期待を小さな胸に抱いて電車を捨てた娘が、たつた五分も經たない間にまた電車をひろはねばならなかつた、全で高速度のコントの様な事件を、先生はお忙しい、講堂の演臺の後で一寸でも想像なさいましたか知ら？　すつかり悲觀して終ひました。

でもそれは入れなかつた人々だけの悲觀であつて女人藝術が世に叫びかける魅力の大きさ、卽ちあの盛會さを悅ばねばならない、そう考へた時本當に嬉しく思ひました。女學校卒業後の精神的空虛の中に女人藝術の存在はフレッシュな智と女性的自負心を與へて與れる唯一のものです。女人藝術の頁をくる時女性は强いと思ひます。馬鹿にされてはゐられないと考へます。そして逃出し度いと望みます。こんな大きな女性の集まり、その中の女性の方々を羨望の瞳で眺めてをります。

市外松江町　小島次郎一

失禮をも顧みず貧しいこの手紙を差上げることを御許し下さい。僕は先日朝日講堂へまりました。此の種の(女性達)會に僕は始めての經驗でありましたが、おぼろげながら當夜の記憶をたどつて感じたまゝを書きます。聽衆の一人として僕は非常に殘念に思つた事があります。それは聽衆の一部分、殊に女性達の無知にあきれ果てました。側にゐた女學生は勿論有識婦人と己れも任じてゐるであらう人達は講演諸氏の服裝批判をしたり、コンパクトを出したり甚だしきは織本氏の熱辯の時でさへも歸りに銀座で何を飮まうか、食べやうかと同伴の紳士に話しかけてゐました。これが爲に一部の人は非常に憤慨して途中席を外した者もありました。僕はこぶしを握りかけました。眞面目な聽衆に對して甚だしく迷惑をかけました。

男子の中にも半ば面白半分に來たものも見受けましたが女性のそれに比しては問題になりません。眞劍なパンの問題に對して熱辯せられた諸氏には氣の毒でならなかつたと思ひます。

とにかく、僕は非常に得た處がありました、厚く御禮申上げます

此種の催を出來得る限り多く御開きになつて下されば幸と存じます。最後に皆樣の御健闘をお祈りします。

京都　八尋昌子

女人藝術の武者振りは實に痛快です。皆樣方の御奮闘に對して唯感謝、感激のみです。一年前、八月號一册を求めたきり、今日まで友に借りてばかりゐました。これは本當にいらだゝしい限りでしたけれど、金が中々出來なかつたのです。仕方がない。私は未だ二十にもみたぬ女で年老いた祖母と二人、小さなお店で玉子を賣つて生活してゐるのです。小市民根性――こんな言葉があります。私はそれをもつた小商人でせうか、毎日三里からの道を尋ね歩いて、まつくろになつてる私の口ずさむ歌は勞働歌です。今月こそ嬉しい月、本を求めました。來月もずつと〳〵求めるつもりです。いゝえきつとつゞける！　皆樣！　今こそ小さい玉子賣り女も女人聯盟員の一人に加へて下さい。數人の友も本誌を愛讀してゐます。

大阪　雨森篤子

御丁寧におはがき頂きまして却つて恐れ入ります。講演會に續いて放送等と、旅先きで嘸かし皆樣お疲れになりましたことゝ思ひます。けどあれだけ盛會であつた事はお互ひに何と言ふ喜ばしい事でございましたでせう。あたくしなどろくにお手傳ひもいたしませずまして肝心の前々日になつて急に店(私方は藥局を經營してをりますので)の者が歸郷してしまひまして、御用聞きから配達など一人でしなければならなくなつた時だつたので、どんなにあせつてもどうにも致し方がありませんでした最後までよくお盡し下さつた方に何とお禮を申してよいか分りません。當日承はつたのですが聯盟の方々の熱心さは涙ぐましいものでございました。

皆樣のお仲間に入れて頂きまして、種々な意味で大變に好い經驗をさせて頂けますので、精神的にどれだけ惠まれてゐるか分りません。もつと〳〵勉强しろ〳〵と口癖の樣に主人に云はれてゐる私です。女人藝術がどれ丈私を導いてくれるのに役立つでせう。毎號感激を覺えずに讀んだ事はございません。論評などの解からないところは主人に敎はりながら少しづゝ讀まして頂いてをります。

先達つて緣川さんから時雨先生の脚本集をとりに來るやうにおはがきを頂きましたが、私にまでお分けにあづかりまして厚く〳〵お禮申上げます。



時雨脚本集の中

氷の雨」合評

出席者
片岡鐵兵
岡本かの子
上田文子
辻山春子
中島幸子
八木秋子
速記者　大野優子
女人聯盟員　佐藤秀子
漫畫　熱田優子



十月廿七日の夜でした。時雨脚本集の中の「氷の雨」一幕について、心おきない方達が、心おきなく作中の人物について批評して下さいました。私はこの作を、そんなにつまらない作だとも思つてゐないので、氣まりわるがらずに發表します。皆さんがチト褒めてくださつたかたちですが——

作中の人物は五人の女です。

玉代　若いころ自分を賣品にして生きてきた女、末期に近い病人、五十二才。
豐子　玉代の生んだ娘、二十才。
お徹　看護婦。
おとく　玉代の友達、カフエの女將
婆や　六十位。

概略は、玉代の生涯に——死の間際に思出されてゐる二人の男、その一人は死んだ旦那で外國人の船長、も一人は豐子を生ませたであらうと思はれる安田。その安田が自分の娘と知らない豐子に思ひをかけてゐる。その現實の苦惱と死苦とをとりあつかつたものです。（時雨）

時雨　あの「氷の雨」に現れた女のやうな場合を考へてみて、私の潔癖からばかり、たまらなく感じるんでせうか。自分の生んだ子の父が知れないと云ふやうな場合、それから父親であるかも知れないと思つて居る人と、娘との間に、兩方ともちつとも知らずに、何等かの交渉が始まりさうな事があつた時に、人道的にも——



岡本　私は人道的と云ふ風にはとらない。主觀的に理論の方から行けば、人類が血統と云ふものを正す合理的作業のやうに、正しくすると云ふ合理的作業のやうな本能を具へて居る、それを表示したやうな、ひとりでに…作者のさう云ふ意圖でなくて、又ヒロイン當人もさう云ふ事を考へないでも、ひとりでに其の後ろにある自然が、さう云ふ風にしたとも云へるでせうし、又觀念的の方から云つたら、眞情主義といふやうな、新しい眞情主義を發見するやうな氣がする。それは倫理的とか、道徳的とか云ふ狹い、人が約束したものでなくて、人類の本能にさう云ふ眞情と云ふものが、有ると云ふことの發見を、是から私が得たんです。作者の意圖でないかも知れないが、さう云ふ風に私が發見した。一目で斯う見ますと、自然主義のやうな廢頽とそれから恐怖を一寸感じますが、宜く見ると、今云つたやうな、新しい眞情主義の出發の世界を暗示されるやうな氣がしたんです。さう、兩方に私とつたんです。そして私、ストリンドベルヒの「父親」を聯想したんですが、でも書き方が、こちらの方が輕い爲に寧ろテーマとか意味はこちらの方が複雜で、深いかも知れませぬが、あれ程凄味が無い爲に…勿論書き方が短かかつたりする爲でせうが、兎に角あれを聯想しました。女であるだけに、複雜に深く取扱つてある——

片岡　僕は中心の力點の置き方が…もう少し中心に力をお入れになつた方が宜かないかと思ひますね、大きい、非常に深い所へ突込んで居つて、突込んだと云ふやうな顏をしてない。作者が是でも〳〵と云ふ顏をしない。是だけ何したと云ふことは、何と云つても大家だと思ひますが、もう少し中心に力點の置き方を強めて欲しかつた。それから此女のたまらなさですね。自分の娘の父親かも知れないと云ふあれが、人道的な何でなくて、やつぱり潔癖に感じられますね、併しそれで宜いだらうと思ふ。そこに人道的な意義なんかゞ強調されて行くんぢやないかと思ふ。

上田　私は人道的が強張されると妙なものになつてしまやしないかと思ひます。今までの娼婦的な生活をして來た女としては、斯う云ふやうな事は、始終ある事だらうと思ひますけれども、私は今片岡さんの仰しやつた中心に力點を置くと云ふ意味は、どう云ふ意味か分りませぬが、私は斯うもう少し…それをお書きになつた年代もございませうし、いろ〳〵ございませうが、もう少し社會制度と云ふやうなものゝ方から見て、娼婦、つまりあゝ云ふ女の存在は、社會と云ふものを、もう少し視界に深く入れてお書きになつたら、もつと斯う強くなるんぢやないかと思ひました。

岡本　今大家と仰しやいましたが、大家のつまり長所と缺點を、澤山あの戲曲の上に見

ました。併し總括して矢張り大家と云ふ感じを受けますね、あの、私なんかよく分らないですけれども、囈語を言ひますね、あの時一々暗くなるやうでしたね。あれは暗くせずに…矢張り技巧が圓熟し過ぎた恨みがあります。あれは明るいまゝ囈語を言ふ事にしたら、寧ろ凄味がある。

上田　私は電燈の使ひ方は大變面白いと思ひました。

岡本　あまりお上手過ぎる恨みがあると思ひます。

時雨　電燈のことは――何て云つたら宜いでせうか、玉代の心持ち、玉の緒のゆらぎと云ひますか、古い氣持ちですが…さう云ふものが、まア何となく暗示せられたやうな氣持で、幾分あゝさしてみたんです。又舞臺の効果から云つて――餘り女主人公が動かない、寢たばがりでゐるので、其の明暗をつける爲に、電燈を少し使つてみたのです。何となく、私ははつきりさう云ふ所まで考へられませんけれど、社會制度が變つた時にも、女は尙且つ、こんな惱みがやつぱりありはしないかと云ふ氣持も、どつかにあつたんです。

片岡　僕は斯う思ひますね、社會が斯う云ふものを生んだ事に關心を持たれて居ればですね、古い言葉で云へば救ひです、明るみが射して來ると思ふ。で此女の斯う云ふ生活から生れた惱みとしか受取れない。さうしたら、さう云ふ生活を持來した所の社會に關心を持たれて、其の惱みのもとに目が屆いて居れば、そこに明るみが射して來ると思ふ。それから是は、僕はやつぱりさう



云ふ亂れた事がたまらないと云ふ氣持ですね、さう云ふ氣持が、此女に在ると云ふ所に、あなたは女の良いものを持たせられたのぢやないかと思ふ。

岡本　それは私、玉代だけの氣持だけでなくて、人間本來の本能として、なかなか打算的に、合理的に巧く出來て居ると思ひました。斯う云ふ人でも矢張り窮極はさう云ふ潔癖が出て、それが實に自然で、誰でもさう云ふ本能があるものだと思ふ、それが餘り主張的でなく、主觀的でなく、概念的でなく出て居る所に、藝術的な手腕と云ふものが適切になると思ふんです。少しも理窟でなく…

片岡　それなんです。それが一ツのリアリズムとして非常に成功して居る。併し斯う云ふ良い閃きがあつても其閃きが又再び泥の中に消えてしまふと云ふ感じですね。

岡本　それはやつぱり生命の末期と云ふものは、そこに其人の眞情を出す。力を與へたんぢやないかと思ふ。

片岡　それは分りますが…

上田　さつきの社會制度が變つても、さう云ふ女としての惱みですね、父が子を×する――さう云ふ事があり得ると云ふことは…

時雨　父が子を×すると云ふより、女自身が、生んだ子の未來に對する心配が、どこまでも女について廻る…

上田　さうするとそれは何でございますか、別段父子相×と云ふやうな性的な亂倫さでなく…

時雨　さうです、母性としての、種の知れない子に對しての不安が…

上田　私はさう云ふものは去つて行く問題だらうと思ひます。

時雨　もう一ツは、集にしてからよく氣がついて居るんですが、自分がよく汚い所はいやだから逃げる――それが非常に自分の性格的にも、實生活にもあるんです。いやな方はサッサと逃げる、いやな方にグイぐ\入つて行く勇氣が無い、それは何から來て居るか、體質から來て居るか、性格から來て居るか、一種の變な東洋的な諦めと云ふものですか、さう云ふものから來るか、或は潔癖から來るか兎に角ひとりサッサと逃出す所があるんです。それが一體に自分の作を薄くし深く強く行かなくちやならない所を輕く逃出してしまふ所があると思ひます。以前にはそれを自分が腹が薄いと考へたんです。どうも學殖が無いのと、體が弱かつた爲に逃げてゐたと、斯う思つたんですが、さうでなく、矢張り自分の根本がどつかまごついて居たのです。それにもう一ツ此中で聞きたいのは、作には出て居ませんが、父には――男にはさう云ふ悩みは無いか――



上田　それはさつき岡本さんが、ストリンドベルヒの「父」を思ひ出したと仰しやいましたが、私はエジポス、あれを一寸思つたんです。あれは男の方が母を何するんでずが……

岡本　私はさう立勝つた觀方ばかりしないで、此の潔癖と云ふのか、此の懸念と云ふものは、やつぱり幾らか嫉妬と隣合してゐるやうなけはひを感じますね、そこが何とも云へない女の可憐な感じがするんです。此の懸念はどうしても、多少嫉妬と隣合して居ます、一間位置いてかも知れませんが……

中島　私は、この作の玉代が以前に淫蕩的、廢頽的生活をして居ましたけれども、自分の子供に對しては、今まで自分が踏んで來たやうな轍を踏ましたくないと云ふやうな、本能と云へば本能、母性愛とまでは云へないと思ひますけれども、自分の子供に清い生活をさしたいと云ふ心持と、さうして矢張り自分が翫弄させられたんであるけれども、其の以前に關係した男ですから、自分の娘に又そんな……矢張りそこに嫉妬と云ふやうなものがあると思ひます。同じ女性でございますから、嫉妬が仄めいて居る……

岡本　却つて口に出す事は、餘り氣持が焦點に集らないかと懸念するほどかすかです。

片岡　是からは現在の結婚と云ふやうなことは、だんだん無くなつて行くだらうと思ひますがね。女がだんだん經濟的獨立を持つて來ますと、結婚しないで子供を生む場合が殖えて來ると思ふ。さう云ふ時にはどれがきやうだいか何か分らないと思ひますね、さうなればそれがきやうだいである事を知り、肉身である事を知つて居れば勿論、知らなければ知らないで濟んで行くものと思ふ。

上田　けれどもさう云ふ事は、寧ろ優性學的、醫學的に進歩して行くべきぢやないでせうか。

片岡　それは制限する事ですか？

上田　さう云ふやうな事を知ると云ふことをです。血族結婚が宜いものなら、かまはないと思ひますけれども人類を惡くする場合には、どうしても考へなくちやならないと

思ひます、昔の母權時代みたいに、目茶目茶な狀態に返ることはいけないと思ひますから、優生學なり、醫學なりの方からどうかして行かなくちやならない問題でせう。

片岡　それでつまり制限する、婚姻を一時的に‥‥

岡本　總て世の中つて辨證法で行くやうな氣がするんです。さうするとさう云ふやうな事が、極度に亂れると巧く調節する手段を、ひとりでに社會、人類自らが、一時はやつぱり‥‥昔ほどに感情的の恐怖が、倫理的に恐怖しない時代が、或は來るかも知れないと思ひますね、それが又非常に人類に合理的に牴觸する時が、何か暗示的な生理とか、方法とかゞ構じられて、さう云ふ事が無くなるんぢやないかと思ひます。

片岡　ストリンドベルヒを讀むと父は知らないが母親は分るさうですね、此子は誰の子であるか‥‥男は分らない、父が分らないと云ふことは、かなり安心です‥‥(笑聲)

岡本　非常に或點では、女は鋭く見て居るが、まだ多少甘いと思ひます。いつか河田さんなんかと、そんな事を話したんです。知つて居ると云ふことは、意識的甘さがあると思ふ、恐らく或種の母には分らない‥‥

片岡　長谷川さんは子供が無いから信用出來ないですな。

八木　長い間淫蕩的生活をしてゐたさう云ふ女が、命の終りに近付いた時、二十五年前に別れた男の事を云ふ。だけれども、ほんとうにさうだらうか、それとも悩みを抱かせた子供の方に、より多く關心が持たれやしないかと、どつちだらうと、不思議に思ひます。



上田　ア、云ふ臨終で、娼婦型の女に母性が出て來ると云ふことは、一寸面白い觀方と思ひましたけれども‥‥

八木　私は、作の中に娘が自分の母親に對して、非常に反感を持つて居るですが、アレを母親と對話があつたら、又強く感じが來たんぢやないかと思ひます。

辻山　もう少し突込んで欲しかつたですね、娘と母親と合せる‥‥

八木　大抵淫蕩的な生活をして來た者の末期と云ふものは、實に悲慘なもので、どうなつて行くか分らないですが、人の圍者になつたり寵者になつたと云ふ、淫賣婦としても、非常に宜い狀態に置かれて居ると思ひました。

岡本　船が枕元に置いてある所なんか、慘めと云ふよりどこかにフランス語にプティーと云ふ言葉がありますね、あの言葉があの戲曲に適するやうな氣がします。併しあの「唐人お吉」なんかからも見られますね、不正的な戀愛と云ふものは、却つて總てのものの後に殘つて來るんぢやないかと思ひます。殊にあゝ云ふ風に病氣なんかした時には‥‥

辻山　あのお友達、おとくですね、それは玉代の娘に對する氣持を、嫉妬と見て居りましたね、でもやつぱり玉代の氣持は母としての心配だつたと思ひます。

上田　是は何かモデルが有つたんでございますか?

時雨　是は何にも無いんですの。尤も小さい時分に柳橋で名妓と云はれた人で、増田のお美代さんと云ふ人が、五十歳になりました時に、子宮癌で亡くなつた事なんかゞ、私の頭に殘つてはゐたんです。其人はさう

云ふ生活の人に似合はないいゝ人でした。私が好きだつたんです。娘が二人ありまして、一人は宜い藝者になつて居ましたし、一人の腹違ひの妹の方は、おりきちやんと云ふ人ですが、どう云ふ譯ですか藝者にしないで、内箱みたいにしてゐたんですが、寧ろ其子の方が客色が宜かつたので……裕福に暮して居りました。其人が私が好きで、いろ／＼親切に話をする、藝者のいやな事なんか聞いたのが幾らか頭に來てゐたんです。それからさつき、かすかに嫉妬があると仰しおいましたが、是はいろ／＼な人間に出て居りますけれども、普通女性の一番いけない所は……女が云ふと可笑しいけれども、娘にも、友達同志にも、母にも誰にも彼にも、皆一種の羨み……

岡本 戀愛的嫉妬と云ふよりも、女性的嫉妬……

時雨 是はどうも女から取去らないうちは、いゝものが出來ないと思ひますね、妙にダニが喰つたやうに、女の心に喰つてやしないかと思ひます。

八木 私もあの作を見て、自分の娘の父と推定してゐる其人に、又自分の娘が戀愛する、其の淡い嫉妬と、病苦と、昔の戀人の事に付て語合ふ――さう云ふ所を非常に面白く拜見して、命の瀬戸際に尚且つ嫉妬を感じると云ふ、女の業を感じたんです。

岡本 喧嘩しながら、仇同志みたいであつても、友達として交際つたり、一緒に暮さなくちやならない、人間同志の運命がありますね、それが實に微妙に巧く出てゐると思ふ。理窟を云はないで……兎に角あの戯曲の宜い所は、女の主觀が理窟で出てゐないこと、リアリズム自然主義でないやうな……

時雨 卑近な觀方ですけれども、あゝ云ふ友情は、所謂教育の有る人よりも、無い人達の方に多く有つて、さうして憎み合ひながら、實に涙脆い所があつて……

上田 さう云ふ所は確にございます。

時雨 よく扶けるのがあの社會の美點で、みんなが救ひ合つてゐるんですね。

岡本 あゝ云ふ社會の人は瞬間的な眞實が多いやうです。

時雨 口では憎み合つてもおなかでは左程憎み合はない、それで相手が餘り出世しない方が宜いんですね。或る役者のお内儀さんに聞いた話なんですがどうしても昔の友達や、待合のお内儀と交際うと、家を出なくちやならないやうになる。何故ならば優しく云つてくれるのにつれて、うつかり家の事なんか打明けでもすると、さう云ふ人達の云ふ事は、「出てお出でよ、そんな面白くない所、好い世界があるぢやないか、お前



さんはあんなに賣れたんぢやないか――」それは決して同情で云ふのでなくて、其の位地が羨しくつてたまらないのが云ふので、それを本當にして出た人は、皆失敗してゐるから、私はそこには入らないと云ふ話を聞いて、私、實にさうだらうと思つたことがあります。うつかり買被つて、昔のやうに醜名を馳せやうなど〻考へると失敗する、決してさうぢやないので、みんなが羨みの的になつて、何かあつた時に引落す、さうして惡くなつたら本當に同情する

ものだと云ふ話を聞いたんですが、本當にそれはさうかなと思ひました。

上田　つまり愛憎と云ふものがゴチャ〳〵になつて居る。理性的に區分されないで、客觀的に云へば面白い所があつて、…さう云ふ點で戯曲的にもおとくと玉代の對話の所が一番傑出して居るやうに思ひました。



岡本　あれは非常に難かしいですね、對話の所が…私はあすこが成功していらつしやると思ひます。

上田　さうして概念的にゴツ〳〵しないで、肉の付いて居る所が、大家と云ふ言葉で云へるかどうか知りませぬが…

時雨　そんなことはありませんけれど――私が思つてゐるのは、あの男が子供の本當の父親だと信じ得られゝば、あんなに惱みは無いであらうけれど、分らない所に何とも云へない、女の焦慮があると云ふこと…

岡本　玉代の昏迷が一番作のダークサイド……落付かせる深みが一番かゝつてゐると思ひます。他の事は其上についてちやんと並べられた氣持であつて、其の昏迷が深く記憶の底に沈んで居るやうに思ひます。分らないと云ふことが…

片岡　母親とおとくのあの幕切れの處なんか…

時雨　あゝ云ふ深い惱みのある片ツ方に、尙且つ物質的に宜くしてくれた人の事を思出すやうな、慾張りの氣持が出るかどうかと云ふことは何ですが…

片岡　泣いてるのも自然だし、船の事も自然ですね、わざとらしい泣方でもなければ、わざとらしい、作者として其作を、如何にも人間が形身分けで爭ふやうな氣持を、暴露するやうな氣持でない、自然ですね。

八木　看護婦が遺産と云ふか、お金に大變目を着けて、イラ〳〵するのも利いてゐると思ひました。あれはしぐさの上に現れたらどうですか。

岡本　私あの劇の中で、一番新しい性格描寫は看護婦だと思ひました。あゝ云ふのが澤山ありますね。

時雨　あの看護婦はちよいとモデルがあつたんですよ、(笑聲) 看護婦と云ふ程ではないのですが、本所の方から手傳ひに來る人で、一寸キネマにも入れた事がある、容色は惡い方ですが、親切なやうな、慾張りのやうな、特殊な性格の人でした。(笑聲)

岡本　實際の性格からあなたが御覽になつたと云ふよりも、あなたの時代と云ふものから感じて作つた、一ツの創作のやうに思ひました。あゝ云ふ看護婦、隨分多いんですよ、(笑聲)

時雨　人間と云ふものは、さう云ふ卑しい氣持を…私も持つて居るんですよ、さうでなければ出て來やしません。恐しく卑しい氣持を、自分で發見するものですね。

上田　かなりせつぱ詰つた時に、フイと出て來る時があります。

時雨　ハテ恐しい――と云ふと可笑しいが、自分ながら…

岡本　お金の事ですか?

時雨　お金ばかりでなく、人の氣持の汚さをね。

上田　よくお金の事なんか、物質的な問題でさう云ふ事があると思ひます。例へば遺産とか何とか云ふやうなもので…

岡本　モダンの方に引かれて行くのと、職業意識で病人を勞はる所が…(笑聲) お金の事なんか看護婦ばかりでなく、嫗やでも

子守でも感じる事ですが、あの曖昧が何の苦もなく、出てゐる所が面白い……

上田　私伺ひたいんですが、あの豊子と云ふ娘、あれはどう云ふ生活をして居るやうな氣持でお書きになつたんでございますか？　お父さんかも分らないと云ふ人……そんな事はあの芝居として必要ないかも知れませんが、あれとの交渉が……

時雨　今宜くあるタイプかと……私はまだ深くさう云ふ人達を、研究濟みになつてゐないんですが、あの釣つてると云ふ氣持でもない……自分の何と云ふか、一種の遊び相手のやうにして居る。いろ／＼な女の人が、お孃さんでも職業婦人でも、ちつとも愛しても何にもゐないで、御飯の相手や、ダンスの相手位で、それでゐてかなり魅惑的な眼を投げたりして、昔で云つたならば、非常に心でおもちやにしてゐるやうな人を、隨所に見かけるやうな氣がしたので、深く見ずに、さう云ふタイプを取つてみたんですが、あの娘の方に深く入つて行くと、どうしても一幕で濟まなくなるから、娘は極く簡單に取扱つて、有合せに近代的と云つて宜いか、今の物産として……

辻山　電氣の消える事や、船なんかで非常に其の氣分が出て宜いと思ひました。

時雨　船を使つた事は、少しきまりが惡いんですけれども、一番說明がし易いと思つて……

岡本　一寸甘くは感じたけれど、あの船が、あの女の過去の或る時代に、船長にあまへた……其の可愛らしさ、フランス語のプテイーと云ふ言葉、何とも云へない可愛い、非常にハイカラな可愛さ——それをよく見せてゐると思ひます。さう云ふ風に見れば、あの船が大變宜い……

時雨　かなり甘い古さだと思つて、少しきまりが惡いと思つたんですが、あゝ云ふ社會の人は、不思議におもちやが好きなんです。一種の手遊びと云ふのでせうか、お婆さんのくせに、人形を飾つてみましたり、少女と同じやうなものを欲しがります。箱根細工が欲しかつたり、極く昔風になると、不動様を澤山飾つて、提灯フラ下げてみたり、おもちやなんか集めてみたり、一種の骨董品みたいにしてゐる事から思ひついて、あゝ云ふ人ですから、寧ろあの玉代が學植のある人間だつたら、可笑しい甘いものになりますけれども、あゝ云ふ人だから許されると思つて……

辻山　殊に病氣ですから、臨終の氣持として宜かつたと思ひます。

八木　人間が死に面した時に、一番眞劍に誰を思ふかと云ふこと——前に別れた愛人の事を囈語に云ふでせう。それが本當に人間の僞らない所であるが、父の知れない娘を



置いて行く、それに關心が行くか、どつちがほんとうかと云ふ疑問を持つんですが……

時雨　私はあの子供には、そんなに深い愛を意識してはゐないと思ふ、本能的にはあつても……と云ふやうな氣持は、何故と云へば、女は——大變自分自身逹を悪く云ふやうですが、大きくなつた娘を憎みますね。自分が衰へて來た、本能的なものだらうと思はれますが、父と息子の場合でも仲違ひをして來る時代がある——

片岡　是が古く別れた戀人だから思出すので、現在連添ふ亭主だつたら、思出すことも無いのです。（笑聲）古ぼけてゐますからね。

岡本　娼婦的な生活して來たから、必ず其人の性格が娼婦とは限りません、寧ろ順調に來た鈍感な母親より、さう云ふ生活をした事のある母の方が、年をとると子供に向つて愛情が深いと思ふ。かなり總ての事に敏感ですから……それは善し悪しにつけて、兩方から來る敏感です。憎みも餘計かも知れないが、又ヒヨツとして、愛情の深く觸れる場合もあるでせうね。

辻山　あまり意識して愛してないと仰しやいましたが、やつぱり心遣つて、さうしてそれをどうにも解決しないで死んで行くと云ふ所が非常に面白い。

時雨　少し舞臺技巧だと思はれるのは、お化粧する事ですがね。是は不思議な事に、今まで見た經驗で、死ぬ人に限つて綺麗にしたがる。爪を取つてくれとか、洗つてくれとか云ふ病人に限つて、助かつた人は一人も無い。あの場合、娼婦であつたと云ふ名殘りで、髪を洗はしてくれと云ふことにしてみたんですが、良い着物が着たい、髪が洗ひたいとか云ふ人に限つて、亡くなるやうですから、それを取入れてみたんです。

八木　私、さつきから感じたのは、玉代ですが、あの人が經濟的の保證があつて、兎にも角にもあゝして死んで行く事が出來る。一般の今の淫賣婦と云ふ者が、例外なく非常に悲慘な生涯を終ると思ふので、さう云ふ淫賣婦の最後と云ふものを考へ、もう一ツさつき云つた、是からいよ／＼他面的になるだらうと豫想される戀愛生活から、子供の問題、此の二つが大きな問題ぢやないかと考へます。

時雨　さう云ふ人の子供を、政府でちやんとしてくれゝば、一番宜い譯ですけれども……

片岡　是は非常に末梢的なんですが、冷たい雨が降つてゐる事が、もつと早くから分つたらどうだらうと思ふ。さうすると囈語で、天氣が好い——さう云ふとすぐそれがフイと來るんぢやないかと思ふ。

岡本　是は此の作の圏外の感想になるかも知れませぬが、豐子と云ふ娘が、かなり我儘に自我的に振舞つてゐるやうですけれども、何だか非常に可哀想なやうな、お母さんのあゝした生活よりも、もつと弱い生活をして居るやうな氣がするんです。近代的な自由さがあるやうで、縛られる運命で……父であるかも知れないと云ふことを知らないで、知つてゝするなら勇敢で強く見えるが、知らないと云ふことは、どこまでも人間の現實では、さう云ふ災ひに遭ふと云ふことが、逃れられないのぢやないかと思つて、自分がモダニズムの生活をして、あゝ云ふ風に振舞つてゐても、昔風な母親と同じやうな、暗い運命に囚はれてゐるやうな弱さがあつて、强さや新しみを感じないのが可哀想なやうな氣がします。

片岡　一體あなたは絶望を感じてゐる、「犬」にしろ——

時雨　さうなんです、困つた事には……**片上**

さんがよく餘りにニヒリズムだつて云はれました。「犬」が上演された時に、脚本集が出來たらすつかり批評するといはれましたがお亡くなりになつてしまつてガッカリしました。葛西氏は他に觀方があると云つてゐました。其の時分は脚本を纏めると云ふ考へはちつともなかつたんです。何故ならみんな恥しい物ばかりと思つてゐたから：：併し今度、女人藝術社のためにすこしでも儲かるかと思つたりして：：：

辻山　三上さんの序にも書いてございますが、目次を年代でズットみまして、初めの、十年以上前のになりますと、非常に美しい夢のやうなのから、だん〱後になるほど、暗さが出て來て非常に面白いと思ひました。

上田　後ろに一々年代が書いてあつたの、非常に親切で宜いと思ひました。

辻山　私も非常に宜いと思ひました。

上田　さう云ふ觀方から云ふと、「氷の雨」より、「犬」の方が、是まで持つていらしてロマンテイシズムが、ずつと少く、整理されてゐるやうな氣がして、さう云ふ點で私は、「犬」の方が好きです。

時雨　不思議な事に、美しい物を書いたと云ふ時より、暗くなつた今の方が人間的になつた、自分自身の所に小さく籠らなくなつて來たんです。さうして少くとも皆さんと一緒に何か出來るやうになつて來たと思ひます。先には自分自身迚も合はないものには、他所を向いて、ひとりで暮して行く所があつて、我儘で：：是は疳癖と云ふより、體の弱さから來るから、體をすつかり癒してしまはなければと思つて、大分それが癒つて來たと思ふんですが、作はあべこべになつて來て、見かけた所が温味が無くなつた氣がするんですが：：：

片岡　歌舞伎脚本ですね、ずつと以前私の子供の時に、確にあなたの作だと思ふが、刃を拔いてゐる幕切がありましたね、あの頃の脚本で、あれ程新しい感じを出した脚本が無かつたと思ひます。

時雨　「丁字みだれ」でせう：：：

片岡　僕の十六七の時でした。

時雨　あれは詩に書いたものなんです。讀賣新聞に一ケ月程續けてもらつた長詩なんです。それを芝居にしたのです。

上田　さう云ふ事を仰しやると、「櫻吹雪」に感心して居ります。今讀んでも、舞臺で見ても、あゝ云ふ樣式のものとしては、大變新鮮な所もあるし、中の女主人公の氣持なんか、かなり何と云ひますか、强いものがあつて非常に面白いと思ひます。

辻山　戯曲、まだお出しになりませんか、楠正成：：：

時雨　足利尊氏、「皐月の一夜」でせう。

辻山　あゝ云ふもの、まだお出しになりませんか？

時雨　あゝ云ふものはどうかと思つて、皆藏しまつちやつたんですがね。自分の殘した物は、瓦も石もやつぱり纏めて置いた方が宜いと云ふ方もあるので、迷つて居りますの。

辻山　惜しいですね。

時雨　「櫻吹雪」は、貞操と云ふものに疑を持つたから、今ならもつと强く書いたんですが、やつぱり妥協して殺してしまつたんですけれども、人の云ふ貞操ですね、教へられた貞操と云ふものが貞操でなくて、貞操と云ふものは自分の心に齊くものであつて、相手に依つて貞操を持つものでないと云ふやうなことを、考へたもんですから、それで書いてみたんですが、あの時分だから、あの位の事でなくちや書けなかつたんです。實際手腕もあれきりだつたんです。

女を二ッに分けてみて、一人を陰のやうな尼さんにして、一人を勝子と云ふ表にして、女の心持を二ッに分け、操と云ふものを二ッに分けて、眞情を以て戀してゐる者と、所謂貞操で片づけられてしまはなゝちやならない貞操と、操と云ふ、世間で云はれて居る言葉に、斯う云ふ二ッがあると云ふことを、書いてみたかつたんですが、さうまではつきり出なかつたので、自分ぢや困つたと思つたのですが、今ならもうちつと書けると思ひますが……

上田　序幕の舞臺面なんか大變面白く……

時雨　いきなり坊主と綺麗な女と逢した所が目新しかつたんでせう。結局生きとると云ふことは、大變なものだといつも思ふので――

片岡　お世辭ぢやないが、宜く書きますね、進んで行かうと云ふ氣持が偉い、大概の女の人は四十過ぎたらもう……

時雨　いつぞや私が、日々新聞に眞面目で話をしたんですが、話が徹底しなかつたので、可笑しな書き方になつたんですが、私は自分の過去に、自分自身で生きて居なかつた年を、實に勇敢にォミットして居る。戸籍上は仕方がありませんが、それは別として、自分自身は非常に若いつもりなのです。自分自身の生活をもつた時だけが、本當に生きた時なんだと云ふ氣持でゐると云ふことを話したんですが、三上なんかに、それは重寶だなつて笑はれましたけれど。

片岡　不思議にさう云ふ時代の事は忘れてゐますから。實にくだらぬ生活をした時代はね……

時雨　因襲的に育つて、因襲的にいろ〳〵な事をやられたから、隨分迂回して來てゐます。今の方なら何でもなく一飛に行ける所に行くのに、迚もヨチ〳〵して來たんです。其の時代は年の入定……つまり蛙が穴の中で生てるも死でるのとおなじとして。

上田　今までの日本の女の人は早く老けすぎました。だから西洋人なんか、一人でこつちに來て居る宣教師なんか、六十になつても、七十になつても隨分若々しくつて、いつまでも元氣ですね。

片岡　男でも文學者が一番早く老込むんですよ。

時雨　放從なせいぢやなかつたのですか

片岡　早く大人になつてしまふんでせう……

上田　東洋的に隱棲したがるんぢやないですか。

片岡　僕等の强味は、大家扱ひにしてくれないから……僕等より一代前の連中は、若くから大家扱ひにされて年をとつた。

時雨　若くて偉くなる人と、なか〳〵大成しないから、ゆつくり勉强するより仕方がない者とありますね。いつまでも勉强しなければいけないと思つてゐますが、何だかだん〳〵恐くなります。是で宜いかしらんと思ふやうな、――又さうかと思ふと、一方……偉い人は別ですけれども、人間て大概こんな者だなと思ふ所と兩方來る（笑聲）でも何だか、女が女を書いてると、ウンと女が殼を破つて、さうして眞から底から明るく、新しく建直さなくちやいけないと云ふ氣持がするんです。

上田　さうですね。

片岡　是まで女の偉い文學者と云ふものが、少かつたでせう。樋口一葉なぞはあつても、近代文學で偉い人は無かつた。男ばかりでせう。だからつまり受繼いで行かない。大體男は宜く分つて居るから、宜く書けた、どうしたつてレベルと云ふものは、突然に來るんぢやないから、だん〳〵受繼いで行くものだから、本當に女の巧く書けた小說が無かつた譯です。それでぢやない

かと思ふ。女が宜く分つて、女を書くのは是からでせう。

上田　妙な虚飾があつて、本當に裸に書けなかつた……

片岡　男の實に宜く書けてる小說はありながら、女のは本當に書けてゐるやうに見えても、實は巧く書いてない。

上田　ストリンドベルヒの女性なんか、一面は非常に宜く書いてあつて、非常に誇張されて……

岡本　甘い氣がする、悪い所ばかりあゝ云ふ風になつて、甘く見えます。

時雨　女は男に巧言令色だと云ふけれども、打開かれた仲間同志や、いろ〳〵な文學者、社會的になつてる方にはありませんが、一般的に女同志の方が巧言令色ですね……巧言令色と云ふと可笑しいが、他所行の言葉を使つて——

片岡　どうも男同志の方が、打明話の出來るやうなのが澤山ある。

時雨　女は男に打明けても、女同志は或所までらしい。今の方は別らしいですが、一般にはみんなさうだと思ひますね。

上田　それは女が今まで生活と云ふものを持つて居なかつたせいで、眞から話が少かつたせいかも知れないんですし、一ツは本當に人に相談しなくちやならないやうな話が、隨分少いやうな人がありますね。

岡本　男の生命の力點を女は持たない。力點を持つてゐるから、男はくだらない事をしない勝ちですが、女はどんな人でも生活を持たないから、餘計な過剩があるらしい。さう云ふ滓を自分で製造するやうな、滓を自分で溜込むやうな過剩的な精力……精力と云ふも大袈裟ですが、餘裕があるですね。

片岡　今までの女は夫に依つて運命が決つた、結婚させられて、嫁入りと云ふことが重大になる。さうすると評判が悪いとお嫁さんに貰ひ手が無かつた、で評判を非常に氣にしなくちやならないので、なか〳〵打割つた事は言へなかつたんですね。世間がうるさくつて……さう云ふこともあつたでせう。

岡本　さう云ふ習性からですか、打算を離れた立場に居ても、やつぱりさう云ふことがあります。

上田　今までの女は夫の生活に寄生されて、非常にそれが運命的になつて、運さへ宜ければ實力が無くても隨分巧く行くし、運が悪いとかなり實力の有る人でも、さう行かないで居るやうな、さう云ふ感じを持つてゐて、グズ〳〵愚痴を言つてる事が多かつたんでせう。

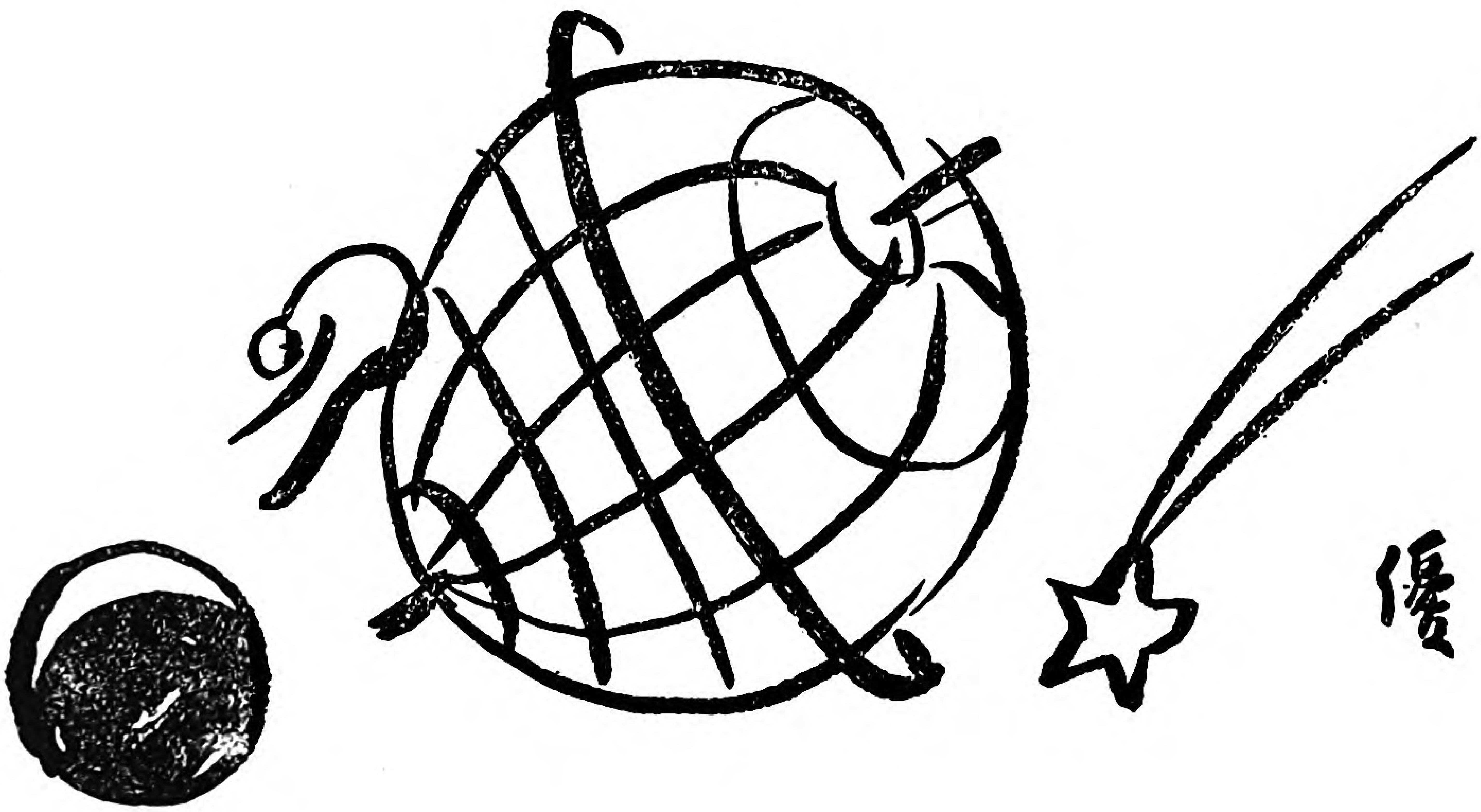
時雨　女と云ふ者は、くだらない所へでもなんでも大變行きたがるやうなのと、それから極く、自分が立てられる處でなくてはいやだと云ふのとある。ある折は同じやうな煉瓦積みとならなければ——

上田　それは男にもあるんではないでせうか。

片岡　それは男にもあります。男だつて無智な所がありますよ。（笑聲）汚い惡口を雜誌で書合つたりして、しよつちうあります。

時雨　でも男ほど、眞から底からバカになれない所があるでせう。女の方が利巧なんですか。

片岡　男だつて眞から馬鹿にしなければゐないやうな人が幾らもありますよ、兎に角生活にはあらゆる人が歪められてゐますから、仕方がないですね。



ニルデスペランドム

——三幕——

辻山春子

時　昭和四年、春の頃

所　地方のある市、靑木修の家

人物

靑木修　卅二三歲

啓子　廿七八歲

リラ　五六歲

三浦秋生　廿六七歲

中島安子　廿歲位

橋本　廿一二歲

永見　卅歲位

——第一幕——

四月の始め頃　午後

靑木の家、無産運動にたづさわる人の家に相應しい室、簡素で小じんまりした中に上品

な趣味が見られる。棚にマルクスの寫眞が入れてある、本棚に澤山のその方面の書物が立ててある。啓子は机の前で本棚の本や机の引出し等整理してゐる。安子は二三足の靴下のふせをしてゐる。

啓子　あたしはどうしても理解出來ないわ、

安子　あら、あたしだつて分りませんわ、

啓子　貴女にも分らないの、噓でせう、——だつて貴女なんか若いんだもの、共鳴する筈だわ、

安子　いいえ、本當に分らないんですよ、（はき出す樣に）あんな教育のある金持のお孃さんの氣持なんか、

啓子　さうかしら——あたしね、自分が年取つて古臭くなつたから、あんな若い新しい人達の思想が理解出來ないんだと思つてるのよ、

安子　まあ、年取つたなんて、（笑ふ）あの人と貴女とはたしか一つか二つしきや違はないじやありませんか、

啓子　だつて、あたしなんか苦勞するばかりで、世の中の樂しい方面なんか見た事もないから年よりずつとふけるのよ、あんな無産運動を趣味の樣に思つてるブルジョアの御孃さんとは比較にならないわ、

安子　でも、——

啓子　兎に角、あたしはもう時代から取殘されてるのよ、だからあんな同志愛だの浮氣だか分らない樣な事をする、所謂新しい人とは相入れないの、

安子　浮氣ですとも、貴女の目の前で先生とあんなになれなれしくするなんて、本當に恥知らずですわ、

啓子　（深い憎惡を含めて云ふ、）青木の目の前で自分がどんなに高い所にゐるかつて事を見せつけたいのよ、（仕事を止めて一所を凝視しながら）あたしが何も云はないのをいい事にして、まるで自分の家みたいに振舞つて——

安子　貴女があんまり優しいんですもの、もつとあてつけてぽんぽんなさらなきやあ、

啓子　でも、あたしにはどうしてもそれが出來ないのよ

安子　なぜでせうね、

啓子　（以後片づけ事を止めて、新聞の切拔きをしてスクラップブックに張るしぐさ、然し時々止めて一所をじつとみつめたりするので仕事ははかどらない、非常にメランコリックな表情）なぜだか自分でも分らないわ、——氣が弱いんだか、あの人を恐れてるんだか——あたし、もつと氣強く思ふ通りに振舞ひたいんだけど、どうしても駄目なの、

安子　まあ、恐れるなんて、なぜあんな人を恐れねばならないんでせう、今にあたし達の世界が來たら一番に叩きつぶされる人達じやありませんか、

啓子　そりやさうだわ、でも——

安子　いいえ、貴女の氣分が優しすぎるんですわ、もつと氣强くならなきやいけませんよ、でないとあんな人に馬鹿にされてだんだん先生を奪はれてしまひますわ、

啓子　ええ、だけどね、

安子　それは先生をます／＼救へない深淵に陷し入れる事ですわ、

啓子　さうも思ふの、でもね、どう云つたらいいか――あたしは日常の事では氣が弱くつて思ふ事の十分の一も云へない女だつて事は分つてるの、何だかこう人の氣持にこだわりすぎて、自分て者を表はすのにあんまり遠慮深いつて事は知つてるのよ、だけど、本當にかうしなきやならない、これが正しいんだと思ふ事は、今迄ぐんぐん行(オコナ)つて來たわ、その點では人をどんなに傷つけてもさつさと乘り越えて來れたのよ、負けた者、倒れた者は自分で起きて進まねばならないつて信じてるから平氣だつたわ、でもね、今度の事はどうしても思ふ通りに振舞へないのよ、自分でもじれつたいんだけどね、

安子　じやあ貴女はあの人の方が正しいとでも思つてらつしやるんですか、

啓子　さうじやないの、正直な事を云ふと自信がないのよ、自分のつまらなさがはつきり分つて來たのでね、

安子　あら、つまらないなんて、

啓子　いいえ、やつぱりつまらないのよ、そりやあたし、靑木に見出されてからは、一生懸命勉强したわ、靑木にはぢない樣にせめて世間並のレベルまでは上りたいと思つてね、でも此の頃、何だかそんな元氣がなくなつたの、あたしが五年も六年もかゝつて世帶や育兒の傍ら夜の目もねずにした勉强が、三浦さんなんか遊び半分みたいで出來るんですものね、

安子　でもそんな事仰申つたつて、それは社會の不合理な爲で貴女のせいじやありませんわ、

啓子　ええさう、それで何もあたし、あの人と自分とを比較してるんぢやないのよ、三浦さんが女子大學に行つてたからつてえらいとも思はないし、自分が小學校きりだからつまらないとも考へてやしないわ、

安子　さうですとも、それにあの人、女子大學は中途で止したんですつてね、

啓子　そんな事でなくもつと根本的な事なの、何だかこう、自分の步いてる足どりが非常にあぶなかしい樣な、――そしてまるで自分のこれまでの生活がふけば飛ぶ樣なあやふやなものに思へてならないのよ、

安子　どうしてそんな事仰申るんです、貴女の足どりが危なかつたら、あたし達はもつと危いでせう、貴女など婦人運動の第一線に立つ人ですもの、もつとしつかりして戴かなくちや何だか心細くなりますよ、

啓子　ええ、でもあたし此の頃何もかも投げ出してしまひたい様な氣がするのよ、

安子　なげ出すつて、――ぢや貴女はあたし達の運動にまで疑ひをお持ちになつたの、

啓子　いいえ、さうじやないのよ、――さうねえ、まるで反對だわ、投げ出すつて云ふより、もつともつと突つこんでみたいのよ、今の様な生ぬるい生活は嘘じやないかと思ふの、もつとずつと左へ行くのが本當の様な氣がするわ、

安子　（あやしげに）さうでせうか

啓子　（笑ふ）あたし、何だかこんがらがつて、主義の事を云つてるんだか氣持の事云つてるんだか、自分でも分らなくなつちやつたわ、

安子　あんまり深く考へすぎるからですよ

啓子　ええ、有難う、

安子　今の御苦しい氣持は三浦さんのせいですよ、あの人がせめて此處にだけでも來れない様にしなきやいけませんわ、あんなづうづうしい人にはもつと押強くあたらなくちや、あたし、はたでみてゐてじれつたい程ですもの

啓子　そりやあたしだつてかうして考へてるとあの人が憎らしくつて仕方がないのよ、でも逢へばまるで仲良しみたいに振舞はずにはをれないの、不思議だわ、あの人には何だか魅力があるのね、それに素直で憎めない性格だわ、

安子　まあ駄目ですわ、そんな事仰申つて、本當にじれつたいつたら、――

啓子　丁度ロシアのコロンタイ女史みたいにあたし達なんかには係りなく、超然として、自分の信じる所を行(オコナ)つてらつしやる様だわ、

安子　かひかぶつちやいけませんよ、あの人にそんな意識があるものですか、男から男へ移つて行くモガにすぎないんですわ、

啓子　さうかしら、

安子　あたし、まだゆつくり話した事はないんですけど、でもそんなしつかりした人じやありませんわ、第一あんな人格者の永見さんを裏切るなんて考へのない證據ですよ

啓子　永見さんて云へばあの人は此の頃大變元氣がないんだつてね、あんな一本氣な方だからきつとひどい痛手だつたのよ

安子　あの女はきつとしんからのバンプですよ

啓子　さうでもないだらうけど、とにかくあたしには理解の出來ない人よ、あたしなんか、古い家族制度の中で育てられた頭に、エレンケイ女史の戀愛觀を上塗りした位のものだから、もう古臭くなつちまつたわ、そりやさうといつか貴女は同志愛について青木と話してたでせう、

安子　同志愛について、ええ、同志愛は戀愛以上だつて事でせう、同志愛の上に成り立つた戀愛しきや、あたしは肯定出來ませんわ

啓子　そんな事だつたかしら、何だか戀愛なんかなくつても同志愛で性慾の解決は出來るてんじやなかつたかしら、

安子　あら、そんな事云やしませんわ、

啓子　さう、さうだつたの、――(頭を振りながら) 止しませうよ、こんな話、

安子　ええ、でも貴女が、

啓子　御免なさいな、變な事たづねて、

安子　まあ、そんな事――リラちやんは何處へ行つたんでせう

啓子　又電車道に出てるんじやないかしら、貴女一寸見て來て頂戴

安子　ええ、行つて見ませう(退場)

啓子　――やつぱり月並な事しきや答へてくれないわ、――(暫くぼんやりしてゐる、切抜いた新聞を片付けてから机の前に坐る、薄いパンフレット様の物を取出して字引をひきながら懶げに讀む)

間。玄關に橋本登場

橋本　(さつさと上りながら) 奥さん、御勉强ですか、

啓子　あら、いらつしやい

橋本　(坐りながら) それ何ですか、

啓子　つまんないものよ、此の頃エスペラント始めたものだから、

橋本　先生は、

啓子　靑木に何か御用? 事務所にはゐないんですか

橋本　ええ、だからこちらだらうと思つて來たんですがね、

啓子　さう、でもあの人は此の頃家にはちつとも落付いてゐないのよ、

橋本　知つてますよ(笑ふ) 三浦さんと遊び歩いてらつしやるんでせう、

啓子　(無造作に笑ふ、さつきのメランコリックな表情は消えてゐる) 多分そんな事でせう、

橋本　黨の者はみんな三浦さんを讃美してますよ

啓子　共有だからでせう。

橋本　え?

啓子　(笑ふ)

安子リラの手を引いて歸る、リラは上ると直ぐ橋本に飛びつく

リラ　あら、橋本さん、いつ來たの、

安子　いらつしやい、

橋本　(リラを抱きながら) やあ、リラちやん僕は今來たんですよ、

リラ　さう、ねえ橋本さん、又公園へ遊びに行かない?

橋本　(困つたらしく) 困つたなあ、僕今日は忙しいんですよ、リラちやんのパパに用があつて來たんだから、

リラ　あら、つまんないわ

橋本　又今度行きませう、

リラ　だつて、

啓子　リラ、無理云つちや駄目よ。

リラ　だつて、ママ

啓子　やす子さん、リラにお八つをやつて頂戴、

安子（立ちながら）リラちやん、いらつしやい。

リラ安子の方へ飛んで行く、安子は隣室の戸棚からパンか何かを出してリラに與へる

啓子　橋本さん、どんな御用なの、あたしで分るんだつたら聞いとくわ、

橋本　何でもないんですよ、選擧の事です、

啓子　吉武さんと青木が黨の公認で立候補するんですつてね、

橋本　ええ、それについて明日委員會を開いて役員や係をきめるんです。

啓子　いよいよ運動を始めるんですね、

橋本　普選第一回の市議選です、大いにやりますよ

啓子　永見さんはどうなつたの、

橋本　あの人は出ない事になりました、併し大分不平らしいんです、

啓子　さう、あの人は此の頃支部の人氣はないの、

橋本　ない事もないけど川田石鹼工場のストライキで味噌つけてから餘り思はしくありませんね、

安子　でもあの負爭議は本當は永見さんだけの責任ぢやないわ

啓子　あんな風の人だから敵が多いのね、でもあたし、あの人は青木なんかより純眞な點があると思ふわ、公認でなくつても出したらいいのに、芽を出させて上げたいわ、

橋本　しかしゲルトが續きませんよ

啓子　そりやさうね、

橋本（側の帽子を取る）奥さん、先生が御歸んなすつたら僕は事務所の方に居ますからさう云つて下さい、

啓子　ええ、云つとくわ、でも何時歸るか分らなくつてよ

橋本（立ちながら）いいんです、じや歸るかな

啓子　もう歸るの、じや又いらつしやい

安子　又ゆつくりいらつしやいね、

橋本　有難う、リラち　ん、さよなら、又來ますよ、

リラ（立つて玄關までついて行きながら）今度いらした時公園へつれてつてね、

橋本　今度は大丈夫行きますよ、（退場）

リラ　橋本さんハイチヤイ——ママ、も一つパン頂戴、

啓子　もうないのよ（机に向つて又前の續きを始める）

リラ　つまんないわ（啓子の背によりかゝつて暫くすねる）リラも勉强するわ、（あきらめて本を出して來てやすこの横に坐る　やつこちやん敎へて頂戴

安子　ええ、よんで御覽なさい

リラ（ひつかゝりながら讀み始める、）ムーラはお年が八つで靑い目をしてゐて

玄關に靑木と三浦秋生登場、秋生はスマートな洋裝である

靑木　唯今、

リラ　あら、パパお歸り（とんで行く）

秋生　リラちやん、こんちは

リラ　小母ちやん、いらつしやい

啓子　お歸んなさい、貴女いらつしやいまし

秋生　あたし又來ましたわ、御免なさい

啓子　さあ、どうぞ、

安子、蒲團を出し挨拶して、ふせかけの靴下等片付けて退場

啓子　貴方、今橋本さんがいらしたんですよ、そこらで御逢ひにならなかつた？

靑木　いや、逢はない委員會の事で何か話があるんだらう

啓子　選擧の事で明日、委員會をするんですつて、それで橋本さんは事務所で待つてるからつて云ひ置いてお歸んなすつたのよ

靑木　じや事務所へ行くかな、——ああ、つかれた、秋生さん、草臥れたでせう

秋生　ええ。大變——それにあんな下品なとこ面白くなかつたわ

靑木　なんだ、自分がつれてつてくれつて云つた癖に、

秋生　だつて貴方が贊成なさるんですもの、貴方も惡いわ、ねえ奧さん

啓子　何處へいらつしたのですか

秋生　櫻見なんですよ、公園へ、

リラ　（靑木の膝に腰かける）パパ、お土產ないの？

靑木　さうさう、あるよ（秋生に）ねえ、君、

秋生　あら、小母ちやんは忘れてたわ（手さげからチョコレートの包を出してやる、）はい、お土產

リラ　（包から出す）あら、チョコレートね、有難う、（食べる）

靑木　リラ、パパにもおくれ

リラ　はい（與へる）

秋生　小母ちやんにも一つ頂戴な

リラ　一つ（與へる）ママにもあげるわ（啓子に與へる）

靑木　さあ、行つて來るかな、（立ちながら）秋生さん、ゆつくりしてらつしやい、僕一寸事務所まで行つて來ますから、

秋生　ええ、でも早く歸つてらつしやいね、

靑木　いよいよ忙しくなるから．今日は、まあ、早く歸つてゆつくり遊ぶかな、

秋生　ほんとに暫くは遊べなくなるわね、さあ、リラちやん、パパをそこらまで送りませう、

リラ　ええ、送るわ

靑木、リラ、秋生、もつれる樣に玄關へ行く、啓子も後から行く

啓子　行つてらつしやい、

靑木　ぢや直ぐ歸るからね、

三人退場、啓子は暫くぼんやりしてゐるが室へ歸つて來てペタンと坐る、散らばつてゐるチョコレートの銀紙を拾つて延したり折つたりする、安子登場、蒲團等片づける

安子　奥さん

啓子　え、（まぶしさうに安子を見る）

安子　貴女はそれで何ともないんですか、

啓子　だつて、――

安子　はたの者の方が腹が立ちますわ、ねえ、お願ひですからもつとしつかりして下さい。でないと先生が可愛さうですわ、このまゝじや先生は黨の信用をなくしておしまひになりますよ、

啓子　ええ

安子　先生もあんな女から早く遠ざけないと今に大變な事になりますわ、

啓子　分つてるのよ、どうせこのまゝじや駄目だわ

安子　ですから此處に來れない樣にもつといじめなきや。貴女はあんまり人がいゝんですもの、あたし、横にゐてじれつたくてじれつたくて、

啓子　でも（笑ふ）いじめるなんてあたしには出來ないわ、

安子　本當に笑つてる時じやありませんよ、あんなブルジョアの遊ぶ事きり知らない女にあたし達の先生を自由にされてなるものですか

啓子　だつて青木があの人を愛してるんだつたら仕方がないわ、

安子　まあ、先生があんな人を、いいえ違ひますわ、先生はあの女からあやつられてらつしやるんですよ、玩具にされてらつしやるんです、今に永見さんみたいに忘られてしまふんですわ、

啓子　あら、青木はあんな人から玩具にされる樣な人間じやないわあのね、青木は貴女も知つてる樣に元は金持のお坊ちやんだつたでせう、だから、あたし達には分らないやうなデリケートな點で三浦さんと共鳴するんぢやないかと思ふのよ

安子　そんな事があるもんですか

啓子　でも、たしかに青木はあの人を愛してるのよ、三浦さんの方はどうだか知らないけどね、兎に角、あんなに思ふ通りをすばすばやつてのけられると人事ながら氣持がいいわ、（笑ふ、しかしそれは自分を嘲笑してる樣である）

安子　まあ、人事じやありませんよ、自分の頭の上にかかつた火の粉ですよ、あたしは貴女の事をこんなに心配してるのに――（眞劍に涙を浮べてゐる）

啓子　いいのよ、あたし、分つてるの、解決はいつだつてつくわ、あたしが亡びさへすればすむ事よ、

安子　いいえ、いけません、そんな風にする位だつたらあたしはこんなに心配しやしませんわ

啓子　有難う、でも大丈夫よ、あたし、うはべは弱々しさうでしん

はとても強いのよ、だから最後の解決は決して間違へやしないわ、それより今のあたしの問題はリラの事だけなの、リラさへゐなきやあれね

リラの歌ふ聲が表から近づく

安子　あの人が歸つて來ました、さあ、元氣を出してたんと皮肉でも云つて恥をかゝしておやんなさいな、

リラと秋生登場、リラは手に大きなゴム毬を持つてゐる

リラ　ママ、あたし毬をかつて戴いたのよ、

啓子　(立つて二人を迎へる)まあ、大きな毬だこと、本當にいつもいつもすみませんわねえ、

秋生　あら、何でもないんですよ、

リラは毬をつく、二ツ三ツつくと毬は啓子の前に來る、啓子は三つ四つついて秋生の方へやる、秋生つき始める

リラ　あら、あら、づるいわ、リラに頂戴よう

啓子　いいえ、今度はママよ(笑ふ)

三人の快活な樣子を安子は驚いてみてゐる――幕

――第　二　幕――

四月の半ば頃　午後

第一幕と同じ舞臺、机上の花瓶の花が變つてゐる位のもの、やす子、雜物を前において雜誌をよんでゐる、リラは横で歌を歌ひながら色紙を切つてゐる

リラ　ねえ、やつこちやん、ママは何處？

安子　あら、さつき云つたじやないの、事務所へパパの御手傳ひつて、

リラ　さうさう、忘れてたわ、リラはママがゐないと何だか淋しいわ、

安子　そんなに淋しいの、なぜでせう、

リラ　なぜだか知らないわ、

安子　リラちやんはパパとママとどちらが好き？

リラ　どつちも好きよ、

安子　でもどちらか少しでも澤山好きな方はないの、

リラ　あたし分らないわ、どつちも好きよ、

安子　さう、そいじやママと三浦さんは？

リラ　ママよ

安子　ねえ、リラちやん、もしママが遠くへ行くとしたら、貴女はパパと此處へ殘る？それともママと遠くへ行く？

リラ　ママは遠くへ行くの、

安子　いいえ、そんな事ないわ、でももしあつたらどうするの、

リラ　あたし分らないわ

安子　さう、――リラちやんはいい子だわ、

又二人共めいめいの仕事を始める。間。　秋生登場

秋生　御免なさい、リラちやん、ゐるの（上つて來る）
リラ　あら、小母ちやん、いらつしやい、いらつしやい、
安子　いらつしやい
秋生　御免なさい、皆さん御留守？
安子　ええ、御二人で仲よく事務所へいらしやいましたわ
秋生　さう――リラちやん、何してるの、
リラ　花をきつてるのよ、でも出來ないわ、
秋生　これなあに
リラ　櫻よ
秋生　まあ、これ櫻なの（笑ふ）あのう、安子さん、こちらは電話何處で借りるの、
安子　電話ですか、角の米屋さんで借りますよ
秋生　さう、じやあたし、一寸借りてくるわ（退場）
安子　いやな人――（やけに本を置いて縫物を取る）リラちやんはあの人好き？
リラ　好きよ、
安子　さう、どれ位好き、？　大變？すこおし？
リラ　（安子の顏を伺つて）すこおしよ
安子　さう――リラちやん、あの人はね、ママのエネミーよ、
リラ　エネミーつて何？
安子　か、た、き、

リラ　さう（子供の心には響かないとみえ平氣で色紙を切つてゐる）
玄關に橋本登場、ワクに布を張つて社會民衆黨公認候補青木修と書いた立看板を片手に、澤山のビラを片手に持つてゐる、立看板を入口の土間に立てる
橋本　ああ、手がだるい（ビラを上り口に置いて上つて來る）こんちは、
安子　いらつしやい、お忙しいでせう、
橋本　とても忙しい、――リラちやん、熱心に何してる？
リラ　これ花よ、きれいでせう、
橋本　へえ、花ですか、あんまりきれいじやないねえ、
安子　橋本さんは聲が少し變ね、
橋本　しやべりなれないので、もう枯れつちまつたのさ、これでも前坐を受持つてるんですよ
秋生登場
秋生　橋本さん、いらつしてたの、
橋本　やあ、秋生さん、しばらく、
秋生　噓ばつかり、二三日前に逢つたわ
橋本　しかし貴女に逢はないと一日が一年にも――
秋生　止して頂戴、變な聲で、
橋本　（笑ふ）
秋生　ねえ、橋本さん、あたし聞きたい事があるのよ、

橋本　何ですか
秋生　永見さんが立候補するつて本當なの、
橋本　本當ですよ
秋生　まあ、やつぱり本當だつたの
橋本　本當にも嘘にも貴女のせいじやありませんか、
秋生　なぜあたしのせいなの、
橋本　永見さんは演說の方の係りでありながら、一度も出ないんですよ、
秋生　それがどうしてあたしのせいですか、
橋本　どうしてつて演說しないので理由をきいたら靑木君の人格に僕はある疑ひをもつから出ないつて答へたさうです、
秋生　まあ、どんな疑ひなのかしら
橋本　僕はそんなくわしい事まで知りませんが、今は我が黨の者が一つに團結して既成政黨に當るべき時だから、そんな個人の感情なんかすててくれる樣につて皆で注意したんですが、どうしても聞かないでかえつて一人で打つて出るつて宣言したんですよ、
秋生　隨分、卑怯な人ね、でも一體運動費は何處から出すつもりかしら、
橋本　何でも小金持の兄貴に泣きついたさうですよ、
秋生　あてつけてるんだわ、何て男らしくないいやな人だらう、
橋本　(立つ)じやあ、僕はゆつくりしてをれないんだつた、安子さんこのビラは晩取りに來ますよ、(土間に下りる)
安子　それは何處に立てるの
橋本　そこの交叉點です、じやさよなら(立看板を持つて退場)
秋生　あたし、永見さんがそんなにまでつまらない男とは思はなかつたわ
安子　みんな貴女のせいですよ、此の頃黨に色んなごたごたが起るのは、
私生　いいえ、ちつともあたしのせいじやありませんよ、
安子　貴女が永見さんを裏切つたりなんかなさるからです、
秋生　あたしは愛されてから感激してその愛をうけただけの事です、しかしつきあつてたらあの人のねちねちした、まるで女みたいな氣性がいやになつたので、さう云つて別れてもらつたのです、貴女なんかに非難される點はちつともありません
安子　では妻や子供のある男性を愛してもいいんですか、
秋生　まあ、うるさい方ね、あたしは靑木さんが好きなんです、靑木さんの男らしくつてしかもデリカシーなあの性格がたまらなく好きなんです、唯それだけですよ、何も靑木さんから啓子さんやリラちやんに向けられた愛を取つてしまうつてのじやありませんそんな大それた事はあの方に一度だつて要求してやしません、あたしは唯自分一人で人を愛する喜びにひたつてゐるだけの事です
安子　そんな體のよい云ひのがれでごまかされるものですか、貴女

は先生を誘惑してるんです、恐しいバンプです、

秋生　（笑ふ）

リラは切紙を止め驚いて二人をみてゐる、青木登場

安子　（立つて迎へる）先生——（泣けさうになるが笑ひ續けてゐる秋生をにらんで無言のまゝ次の間へ去る。）

青木　どうしたんですか、

秋生　何でもないのよ、

リラ　パパ——（青木にすがつて泣き出す）

青木　リラ、どうしたのさ、いい子だから泣くんじやないよ、

リラ　（ますます泣く）

安子　（出てくる）リラちやん、泣いちや駄目よ、さあ公園へ行きませうね、（背負つて玄關から退場）

青木　一體どうしたんです、

秋生　あたしは貴方を誘惑するバンプですつて（笑ふ）

青木　安子さんがさう云つたのですか、馬鹿だなあ、あんな若い純眞な子を相手にするなんて

秋生　だつて、あの人が變な事ばかり云つてつつかゝつてくるんですもの、

青木　君が眞面目に相手になるからだよ、

秋生　いいのよ、いいのよ、もうそんな事

青木　ええ、それよりも急用つてのは一體何です、

秋生　永見さんが立候補するんですつてね、

青木　ええ、それがどうしたんです、

秋生　だつて、貴方、大丈夫？、あの人が當選して貴方が落ちたらあたし口惜しいわ、

青木　大丈夫だらうとは思ふが、しかし永見がつまらない事をして無產黨の勢力を分けてくれたのは一寸こたへますね、

秋生　本當にあの人何てゆうづうのきかない男だらう、

青木　（秋生の頰を指でついて）君のせいさ、

秋生　まあ、馬鹿にしてらつしやるわ、あの人の考へ方が小さいからですよ、つまんない私怨の爲にそんな事をしちや黨を裏切つたのも同樣じやありませんか、もしも二人共落ちてご覧なさい、こんな恥さらしな事があるもんですか、

青木　ええ、だから除名問題が起つてますよ、

秋生　それに相當しますとも、だけど貴方の形勢はどんな？

青木　さあ、三百五十票は取れるだらうと思ふ、三百あれば當選圏内ですがね

秋生　大混戰ですつてね、それに政友なんか隨分買收してるさうじやありませんか、

青木　普選になつて第一回だから大變こんがらがつてますよ、一寸豫想がつかないなんて云ふ者もゐる位だらう、

秋生　さう、あたし心配だわ、ねえ貴方、軍用金は大丈夫ですか、

青木　無産黨だもの、政友みたいに軍用金がありあまつちやゐませんよ

秋生　永見さんはたつぷりあるんでせうね、

青木　相當にあるらしいね、

秋生　さう――ねえ、青木さん

青木　何です

秋生　あたしにおあしを出させて下さらない？

青木　君に？――いけないよ

秋生　なぜ？――あたし此處に持つて來てるのよ、是非つかつて頂戴な、もし永見さんが上つて貴方が落ちたら、あたしどんなに口惜しいか分んないわ、貴方をあんな卑怯者に負けさせたくないのよ

青木　有難う、しかし君に出してもらつちやすまない

秋生　ねえ、いいでせう、あたし今迄余り家からおあしもらつた事ないのよ、でもこれは少し買物するからつて、母にもらつたの、たつた三百圓ぽちだけどつかつて下さいな、

青木　本當にいいのかしら？實の所のどから手の出る程ほしいにはほしんいですがね、

秋生　いいのよ、是非つかつて頂戴

青木　でも悪いな

秋生　どうして？あたしの御小使なんですもの、決して悪い御金じやあないわ、

青木　さう、それぢや思ひきつて戴きませう、

秋生　有難う、遠慮なくつかつて下さい、そして決して運動不足のない樣にね、御願ひしますわ、

青木　秋生さん、すみません、（秋生に接吻する）

秋生　あたし、飢えてたの、貴方の口づけに、

青木　たつた三日じやないか、

秋生　だつて、――

啓子、玄關に登場、青木と秋生あわてゝ離れる、しかし不自然な樣子は啓子の頭にピンと來る、釘づけにされた樣立つてゐる

青木　もうすんだのかい

啓子　ええ、御免なさい、早すぎたんですか

青木　何を云つてるのだ、

啓子　御邪魔だつたらも一度行つて來ますわ、

青木　皮肉は止さないか、

啓子　人が一生懸命働いてるのに――こんな所に隱れて――

青木　秋生さんが運動費を出して下さるつてので色々相談してたんだよ

秋生　奥さん、御免下さい、あたしのおあしを運動費につかつて下さる事になつたのでつい感激しすぎちやつて（冷たく笑ふ）何でもないんですわ、では、これ、御上げしときませう、（手提から札で

ふくれた封筒を出し青木に渡す。）

青木　どうも有難う。たしかに頂きました、

秋生　あたし、失禮しますわ、どうぞしつかりやつて下さいね、奥さん、すみませんでしたわね、

啓子　いいえ、あたしこそ、

秋生　じや、さよなら、（立つ）

青木　（立ちながら）さよなら、用が出來たらいつでもいいから事務所の方へいらつしやい（見送る）

秋生　ええ、さうしますわ（退場）

青木、歸つて來て机の前に坐る。氣まづい體

青木　馬鹿だなあ、――いつものお前らしくもない、やきもちやくなんて、――どうしたんだい。

啓子　――（うつむいてゐる）

青木　お前は俺の妻なんだよ、いはば俺の半身なんだよ。

啓子　――（ちらと青木を見る）

青木　こんな事にはもつと超然としてゐなきや駄目だね、

啓子　――（唇をきつとかむ）

青木　分らないのかい、俺は他のどんな女にも魂までは與へてゐないよ、

啓子　――（泣き出す）

青木　おい、此處へおいで、

啓子　――（行かない）

青木　啓子――おいでつたら

啓子　――（行かない）

青木　馬鹿だなあ（進みよつて抱擁、接吻する。）

間

啓子　（急に青木の腕からすりぬける）

青木　おい、どうしたんだ、

啓子　貴方は、どうして嘘ばかり仰申るの、愛してるなら愛してると正直に仰申ればいいのに、

青木　何を云つてるんだ、

啓子　あたし、あんな事に同情して頂かなくてもいいの、捨てちや可哀さうだなんて、そんな、そんな、屈辱だわ（泣く）

青木　おい、どうしたんだ、お前は俺の氣持がちつとも分つてないね、

啓子　分つてます、あたしの樣な馬鹿は家庭の道具と仕事のお手傳ひにしとけばいいんでせう、どうせ三浦さんの樣に相談相手や戀愛の御相手にはなれませんものね、

青木　馬鹿だなあ、お前はまだ戀愛ごつこの御相手がしたいのかい、

啓子　魂は與へてゐないなんて嘘です、虫のよい云ひわけですわ、

青木　おい、あんまりわけの分らない事を云ふと俺だつて怒るよ、

啓子　――あたし、今迄一生懸命こらへてたんです、自分が、自分

がつまらない事を知つてるから、だのに、――だのに、嘘ばかり云つて、――氣安めばかり仰申るから、――いやです、いやです、(泣く)

青木　お前は本氣でそんな事を云つてるのかい

啓子　あたしなんか、古臭くなつたんですもの、あんな教育のある新しい方とは比較にならないわ、

青木　へえ、お前はあんなブルジョアの浮氣娘を恐れてるのかいあんなのが新しいと思つてるのかなあ、

啓子　だつて、――だつて、

青木　おい、啓子、あんなお孃さんはね、新しいのでも進んでるんでもないよ、まあ性格なんだね、昔からあつた所謂おきやんとでもいふんだらう。そいつが此の頃モダーンガールだなんて云つて恥も外聞もなく大ぴらにのさばる樣になつたんだよ、

啓子　いいのよ、いいのよ、そんなに辯解したり、茶化したりなさらなくつてもね、あたしこれでも眞面目に苦しんでるんですよ、

青木　辯解なんかしないさ、――しかしね、啓子、お前がどう云つたつて男と女とは違ふんだよ、

啓子　何が違ふんですか

青木　肉體に於ても魂に於てもだね、その昔人間が造物主にクルエートされた時からすでに違つてるんだ、

啓子　だから女はこの愛慾地獄の中で永遠に苦しめつて仰申るの、

青木　だから苦しまなくたつていいさ、男はこんな物だと思つてればね、

啓子　そりや貴方が男だから云へる事だわ、それよりあたしね、何だか此の頃隨分澤山考へねばならない事がある樣な氣がするんですよ、

青木　何を考へるんだい、

啓子　何やかや色々ですわ、そして何かこう心の中に革命でも起つてる樣なのよ、

青木　秋生さんの事がお前にそんなにまで影響したのかい、

啓子　(強く首をふりながら)いいえ、そんな事じやないわ、あたしなんかあの方の事と一緒に考へて頂かなくつていいのよ、あの方とあたしとは全然別の世界にすむ人間ですからね、

青木　そんなに毛嫌ひしなくつたつていいじやないか、(笑ふ)

啓子　あたし、別に毛嫌ひなんかしてやしませんよ、(静かに立つて普通着を出して來て帶をとき始める、　――幕――

――第三幕――

四月の終り頃　夜

第一幕第二幕と同じ舞臺、電燈の下で室内の物體や人の影が何だかあやしげなニユアンスを作つてゐる、外が何となく騷々しい、市議當落發表の時刻に近いからである、けい子は編物をし

てゐる、リラは人形等出してブツブツ一人言を云ひながら遊んでゐる、安子はぼんやりそれをみてゐる、

啓子　今晩は街が騒々しいわねえ

安子　ええ、隨分――まだ分らないんでせうか、

啓子　さあ、

安子　五時の發表の時が二百五十票で、さつきが三百でしたから、この勢だつたら豫想通り三百五十は大丈夫だらうつてお話でしたが――やつぱりいよいよの處が分らないと心配ですのね、

啓子　ええ、――でも靑木はもう大丈夫よ、

安子　そりやさうですわ、三百票越せば大丈夫當選するさうですから、

啓子　永見さんはその後どんなかしら、

安子　さあ、五時の時も七時の時も二百でしたわ、

啓子　七時からはもうとても百票取れないわね、

安子　ええ、駄目でせうね、何だかお氣の毒ですわ

啓子　可愛さうね、あの人は今度落ちたら支部から除名されるのよ、

安子　まあ、本當ですか

啓子　ええ、だからあたし見てゐられない程氣の毒でね、あんなに氣が小さくて物を思ひつめる方だから、今暫くは餘りひどい打擊は與へたくないの、

安子　女には裏切られる、落選はする、支部からは除名されるでは本當にひどすぎますね、

啓子　いはばその凡てが皆三浦さんの爲だわね、

安子　さうですよ．みんなあの人のせいだわ、

啓子　あの人はあんまり人を傷つけ過ぎるわ、思ふ事をずんずんなさるのはいいけど、自分の下敷になつた者に對してもつと敬虔な氣持を持たなきや、きつといつかひどい目に合はされてよ、餘り世の中をあまくふんでると思ひがけない處に落し穴があるわ、

遠くで萬歲萬歲と叫ぶ聲や自動車の走る音

安子　あら、すんだのでせうか

啓子　さうらしいわ

安子　リラちやん、行つてみませうか、

啓子　リラ、安子さんと行つてらつしやい、そしてパパの處に電話かけるのよ、通りましたかつてね、

リラ　ええ、モシモシ、貴方はパパですかつてね、

啓子　さうよ、そしてパパが通つてたらお目出度うつて云ふのよ、それからママも喜んでますつてね、分つた？

リラ　分つたわ、

啓子　安子さん、永見さんの事も忘れないやうに尋ねてね、

安子　ええ、忘れるもんですか

リラと安子退場

啓子　とうとう運命のさいは投げられた。

間

啓子　あたしはあの人達の喜びを見ない内に去る方がいいわ（立つて押入をあけ蒲團の下にかくされてゐる鞄を出す、一寸中をあけてみる、中にはリラと啓子の着物や手廻りの物が入れてある）

啓子　これだけで當分はどうにかしのげるわ、

玄關に永見登場、啓子はあわてて鞄を押入にかくす

永見　御免下さい、

啓子　はい――あら、永見さん

永見　啓子さん、御無沙汰しました、何だか此の頃御宅のしきいが高くつてあがれませんでした。

啓子　いいえ、あたしこそ御無沙汰してます、まあ、何だかお瘠せになつたのね、

永見　さうですか（頬をなでる）

啓子　さあ上つて下さいな、色々御話したい事がありますわ

永見　有難う、しかし今日はゆつくりしてをれないんです、

啓子　いいぢやありませんか、あたしに免じてライバルの家とは思はないで下さい

永見　そんな事思ふものですか

啓子　だつたらいいじやありませんか、さあ

永見　ええ――此處でいいんですよ（上り口に腰かける）

啓子　何だかすつかり他人におなりですね――（自分もそこらに落付く）永見さん、あたし、どんなにか心配してましたのよ

永見　有難う、とうとう敗殘の身になつちまひました。

啓子　もう發表はありまして？

永見　あつたんでせう、僕は聞かない樣に今日は逃げ廻つてるんです、自分のした事がどんなに卑怯だつたか氣が付いたので、もう誰にも逢ひたくないんです、恥しくつて顔を上げて歩けません。

啓子　そんな事があるもんですか、ですが支部の事はどうなりまして？

永見　除名になりました、

啓子　そしてこれからどうなさるおつもり？

永見　今度は何もかもやり直すつもりで東京の本部に行つて活動します

啓子　さう、それで安心しましたわ、越えて行つた者に對して、打負かされた者の元氣を示して下さい、ふみにじられてもそのまゝ泣寢入してなるものですか、永見さん、實をいふとあたしも明日から新奇蒔直しするんですよ

永見　え、どうするんです

啓子　あたし、リラを青木から奪つて二人で東京へにげるんです、今晩の特急で立てる樣にもう何もかも用意しました、かうしてゐる間ももう一時間とないんです。

永見　貴女の方もそんなに破綻してるんですか、
啓子　ええ、とうとう
永見　すると秋生さんは貴女をそんなにまで苦しめたんですね
啓子　いいえ、何もあの方のせいばかりじやありませんわ、
永見　ですが、もうどうにもなりませんか、
啓子　今頃どうにかなつても、もうあたしの氣持の方が駄目ですわ、
永見　さうですか、思ひ直せませんかね
啓子　ええ、まもなく安子さんが歸ります、そしたらあたしはリラと二人で事務所へ行くと云つてここを出るだけの事です、
永見　隨分大膽な事を考へましたねえ
啓子　こうする迄にはどれ位考へたか分りませんの、
永見　さうでせうとも、僕にはよく分ります、
啓子　有難う（思はず泣く）永見さん、あたしね、實を云ふとまだ靑木を愛してゐます、靑木にしてもあたしを愛してゐないんじやありませんわ、しかし、今の樣な狀態ではあたしはどうしても辛抱出來ませんの、女のみに與へられた永劫の地獄ですものね、凡てが無かつていふのがあたしの我のせいでしたら、あたしは我を通しますわ、
永見　靑木君は貴女か秋生さんか、どちらか一人を選んだのじやないんですね、
啓子　いいえ、どちらもと云ふんですわ、
永見　さうですか、男には有がちの事ですけれどね、
啓子　ええ、だからあたし、どんなに辛抱しようと努力したか分りませんの、暫くは自分を虐げる事に快感をさへ覺えてゐましたわ、どれだけ忍べるか、どこまでゆるせるか、まるではかりにでもかける樣な氣持でね、でもそんな不自然な事は長く續きませんわ、
永見　さうですとも
啓子　でもねえ、永見さん、あたし自惚れてるのか分りませんが、靑木を本當に知つてゐるのはあたしだけじやないかと思ふんですよ、だから、あたしが去つたらあの人はきつと直ぐに魂の淋しさを感じるに違ひありませんわ
永見　ええ、靑木君はきつと後悔しますよ、その時こそ貴女は永遠の愛を誓つてあの人の手に御歸りなさい、
啓子　まあ、いいえ、あたしは決してそんな事を期待してるんじやありませんの、そんな事を試すつもりで此處を出るのじやないんです、出る以上はあの人を本當に失つてしまふんですわ、あたしは靑木の信頼を裏切るんですものね、決して決して許せる事じやありませんわ、
永見　ああ、貴女はそんなに强く覺悟してるんですか、
啓子　ええ、（靜かに泣く）

永見　啓子さん大丈夫ですか、貴女は一人でやつて行けますか、
啓子　有難う、でもあたしにはリラがゐますから、
永見　しかし――ねえ、啓子さん、僕は二三日內に立つつもりでしたが、明日中に仕事を片付けますから明晩まで待ちませんか、
啓子　さあ、――それでもいいけど、
永見　さうなさい、でないと僕心配ですから
啓子　でもやつぱり今晩立ちますわ、あたし折角一人で步く覺悟をしたんですから、やり通しませう、惡く思はないで下さい、
永見　さうですか、じや東京の處を聞かしといて下さい、ついたら直ぐ御尋ねしますから
啓子　さあ、心ぎめの所がないじやありませんが――でも今は何もきかないでおいて下さいな、
永見　しかし、それじやあ――
啓子　いつか御逢ひ出來ますわ、いつかきつとお知らせする日が來ると思ひます、それよりも上京したらお互にしつかりやりませうね、
永見　さうですか、じや仕方ありません、ですがあちらに行つてからどうするつもりですか、それだけは聞かしといて下さい、
啓子　働くだけの事ですわ、自由にのび〳〵と働いてリラを育てればいいんですから、
永見　するともう黨との關係は全然切りますか、
啓子　ええどうせ當分は駄目でせう、センチメンタルな云ひ方ですけれどこの亂れた心が直るまでは、何だかもつと靜かな氣持でゐたいんですものね。
永見　それもいいでせう、どうもこの生活は女にはあわたゞしすぎますから、
啓子　でもあたし氣持が落付いたら、又始めますわ、しかしもしかしたらもつと左翼へ行くか分りませんの、何だか此の頃もつと左でなきや嘘つてな氣がして來ましたのよ、
永見　さうですね、しかし目的地は遠いんだから僕はまあ運動の經過を肯定しますね、いはゞ合法的といふ假面をかぶつて革命の豫備行動をしてるんですから、
啓子　さうですね、それはさうと、こんな議論よりも貴方何か靑木に御用じやないんですか、
永見　ええ、いいえ――僕、一度秋生さんに逢ひたいと思つて來たんですが、何だかそんな未練はなくなつてしまひました、
啓子　三浦さん？　あの方はこの頃ちつとも此處へはいらつしやらないんですよ、
永見　實は事務所にでもゐたら貴女に呼出して頂くつもりで來たんです、
啓子　さう、じや電話かけてみませう（立ちかゝる）
永見　いや、いいんです、もう逢ひますまい

啓子　さう、でもいいんですか、

永見　ええ、逢はなくつても、おさまりさうな氣になりましたから

啓子　わたしもう青木に逢ひませんわ、時間もないし、逢へば氣が弱くなりますからね、

永見　さうですか、では僕も止しませうそれじや啓子さん、いつまでゐたつて同じ事ですから、（立つ）

啓子　さうですねえ、じやどうぞ御達者でね、

永見　有難う、貴女もしつかり自愛して下さい、

啓子　ええ、有難う（急に湧出て來る涙をふく）あたし、何だか泣けて——じや、さよなら——（こらえきれなくなり、永見に見えない樣に机の前に來て泣く）

永見　（暫く去りかねる）——じや、啓子さん、さよなら——（思ひ切つてくるりと身を翻して退場

啓子　——（暫く啜泣く、それから立つて外をのぞく、のろ〱と室の隅の押入の前へ歩いて來る）何だか頭の中が水の樣にすみきつて來たわ、——長い事たまつた丁度濁つたをりの樣なものが涙で洗ひ出されてしまつた樣だ——（押入から鞄を出して玄關の土間の暗がりへかくす、上つて來る、）思ひきり、泣いたせいかどうやら未練なく出て行けさうだわ、——（隣室へ入る、着物を着變へてゐるのである）

間、外は相變らず騷々しい。リラの洋服を持つて出て來る、ややく事務的にテキパキと紙やハンカチを袖に入れたり、髮をかきつけたり始める　リラと安子登場

リラ　あのね、ママ、あたしパパにおめでとうつて云つたのよ

安子　奥さん先生は當選ですよ、

啓子　まあ、よかつたのね、では永見さんは駄目だつたの？

安子　ええやつぱり駄目でした、先生が三百八十五票で、永見さんが二百十三票です、

啓子　そして無產黨からは何人上つてるの、

安子　たつた二人ですよ、大衆黨の藤田氏と宅の先生だけです、

啓子　さあ、じや吉武さんは駄目だつたのね、

安子　ええ、吉武さんも大衆黨の岩田氏なんかも枕を並べて落選ですわ

啓子　二人にしても成績はまあいい方だわ、これ位の市としてはね、

安子　さうでせうね

啓子　でも、新興階級の世界はまだまだ程遠いわ——あら、あたし、かうしてはをられない、一寸事務所へ行つて來なきや——さあ、リラちやん、パパの所へ行くのよ、安子さん、リラに洋服を着變へさせて頂戴（そはそはと玄關に下りる、安子がリラの洋服を着變へさせてゐる間に巧に土間においてあつた鞄を表へ出す）まだなの、

安子　もうすみます

リラ　ママ、まつて頂戴よ

啓子　（門口で向ふを向いて）まあ、大變な騒ぎね、

安子　電車通りはもつとひどいんですよ――はい、すみました、

啓子　では安子さん、そこらを片附けといつて頂戴ね、お客様がいらつしやるか分らないから

安子　はい

啓子　では行つて來ますよ、

安子　行つてらつしやいまし（片づけ始める）

啓子　――（リラの手を取り門口に立つて暫く家の中を見る、それから思ひきつて退場する）

安子は邊りを片付けた後、啓子の抜ぎすてた着物を持つて來て疊みかかる。間。近くで大きく自動車の警笛がする、「萬歳々々」「青木君萬歳」といふ大勢の叫び聲がして青木橋本その他四五人登場、中には當選御禮と書いた旗を持つてゐる者もある

橋本　奥さん、お目出度う、先生は當選しましたよ、（上りこんで飛びまわる）

安子　まあ、橋本なん、

皆々　（口々に表から叫ぶ）奥さん、おめでたう、リラちやん、パパは當選しましたよ、お目出とう、お目出度う、萬歳々々、

青木　（立つて來る）安子さん、啓子はゐないんですか

安子　まあ、先生、御目出度うございます。奥さんは先刻リラちやんをつれて事務所へいらつしやいましたわ

青木　馬鹿だよ、落付いてゐればいいのに、

橋本　ゐらつしやらないんですか、リラちやんもですか、

青木　せつ角リラを自動車にのせてやらうと思つてたのに、

橋本　リラちやんが喜ぶだらうと思つて迎へに來たんだがな

表の人　いらつしやらないんですか、どこです、何處へ行つたんです

橋本　事務所だ、

表の人　事務所、じや、もう一度事務所へ逆もどりだ、

青木　いや、もういいよ、仕方がない、じあ廻らうじやないか、

橋本　仕方がないや、じや廻りませう

青木と橋本表へ出る、人々「萬歳々々」等と叫びながら退場する、安子も表へ走り出て見送る、間もなく自動車の警笛が遠ざかつてゆく、嵐の後の様な氣分の内に

――幕――

一九二九、五、脱稿。同　一〇、改作



みちづれ

ヴィクトオル・マルゲリット
望月百合子譯

第二章 — 二

中食の卓でアニックの顔を見た時、アメデエは心の屈託をかくすことが出來なかつた。

併乍らダンヴォア婆さんは、大祭日にふさわしいムニュをつくり上げるのに心を砕いたのであつた。今日はお元日だ！ ニイスの薔薇は刺繍に飾られた卓子掛の上に太陽の光線をこぼしてゐた。アステイは二人が次ぎ〳〵に『お目出たう！』と言ひ乍ら唇をつけたコップの中で泡立つてゐた。

彼は母親との會見の模様をアニックに話し乍ら、彼女に關することは一切言ふまいとした。併し彼女は、彼を餘りによく知つてゐた。彼の顔や、心の最も纖細な動きまでも知りつくしてゐたので、母親と彼が彼女のことしか話さなかつたこと、而も如何なる意味で話したかといふことを、ちやんと察してゐた。

『ほんとに？ 私のことは何にも言はなかつた？ 少しの惡口も？……きつと？』

彼は卒直に笑つた。その卒直さは、彼等にとつては、彼等の信頼の地盤そのものであつた。彼等相互の愛の樂しい殿堂の基礎そのものであつた。彼は正直に言つた。

『言つたよ！ 惡口を山のやうに』

『話して頂戴』

『ルボオは恥をかいて默つて居はしないんだよ。あの男は貴女に對して怒つてゐるのさ、とても！……で、僕は、あの男が默るか、でなければ僕を相手にするやうにと言傳をして來たんだよ』

『私にだつて私一人で十分自分を護ることが出來るわ！』

『それやさうだとも』と彼は不快な顔をして呟いた。

『それで何んてあの男は言ふんですの？』

彼は輕蔑したやうに肩をすぼめた。

『ね、何んて言つたのよ？』
『事實の反對さ』
『まあ！』
　彼女は笑つた。そしてルボオをロオザの子の父親だと言ふことは詐欺强脅だといふことをきいたとき、彼女は一層愉快さうに笑つた。併しアメデエは注意して言つた。
『氣をおつけ！　それが、この裁判の弱點だから……ロオザの裁判は、彼女の言葉が唯一の根據なんだから……證據といつては何もありはしない。推定さへもない……若し貴女がいま考へてゐるやうにルボオに對してするとすれば、貴女は若しすれば、やつぱり男である裁判官達の惡感を買ふかも分らない。……ルボオには勢力があるんだから、自分を迫害の犧牲だと世間に信じさせるやうにしてしまふだらう』
『私の迫害の！』
『貴女の依賴者の迫害さ……それは陪審員に此方に不利な決議をさせる』
『それで？』
『さあ……―あの男には罪がある。だから彼は恐れてゐる……多分あの男は自分のためには、此の事件が、貴女に對してだけのものであることを欲するかも知れない。……だから若しかしたら示談にした方が、ロオザのためにいい解決をつけ得るかも知れない……』
『陪審員はそんな風に考へはしませんよ』
『勿論、陪審員はさうぢやないさ。併し檢事だ。そして裁判の例では……嘘つき自身が、自分は清淨潔白であると、斷言するんだよ……それにもつとルボオにとつて好都合なことは裁判長がルボオの友人であることだ……』
『全く清淨潔白であり得る政治を、何故私が嫌ふか分つて？』と彼女は言つた。
『それや男が政治をするからだらう？』
『その通りよ』
『全くだ！』
『皆、貴方のやうな男ばかりではありません……でも貴方だつて（彼女は指で彼を脅かす眞似をした）みんなのやうな傾向が少しばつかりないではありませんよ！……情實に動くといふことは職業上の缺點だと思はなければなりません』
『どの職業にだつてそんな缺點はあるさ』
　併し彼女はそれに反對した。
『職業は職業です。私は誓つて辯護士として……』
『そんなことを言つたつて、貴女だつて、僕等のやうにしか出來はしないさ……』
『いいえ！　女といふものはもつと理想家です！　いまに見てゐらつしやい。女性の眞面目さ（何故なら、男達がなければ、私達はもつと嘘を言はないでせうから）や、寛大さや、優しさが、少しづゝ、あらゆる方面に進歩をもたらすでせうから……そして私達が投票權を持つ時は、貴方がたの汚れた政治にさへも』
　彼が無意識の中に、彼女の獨立心を快よく思はなかつたが――何故なら、理性では彼は正しい原理としてそれを許してゐたので――彼女もまたいつの間にか彼に對して、野心と愛とがうまく一致しない仕事に引かれてゐる點で、快よく思つてゐなかつた。屢々、夕方彼は彼女に別れを告げなければならないのを悲しんだ。あゝ！　彼

女が面白がつて整へる輕い食事を屢々とるアニックの事務室の團欒に止つてゐること……愉快な話や、愛撫に耽けること！……だが、のつぴきならぬ會合や、約束した講演や……で、彼はどんなにか喜んで彼を引き止めるであらう彼女の腕を振りきつて行かねばならなかつた……

アメデエが、まだ切迫してはゐないが來るべき選擧の第一次運動に奔走してゐる間に、アニックは裁判所への自分の道を開拓しつゝあつた。彼女は法律上の眞の知識や、爽やかな辯舌は、日毎に彼女の聲望を高めた。

彼女は、最初からお世辭や媚を言ふ人達を避けた。彼等の中には、老道化役者のやうな頬髯を生やした半白の老人もあるし、無髯の老人もあつた。若い人達は老人達よりももつと熱心に併しもつと露骨であつた。併し、若やかな胸を持ち、栗色の短かい巻毛の上に縁無し帽を被つてゐる彼女が、いかにも美しく、その上快活で愛嬌があつたので、すぐ人々に認められた。……アニック、ラムベエル？ 素晴らしい女だ！

執拗な競爭者である女達だけは（少くとも、彼女のやうに若く、美しい女達は非常に氣むづかしい）彼女を批評した……アニック、ラムベエル？　氣取り屋だ！……そして彼女が有名になり、殊にジヤクマン（今日の指導者で、明日の大臣たる）との關係が、一般的にひろまると、女達の間の輿論は、アニック、ラムベエル？　狡猾者だ、といふことに決つた。

彼女はこの成功の理由について些も誤つた考へは抱かなかつた。彼女の勞働以上に自然にルボオの庇護が、次いでアメデエの庇護が彼女のために役立つたのだ。そして今日も尚、生活のために十分の物質を得させてくれることは、彼女を多くの困難から庇護してゐることをアニックはよく知つてゐる。若し支持者もなく、仕事もなかつたならば、底無しの沼に、彼女はもがかねばならなかつたかも知れない。或はもつと運命に惠まれない、またもつと意志も強くない女達のやうに、沈んでしまつたかも知れない……

不正と不公平に對する彼女の怨恨は、汲み盡すべくもない。五月一日のあの暴行を思ひ出す度に、彼女の內に鬪爭的精力が盛り上るのであつた。

彼女は自分の美しい信念を些も讓歩しなかつた。そして絕えずその信念を弱者のために役立てた。そしてやがてポオルの絕望のために。彼女とマルチネの間は、結婚の當夜、既に破裂してしまつたのであつた。……

それは辛棒強い彼女に、只恐怖しか與へない程、それ程急激な亂暴な破裂であつた。

マルチネは妻の處女性に、堪え難い苦痛と、合法的暴行を加へて只徒らに彼女の官能を目ざめしめようとした。併し遂に成功しなかつたので、彼は――自分の欲望を滿たすや否や、相手が滿足したかどうかも、彼女が明かに嫌惡を感じたのも、おかまひなく――鼻唄を唄ひ乍ら彼女に背を向けてしまつた。かうしてポオルは彼女のために召使の位地に落ち、一方リイズ、ベルタは『戀をする』ためには再び彼女の上に立つやうになつた。

數週間後には、妻を――『頓馬！』――だと言つて抛り棄てたまま、再び結婚前のやうに家を外に出歩くやうになつた。ポオルは始めほつとして、やがて暗鬱な神經衰弱になつて、また一人ぼつちになつた。だが若し彼女に子供があつたら！……それは悲しみを慰さ

めるもの、苦しい心を希望に導くもの！だが彼女の主人は、始めから、それに就てははつきりした考へを持つてゐた。『子供だつて！利息收入もないくせに！……子供！　へ！　貧乏の種だ。自分で自分が何をしてゐるかさへ知らねえやうな人間共にはいいさ！……醉狂な貧乏人共にや……！』

アニックは？……併しいくら彼女が優しいにしても、彼女の生活があつた！……ポオルは誰に頼つていいかを知らなかつた。只彼女の仕事のみが殘つてゐた。演奏會、それは激しい、そして苦しい職業であつた。……併し舞臺に立つことは夫も確實に認めた事であるが、只それにはお腹の大きいことは禁物であつた。

結婚以來、ポオルはマルチネの名で出演して來た。何故なら最初から彼は、自分の表標のやうに、彼の名を彼女が仕事の上にも用ゐることを要求したからだ。それだのに、いま、彼は意地惡な羨望で、彼女が彼の名を用ゐることを責めるのだ。一體、マルチネはどうしたといふのだらう？……

彼女は決算日でもないのに、彼女に金の要求をする……どんな小さな教授の月謝でも、どんな小さな演奏會の收入でも、この名前の賃貸であり、强制的税金であつた。……そして彼女の不平に對しては『法律を、法律を忘れたかい？　俺はその法律の上に坐つてゐるんだよ！　俺は文無しのお前と結婚した。だからこれは、家庭の入費に對するお前の割り前さ……』と冷笑するのであつた。

かうして、來なければならなかつたことが、遂に來たのであつた。

二ケ月の地獄のやうな生活を送つて來た五月のある日の午後、リリ、ブロンチエをなつかしみ乍ら、ガヴオの演奏會を濟ませて、出て來たポオルは、そこの門口で、若い産業家をゼローフに紹介された？……それはロジエ・ジユウヴといふかつての飛行士で、いまは電氣器具の製造をしてゐる人であつた。

彼女はモザアルとグリエグとを素晴らしく演じた後で、まだ自分の演奏の成功と、感動の波が靜まつてゐなかつたので、――何故なら音樂の陶醉的慰樂に全我を投げ出した彼女は、いま魂を打ち込まずには演奏することが出來なくなつてゐる――正當の讃辭や、眞面目な讃美には感じ易くなつてゐた。ロジエ・ジユウヴは、ゼロノフや、ブルウサ夫人や、アニックやジヤクマンや、みんなと一緒に、ボアにお茶を飲みに行かうと言ひ出した。彼女は快よく同意した。運命を支配する偶然には思ひも寄らずに。

そして二週間後には、彼女はロジエの戀人になつてゐた。昨日まで未知であつた人が、いまは彼女にとつてこれまで缺けてゐた凡て、卽ち過去や、家族と變化して來たのであつた。始めて快樂を知り、同時に急激な戀愛の展開に遭つて、ポオルは甦つた。……そしてそれからはロジエが彼女の日日の空であり、あらゆる希望の地平線となつた。

アニックはどうすることも出來ない悲しい心で、ポオルが苦しむのをみつめてゐた。彼女は『貴女がそんなことを自分から求めたんだ！』とか、『私があれ程言つたのに！』とかと、無益な、徒らに心を傷つけるやうな非難をポオルに對してしなかつた。併し、今や、結婚が、取引契約でしかない場合、それは最惡の煩累になり得るといふことがポオルに分つたのだから――彼女はそれを實驗したのだから――再び自分の自由を取戻すことを躊躇してはならない！……卽ち離婚だ。

ポオルは殆め躊躇した。自由、それはさうだ、けれど、またパンを得るために働かなければならない…岐路だ。これまでの苦しい苦しい生活が、彼女の彈力をすつかり、減らし、干からびさせてしまつたのだ。大抵のブルジョア女のやうに、彼女は未知の世界へ一人出發する必要の前に立つて、弱い自分と、なえた足とを感ずるのであつた。

愛し愛されるやうになつて始めて彼女は別人のやうになつた。彼女はロジエが自分を手離さないだらうといふ確信を持つたので、快活に前進するやうになつた。彼女がさうした熱情をアニックに打開ける…、彼女は一層ポオルをせき立てた。彼女は嘘を極端に嫌ふ所から、ポオルが、これ以上秘密を守つてゐる事を許さなかつた。

『ねえ、欺くといふことは、他の男と寢ることぢやないのよ！　内所でそんなことをするといふその汚さがいけないのよ！…いま、貴女は、貴女の夫に、事實をすつかり言はなければいけないのよ、分つて？…』

『えゝ、機會が來次第…』

二人の姉妹は自由になる計劃を立て、その方法を考へた。アニックはいつも、『早く離婚出來るやうに、マルチネが意地悪い態度に出ないやうに、彼の了解を得なければいけない』といふ結論に歸つてくるのであつた。

丁度その時、アニックの考へを裏書きするやうな不意の出來事が起つた。それは同時に、ふら〳〵と決まらない心でゐるポオルをもはつきりと決心させた。二月初めに、彼女は自分が姙娠してゐることを知らねばならなかつたのだ。

『間違ひなく？』アニックは訊ねた。

『お醫者さんに三度も診て貰つたのよ』

『ロジエはどう思ふの？』

『あのひとは狂人のやうに喜んでゐるの…』

『あのひとは貴女程深く考へないんだわ！　貴女達の狀態で子供が生れたら、それこそ物料の種です。だけど、今更どうしようもないし…直ぐ貴女の夫に言はなければいけませんわ…あのひとは躊躇しないでせう。そして、自分の子供でないと知つたら、貴女達に子供を殘すでせう…』

『でも…』

『ロジエはさう思はないの？』

『いいえ、あのひとは私が決心するやうにとせめ立てるの』

『では？』

『でも…ねえ、アニック！　若し夫が承知するとして、離婚訴訟は最小限どの位の時間がかかるだらうね？』

『三ヶ月か四ヶ月よ…』

『一年もかゝるかも知れないね？』

『それは貴女の御主人樣の意向に依るのよ』

『で、この子供は、たとへ私が離緣しても、法律上、私の現在の…マルチネといふ名をつけられはしないだらうか？』

『えゝ、貴女の夫が自分の子供として認知することを拒む訴訟を起さないかぎりは』

『まあ！…』

一つの疑惑がありありと彼女を惱ませた。アニックは追究した。

『何を考へてゐるの？　え？』

ポオルは遂に白狀した。

『それはね…實は、ロジエが暫らく日本へ行かなければならないんで…』

『その時は貴女も離緣の手續きがすむでせうから、一緒にいらしたらいいでせう』

『そんなことは出來ないわ…二人づれの旅行は疲れるし、それに金もかゝるし…あゝ！　あのひとについて行けないことはどんなに苦しいか知れないのよ…私は不安な氣がするの…何とはなしに…あのひとが私から離れてしまふとは思はないけれど、それや、私信じてゐるわ…だけど何かそれよりももつと悪い事が起るやうな氣がするのよ…災難みたいなものが…』

彼女はアニックの兩手を握りしめた。

『多分海よ…私が恐れるのは、若しあのひとが歸つて來なければ？』

恐しい幻影が彼女の瞳をみはらせた。沈んで行く船…溺れる人達の叫び…

『馬鹿な』とアニックはからかふやうに言つた。

『いいえ、私は豫感のやうな氣がするの…だから私は、もう少し我慢してゐた方がいいと思ふのよ…』

『そんなことを言つてゐると、もう二三週間も經つと、マルチネにもう隱すことが出來なくなつてよ…』

するとポオルは顔を赤くした。

『それはかまわないのよ』

『え？』

ポオルは顔をそむけた。アニックは了解した。

『では、マルチネと、貴女は？』

『えゝ！…』

『まあ！　ポオル…』

アニックは呆れてポオルを見つめた。彼女は恥ぢて泣き出した。……彼女には勇氣も意思もなかつたのだ…

『貴女はそんなことをしたの？』

『さうするより他仕方がなかつたんだもの』

彼女は一層激しく泣き出した。けれどもアニックは慰める力もなかつた。…熱情のエロイズムに一時、熱狂して、次の瞬間にはすぐ、隷屬の泥沼の中に落ちこんだこの哀れな人間が、彼女の姉なのだ。何んといふ卑しさ、何んといふ二心だらう？　いや、それよりもひどい。アニックは彼女のために悲しんだ。ポオルだつて考へてみればロオザと同じことだ…亂暴者は自分の子供を殺し、文明人は夫を欺いた…罪にしろ過ちにしろ、結局同じことではないか？

春が來た。それでもポオルはロジエの近近の出發に全く氣をとられてしまつて、まだはつきりとした態度をとらなかつた。二人の姉妹は前のやうにしげしげとは會はなくなつた。妹には姉の行爲が許せなかつた。…それでもポオルを嫌ひ出したわけではなかつたけれど。只彼女は心を傷つけられて、どうしてもポオルに對して尊敬を抱くことが出來なくなつたのだ…彼女の藝術家としての才能さへも、女としての彼女の行爲を、たとへ一部分許すとしても、全部を正當化しはしない。

日は速やかに、めまぐるしく過ぎ去つて、アニックはポオルの事件にかゝわつてはゐられなくなつた。秘書としての仕事と、自分の辯護の準備のために、マドモアゼル、アルデイにも、ブルウサ夫人に

も會ふ時間がなかつた。

このめまぐるしさの中にあつて、唯一の休息は、極くまれにアメデエと一緒に過ごす夕べのみであつた。彼女は二人の樂しい生活をなるべく失はないために、またあまりに短かい朝の時間を利用するために、殆んどいつも秘かに彼のアパアトに住むことにした。併し彼女はまだ全く彼の所に來てしまつたわけではない。只徐々に、準備するのであつた。

彼等は互に樂しい喜びをもつて、かうした日々の工夫をするのであつた。そして少しづゝ、互の影響を受けつゝ、互に互の生活にしんみり、適應するのであつた。

彼女は、裁判のためには、いやでも彼の助言に従はねばならなかつた。ロオザの利益のためにはどうしてもさうしなければならなかつた。アニックにはそれがすぐよく分つた。ルボオが沈默してゐるのは、自分に有利な状態にし得る可能性があるからかも知れない……ともかくも酌量すべき情状ではある。この前、彼女がルウアンに行つて、牢舍を訪ね、裁判所に廻つたとき、檢事はそれとなく彼女にさう言つた……

彼女はまづ攻勢をとるとする。さうすれば彼女の前には、ルボオを中心にして男子全體が結束して立ち上るだらう。それは確かだ。

それを思ふと彼女はまづ冷たい怒りで一杯になり、勇氣を失つてしまつた。こんな要塞にあつてはどうすることも出來はしない！……只無益に攻撃して、第一にロオザを犠牲にするばかりだらう。……マドモアゼル・アルデイに相談すると、まづやさしく出るやうにと忠告した。彼女はまづロオザを救はなければならない。只結果のみが大切なのだ……彼女は手段を撰ばなければならなかつた！……そして遂にアメデエの考へに従ふことになつた。併しそれは彼女にとつて、實に辛い方法であつた。

この方法のために、彼女はまづロオザを易々と說き伏せることが出來た。病氣は彼女の最初の獰猛な魂を、暗愚な頑迷さを解いたのだつた。そして哀れな、儚い存在に過ぎなくなつてゐた。勿論、彼女には自分の行爲の善惡が分らないまゝでゐたのだから後悔はしなかつたが、只泣き暮らしてゐた。

懲罰の恐怖の前の、人殺し、人殺し、棄てられた孤獨な獸……彼女は夜も眠らないで、裁判廷のことを思ひ、明日の恐しさを考へては慄えてゐた。アニックが見舞つたとき、彼女は熱で燃えるやうに熱く、手にも力がなかつた。そしてアニックの言ふことを鎭靜劑でも飲むやうに、飲み込んだ。

遂にその日になつた。アニックは、外見は落付いてゐるやうではあつたが、神經質になつてゐた。アメデエは、のつぴきならぬ質問のために議會に呼ばれてゐたので、殘念がり乍ら停車場まで彼女を送つて行つた。彼はせめて彼女と一緒に行つて元氣づけたいと思つてゐたのに。四月の初め頃から、彼女は原因もないのによく疲れた。……そしてそれがアメデエを心配させた。彼はぜひとも裁判に出席すると言ふマドモアゼル・アルデイにアニックを托した。裁判が二日以上かゝるとは思はなかつたので。

『若し議會が早く濟んだら、僕も夜中前にはルウアンに行きます。今日は貴女も辯護しないだらう……僕は是非貴女の辯護をきゝたい』

彼女は感謝の眼で彼をみた。彼女は、自分の傍に彼が居てくれることは嬉しいには嬉しいが、一人の方がいいと思つた。けれどもそ

れは彼に言はなかつた。それは、彼が居ない所では本能的により自由に自己を主張することが出來る氣持ちと、同時に謙遜な感情――彼が彼女に豫期してゐたよりも駄目な自分であるかも知れないといふ恐れとであつた。

彼はその夜、彼女が待つてゐるホテルに着いた。彼女はまだ訊問調書と陳述記錄とを熱心に調べてゐた。彼女には　望があつた。ロオザは、猛獸のやうな樣子をしてゐたが、吃り勝ちの答は丁度適度であつた。而も陪審員達は意地惡さうには見えなかつた。

『おゝ息づまること』彼女は窓を開けて外氣を吸ひ込み乍ら言つた。『ねえ、私がどんな感　を受けたか分つて？　まるで舞臺に出やうとする時の女優のやうに、私は怯えてゐるのよ……まるで芝居の舞臺裝置みたいなんですもの。高い板張りと、時計とキリストの肖像しか飾つてない壁でかこまれたあの大廣間や、腰かけの上の傍聽人達や……內庭側の席の檢察官や陪審員達や、その反對側の辯護士や憲兵や、被告人や……そして、正面に、ギニヨルのやうに、ずらりと並んだ裁判官達、そしてその人達のために芝居が演じられるんです！……幸ひと私は私の役割を知つてゐます！……その中に恐ろしいコメデイがあつたつてかまやしませんけれど……』

その翌日、檢事の求刑の後、肅然とした中に立ち上つた時、彼女の心臟は高鳴つた。彼女は眼で、裁判長の後におかれた優待席にゐるアメデエとマドモアゼル・アルデイとを探した。監視代表として、ルルダル夫人がラッペル紙の司法記者と並んで、綠色の飾りリボンをつけた木犀草色の麥藁帽子をひらつかせてゐた。それからロオザに眼を移すと、アニックは彼女をしか、この可哀さうな女から、只盲目的に犯してしまつた罪の重荷をとり除いてやるといふ目的をしか見なかつた。

彼女は最初不確かな聲で話し出したが、すぐ、平常のしつかりとした聲になり、やがて熱情にみち〳〵た朗々たる聲になつた。最初は、彼女自身、自分とは違ふ自分が、自分の中で、習つたことを暗誦してゐるやうな感じであつた。だがすぐ、その苦痛は消え去つて、輝くばかりの確信が彼女の全身に滿ち溢れ、明るく光りを放ち始めた。

びつくりすると同時に最初は『この巴里の女辯護士は何をしに來たんだらう？』といふ要心をもつてゐたが、次第に女の優美さに興味を感じた、陪審員達は熱心に耳を傾け始めた。聽衆は時々的確な論據に、熱情的な雄辯に、贊成の身振りをした。裁判官達は身動きもせず、或は時に頭を動かしたりして、眠つてゐるかのやうに眼を閉ぢてゐた。ロオザは小さくなつて、まるで慄える背中ばつかりのやうな格構で『モン、デュウ！　モン、デュウ！』と呟やきつゞけてゐた。

アニックの辯論は、滿堂の感動のうちに響き渡つた。

『あゝ！　みなさん貴下方のお仕事は何んとむづかしいことでありませう。この奇怪な罪に對して貴下方が嫌惡されるのは御尤もです。一人の母親が、自分の子供を殺し、足蹴にする！　併乍らこの許され難き行爲も、若しそれを許すやうな、或はそれを說明するやうな理由がありましたならどうでありませうか？　みなさんは、嚴として侵し難い決議によつてみなさんが泥沼の中に、混亂の中に投じられた一人の人間を、皆さんの御好意に依つて救ひ得るといふことにお氣づきになつた時、どうなさいますか？　勿論、この女には罪があります。併しこの女は知らなかつたのです。この女自身兒殺し

のその翌日私に申しました『私は澤山の獸を殺した！』と。この女一人の肩にかゝつたその子供は――何故なら父親が責任を持たうとしなかつたからです――この女にとつては仔山羊と同じだつたのです。どうぞ、このことに特に注意して下さい。この女は肉屋の爲に、いつもさうした獸を殺してゐたのです……

陪審員の皆さん、どの戰士達にでもきいて御覽下さい。二度目に敵を殺すとき、最初に殺した時程、辛いかどうかといふことを。彼等の悉くが言ふでせう。馴れるにつれて辛くなくなると！

私は皆さんにまつ先きに言ふでせう『併乍ら、若し皆さんの前に意識した罪人がゐるならば出來るだけ嚴罰に處分なさい！』と。併し今度の事件は、この不幸な女が十分後悔してゐます。それにまだ病氣のなめに全く弱り込んで居りますし、悲嘆の餘り死にさうにさへもなつたのです。この女の陳述に依つてもいかに絶望してゐたかが分ります。この女の手よりも、もつと强い手が、影でこの女の手に兇器を持たせ、こんな罪を犯させたのです。陪審員の皆さん、この女の背後には、自ら逃避し、而も法律が庇護する處の誘惑者があります！

皆さんは、この女一人を處罰して、この女の共犯者を、否、この罪の誘導者を赦しておかれるでありませうか！……どうぞ陪審員の皆樣、賤しむべき男が處女を奪つたこの女のために、母親になることを願ひも欲しもしなかつたこの女のために、悲慘な運命と、男性の狡猾なる慾情とが永遠の罠を投げかけたこの女のために、同情して下さい！この女は既にもう十分後悔のために罰を受けてゐます。この女は魂の夜から目ざめかけてゐます！……可哀さうに、貴女は貴女のものだと思つてゐた一つの生命を破壞したのだ。貴女は貴女自身を殺したのだ！　併し貴女よりもつと罪の深い男は自分の責任から免かれてゐる。

同情して下さい。私は私の憐れな姉妹の一人のために皆さんにそれをお願する女です。この女はもう既に非常に苦しんで來たのです。まだ二十才にしかなりませんのに。二十才！　陪審員の皆さん、皆樣にも多分、許婚者のことを空想し乍ら、平和に皆さんを待つてゐらつしやるこの年頃のお孃さんがおありでございませう！　ロオザには庇護してくれる父親がありませんでした……貴下方の幸福な、愛されてゐらつしやるお孃さん方の名に於て、私はこの哀れな女のために無罪をお願ひいたします』

呟やきが起り、ブラヴオの聲さへ聞えた……併し熱中してゐたアニックは、自分のまわりに混沌とした渦卷きを感ずるのみだつた。……彼女は心臟を押え乍ら、腰を下したといふよりも寧ろ倒れてしまつたのであつた。……そして意識をとり戻したとき、アメデエと、マドモアゼル・アルデイの狼狽した顔が、心配氣に、彼女の蒼白めた顔を覗き込んでゐた。……

『どうしたんでせう……めまひがしちまつて……』

さう言つて彼女は微笑した。人々は同情の色を浮べて彼女をとり卷いてゐた。……

『無罪は確實ですよ』とマドモアゼル・アルデイが言つた。

『とにかく罪は輕くなるよ。辯論は素晴らしかつた！』とジヤクマンが言つた。

彼女の體内に一つの新らしい生命が、混沌として現れ始めたのであつた。新らしい大きな希望が二人を包み始めた。

婦人彙報

◇北京の電車襲撃

北京では最近車夫が不景氣で非常に生活に困つてゐる。これは電車に客をとられる故だからとの理由で車夫工會側は十月二十二日突然電車會社側を襲ひ電車を破壞したので、全市の交通はまつたく杜絶し、終に暴動化したので戒嚴令が布かれ極度の恐怖のうちに市民は陥れられた。この際市黨部婦女工會等はめざましい活動をし、成行は混頓として豫側をゆるさない狀態であつたが、幾度となく警官隊の鎭壓にあつてどうやら辛くも納まつた。

◇不貞の罪は極刑に

メキシコの新刑法は十二月十五日から效力を生じるが、この新刑法は男女關係には特に嚴しい規定が設けられてゐる。といふのは若し娘が不義のため處女を失つた場合にはその父は斷然娘を殺して差支なく、娘を誘惑した男をも同様である。勿論不貞の妻に對しては一層きびしいので、この極刑を免かれることは出來る筈はない。そして新刑法は男に對しても女と同様に、不義をした夫は妻に殺されても仕方がないといふ事になつてゐる）尙また新刑法によると常習の醉拂ひは否應なしに療養院へ拋りこまれ、惡疾患者は强制的に治療せら　るだけでなく、若し他人に感染させでもしたら忽ち入獄させる事になつてゐる。この新刑法は大統領ボルテス・ヒル氏自身の起草になるものだが、さて實施した曉どんな反響をよぶものかしら。

◇かあいゝ當の夫婦

緣結びの神出雲大社で、このほど六歳と五歳の子供の神前結婚式が擧げられた。花嫁は大阪市東成區大今里町山根四五子ちやん（五つ）お婿さんは大阪府下萩原種雄さん（六つ）で花婿は紋付羽織に仙臺平の袴、花嫁は人形のやうなお振袖で双方の兩親に伴はれて神前にぬかづき大社教化長から祝詞をあげられ、三々九度の盃をして目出度く許婚の式を終つた。今どきまだこんな許婚といふ男女の契りの習慣が殘つてゐる。

◇試驗の答案が紛失した事件

九月二日から七日まで大阪府で行はれた專門學校入學者檢定試驗と高等試驗令第七條による試驗（合格すれば高等試驗豫備試驗の受驗資格を得る）の答案全部約五百人分が紛失したので、文部省はは大周章で大阪府の試驗を無效とし、前例のない再試驗を行ふといふ失態を演じ廿四日の官報で發表した。この答案は九月十二日原運送店扱ひで貨車便で東京に送られ十四日汐留驛に着き、同運送店の手で驛の構內に保管したものであつたから責任は運送店にあると文部省はいつてゐたが、受驗者は大抵苦學者が多いので再試驗は旅費や時間の問題で大問題をひき起してゐたが、二十五日圖らずも原運送店の倉庫から泥まみれになつて答案の包が現はれたので、再試驗の發表も取下げとなり、現內閣は減俸問題と共に「取やめ內閣」といふ綽名を頂戴した。

◇製絲女工の收入減七十萬圓

長野縣生絲組合聯合會では、目下對米生絲の價格が下落しまた生産過剩で弱りぬいた揚句、今年もまた操業短縮を全國同業會社へ提唱することゝなつた。操短とは從來夏びき終了が十二月二十二日頃であつたのを十二月十五日にくりあげ、翌年三月一日頃春びきを開始するのでその間女工さん達は遊ばなければならない。でその影響するところは、一日の賃銀平均六十錢女工全體の總額五萬四千圓としてその所得不能額は三十七萬八千圓となり、そのうち十二月二十日までは休業の場合七割の支拂ひがあるから差引十六萬九千圓となる。このやうな重大な打擊は全然工場主側だけの自由意志でなされて女工達は苦しむ他はないのと階級意識が次第に女工の眼をさましつゝあるといふので、縣工場課では本年から賃銀七割保證の日限をもつと延さうといふ事が問題になつてゐる。因に、永い間女工達を泣かせてゐた操絲技術上の罰則は今回廢止される事となつた。

◇日本共産黨事件の發表

八百名を超える秘密結社日本共産黨——として三・一五事件、四・一六事件として異常なセンセーションを起した日本共産黨事件は昨年三月十五日の最初の大檢擧以來新聞記事差とめで一切知る事を得なかつたが、十一月五日豫審終結と共にその眞相を發表された。勿論警察の檢閲のもとに發表を許されるのだからどこまでが眞相か判らないが、佐野學、福本和夫、渡邊政之助、三田村四朗、德田球一氏等の巨頭をはじめ起訴せられた人八百二十五名に上つてゐるが、これ等の人々は大正十三年の共産黨檢擧事件以來再建を圖り、大正十五年の福島縣下の穴原溫泉、山

形縣下五色温泉の秘密會合を經て渡邊、爾本、德田氏等のモスクヷ行となり、以來日本共産黨結成と第三インタナショナル聯絡のもとに秘密運動をつゞけてきたといふにある。渡邊政之助氏は臺灣で死に他の人々も檢擧されたが、中には丹野せつ子、野坂龍子、森田京子氏等の女性も交つてゐる。學生が大部分で東京帝大が最も多く、日本女子大、東京女子大、女高師卒業生などもある。

◇兒童の成績を僞造して

中等學校入學試驗に筆記試驗を廢して兒童の成績を申告するといふ方針のもとにいま文部省側と全國小學校長側との間には問題が起きてゐる際、はしなくもこの春の入學試驗に大阪府で行はれた試驗の時、小學校訓導中には自分の受持の兒童の中から多數の入學者を出したいために兒童の成績を僞つて申告したもの五十餘校、訓導百數十名の多數に上つて教育界空前の不祥事といはれる事件が發覺した。大阪府は此等の不正校長や訓導を免職減俸や譴責などの處罰に附することになつたが、筆記試驗の制度を廢すればかういふ不正が起るし、いづれにしても今日の教育制度は根本的に改革されない限り今後も尙問題は起るだらう。

◇軍隊赤化の伍長追放さる

水戸步兵第二聯隊伍長上野壯夫は大演習を目の前に控へて軍隊赤化を企てた事を探知され、突然十月廿八日松本師團長の命令で除から追放された。上野の父親は下妻署管內に巡査をしており、この日悄然として息子を引きとつて行つた。上野壯夫氏は今後は上京して著述業をやると人に語つてゐる。

◇登錄を求める勞働者群

冬の失業季を前にして地方からの出稼人をくひとめるため東京市では大正十四年から日傭勞働者を登錄してゐたが今年から當人の寫眞をとつて勞働手帳を渡すことゝなり十月二十七日午前十時から深川、江東、玉姬、小石川、新宿、芝浦の六職業紹介所がそれぞれ近くの小學校を使つて午前は一般失業勞働者、午後は當日一定の場所で働いてゐる勞働者の登錄申込みを受付け顏を活動寫眞機で撮した登錄者數は合計一萬四千六百七十六名、これ等の人々は十一月から手帳を貰つて仕事を保證されるといふが、さて、どこまで實現されるものか。この日關東自由勞働組合の一勞働者は登錄の出來ない勞働者に同情して登錄反對のビラを撒いて檢束された。

◇罪人扱ひの大失敗

この勞働者登錄に眼をつけたのが警視廳である、強盜出現の季節となつた折柄一萬五千人からのカードと寫眞は犯罪搜索上に何よりのよい手掛りだとあつて、早速搜査課の刑事がカードの閱覽にまかり出たところ東京市社會局はキッパリとはねつけて見せなかつたので、警視廳は大恥かき、「たとへ前科者が交つてゐたにしても今後はまじめに働いて行かうとしてゐる心組みで登錄した人達だ、警視廳の搜査に便宜を與へるとてカードを作つたのではない」このはつきりした謝絶に出會つてはさすが人を見れば罪人扱ひのその筋も、一言もなく引下つたのである。

◇黑田女史が博士に

東京女高師教授黑田ちか子女史は數年間苦心した紅の研究を完成東北帝大理學部に博士論文を提出し審査中であつたが十一月四日教授會にかけた上理學博士の學位を授けられる事になつた。日本では婦人の理學博士としてはさきに東京女高師教授植物學の安井この女史あり、黑田女史は二人目である

◇女子エスペラント研究に

東京麴町區四番町九番地のエスペラント研究會では今度婦人の研究者のために門戶開放、歡迎する事となつた。初等科ABC組ありA組は每土曜日午後二時より二時間、B組は每木曜日同時間C組は土曜日午後七時より二時間、中等科は每日曜日午前九時から二時間で會費一ヶ月二圓個人教授もする

◇五十年ぶりの女浦島

萬國工業會議のお歷々にまぢつて郵船コレア丸に唯一人の日本女性として布哇から漂然歸つた荒川ちよさん(七六)の話「夫と三年の契約移民でハワイに渡りましたのが明治十三年、五十年ぶりに日本語も忘れかけて歸つたものゝまるで變つた橫濱を見ると浦島太郎の心持もよくわかる氣がします。」

◇待遇のよいアメリカ刑務所

米國の有名なシンシン刑務所では最近千八百の獨房を增築すると共に、刑務所の中に中繼放送局を設けて四人にラヂオを聞かせる事になつた。活動寫眞の方はこれまで每日見られる事になつてゐたがラヂオと差引して一週に二日だけと制限した由、どこかの國の刑務所とは雪とスミぐらゐの相違。

編輯後記

この一年は何をして來たか——思へば感慨深いものがある。もしまだ此のち生きつゞけたら忘れ得ない年である。たゞ私は悦びの中にも悲しみの中にも力一ぱいに働いて來たとだけはいへる。私はいま足許に力を入れて强く〳〵一歩づゝ蹈みかためやうとする一方、いかなる激浪の中をも泳ぎぬからとする衝動を押へきれない。これは私といふ一人稱の代辯であつておそらく編輯一同、本誌を支持される執筆家、及女人聯盟の人々——といふより今日の女性全體の氣運であり動きであると感じる。さう思ふとき、全女性の上になんと輝かしき光りをむかへる來年であらう。思ふだけでも胸が躍り、五指の尖端から火花が發する。女人の時代はついに來ると叫びたくなるではないか——しかし、ものゝ伸長はさう易々と惠まれるものではない、心を締て事にあたらなければならない。雜誌は公器である我々の失敗は女人全體の名譽にかゝはると思ふとき、浮薄であつてはならないと、年末號の編輯を終つて一層深く考へさせられる。

新しく來る年の「女人藝術よ、女人大衆よ」光輝あるものであれと祈り、女人聯盟諸氏の奮然たる努力聲援を竢つ！（時雨）

朝日講堂における女人藝術の演說會も大盛況だつた。聽衆を見ると青春氣鋭の人々が多く、すさまじかつた氣勢も一種はげしい時代尖銳感を發露するものである。この頃のいろんなものは高い調子を鳴らせたがる。では幅廣い底力のある調子はどこから鳴りひゞくか女人藝術内外の大合流の中から、やがてはその强音の起ることを永い願ひとする。次へ次へと希望は進出するのだ。（花世）

ぐづ〳〵して居るうちに大晦日が來てしまつた。驚くなかれ、勿論雜誌のである。やがて除夜の鐘が鳴るだらう。明日から一つ年をとる筈なのだが何だかそんな氣になれない。其の筈だ。世間はまだ十一月の風が吹いて居るのだから。（優子）

まだ十一月の初旬だけど十二月號の編輯後記をかくので、讀者の方達に今年中は色々とどうも有難う御座いました。來年も相變りませずなんてお禮を云はふかそれもあんまり變だ。それぢや大晦日になると太陽はきつと韓度何度といふ所をさすのだらうから丁度後記をかく時の韓度をかいてもう何度になりますから皆様もお元氣でつてかいたらどうだらうなんて云ひあつてゐます。（みどり）

朝日講堂の講演會は近來稀な盛會で愉快でした、滿員で入口から追ひかへされた澤山の方々にはまことにお氣の毒でしたが、あれは張番のおまわりさんが職務に忠實だつたので、私たちはもつと親切に仕たかつたのですが仕方がありませんでした。大阪及び甲府各地の講演會も非常な盛況でした。十二、一月號と新年號をひかへて人並より一月も早い師走のいそがしさを働いてゐます。今月は社會時評の筆者が別莊行きで間に合はず、文藝時評がやはり筆者の都合で載けませんがその代り短かい情味豐かなフレッシュな小品をいくつか並べました。（素子）

そとにはつめたい嵐が吹きあれてゐる。蕭條とした冬の空の下に凍つた土の中で、すこやかな種子が、春の光りを待つてゐるのはたのしい。女人藝術は鮮かな足あとをこの年の記憶にのこして、また新らしい希望の春を迎へやうとしてゐる。女人聯盟も一歩々々進歩のあとを見る。幼稚な歩みでも、充實してゆくのを見るは愉快である。同性の人々の熱烈な支持は大きな力でなければならない（八木）

今月は、今年の五月からのびのびになつてゐた與謝野晶子氏の生誕紀念祭を擧行する筈であつたが世をあげて緊縮の時代であり、歳末の慌たゞしい中に如何かと思つて晶子氏とも御相談の上、來春、華やかに祝賀會をあげることにした。發起人をお願ひした方々にもその事をお含み頂き、一般の賛成者に一應お斷り申上げておく。なほ新年號譯特輯號の素晴らしい新人の顔ぶれを御期待下さい。では皆様よい年をお迎へなさいまし。

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部壹錢五厘

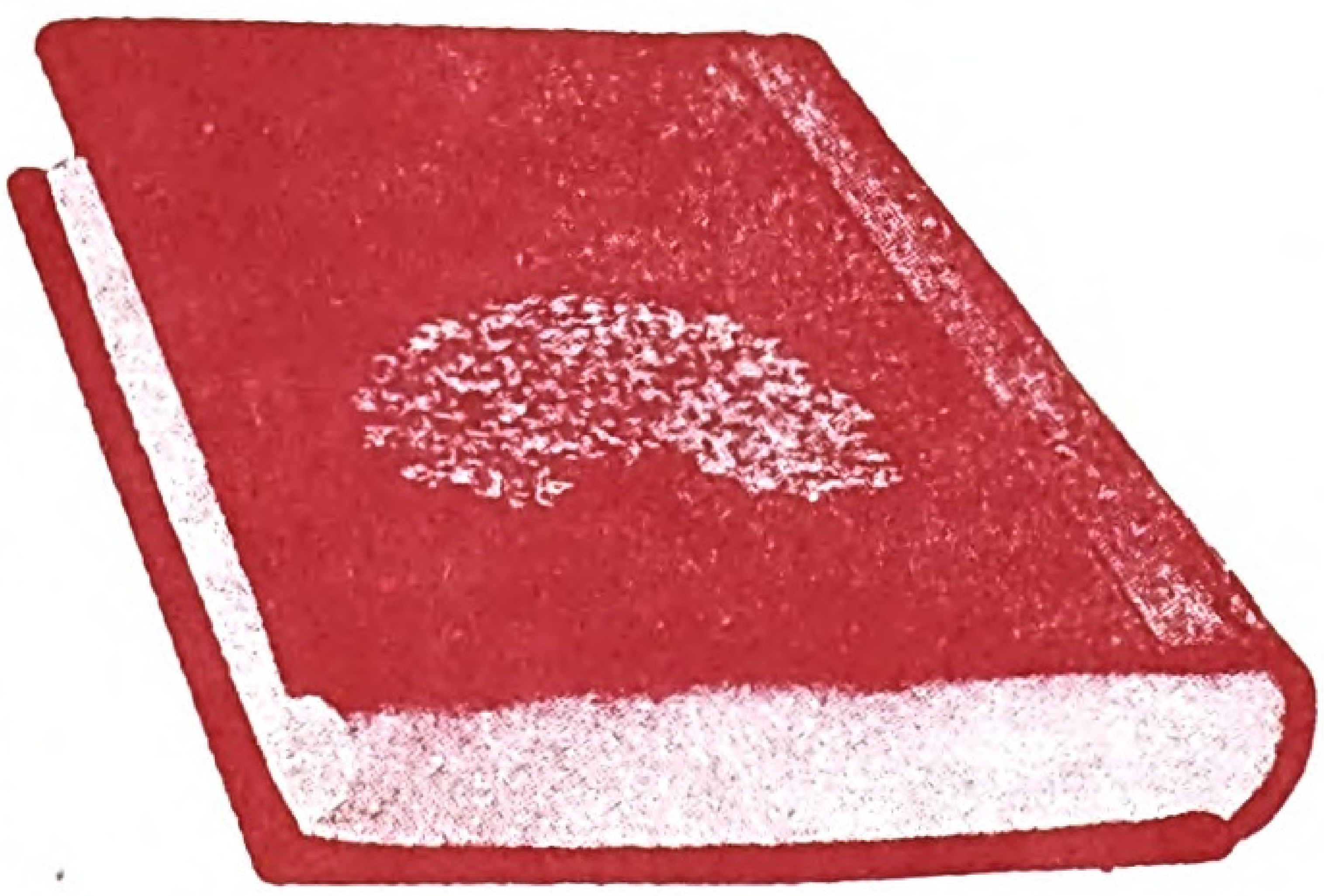
定價
1部……40錢
6部……2.30錢
12部……4.50錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割増の事。

發行兼印刷者——長谷川時雨
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂——大東館
　　　　——北隆館——東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五

第一輯 時雨脚本集



——ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと悩ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの憂鬱を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その效果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な痼癖に、內なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる。此の集に盛られたものは、多くこの再生期——展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る——

三上於莵吉氏序

内容

ミイの生れた朝　暗夜
月に任む人　氷の雨
つくしの空　犬
業火の洗禮　手兒奈
北國藥研谷　西の空

定價金貳圓
送料金六錢
本社處女出版の美本です

東京市牛込區左內町三十一
女人藝術社發行
振替東京七五八三
電話牛込一七八九